

京都府遺跡調査概報

第 47 冊

1. 薬師遺跡
2. 下畑遺跡
3. 長岡京跡左京第216・241・242次
右京第349・357次
 - (1) 長岡京跡左京第241・242次
 - (2) 長岡京跡左京第216次・雲宮遺跡
 - (3) 長岡京跡右京第357次
 - (4) 長岡京跡右京第349次
4. 堂ノ上遺跡・恭仁京推定地
5. 興戸遺跡第11次

1 9 9 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昨年開設から満10年を迎えました。当センターでは、これを記念し、特別展覧会や特別講演会の開催及び論文集の刊行等の事業を実施してきたところでありますが、これらの諸事業の遂行にあたりまして皆様方の御協力を賜りましたことを、厚くお礼申し上げます。ふりかえりますと、当センターの設立以後10年間に、公共事業は年々増加の一途をたどり、それに伴い、発掘調査は単に件数の増加だけでなく、近年は特に大規模化する傾向にあります。こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究を図ってまいりました。このような発掘調査成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行してまいりました。また、毎年、「小さな展覧会」・「研修会」を開催し、出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成3年度に実施した発掘調査のうち、京都府丹後土地改良事務所・京都府教育委員会・日本道路公団大阪建設局・京都府土木建築部の依頼を受けて実施した、薬師遺跡、下畑遺跡、長岡京跡左京第216・241・242次・右京第349・357次、堂ノ上遺跡・恭仁京推定地、興戸遺跡第11次の各発掘調査を取めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また、埋蔵文化財を理解する上で、なにごしかの役にたつところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された上記の諸機関をはじめ、京都府教育委員会・大宮町教育委員会・野田川町教育委員会・山城町教育委員会・田辺町教育委員会などの関係諸機関、並びに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
 1. 薬師遺跡 2. 下畑遺跡 3. 長岡京跡左京第216・241・242次
右京第349・357次 4. 堂ノ上遺跡・恭仁京推定地 5. 興戸遺跡第11次
2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。
3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 薬師遺跡	中郡大宮町奥大野	平3.5.7～ 10.9	京都府丹後土地改良事務所	岸岡貴英
2. 下畑遺跡	与謝郡野田川町三河内下畑他	平3.6.10～ 8.3	京都府教育委員会	岸岡貴英
3. 長岡京跡左京第216・241・242次 長岡京跡右京第349・357次			日本道路公団 大阪建設局	石尾政信 竹井治雄 中川和哉 黒坪一樹 戸原和人 戸原和人 岩松 保
(1)長岡京跡左京第216・241・242次	京都市伏見区羽束師菱川町向日市上植野町	平2.4.17～ 平3.3.6		
(2)長岡京跡左京第216次	長岡京市神足寺田	平2.4.3～ 6.22		
(3)長岡京跡右京第357次	乙訓郡大山崎町円明寺壱町田	平2.7.4～ 平3.2.18		
(4)長岡京跡右京第349次	乙訓郡大山崎町	平2.4.9～ 平3.3.6		
4. 堂ノ上遺跡・恭仁京跡推定地	相楽郡山城町北河原・平尾	平3.7.19～ 11.26	京都府土木建築部	野島 永
5. 興戸遺跡第11次	綴喜郡田辺町興戸犬伏	平3.10.1～ 11.26	京都府土木建築部	伊野近富

目 次

1.	薬師遺跡発掘調査概要-----	1
2.	下畑遺跡平成3年度発掘調査概要-----	9
3.	長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要-----	13
	(1) 長岡京跡左京第241・242次 向日工区-----	15
	(2) 長岡京跡左京第216次・雲宮遺跡 長岡京工区-----	49
	(3) 長岡京跡右京第357次 下植野工区-----	54
	(4) 長岡京跡右京第349次 大山崎工区-----	70
付載	京都盆地西縁・小畑川扇状地の微地形分析-----	90
	—長岡京左京四条二坊(長岡京跡左京第242次調査地)を例に—	
4.	堂ノ上遺跡・恭仁京推定地発掘調査概要-----	103
5.	興戸遺跡第11次発掘調査概要-----	115

挿 図 目 次

1. 薬師遺跡	
第1図	調査地位置図-----1
第2図	トレンチ配置図及び土層模式図-----2
第3図	Aトレンチ遺構配置図-----3
第4図	Bトレンチ遺構配置図-----4
第5図	Cトレンチ遺構配置図-----5
第6図	出土遺物実測図-----6
2. 下畑遺跡	
第7図	調査地位置図-----9
第8図	トレンチ配置図-----11
第9図	検出遺構図及び断面図-----11
3. 長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次	
第10図	調査地位置図-----14
(1)長岡京跡左京第241・242次	
第11図	トレンチ配置図・周辺字切図-----15
第12図	2BL、第14トレンチ・3BL、第2トレンチ平面図-----17
第13図	掘立柱建物跡S B24203実測図-----19
第14図	2BL、第14トレンチ出土遺物実測図-----20
第15図	3BL、第2トレンチ出土遺物実測図(1)-----23
第16図	3BL、第2トレンチ出土遺物実測図(2)-----24
第17図	3BL、第2トレンチ出土銭貨拓影-----25
第18図	3BL、第2トレンチ出土遺物実測図(3)－木器-----27
第19図	3BL、第15トレンチ平面図-----28
第20図	井戸跡S E24114平・断面図-----29
第21図	3BL、第15トレンチ出土遺物実測図-----29
第22図	3BL、第3トレンチ・4BL、第4トレンチ平面図-----30
第23図	4BL、第4トレンチ出土遺物実測図-----31
第24図	5BL、第18トレンチ平面図-----32

第25図	掘立柱建物跡 S B 24117 実測図	33
第26図	5BL、第18トレンチ長岡京条坊遺構	33
第27図	6BL、第8トレンチ平面図	34
第28図	溝 S D 24122 土層断面図	34
第29図	6BL、第8トレンチ出土遺物実測図	35
第30図	6BL、第9トレンチ平面図	37
第31図	溝 S D 24124 土層断面図	38
第32図	6BL、第9トレンチ長岡京条坊遺構	39
第33図	6BL、第9トレンチ出土遺物実測図	40
第34図	6BL、第19トレンチ平面図	41
第35図	6BL、第19トレンチ出土遺物実測図	41
第36図	7BL、第10・20トレンチ平面図	42
第37図	河道 S R 24134 土層断面図	43
第38図	7BL、第10トレンチ長岡京条坊遺構	43
第39図	弥生中期の溝 S D 24238 平・断面図	44
第40図	7BL、第10トレンチ出土遺物実測図(上層)	45
第41図	7BL、第10トレンチ出土遺物実測図(下層)	45
第42図	7BL、第20トレンチ出土遺物実測図	48

(2)長岡京跡左京第216次・雲宮遺跡

第43図	調査地位置図	49
第44図	7BL、第22トレンチ平面図	50
第45図	環濠 S X 60・S X 76 土層断面図	51
第46図	出土遺物実測図(1)	52
第47図	出土遺物実測図(2)	53

(3)長岡京跡右京第357次

第48図	調査トレンチ配置図・周辺字切図	54
第49図	Aトレンチ平面図	55
第50図	A・B・C-1トレンチ土層断面図	56
第51図	Aトレンチ出土遺物実測図	57
第52図	Bトレンチ平面図	59
第53図	Bトレンチ出土遺物実測図(1)	60
第54図	Bトレンチ出土遺物実測図(2)	61

第55図	Bトレンチ出土遺物実測図(3)-----	62
第56図	C-1トレンチ平面図-----	63
第57図	C-2トレンチ平面図及び土層柱状図-----	64
第58図	C-3トレンチ平面図及び土層柱状図-----	65
第59図	Dトレンチ平面図及び土層柱状図-----	66
第60図	C・Dトレンチ出土遺物実測図-----	67
第61図	Eトレンチ平面図及び土層柱状図-----	68

(4)長岡京跡右京第349次

第62図	調査地位置図・周辺字切図-----	70
第63図	A・B地区調査地配置図-----	71
第64図	A地区トレンチ平面図-----	72
第65図	A地区トレンチ配置図-----	73
第66図	B地区トレンチ配置図-----	74
第67図	B地区トレンチ土層断面図-----	75
第68図	C・D地区調査地配置図-----	76
第69図	C-1地区平面図-----	76
第70図	C-1地区土層断面図-----	77
第71図	C-1地区出土遺物実測図(1)-----	78
第72図	C-1地区出土遺物実測図(2)-----	79
第73図	C-2地区平面図-----	80
第74図	D地区平面図-----	81
第75図	推定西国街道東側溝S D34914周辺実測図-----	84
第76図	D地区出土遺物実測図(1)-----	85
第77図	D地区出土遺物実測図(2)-----	86

付載

第78図	調査地位置図-----	91
第79図	小畑川扇状地の微起伏・調査地位置図-----	93
第80図	小畑川扇状地地形学図-----	95
第81図	長岡京跡左京第242次3BL 第15トレンチ、 2BL 第14トレンチ地質断面図-----	97
第82図	礫の運搬堆積方位ダイアグラム-----	99

4. 堂ノ上遺跡・恭仁京推定地

第83図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図	103
第84図	トレンチ配置図(1)	104
第85図	第2トレンチ遺構配置図	105
第86図	土層柱状図	105
第87図	S H9104住居跡実測図	106
第88図	住居跡S H9103・土坑S K01実測図	106
第89図	S H9102住居跡実測図	107
第90図	井戸及び井戸枠実測図	108
第91図	遺物実測図(1)	109
第92図	遺物実測図(2)	110
第93図	遺物実測図(3)	111
第94図	トレンチ配置図(2)	113
第95図	トレンチ西壁セクション図	114

5. 興戸遺跡第11次

第96図	調査地位置図	116
第97図	興戸遺跡発掘調査地点図	117
第98図	調査地周辺図(トレンチ配置図)第6・8・11次分	118
第99図	土層断面図	119
第100図	トレンチ平面図(中・近世)	120
第101図	大畦畔の土層断面図	120
第102図	トレンチ平面図(古代)	121
第103図	出土遺物実測図	123
第104図	推定古山陰道・古山陽道と推定方格地割	124
第105図	興戸遺跡における時期別変遷図	127

図版目次

1. 薬師遺跡

- 図版第1 (1)調査地風景(東から) (2)Aトレンチ全景(南から)
- 図版第2 (1)Cトレンチ全景(東から) (2)溝1(南から)
- 図版第3 (1)掘立柱建物跡2(東から)
(2)掘立柱建物跡2のピット6 土器出土状況
- 図版第4 出土遺物

2. 下畑遺跡

- 図版第5 (1)トレンチ全景(東から) (2)東壁第9図A-B断面(北から)

3. 長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次

(1)長岡京跡左京第241・242次

- 図版第6 (1)2BL、14tr 旧流路S R24201(北方から)
(2)2BL、14tr 旧流路S R24201断面(西方から)
(3)3BL、15tr 溝S D24213杭列(北方から)
(4)3BL、15tr 溝S D24213杭列と護岸板材(東方から)
- 図版第7 (1)3BL、2tr 中世溝群(北方から)
(2)3BL、2tr 土坑S K24207(北東から)
(3)3BL、2tr 下層溝群(北方から)
(4)3BL、2tr 下層溝遺物出土状況(南から)
- 図版第8 (1)4BL、4tr 中世溝群(南から)
(2)4BL、4tr 中層全景(南から)
(3)4BL、4tr 遺物出土状況(南から)
(4)4BL、4tr 下層断ち割り(南から)
- 図版第9 (1)5BL、18tr 南部中・近世溝群(南方から)
(2)5BL、18tr 南部全景(南方から)
(3)5BL、18tr 掘立柱建物跡S B24117(北方から)
(4)5BL、18tr 東二坊大路東側溝S D24118(北方から)
- 図版第10 (1)6BL、8・9tr 全景(南方から)
(2)6BL、8tr 全景・中世溝(南方から)

- (3)6BL、8tr 溝 S D24121(北方から)
 (4)6BL、8tr 溝 S D24122(東方から)
- 図版第11 (1)6BL、9tr 全景・中世溝群(南方から)
 (2)6BL、9tr 中世溝群(北方から)
 (3)6BL、9tr 東二坊大路東側溝 S D24123(北方から)
 (4)6BL、9tr 断ち割り断面
- 図版第12 (1)6BL、19tr 北部全景(北方から)
 (2)6BL、19tr 北部全景・断ち割り(北方から)
 (3)6BL、19tr 溝 S D24126(西方から)
 (4)6BL、19tr 溝 S D24125(西方から)
- 図版第13 (1)7BL、20tr 二条条間小路南側溝 S D24230(東方から)
 (2)7BL、20tr 二条条間小路南側溝 S D24230断面
 (3)7BL、10tr 溝 S D24238(北方から)
 (4)7BL、10tr 溝 S D24238断面
- 図版第14 (1)7BL、20tr 全景・中世溝群(南方から)
 (2)7BL、20tr 二条条間大路南側溝 S D24133(北方から)
 (3)7BL、20tr 溝 S D24135・杭列 S A24136(北方から)
 (4)7BL、20tr 溝 S D24133(北方から)
- 図版第15 出土遺物(1)
 図版第16 出土遺物(2)
- (2)長岡京跡左京第216次・雲宮遺跡
- 図版第17 (1)雲宮遺跡調査地遠景(南から) (2)内環濠 S X60検出状況(上が西)
- (3)長岡京跡右京第357次
- 図版第18 (1)Aトレンチ全景(北から)
 (2)Aトレンチ土坑 S K35713検出状況(南から)
- 図版第19 (1)Bトレンチ上・中層遺構検出状況(西から)
 (2)Bトレンチ下層遺構検出状況(東から)
- 図版第20 (1)C-1トレンチ上層遺構検出状況(西から)
 (2)C-1トレンチ下層遺構検出状況(西から)
- 図版第21 (1)C-2トレンチ調査風景(西から)
 (2)E-1トレンチ下層断ち割り状況(西から)
- 図版第22 下植野工区出土遺物

(4)長岡京跡右京第349次

- 図版第23 (1)A地区全景(北から) (2)A地区全景(南から)
- 図版第24 (1)B-1トレンチ全景(東から) (2)B-3トレンチ全景(東から)
- 図版第25 (1)C-1地区全景(東から)
(2)C-1地区S R 34901内土器検出状況(南東から)
- 図版第26 (1)D地区全景(東から)
(2)D地区西国街道路面・側溝及び建物跡群(南から)
- 図版第27 (1)D地区S B 34922・34923(南から)
(2)D地区S R 34951検出状況(南東から)
- 図版第28 (1)D地区S R 34952全景(南から) (2)D地区S D 34953検出状況(西から)
- 図版第29 出土遺物(1)
- 図版第30 出土遺物(2)

4. 堂ノ上遺跡・恭仁京推定地

- 図版第31 (1)堂ノ上遺跡調査地調査前全景(南から)
(2)S H 9104住居跡検出状況(東から)
(3)S H 9103住居跡検出状況(西から)
(4)S K 01土坑内縄文土器出土状況
- 図版第32 (1)S H 9102住居跡検出状況(西から)
(2)S H 01井戸枿検出状況(西から)
(3)S E 01井戸枿遺存状況(南から)
(4)堂ノ上遺跡調査時全景(南から)
- 図版第33 (1)恭仁京推定地調査前全景(南から)
(2)第2トレンチ西壁土層堆積状況(東から)
(3)第1トレンチ地山断ち割り状況(南から)
(4)恭仁京推定地調査後全景(南から)
- 図版第34 出土遺物

5. 興戸遺跡第11次

- 図版第35 (1)調査前風景(南東から) (2)近世面(西から)
- 図版第36 (1)中世面(東から) (2)古代水田面調査風景(南から)
- 図版第37 (1)古代水田面東区(北西から) (2)古代水田面中央区(東から)
- 図版第38 (1)水田東区(南西から) (2)水田西区(北から)
(3)東区大畦畔断面(南西から) (4)西区柵列(南東から)

付 表 目 次

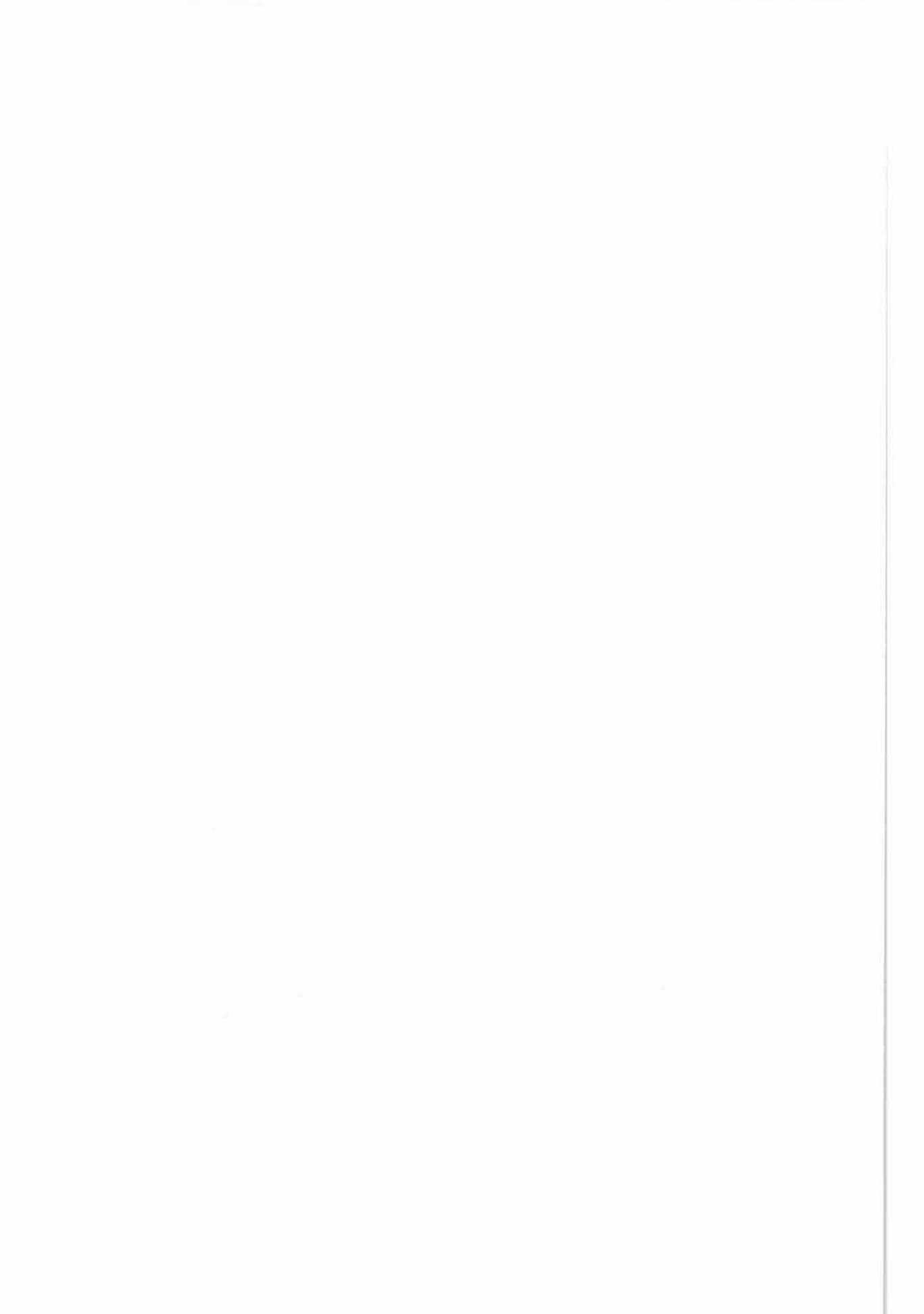
3. 長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次

(1)長岡京跡左京第241・242次

付表1 向日工区 調査一覧表-----16

(4)長岡京跡右京第349次

付表2 碎屑性堆積物の粒度階区分表-----102

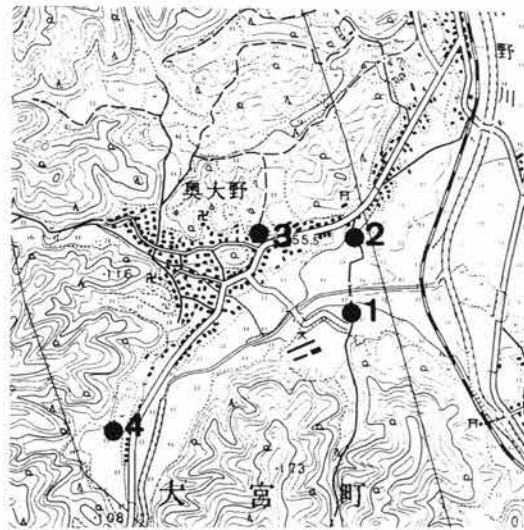


1. 薬師遺跡発掘調査概要

1. はじめに

薬師遺跡は、京都府中郡大宮町字奥大野に所在する。この遺跡は竹野川上流域に属し、支流である常吉川の左岸に広がる段丘上に位置する。

薬師遺跡周辺の遺跡として、常吉川を挟んだ対岸の扇状地に立地する裏陰遺跡がある。この遺跡は、1978年に発掘調査が行われ、弥生時代後期の竪穴式住居跡やピット等を検出した。また、縄文時代早期～平安時代前期の土器や石器などが出土し、長期間にわたる複合集落遺跡であることが判明している^(注1)。さらに常吉川



第1図 調査地位置図(1/25,000)

- 1.裏陰遺跡 2.薬師遺跡 3.新戸古墳
4.正垣遺跡

左岸上流1kmのところには、正垣遺跡がある。この遺跡からは、平安時代～鎌倉時代初頭の掘立柱建物跡が計20棟検出されており、墨書土器・石帯・陶磁器等が出土している。このような点から、地方官衙の性格の強い遺跡であったと推定されている^(注2)。

今回の調査は、大宮地区府営ほ場整備事業に伴うもので、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて実施した。調査は京都府教育委員会が試掘調査を、当調査研究センターが本調査を実施し、京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係技師森下 衛、当調査研究センター調査第2課調査第2係長水谷壽克・同調査員岸岡貴英が担当した。

現地調査は、京都府教育委員会が平成3年5月7日から6月14日まで行い、約400m²を調査した。また、当調査研究センターは、平成3年8月20日から10月9日まで行い、約800m²を調査した。なお、整理作業は岸岡貴英が担当した。

調査に当たっては、京都府教育庁文化財保護課、大宮町教育委員会、京都府立丹後郷土資料館をはじめ、多くの関係諸機関からご協力いただいた。また、奥大野地区をはじめ有志の方々には、作業員・整理員・調査補助員として調査に従事していただき、多くの方々^(注3)

からご指導・ご教示を賜った。^(注4)記して感謝の意を表したい。なお、調査にかかわる経費は、京都府が負担した。

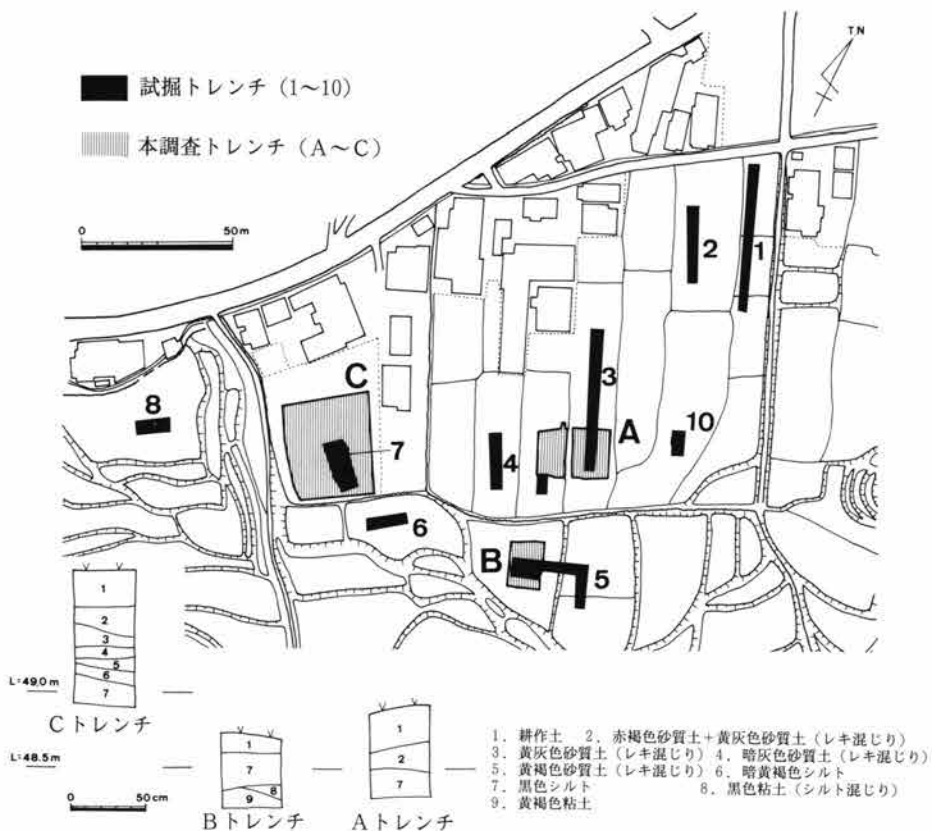
2. 調査概要

遺跡のある地区は、田畑が段々状に広がっており、CトレンチからA・Bトレンチにむけて緩やかに下る。試掘調査では、調査対象地全域に10か所のトレンチが設けられ、遺構の有無が確認された。その結果、弥生時代～古墳時代の溝と奈良時代～平安時代のピット等が検出されている。

以上の結果をうけて、本調査トレンチは、もっとも遺構の残りがよいと考えられた3・5・7トレンチを、面的に拡張することにより設定した。

各トレンチの層位の状況は、第2図に示したとおりである。1・2層は近世以降の包含層で、3層からは鎌倉時代以降の遺物が出土している。4層は平安時代後期の包含層で、5層は奈良時代の包含層である。6～9層は無遺物層である。

包含層の遺存状況は、Cトレンチが比較的残りがよく、各時代にわたる包含層が部分的

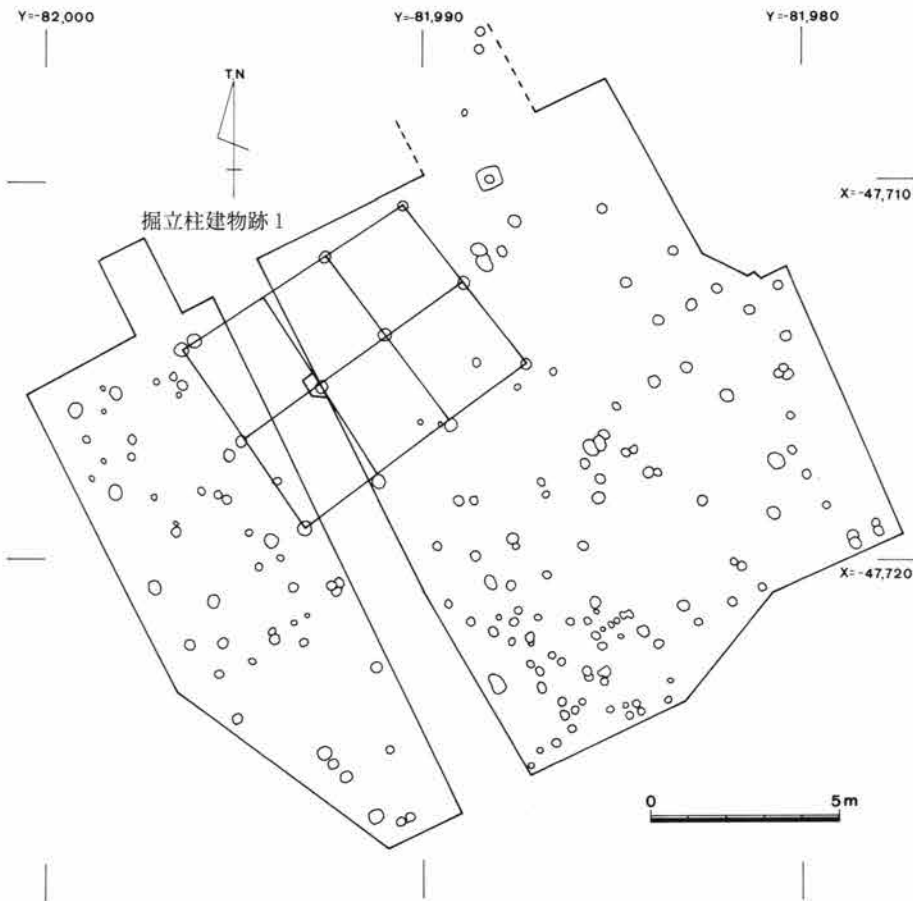


第2図 トレンチ配置図及び土層模式図

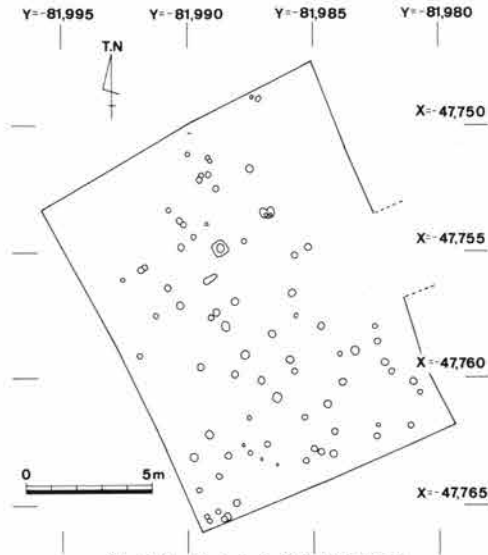
に残存している。一方でA・Bトレンチは、奈良時代以降の包含層が削平されており、遺構自体も残りが悪い。

3. 検出遺構

Aトレンチでは、第7層の上面で、2間×3間の掘立柱建物跡1棟を検出した。この掘立柱建物跡1は、約5.7m×7.0m(東西×南北)の大きさをもつ総柱建物跡である。建物跡のピットは、すべて円形で、大きさは25~40cmとばらつきがある。埋土の土色は、建物跡についてはほぼ同じで、他のピットとは明確に区別できる。しかし、建物跡各ピットの、柱穴・柱掘形・柱抜き取り穴の識別はできなかった。深さは、浅いもので10cm、深いもので30cmほどある。柱間距離は、南北間が2.6~2.9m、東西間が2.2~2.5mとばらつきがある。また、P4からは土師器、P5からは砥石、P8からは15cm大の自然石、P10からは黒色土器(第6図13)が、埋土中から出土している。これらの土器から、この建物跡の時



第3図 Aトレンチ遺構配置図



第4図 Bトレンチ遺構配置図

期は、平安時代後期になるとと思われる。

Bトレンチでは、第8層～9層の上面にて、ピットをいくらか検出した。しかし顕著な遺構を確認することはできなかった。

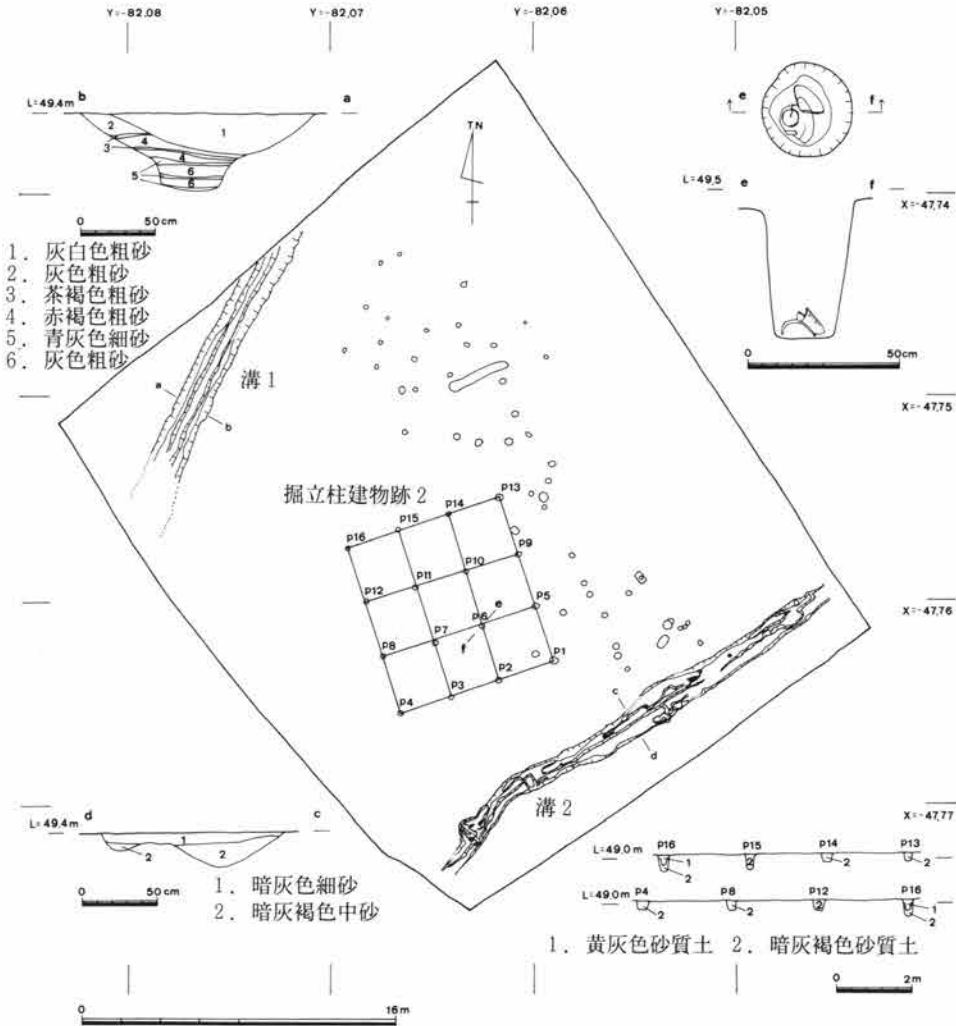
Cトレンチからは、掘立柱建物跡1棟・溝を2条検出した。

溝1は、第7層の上面で検出した。この溝は、北東から南西にかけて直線的にのび、検出長は約14mを測る。幅は約15mで、形状は二段に落ち、底面は「U」字形を呈する。埋土は11層に分かれるが、基本的には灰色系の粗砂と茶褐色・青灰色の細砂の互

層状態である(第5図)。断面を観察するかぎり、別の遺構が切りあっている可能性があるが、平面では確認できなかった。出土遺物には、弥生土器の壺(第6図3)、甕(第6図1・2・4・5)や敲石(第6図6)等がある。これらの遺物から、溝の埋没時期は弥生時代中期末～後期初頭になるとと思われる。

溝3は、第6層の上面で検出した。北東から南西にかけてゆるやかに蛇行する溝で、検出長は約25mを測る。幅は狭いところで0.8m、広いところで1.6mほどになる。溝の底面はかなり凹凸に満ちており、ところどころに深いピットがある。埋土は上下2層に分かれるが、底面の状況を見るかぎり、数条の溝が重複した痕跡かもしれない(第5図)。つまり、この溝は自然流路であった可能性が高い。溝3の出土遺物には、須恵器の蓋(第6図7)や土師器杯(第6図9)がある。溝の埋没時期は、奈良時代後半～平安時代初めになるとと思われる。

掘立柱建物跡2は、第5層の上面で検出しており、3間×3間の総柱の建物跡である。この建物跡は、約7.9m×約9.0m(東西×南北)の大きさをもつ。ピットはすべて円形で、大きさはほとんど30cm前後におさまる。埋土の土色は、建物跡についてはほぼ同じで、かつ他のピットとは明確に区別できる。しかし、建物跡各ピットの、柱掘形・柱抜き取り穴・柱穴の識別はできなかった。ただ、P16は径が50cmと大きく、断面観察の結果、柱抜き取り穴(第5図1)と柱掘形・柱穴(第5図2)に区別できる土色変化を確認した。ピットの深さは、20～50cmとさまざまである。柱間距離は、南北間が3.0～3.1m、東西間が2.6～2.7mの間におさまり、約10尺×9尺に相当する。そのため、比較的規格性の高い建物と考えられる。出土遺物は、黒色土器碗がP6(第6図10)・P8(第6図11)・P16(第6図12)

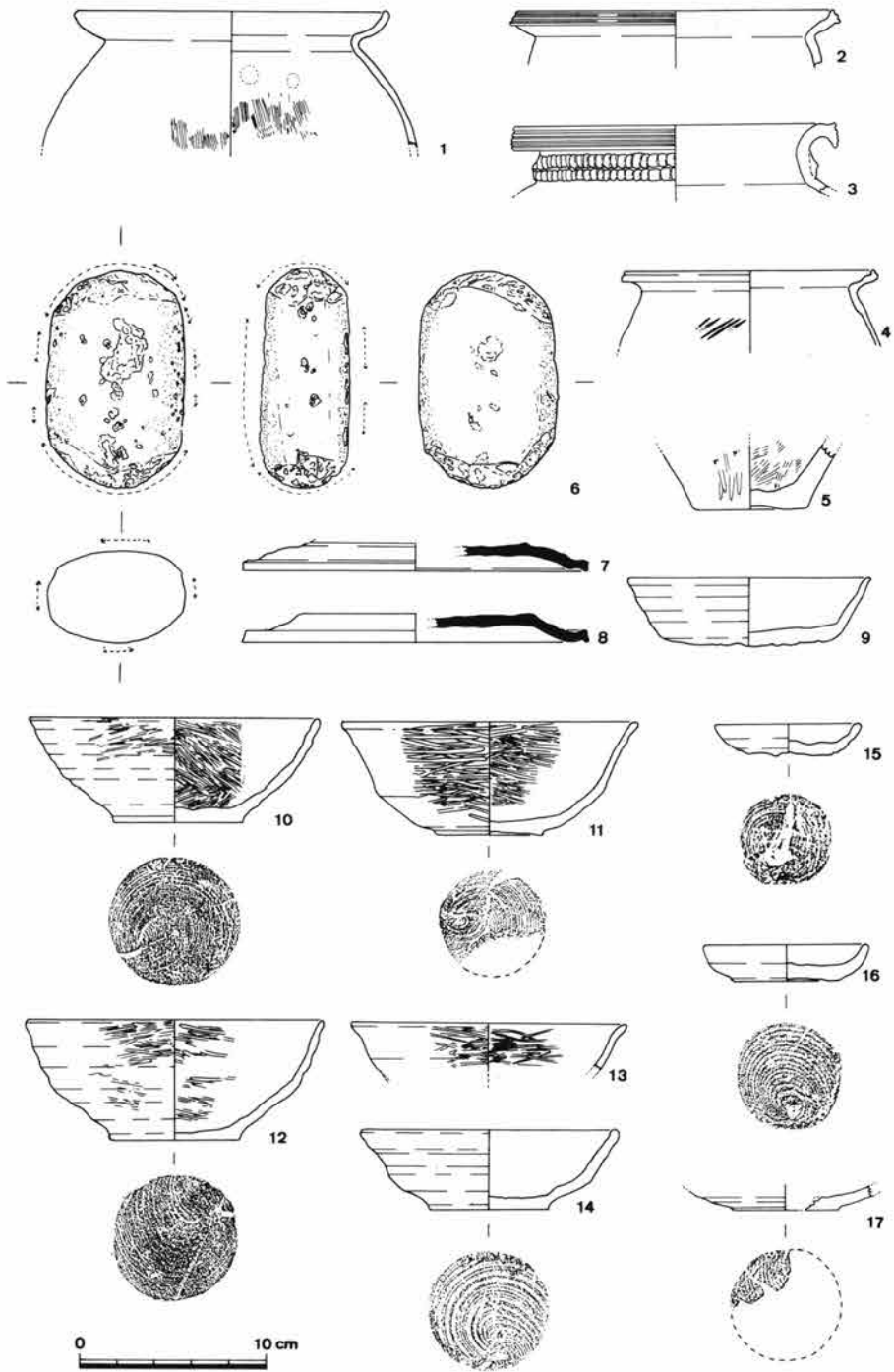


第5図 Cトレンチ遺構配置図

から、土師器椀がP 6(第6図14)・P 11(第6図17)から、土師器皿がP 8(第6図15)から出土している。さらに、P 1・P 2からも、黒色土器や土師器の細片が出土している。土器の出土状況を見ると、ほとんどがピット埋土の上・中層から破片の形で出土している。ただ、P 6のみピットの底から、黒色土器と土師器が出土した(第6-3図)。両者とも完形ではなく、口縁部等が欠損している。これらの遺物から、掘立柱建物跡2の時期は、平安時代後期になると思われる。

4. 出土遺物(第6図)

各トレンチとも、包含層がかなり削平をうけているため、遺構から出土する遺物が大半を占める。1～5は弥生土器である。3は、頸部から口縁部にかけて短く外反する壺であ



第6図 出土遺物実測図

1~5.弥生土器 6.敲石 7・8.須恵器 10~13.黒色土器 9・14~17.土師器
 1~6.溝1 7・9.溝2 8.Cトレンチ包含層 10~12・14・15・17.掘立柱建物跡2
 13.掘立柱建物跡1 16.Aトレンチ包含層

る。端部は下方に垂下する。頸部にはヘラ圧痕文凸帯を2条施し、口縁端部には4条の擬凹線が見られる。甕は、ゆるやかな受け口状口縁を呈するもの(1)と、「く」の字状に外反し口縁部に面を持つもの(2・4)がある。1は、内外面ともハケで調整を行う。内面には指押さえのあとを確認できた。2は、口縁部に2条の擬凹線を施す。4は、口縁部に1条の沈線がめぐり、体部には刺突文を施す。5は、甕の底部である。外面をミガキ、内面をハケで調整している。以上の弥生土器の胎土は、すべて金雲母・石英・2～4mm大の白色礫(花崗岩)が目立ち、類似した砂礫構成をとる。

6は、敲石である。ただ一部で磨面が確認できることから、磨石と併用された可能性がある。長さ12.1cm・幅7.5cm・厚さ4.9cmを測る。

7・8は、須恵器の蓋である。両者とも天井部と体部が明瞭に屈曲し器高は低い。口縁端部の処理は7の方がシャープである。口径は、7が8.8cm、8が19.0cmである。9は、土師器の杯である。底面にはヘラ切り痕が残る。

10～13は、黒色土器である。10は、丸味をもって立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。体部と高台の境は、あまり明瞭でない。口径15.8cm・器高5.6cm、器高指数は36を測る。11は、体部に明瞭な稜線を有し、口縁部にかけてゆるやかに外反する。平高台は直立し、高台高は、2.5mmを有する。ミガキ調整は、内外面とも密に施される。口径16.2cm・器高6.1cm・器高指数は38を測る。12は、体部の稜線があまり明瞭でなく、口縁端部は尖り気味に終わる。体部と高台の境は、あまり明確でない。口径15.2cm・器高6.6cm、器高指数は42を測る。14・17は土師器碗である。14はわずかな平高台をもち、器壁は黒色土器と比べて厚い。口径13.8cm・器高4.3cm・器高指数32を測る。15・16は、土師器皿である。15は口径7.7cm、16は口径8.6cmを測る。10～17は、すべて底面に糸切り痕を残す。

5. ま と め

今回の調査成果の中で、平安時代後期の建物跡である掘立柱建物跡2が注目される。

掘立柱建物跡2は、柱間距離がほぼ完数尺の数倍に相当し、比較的規格性に富む総柱の建物跡であり、かつ規模も大きい。このような点から、この建物跡の性格を考えると、庄官クラスの居館^(伊5)、墳墓堂^(伊6)、倉等が相当する。ただ、建物跡のピットの深さがすべて20cm以上と深い点、かつその規格が3間×3間と正方形に近い点、そして段丘の中央に立地している点から考えて、この建物跡は倉である可能性が高い。また、この建物跡は、おそらく屋敷地の一角を構成したであろうが、建物跡周辺の削平がはげしいため、その点に関しては不明である。

掘立柱建物跡2のP6からは、黒色土器や土師器が埋納されたとと思われる状態で出土し

た。このような掘立柱建物跡のピットへの土器埋納は、西町遺跡S B 04・S B 11、日光寺遺跡S B C 1、大内城掘立柱建物跡S B 212等でも報告されている。しかし、詳細な検討は、それほどなされておらず、類例の増加が待たれるところである。

薬師遺跡の所在する奥大野地区は、中世の文献である『丹後国田数帳』に、「倉垣庄」として記されている。^(注8)しかし、今回検出した掘立柱建物跡群は、平安時代後期のものであり、「倉垣庄」の実態にせまることはできなかった。また、1 km上流には、平安時代を通じて官衙的性格の強い正垣遺跡がある。おそらく、何らかの形で薬師遺跡に影響を及ぼしたであろうが、そのような実態を示す資料は出土しなかった。

(岸岡貴英)

注1 杉原和雄「裏陰遺跡発掘調査概報」(『大宮町文化財調査報告』第1集 大宮町教育委員会) 1979

注2 竹原一彦「府宮ほ場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 (1)正垣遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注3 調査に参加した方々は、以下のとおりである(敬称略)。
井通敏郎・小牧利男・皿木 綾・杉原美加・鈴木 豊・田辺隆子・田村文代・永江章司・中村ひろみ・松島和典・安田とめ・山添英夫・山添 均・吉岡 譲・吉村利雄

注4 ご指導・ご教示いただいた方々は、以下のとおりである(敬称略)。
今田昇一・肥後弘幸・森下 衛

注5 西岸秀文「西町遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987)、綾部市西町遺跡では、12世紀段階の庄官クラスの屋敷跡に比定できる掘立柱建物跡群が検出されている。これらの中心となる建物跡は、4間×3間もしくはそれ以上の総柱の建物である。

注6 森島康雄「中世墳墓に伴う建物」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991)、森島氏は、京都府北部における墳墓堂と思われるものを提示し、そこに共通点を見出ししている。その中のひとつに、「いずれの建物も方位を意識して建てられており、建物の東西方向と南北方向の長さを比べると、東西方向の方が長い傾向がある」と記述している。

注7 注5と同じ

注8 森島康雄「国道178号バイパス関係遺跡昭和63年度・平成元年度発掘調査概要 (1)日光寺遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注9 伊野近富「大内城跡」(『京都府遺跡調査報告書』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

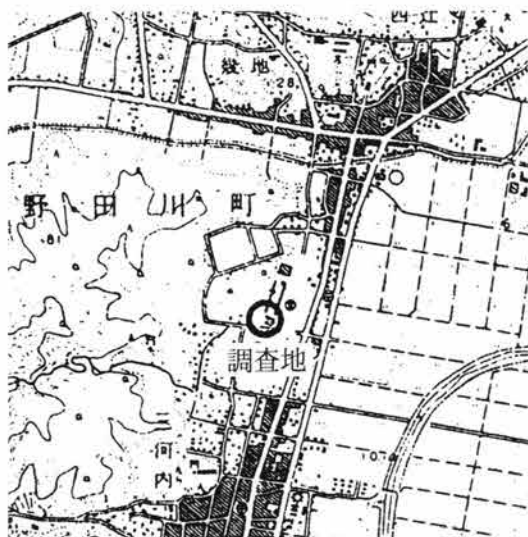
注10 石川登志雄「丹後国田数帳にみえる荘園公領について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987。「倉垣庄」の名称は、鎌倉時代の正応元(1288)年にまで遡るとされている。

2. 下畑遺跡平成3年度発掘調査概要

1. はじめに

下畑遺跡は、京都府与謝郡野田川町字三河内小字下畑及び字幾次小字角外に所在する。この遺跡は、野田川左岸の低地にのびる丘陵の先端にある。この辺りの遺跡には、下畑遺跡の約500mほど南にある梅谷遺跡や、背後の丘陵約1.5kmの山中にあり、梅林寺銅鐸の出土地である比丘尼城遺跡がある。

下畑遺跡は、府立加悦谷高校の敷地を中心に広がっている。このあたりの丘陵は、古くから段々畑であっ



第7図 調査地位置図(1/25,000)

たらしく、もともと削平をうけていたと思われる。その後、加悦谷高校の校舎建築に際して、丘陵端部がたびたび大きく削られており、削平面には弥生土器を包含する黒色土が露出していたらしい。昭和47年には、当時の同校教諭浪江庸二氏と丹後町立竹野小学校教諭林和廣氏が調査を担当し、同校郷土研究会等の協力を得て試掘調査が行われた。調査の結果、丘陵先端部で黒色土層の包含層を確認しており、そこから弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器等が混在して出土した。その後、校舎の建て替えに際し、昭和56・57・60・63年と4度、当調査研究センターが調査を実施した。昭和57年度の調査では、平安時代～鎌倉時代初頭の井戸、昭和60年度の調査では、弥生時代中期後半の溝2条・埋葬主体1基・鎌倉時代の溝1条等が検出された。

以上がこれまでの下畑遺跡に関する概要である。そこでこれらを要約すると、

①下畑遺跡の立地は、丘陵先端部と野田川左岸の低地の境にあたる。丘陵部分は古くから耕作地等に利用されているので、かなり削平を受けている。そのため、旧地形については不明な部分が多い。ただ、これまでの成果を参考にすると、小さな谷の入りくんだかなり複雑な地形を呈していたものと推定できる。

②出土した遺物は、弥生時代前期末～鎌倉時代にわたる^(注7)。これらは、黒色の砂質土層もしくはシルト層から出土する。出土遺物の中では黒色土器が多数を占める。これらから下畑遺跡は、平安時代後期～鎌倉時代に盛期とする複合集落遺跡と考えることができる。

今回の発掘調査は、体育館建設に伴い、京都府教育委員会の依頼を受け、当調査研究センターが調査を行った。調査は平成3年6月10日～8月3日まで実施した。現地調査は、調査第2課調査第1係長水谷壽克・同調査員岸岡貴英の両名が行った。なお整理作業は、岸岡貴英が行った。

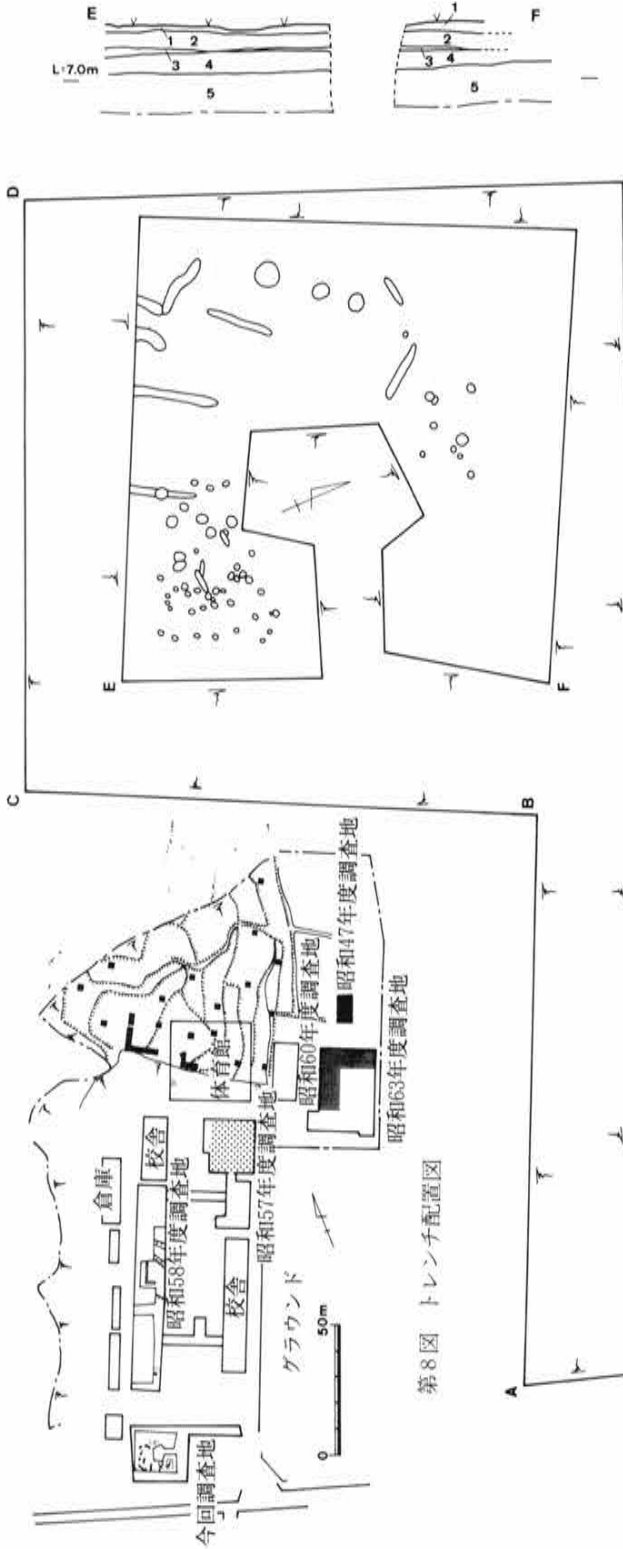
調査期間中には、京都府教育委員会・野田川町教育委員会・京都府与謝教育局・府立丹後郷土資料館・京都府宮津地方振興局・府立加悦谷高等学校、及び地元有志の方々から多大なご協力を得た^(注8)。記して、感謝の意を表したい。

2. 調査概要

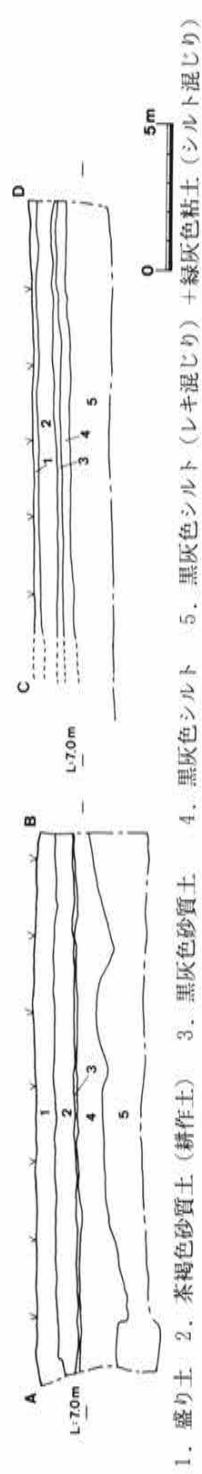
今回の調査地は、昭和57年度調査地の南側にあたり、平安時代後期～鎌倉時代初頭の井戸に関連する遺構が期待された。

調査はまず、調査対象地の北西辺と北東辺を「L」字形に重機で掘削し、土層の堆積状況をみた。第1層は盛り土、第二層は水田耕作土である。これらは、加悦谷高校の整地層と加悦谷高校建設以前の状況を示していると思われる。第3層の黒灰色砂質土・第4層の黒灰色シルト層は、ほぼ東西方向にゆるやかな傾斜をなし、東に下るにしたがって厚く堆積している。出土遺物としては、ほとんどが黒色土器碗で、わずかに土師器碗・皿、奈良時代の須恵器等が見られる。結果的に、この層から出土する土器が今回の調査の大半で、整理箱にして5箱になる。これらは、ほとんどが破片でローリングをうけており、完形に復原できたものは1点もない。黒色土器は、底部のみ出土のものが多し。第5層は、黒灰色シルトと緑灰色シルトが混ざりあった堆積状況にある。基本的には、東から西へと傾斜した堆積を示すが、黒灰色シルトが大きくブロック状に入るか所もあり、かなり複雑な状況を示す。おそらく、この地点が丘陵の先端と野田川沖積面の接点になることから、このような様相を示すことになったのであろう。出土遺物としては、弥生時代後期の土器や古墳時代前期の土器が若干出土した。古墳時代前期の土器はすべて細片であったが、弥生時代後期の土器は比較的残りがよく、近くに集落が存在することを窺わせる資料である。

以上の結果、奈良時代～鎌倉時代の遺構面の存在が予想されたので、調査地の西側半分を拡張した。重機により第1・2層を除去し、手掘りにより第3・4層を掘削した。その後、第5層の上面で遺構を検出した。検出した遺構は、数本の溝と多数のピットで、トレンチの東側に多く、西側には少ない。中央部分は、旧建物の基礎により攪乱されていた。



第8図 トレンチ配置図



第9図 検出遺構及び断面図

溝は、断面「U」字形もしくは台形状を呈する素掘りの溝で、深さ10cm程度である。ピットはいずれも5～10cmと浅く、性格等は不明である。これらの溝・ピットからは、時期を確定する遺物の出土はない。

出土遺物には、弥生土器甕、古式土師器甕・壺、須恵器杯、土師器椀・皿、黒色土器椀等が出土している。量的には黒色土器が多数を占め、土師器、弥生土器は多少あり、古式土師器、須恵器はわずかである。黒色土器はほとんどが底部のみで、退化した平高台が多数を占める。

3. ま と め

下畑遺跡は、ほとんど全面にわたって黒色土器が出土するが、この時期の遺構としては、井戸しか検出されていない。今後は、集落の中心を確定することが課題であり、西側の丘陵部分に存在する可能性が残されている。

(岸岡貴英)

注1 『下畑遺跡発掘調査概報』 野田川町教育委員会 1972

注2 第8図に当時の地形を復原してある。

注3 竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注4 竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注5 竹原一彦「下畑遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第18冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

注6 中川和哉「下畑遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第33冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

注7 加悦町教育委員会佐藤見一氏により、1972年の発掘調査出土遺物の中に、前期の貼り付け突帯文を持つ土器があるをご教示いただいた。

注8 ご指導・ご助言いただいた方々は、以下のとおりである(敬称略)。

佐藤見一・下川賢司・坪倉利正・中馬陽太郎・浪江庸二・長谷川達・森下 衛

なお、野田川町教育委員会下川賢司氏、三河内区長柴田喜十郎氏・幾次区長山本三郎氏には、作業員募集の件でご協力いただいた。

また、調査に参加した方々は以下のとおりである(敬称略)。

有吉利幸・市田 操・小牧義雄・香山利幸・皿木 綾・田中喜一・土井正一・永江章司・中村ひろみ・西角雅士・能勢 昇・森垣実夫・山上初野・吉岡 譲・吉田岩夫

3. 長岡京跡左京第216・241・242次 右京第349・357次発掘調査概要

はじめに

日本道路公団では、中央自動車道西宮線、通称名神高速道路における交通量の増加に伴う慢性的な交通渋滞と、天王山付近で多発する事故に対する改善のため、大阪茨木インターチェンジから京都南インターチェンジ間の走行車線の拡張工事を計画された。本調査は、この名神高速道路拡幅工事に伴い、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。

名神高速道路の走る京都市西南部(京都市南区・伏見区、向日市、長岡京市、乙訓郡大山崎町)は、桂川、宇治川、木津川の3河川が合流し、淀川となる地点の北に位置する。この地域では、道路部分の大半は低位段丘面及び沖積平野を横切って走り、ほぼ全域が長岡京域に含まれる。さらに、該当地域には長岡京以外の遺跡も数多く分布する。

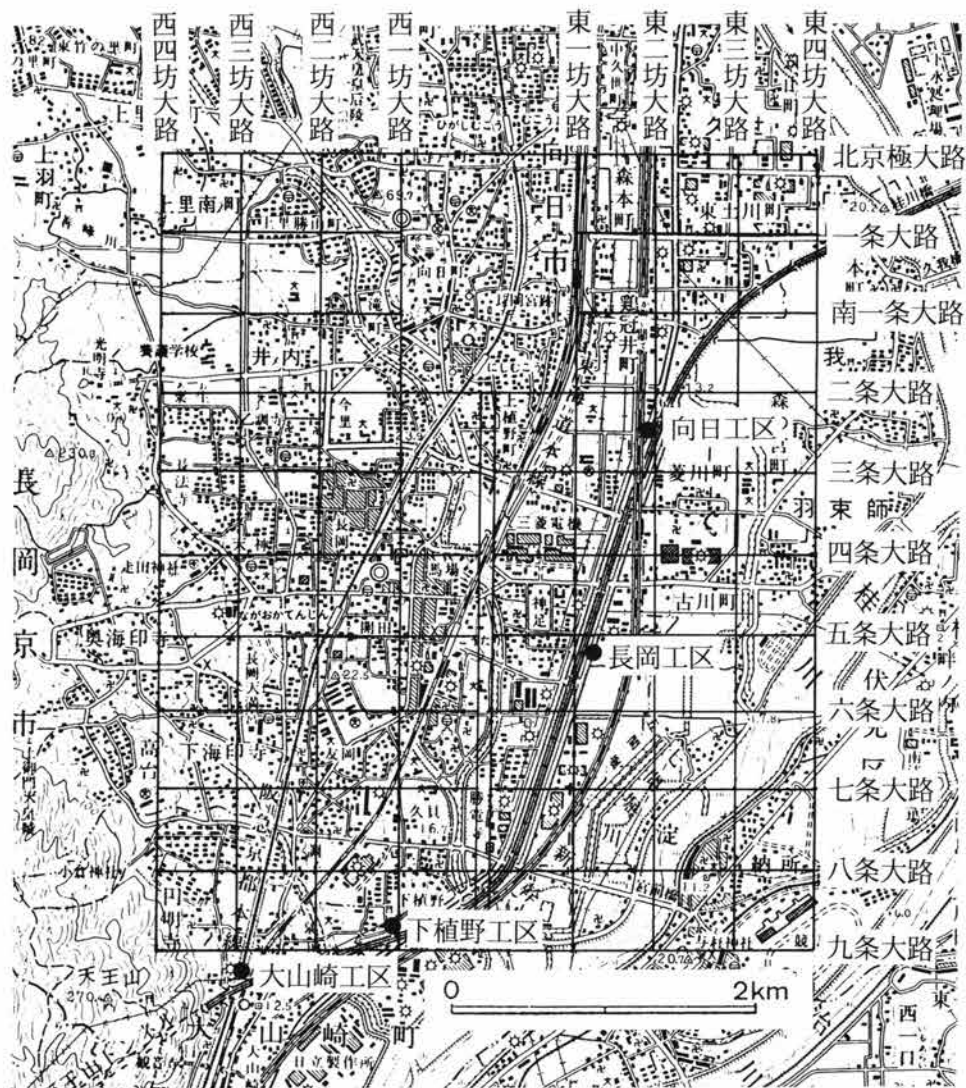
今年度の調査対象地は、長岡京の条坊復原によると、左京三条二坊・三坊、四条二坊、右京九条一坊・二坊、九条三坊南接地が想定される地点である。また、大山崎町では百々遺跡・算用田遺跡・下植野南遺跡が、長岡京市では雲宮遺跡、向日市では鶏冠井清水遺跡・芝ヶ本遺跡・鴨田遺跡といった遺跡もまた調査対象地内に含まれている(第10図)。

発掘調査区は、道路公団側の工事区分に合わせ、向日工区・長岡京工区・下植野工区・大山崎工区の4区に分けた。このうち、向日工区は、長岡京跡左京第241・242次調査、長岡京工区は左京第216次調査として行い、大山崎工区は長岡京跡右京九条域に接するため右京第349次調査とその他に分けた。また、下植野工区は、右京第357次として調査した。

検出した遺構の番号は、各工区ごとの連番とした。図中では記載の都合上、ブロックを「BL」、トレンチを「tr」とする場合がある。現地の発掘調査は、平成2年4月4日～平成3年3月6日までを要した。調査面積は、延べ約9,620㎡となった。本調査にかかわる経費は、日本道路公団大阪建設局が負担した。

調査には、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同主任調査員戸原和人、同調査員竹井治雄・石尾政信・岩松 保・黒坪一樹・中川和哉があたった。本書の執筆については、(1)向日工区を竹井・石尾・黒坪・中川、(2)長岡京工区、(3)下植野工区を戸原、(4)大山崎工区を岩松・中川が担当した。

調査を実施するにあたっては、日本道路公団、大山崎町教育委員会、長岡京市教育委員



会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所等の関係各機関をはじめ、各大学の学生諸氏等の協力を得た。紙面をかりて、謝辞を述べたい。^(注1)

(戸原和人)

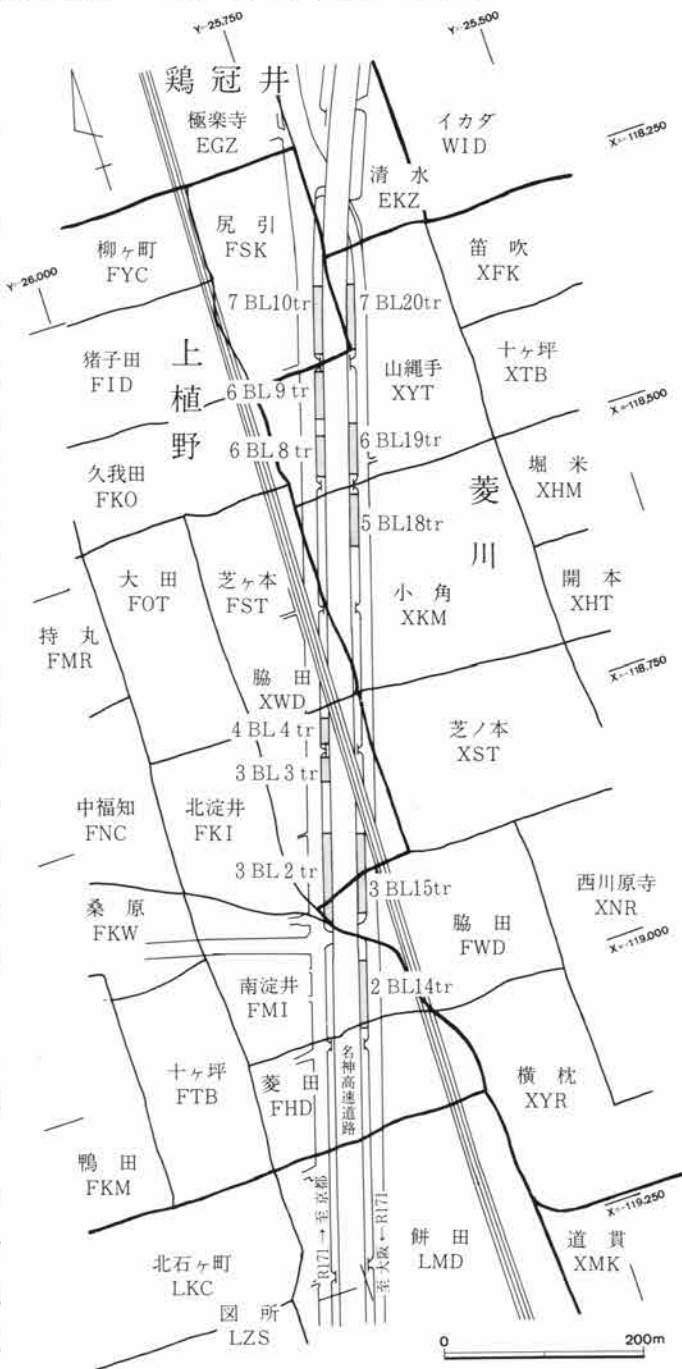
(1) 長岡京跡左京第241・242次調査 向日工区

(7ANFMI-5・FWD・XKM・XYT・ESK-3)

1. はじめに

向日工区の調査は今年で2年目にあたる。今年度の調査は、京都市域と向日市域にまたがるため、京都市域を左京第241次調査、向日市域を左京第242次調査と2つの調査回数に分けた。京都市域は伏見区羽東師菱川町で、旧小字名をとって2つの地域記号を付した。旧小字名の山畷手・小角からそれぞれ7ANXYT・XKMとする。向日市域は上植野町尻引・脇田・南淀井の小字名からそれぞれ7ANFSK-3・FWD・FMI-5とする(第11図)。

調査は、試掘を実施した後に遺物包含層、または遺構検出面までの重機掘削及び安全対策工事を終了した時点で、公団より調査区(トレンチ)の引き渡し



第11図 トレンチ配置図・周辺字切図

付表1 向日工区 調査一覧表

ブロック	トレンチ	回数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構(遺跡)	面積	開始	終了
2BL	14tr	L242	7ANFMI	上植野町南淀井	四条第二・東二坊第二小路、鴨田遺跡	480	6/14	10/26
3BL	2tr	L242	7ANFWD	上植野町脇田	四条条間・東二坊第二小路	480	8/16	12/21
3BL	3tr	L242	7ANFWD	上植野町脇田	四条第一小路	120	8/16	11/7
3BL	15tr	L242	7ANFWD	上植野町脇田	四条条間大路	360	8/6	10/26
4BL	4tr	L242	7ANFWD	上植野町脇田	四条第一小路	120	10/17	11/29
5BL	18tr	L241	7ANXKM	菱川町(小角)	東二坊大路、芝ヶ本遺跡	360	11/29	2/28
6BL	8tr	L241	7ANXYT	菱川町(山畷手)	三条第二小路・東二坊大路、芝ヶ本遺跡	240	4/17	6/14
6BL	9tr	L241	7ANXYT	菱川町(山畷手)	東二坊大路	300	4/20	6/22
6BL	19tr	L241	7ANXYT	菱川町(山畷手)	三条第二小路	240	11/1	2/2
7BL	10tr	L242	7ANFSK	上植野町尻引	三条条間小路、鶏冠井清水遺跡	360	6/4	8/23
7BL	20tr	L241	7ANXYT	菱川町(山畷手)	同上	360	1/9	3/6
合計						3420		

を受け、調査終了後に公団に引き渡すことになった。このため、実際の現地調査の開始及び終了の日付は異なる。調査には、日本道路公団が設置した国土座標の入った基準点を使用して測量を行い、遺構平面図(トレンチ図を含む)には、相互の関係を表わすためすべて国土座標を表示した。また、各遺構平面図等に付した遺構番号は、当初各トレンチごとに付したものを南方のトレンチから付け直した(説明会資料等とは大幅に異なる)。

調査区(ブロック・トレンチ)ごとの調査回数、所在地、地区記号、調査面積、調査期間は付表1のとおりである。以下、南方より各トレンチごとに記述する。

(石尾政信)

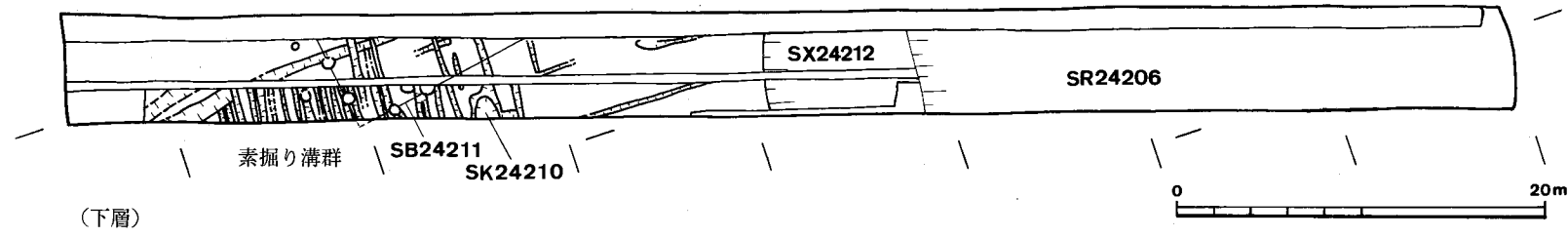
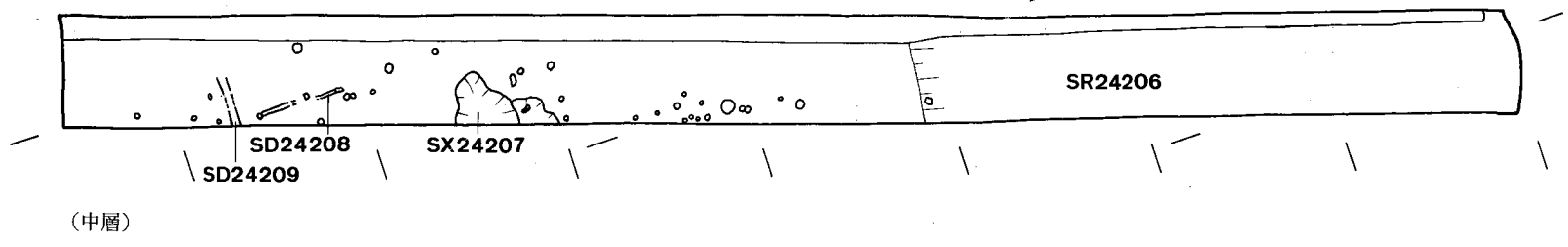
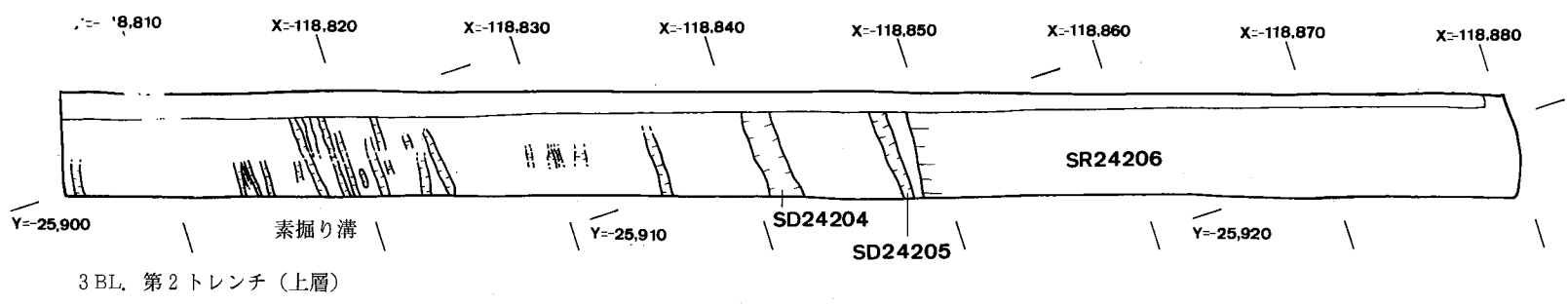
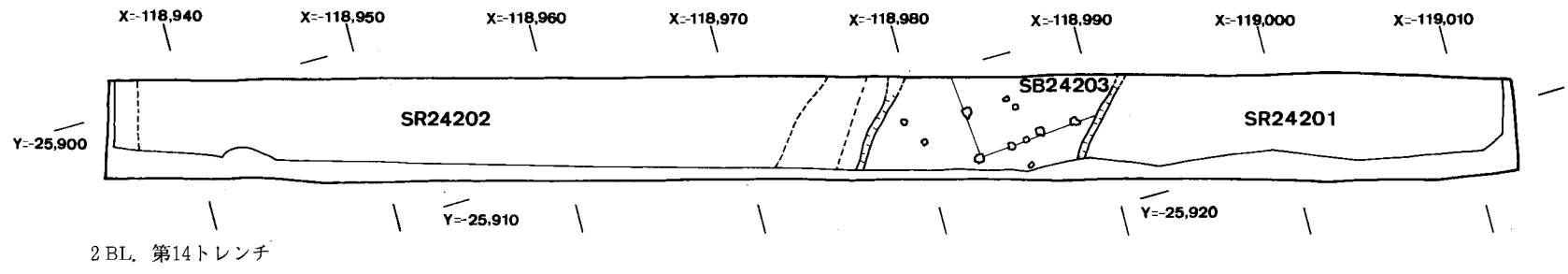
2. 調査の概要

① 2ブロック(7ANFMI-5地区) 四条第二小路・東二坊第二小路、鴨田遺跡の検出を目的とした調査区である。

第14トレンチ(第12図)

A. 検出遺構

検出した遺構は、掘立柱建物跡、小畑川の旧流路等である。旧流路については、3ブロック15トレンチも含めて、本書90頁の「京都盆地西縁・小畑川扇状地の微地形分析」で中



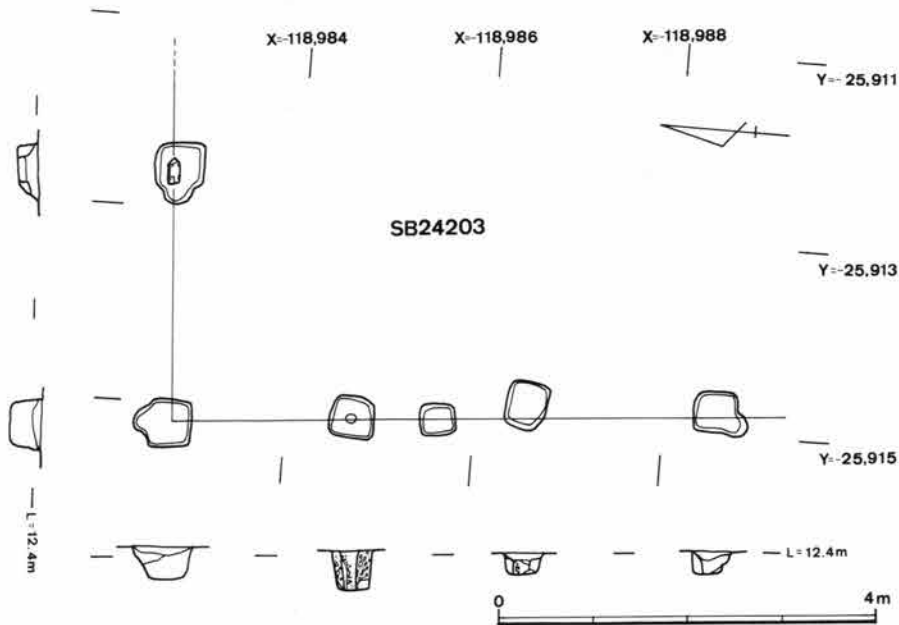
第12図 2BL、第14トレンチ・3BL、第2トレンチ平面図

塚 良氏が詳しく論じておられるので、ここでは簡単に述べる。

建物跡 S B 24203 東西1間以上・南北3間以上の掘立柱建物跡である(第13図)。柱間寸法は東西2.7m(9尺)・南北1.95m(6.5尺)等間である。建物跡の方位は、真北から4°30′西へ振る。柱掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.4mを測る。柱穴の埋土は褐灰色粘質土であるが、p-3では2~3cmの円礫で固めている。p-1の基底には、柱痕付近に柱材の破片が横たわる。出土遺物は土師器の細片があるが、時期は不明である。この建物跡の時期は、層位からみて8~9世紀のものである。

旧流路 S R 24201 トレンチ南半部で検出した北西~南東方向を示す流路である。堆積層は、厚さ1.2~2m以上に及ぶ砂礫層である。砂礫層は大きく2層に分かれ、上位は褐色砂礫、下位は灰褐色砂礫であり、いずれも円礫である。礫の長軸方向は、北西、西北西の2方向を示すが、上位・下位とも認められる。特に、流路の肩付近では砂層も混じえて複雑な様相を呈している。出土遺物は、土師器・緑釉陶器・黒色土器等があり、10世紀末から11世紀初頭頃のものが多い。

旧流路 S R 24202 トレンチ北半部で検出した北西~南東方向を示す流路である。堆積層は、厚さ0.8~1.0mの砂礫層である。流路の肩付近は黒褐色の泥土が堆積し、流路の終末の痕跡を残す。砂礫は、2~10cmの褐灰色を呈し、礫の長軸方向はほぼ北西方向を示す。流路の河床は青灰色粘質土であるが起伏が激しく、砂礫によって削られている。その



第13図 掘立柱建物跡 S B 24203実測図

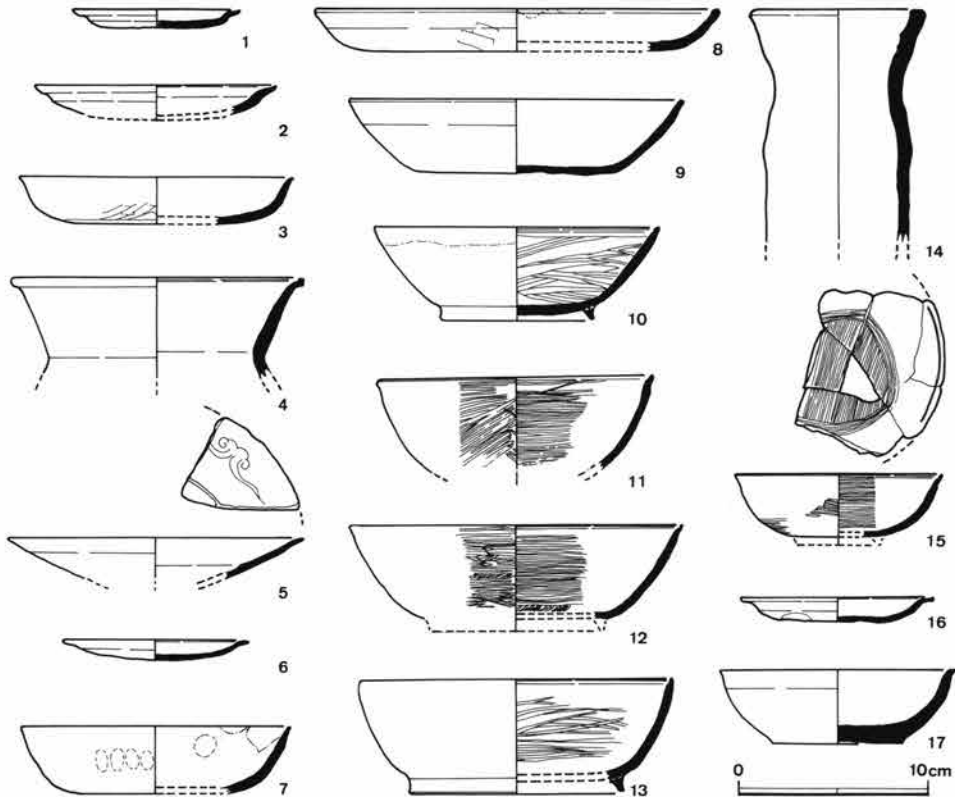
方向は北西を示し、砂礫の長軸方向と一致する。出土遺物は、土師器・黒色土器等があり、S R 24201と同じく10世紀後半～11世紀頃のものである。

B. 出土遺物(第14図)

1～3は、土師器皿である。1・2は、口径9.0cm・12.8cm、淡褐色を呈する。口縁は大きく外傾し、端部は丸くおさまる。3は、赤褐色を呈し、底部外面はヘラ削りを施す。4は、須恵器壺である。5は、緑釉陶器皿である。内外面に釉薬が施され、内面には雲形文が陰刻される。6・7は、土師器皿で、口径9.8cm・14.2cmを測る。

8・9は、土師器皿・杯である。8は、淡褐色を呈し、口径21.4cm・器高2.2cmを測る。底部外面はヘラ削りを施し、端部は丸くおさめる。9は、茶褐色を呈し、胎土は固い。口径17.6cm・器高4.0cmを測る。10は、黒色土器碗Aである。体部内面と口縁部外面は黒色を呈し、その他は赤褐色を呈する。内面の磨きは粗く施される。

11・12は、黒色土器碗Bである。内外面には緻密な磨きが施され、口縁端部の内側に1条の沈線が描かれる。13は、黒色土器Aである。内面の磨きはやや粗く、沈線も明瞭でな



第14図 2BL、第14トレンチ出土遺物実測図

い。14は、淡褐色を呈する製塩土器である。胎土は粗く大粒の石英、長石が多く含まれる。15は、黒色土器椀Bである。口径11cmを測り、小形品である。16は、口径10.4cmの土師器皿である。口縁部は水平に外へ傾き、端部は上方で丸くなる。17は、淡灰色を呈する須恵器である。底部は平底で糸切り痕がある。

(竹井治雄)

②3 ブロック(7ANFWD・XWD地区) 四条第一小路・四条条間小路・東二坊第二小路の検出を目的とした調査区である。第15トレンチでは、京都市伏見区羽束師脇田(7ANXWD)を含むが、トレンチ地区名は調査の都合上、向日市上植野町脇田(7ANFWD)とした。

第2トレンチ(第12図)

南半で旧河道を検出し、北半では上層で中世溝を、中層で平安時代の土器溜りやピット群を検出した。下層では、長岡京期の東西・南北の溝群と土器溜りを検出した。溝は、ほとんどが東西方向である。2トレンチの遺物包含層からは、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・布目を持つ平瓦・石帯(丸柄)などが出土した。調査地南半の自然流路からは、須恵器杯・甕、土師質の羽釜などが出土しており、平安時代のものが多い。長岡京期の土器溜りからは、土師器・須恵器・木製品・神功開寶(2枚)などが出土した(第16・17図)。須恵器片には、底部外面に「徳」と墨書されたものがある。

A. 検出遺構

イ. 中世(上層)

トレンチ北半部で、瓦器椀の断片をわずかに含む東西方向の素掘り溝群を検出した。灰褐色粘質土を埋土とし、残存幅約10~18cm・深さ約5~10cmを測る。トレンチ中央部の2本の溝は比較的幅が広く、溝(S D 24204)は幅約1.4m・深さ約17~20cm、溝(S D 24205)は幅約50~80cm・深さ約15cmの残存状況である。埋土はともに暗褐色粘質土である。これら中世溝の検出レベルは、13.6mを測る。なお、トレンチ南半部は、平安時代を上限とする自然流路(S R 24206)がみられ、中世の遺構は認められなかった。

ロ. 平安時代(中層)

上記の中世検出面から約20cm下位で、3本の素掘り溝、土坑(S K 24207)、柱穴痕などを検出した。トレンチ南半部は、青灰色砂礫・粗礫・褐色砂質土を縞状に堆積した自然流路(S R 24206)に広く覆われていた。

溝 S D 24208 褐色粘質土の埋土で、幅約20cm・深さ約3cmの残存状況である。中から底部糸切りの須恵器壺(第16図47)が出土した。

溝 S D 24209 褐色粘質土を埋土とし、幅約40cm・深さ約10cmの残りを示す。

土坑 S K 24207 不整形で灰色粘土をまばらに含む褐色粘質土を埋土とする。土師器皿(第15図37)、釜形土器(第15図18)の断片などが出土している。浅い沼地状のくぼみのような状況である。

柱穴は、柱心材を残すものもあり、残存状況は良好ながら、掘立柱建物跡の抽出はできなかった。掘形は、直径20~40cmの円形である。

自然流路 S R 24206 トレンチ中央からなだらかに南側に落ち込み、深さ約1mを残す。平安時代の遺物の他、メノウ製の勾玉1点(第15図22)が出土している。遺構の検出レベルは、溝・土坑・柱穴痕を検出した北半で約13.4m、自然流路の南半で約13.5mを測る。

ハ. 長岡京期(下層)

東西方向の素掘り溝群、南北方向の素掘り溝群、掘立柱建物跡と思われる柱穴痕、土坑1基などを検出している。これらの遺構の検出面は標高13.1~13.2mを測る。

また、自然流路(S R 24206)を完掘後、自然流路の北岸よりさらに北へ約10m広がる沼地状の落ち込み(S X 24212)を検出した。暗茶褐色粘土・黒褐色土を埋土とするこの落ち込みは、最も深いところで約25cmを測る。ここから、長岡京期の各種の土師器・須恵器をはじめ、木製加工品、自然遺物、さらに木簡・神功開竈など多くの遺物が出土した。

土坑 S K 24210 不整楕円形で、長径約2m・短径約1.4m以上・深さ約20cmを測る。須恵器・土師器・黒色土器などが出土している。

素掘り溝群 東西溝は幅約30cm前後ではほぼ等間隔に並行して26条検出された。南北方向のものは5条みられ、東西溝に先行して掘られていた。南北溝は東西溝に比べて幅広い。長岡京期の須恵器・土師器などが出土した。耕作にかかわる畝と溝の可能性が高い。

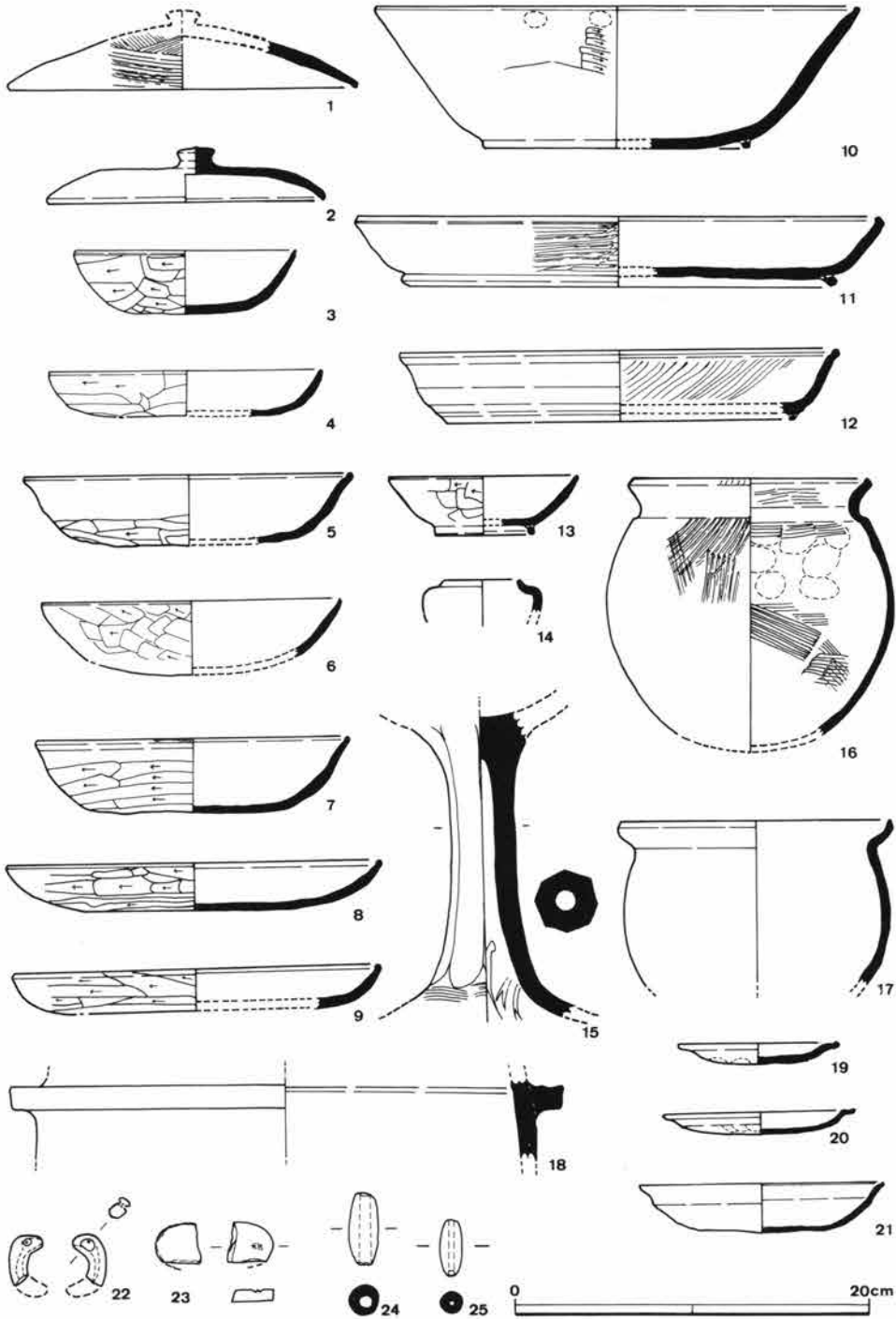
掘立柱建物跡 S B 24211 直径60cm前後の円形柱掘形が並ぶことから推定した。北西隅の柱穴痕は未検出ながら、梁間・桁行とも2間以上と推定される。主軸が真北から東へ約10°振れており、素掘り溝群を切っているので、長岡京期以降の可能性はある。

長岡京期の遺構は以上であり、四条第一小路・四条条間小路の条坊遺構と考えられるものは、検出されなかった。

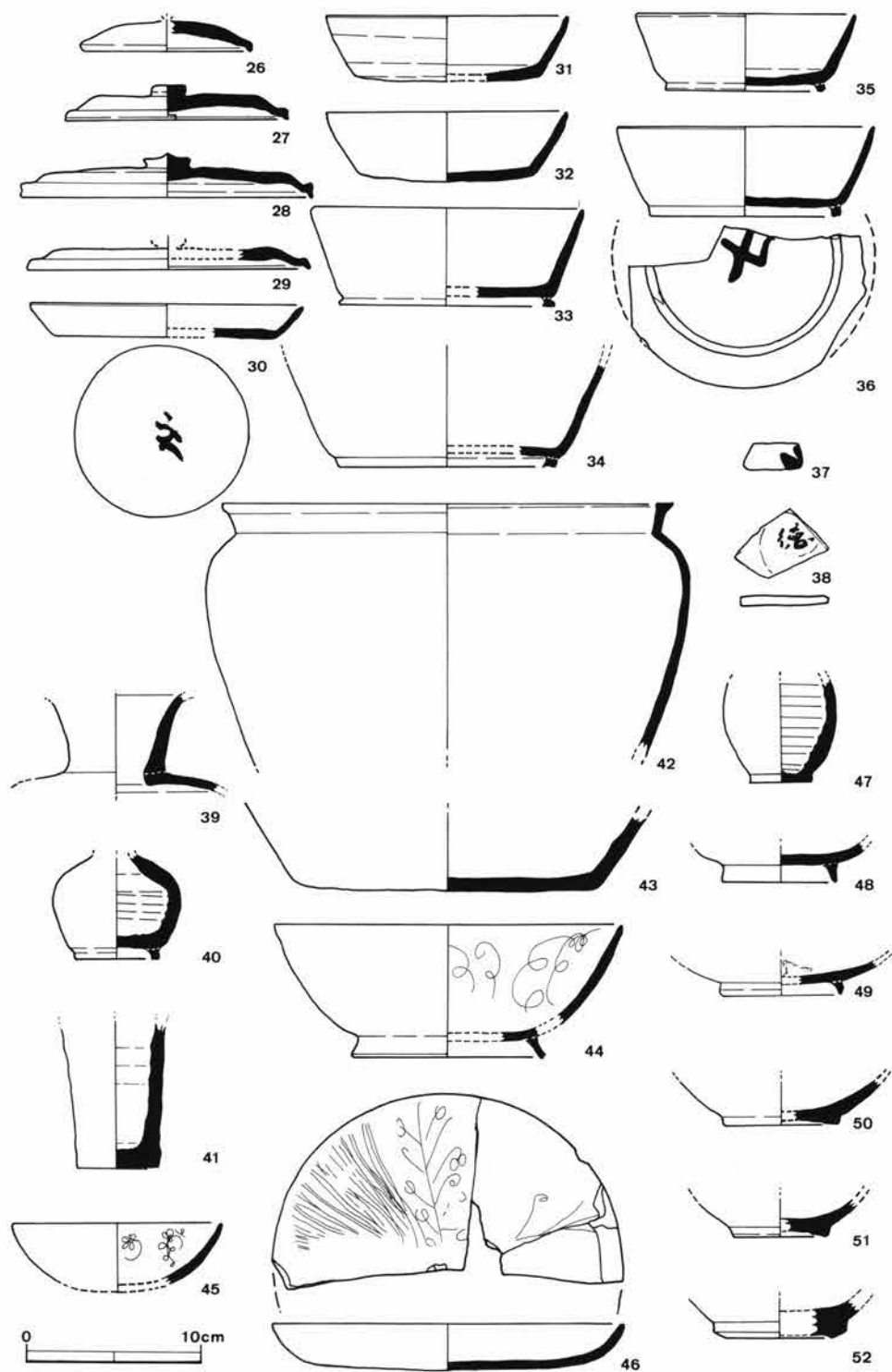
B. 出土遺物(第15・16図)

イ. 中世

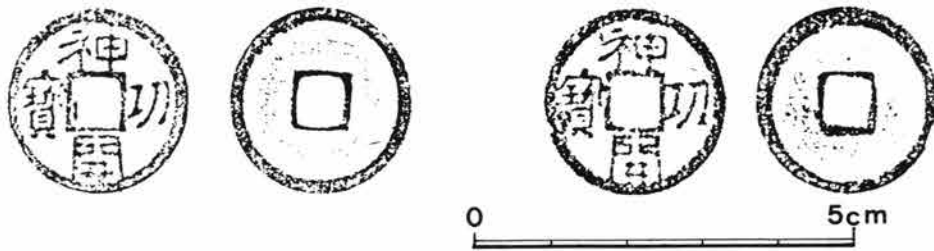
わずかに瓦器碗断片が素掘り溝及び包含層中から出土しているが、図示し得るものはなかった。ほかに、中国製輸入白磁の底部断片(第16図52)、土錘(第15図24・25)などが包含層中から出土している。



第15図 3BL、第2トレンチ出土遺物実測図(1)



第16図 3BL、第2トレンチ出土遺物実測図(2)



第17図 3BL、第2トレンチ出土銭貨拓影

ロ. 平安時代

素掘り溝中から出土した土師器皿・須恵器壺、土坑(S K24207)からの土師器皿、同釜形土器、流路内から出土した緑釉・灰釉陶器の底部断片などがある。また、遺構面上から碧玉製の石帯(丸軋)が1点出土した。土師器皿は、口縁部が一旦水平に屈曲し、端部が上方に丸め込まれている。19は、口径9.2cm・器高1.2cm、20は口径10.8cm・器高1.3cmを測る。47は、糸切り底の須恵器壺で、底径3.6cmである。灰釉陶器は、シャープな高台をもつ。50・51(第16図)は、蛇の目高台の緑釉椀である。軟陶質である。23(第15図)の石帯は、緑色のヒスイ製で、表面中央に穿孔が2つ認められる。全体の3分の1を欠損している。

ハ. 長岡京期

土師器では蓋(第15図1・2)、椀(同3)、皿A(同4・8・9)、皿B(同11・12)、杯A(同5・6・7)、杯B(同10・13)、甕(同16・17)、高杯(同15)が、須恵器では蓋(第16図26~29)、杯A(同31・32)、杯B(同33~36)、鉢(同42)、甕(同43)、壺(同39~41)、墨書土器(同30・36~38)が、そして黒色土器の椀(同44・45)、皿(同46)がある。(第15図9及び第16図35・36は柱穴内、第15図7・12・15・17、第16図27・39は素掘り溝内、第16図26・29・31・33・37・41・45は包含層中、以上のもの以外はすべてS X24212中から出土している。)

土師器皿 器高が高く、外面に顕著なヘラミガキの認められる18と、口縁端部にむかって屈曲が強く、宝珠状形のツمامをもつ19がある。ともに端部は丸くおさめられる。

土師器椀 外面をヘラケズりするc手法によるものである。杯A(第15図22・24)は、c手法ながら、22は口縁部上半を、24は同3分の1をけずり残している。口縁端部はやや内に丸め込まれている。なお、38は外面下半を押さえの後ヘラケズリし、上半をナデによって調整するものである。

土師器杯B 10は、口径27cm・器高8cmを測る大形のもので、外面はヘラミガキされる。口縁端部は丸め込まれている。13は、口径10.6cm・器高3.2cmを測り、外面をヘラケズリしている。口縁端部は、10は丸め込みがみられ、13は丸くおさめられる。

土師器皿B 11が口径29.3cm・器高3.8cm、12が口径24.8cm・器高4cmを測る。11は、

口径部外面にヘラミガキを施している。口縁端部は丸め込まれている。12は、内面に斜め上方向にのびる暗文が認められる。口縁形はやや外反ぎみになり、先端は丸め込まれている。12は暗赤褐色の色調である。

土師器甕 16・17とも球形体部をもつ。16は、内面をハケ目調整し、体部外面はタタキ目の上に調整されたようすがうかがえる。

土師器壺 31は、壺Eの体部から口縁にかけての屈曲部断面である。

土師器高杯 15は、脚柱部のみの断片である。棒心作りで八角の面取りがなされている。脚台部はヘラミガキされている。

須恵器蓋(26～29) 平らな頂部から直立する口縁端部を形成するもので、中央がくぼむボタン形の鈕をもつもの(27)、宝珠形の鈕をもつもの(28)がある。なお、図化していないが、焼成のひずみをもつ蓋の上面全体に墨が付着した転用硯が1点出土している。

須恵器杯A 31・32は、ヘラ起こしした底部から立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。

須恵器杯B 33～35は、口径37～38cm・器高4.5～5.5cmを測る。

墨書土器 30・36の底部中央に墨書がみられる。ともに判読不能。37・38は、同じく墨書土器である。38は、おそらくヘラ起こしされた杯の底部に、「徳」と記されている。30は、須恵器皿A、36は同杯Bである。

須恵器壺 39・40の壺L、41の壺Gがある。壺Lは、大小あり、40には体部内面にロクロ引きの凹凸がある。

須恵器鉢 42は、口径25.6cmを測る。口縁部は「く」の字に屈曲し、口縁端部は水平な面をもつ。

須恵器盤 43は、安定した底部から大きく開く盤の底部断片である。

黒色土器 内外面をヘラミガキし、内面のみを黒色化させる。44・45は椀で、内面に螺旋暗文を施す。46は、皿で同じく内面を黒色化させ、内面に枝葉状の螺旋暗文がみられる。

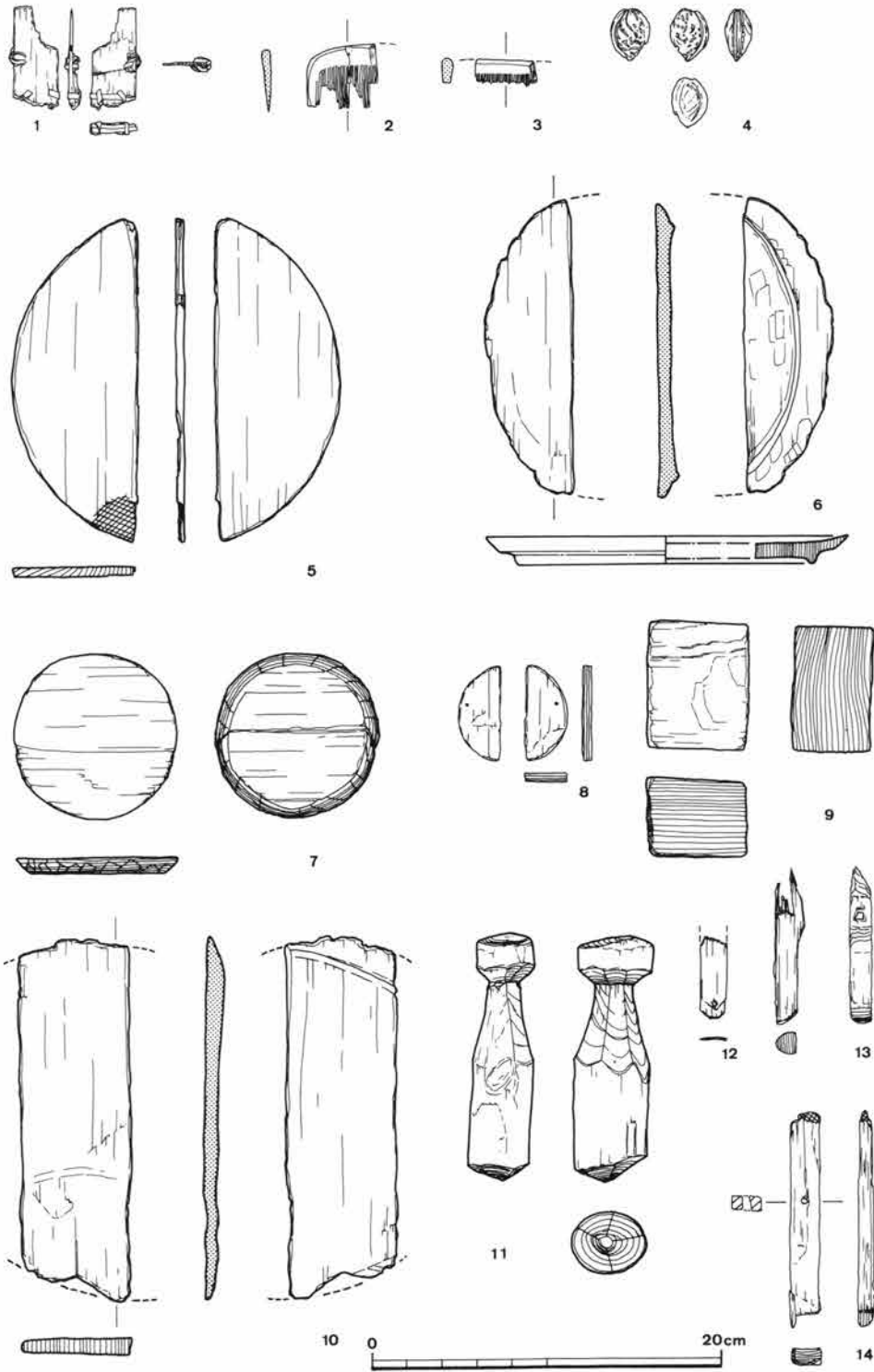
木製品(第18図) 木簡の断片(墨痕のみ、判読不明)、曲物容器の側板材・蓋(栓か?)・底材・高台付皿・ツチノコ・櫛などがある。その他、用途不明の加工木材や桃の種などの自然遺物も出土している。9と10は、素掘り溝中から、他はすべてSX24212中から出土した。

曲物 1は、曲物側板と考えられ、巻いて綴じ込まれたような桜の樹皮が残っている。5・8は、曲物の底板である。5の下端の斜線部分は、焼け焦げた痕である。

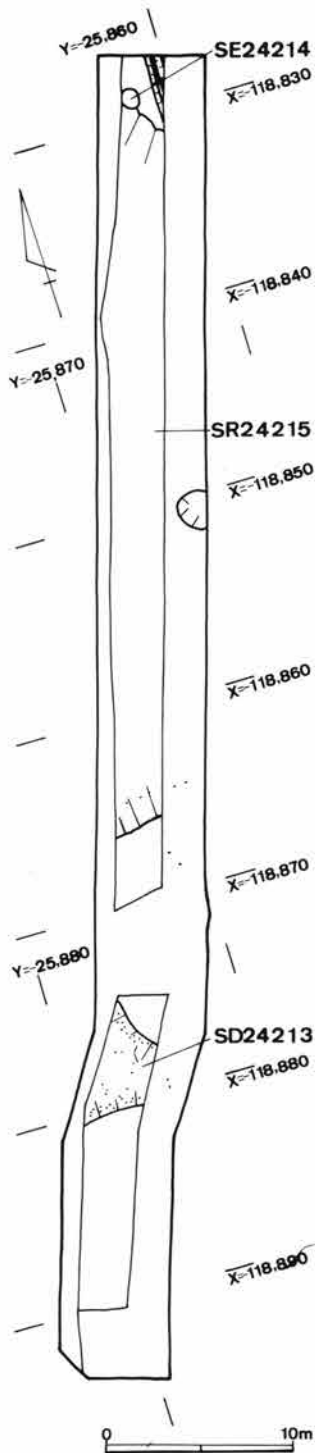
櫛 2・3は、櫛の断片である。

皿 6は、削り出しの高台をもつ皿である。10も木皿の底部断片である。高台の高まりがわずかにみられる。

蓋(栓?) 7は、側縁全周を斜めにカットしていることから、蓋または栓の役割を果た



第18図 3BL、第2トレンチ出土遺物実測図(3)一木器



第19図 3BL、第15トレンチ平面図

したものであろう。

ツチノコ 11は、鉛筆のように面取りされた削り方で、丸い先端を作り出している。

加工木材 9・12～14は、大小の加工木材である。9は、長方体に切断されている。12・14は円形、13は方形のほぞ穴が穿たれている。このほかに自然遺物として4の桃の種子がある。

二、古墳時代(第15図22)

勾玉 尾部の屈曲が強く、背がやや張る。形にそってかすかな稜が残されている。両側から穿孔をしている。橙色半透明のメノウ製である。

(黒坪一樹)

第3トレンチ(第22図)

耕作土・床土を重機で掘削すると、トレンチ全面に礫層が厚く堆積し、旧河道を確認したにとどまった。礫層内からは須恵器の甕片など少量出土した。

流路跡の堆積層は厚さ2.0mの砂礫層である。この砂礫層は褐色砂礫と褐灰色砂礫の2層に大きく分かれるが、礫の長軸方向は、いずれも北西方向に向く。砂礫は円礫で2～8cm程の大きさである。出土遺物は須恵器壺(第21図8)がある。色調は灰色を呈し、口径は16.4cmを測る。

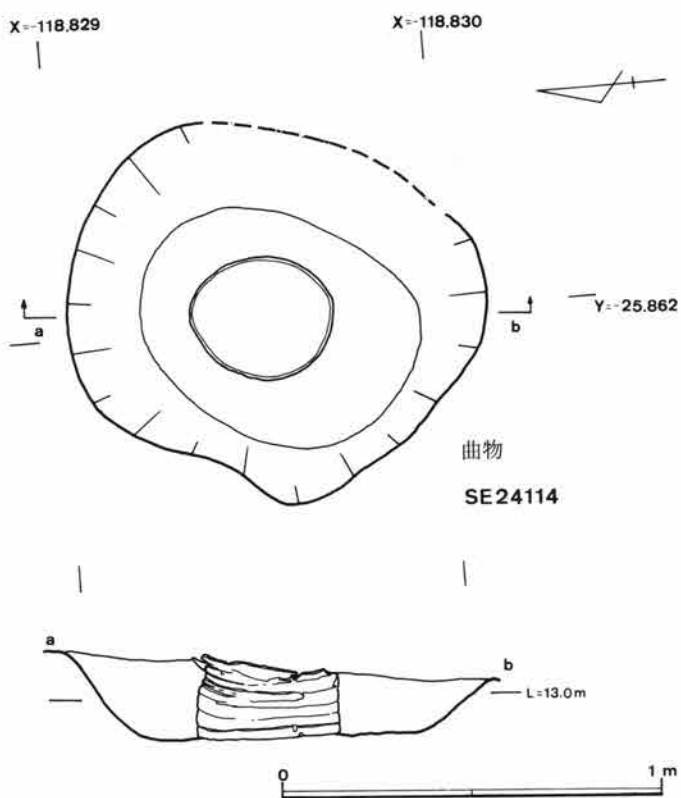
第15トレンチ(第19図)

調査地の大半が旧河道で、河道内で杭列を2か所確認し、河道の北岸で曲物を使用した井戸を1基検出した。検出した旧河道は、上流にあたる第2トレンチ南半の旧河道の延長と考えられる。

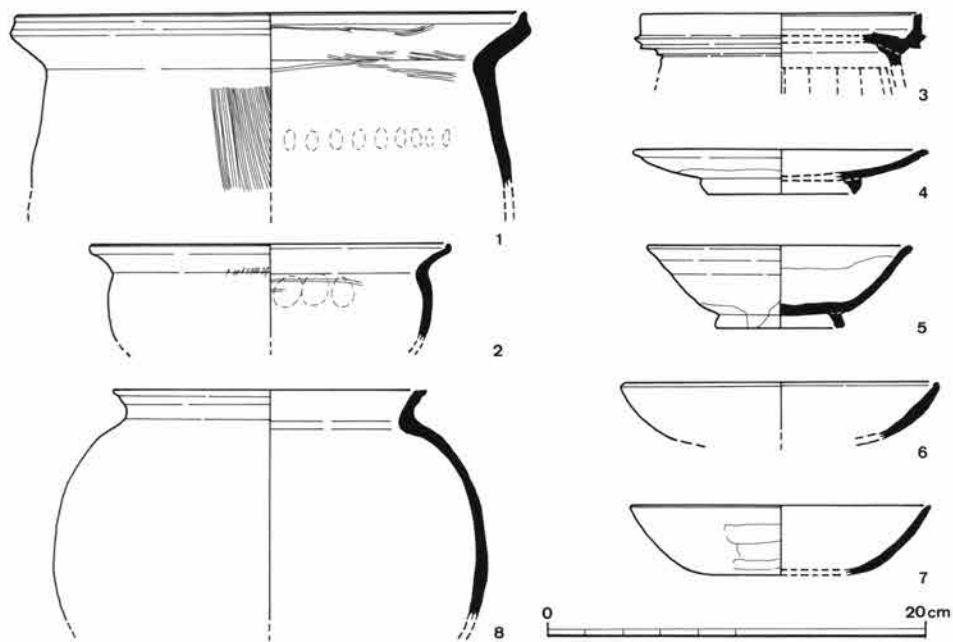
A. 検出遺構

検出遺構は、井戸、溝、小畑川の旧流路等である。
溝 S D 24213 トレンチ南端部で検出した多数の

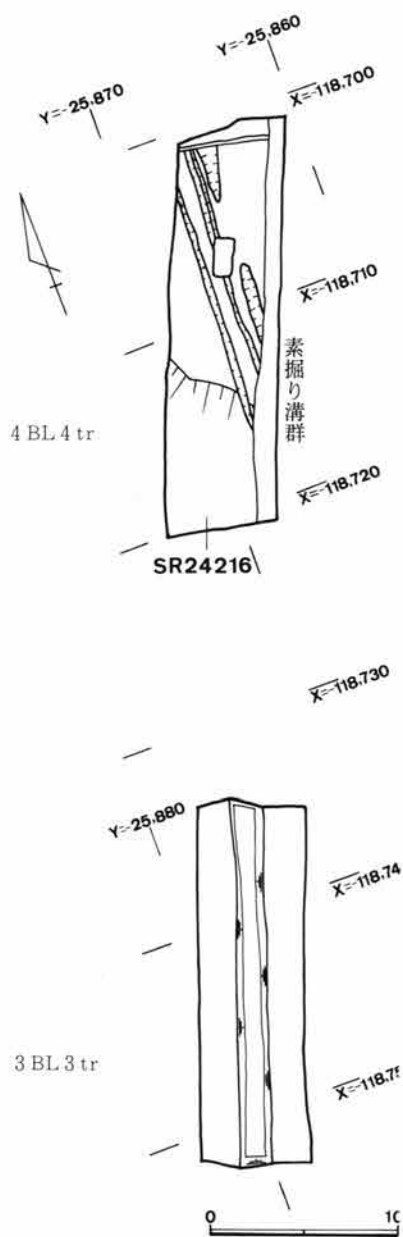
杭を伴う溝である。溝幅約2.8m・深さ1.3mを測る。溝の平面形態は西側で二つに分かれる。本流は不明である。杭列は、溝の肩にそって扇状に開いている。杭の直径10cm、長さは2mを測り、下層の砂礫に強く立っている。杭列の分岐点には、幅0.3m・長さ1.2mの横板を設けて、護岸の役割を果たしている。この溝は、近年まで遺存していた形跡があるが、周囲の景観の大きな変化をとげる中で、旧地形を知る重要な手がかりとなるもの



第20図 井戸跡S E 24114平・断面図



第21図 3BL、第15トレンチ出土遺物実測図



第22図 3BL、第3トレンチ・
4BL、第4トレンチ平面図

である。

井戸 S E 24214(第20図) トレンチ北端部で検出した曲物を伴う井戸である。残存状況は、井戸の下部、曲物のみで良好とは言えない。曲物は直径0.38m・高さ0.22mを測り、厚さ5mmの板を5枚重ねる。堆積土は、曲物の中では緑灰色粘質土、外では青灰色砂質土である。出土遺物は全くない。

旧流路 S R 24215 トレンチ全域で検出した北西～南東方向を示す流路である。トレンチ北端で流路の肩が北西方向に向く。堆積層は、厚さ1.8～2.2mの砂礫層である。砂礫層は上位・褐色砂礫、中位・褐灰色砂礫、下位・灰色砂礫と大きく3層に分かれ、上位と中位との間に青灰色粘土が0.1～0.2mの厚さでレンズ状に堆積する。この粘土が時間の間隙を表わすか、あるいは粘土塊が運ばれてきたものか不明である。礫の長軸方向は北西、北北西に向き、流路の肩、河床の侵食方向とほぼ一致する。出土遺物は、土師器、灰釉陶器、須恵器等がある。

B. 出土遺物(第21図)

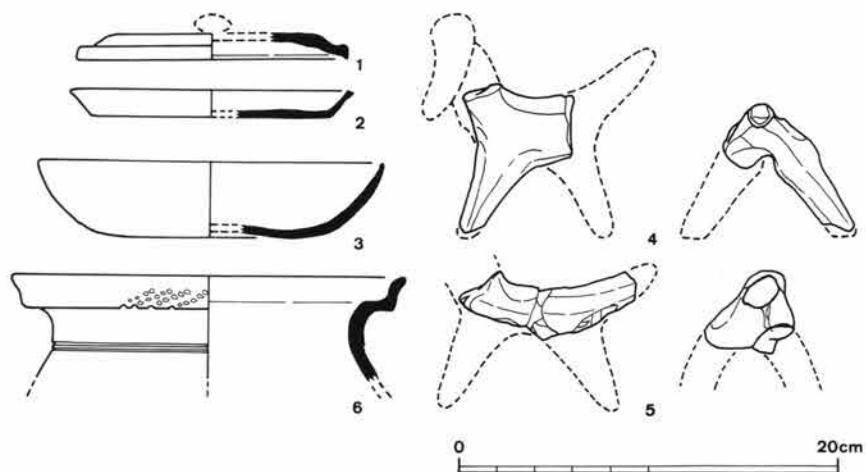
土師器甕 1は、口径27.4cmを測る。体部は胴長の様相を呈し、端部は上方に丸くおさまる。外面は縦方向の細かいハケを施し、内部は指押さえて調整する。胎土は細かい砂粒が多く含まれる。

土師器鉢 2は、口径19.2cmを測る。

須恵器円面硯 3は、口径15.0cmを測る。脚部には長方形のスカンがある。

灰釉陶器皿 4は、口径17.6cmを測る。

灰釉陶器椀 5は、口径16cm・器高4.4cmを測る。器の外面と口縁部内面を施釉する。



第23図 4BL、第4トレンチ出土遺物実測図

土師器皿 杯6・7は、土師器皿・杯である。7の外面には、横方向の磨きが施される。

(竹井治雄)

③4ブロック(7ANFWD地区) 左京四条二坊十六町にあたる。四条第一小路の検出を目的とした調査区である。

第4トレンチ(第22図・図版第8)

上層で、中世の耕作等にかかわる溝を検出し、下層で流路状堆積を確認した。流路内からは、古墳時代の土師器・須恵器、弥生土器片が出土した。

A. 検出遺構

素掘り溝 瓦器碗片などが出土する南北方向の素掘り溝を3条検出した。中世の水田耕作にかかわるものと推測される。

旧河道S R24216 南部では、南方に落ち込む礫層の堆積を確認した。この礫層は、3ブロック・3トレンチで確認した厚い礫層の北肩部と推定される。この礫層の範囲を旧河道とした。

中世素掘り溝が検出される灰褐色土層の30~40cm下から(標高13.0m前後)、土師器、須恵器、土馬などが径1.5mの範囲に出土したが、遺構には伴っていない。土馬などの遺存状況からみて周辺から流れ込んだものであろう。

流路状の堆積 最終段階に断ち割りを実施したところ、標高11.8m前後で暗灰・黒灰粘土層を確認し、この上層の青灰砂・砂礫層から古墳時代の土師器・須恵器や、弥生土器などが出土し、流路状の堆積があることを確認した。

B. 出土遺物(第23図)

遺物包含層から須恵器蓋(1)・土師器皿(2・3)や土馬(4・5)が出土した。いずれも長岡京期に属するものであろう。

流路状の堆積である青灰砂層から、受け口状口縁部の外面に、列点文を施したいわゆる近江系の弥生土器(6)が出土した。口縁部と体部の境界に櫛描き直線文がみられる。外面は、淡黄褐色を呈しており、胎土に石英・チャートや少量の赤褐色粒子を含み、復原口径21cmを測る。弥生時代後期(畿内第V様式)に相当するものであろう。

(石尾政信)

④5 ブロック(7ANXKM地区) 東二坊大路、芝ヶ本遺跡の検出を目的とした調査区である。

第18トレンチ(第24図)

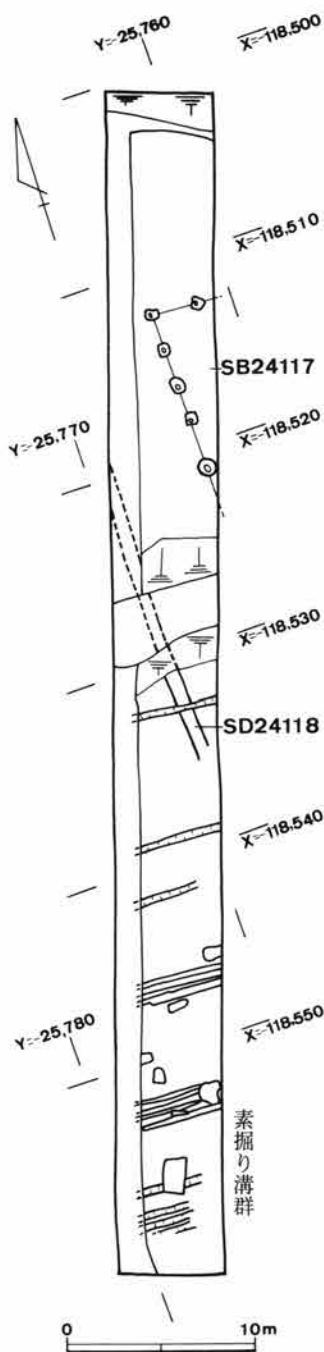
第18トレンチは、南北二つに埋設された通水管によって分断されている。このトレンチは東二坊第二小路を検出するために設定された。実際に検出できた遺構は、中・近世及び長岡京期の遺構で、ほぼ同一の面で認められた。

現在の道路面から遺構面までの比高は約2mを測る。検出面は、12.4~12.0mである。

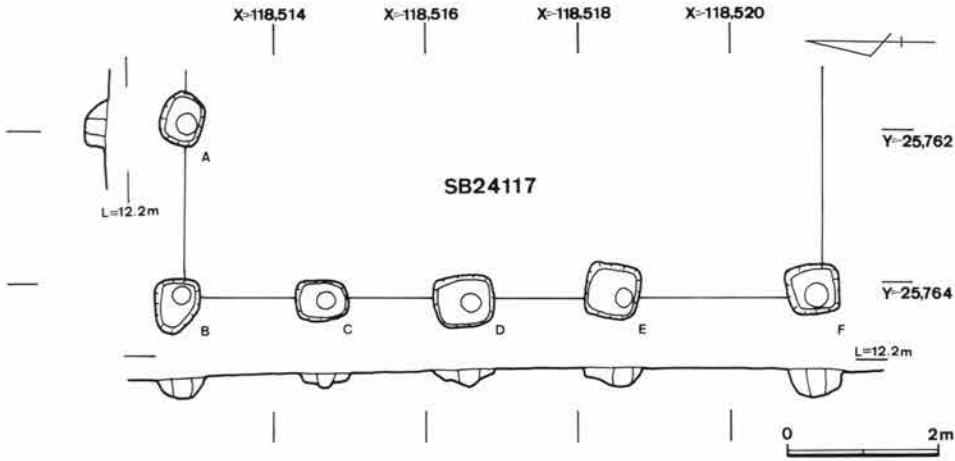
A. 検出遺構

イ. 中・近世

素掘り溝群 ほぼ東西方向の溝群である。中には竹が埋設されたものもあり、暗渠廃水溝として用いられたと考えられる。遺物には、瓦器片・白磁片などがあるが、いずれも細片であるため図化し得なかった。また、竹の埋まった溝は、竹のまわりに木葉のついた柴を置く構造を呈している。竹の残りが非常によいことから、溝は時代差のある二群に分けられる可能性が指摘できる。



第24図 5BL、第18トレンチ平面図



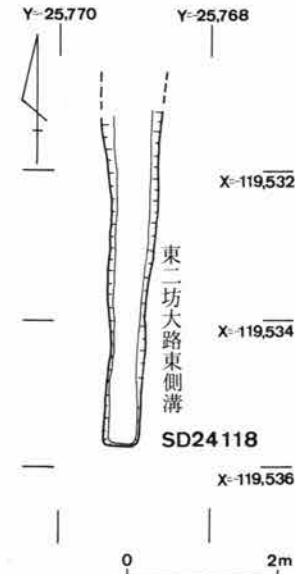
第25図 掘立柱建物跡 S B 24117実測図

□. 長岡京期

掘立柱建物跡 S B 24117 東西2間以上・南北4間の建物跡で、南に廂を持つ。東西の柱間約2.4m・南北約2.1m、廂は、約2.4mを測る(第25図)。柱掘形は一辺約0.7mほどの隅丸方形で埋土は暗青灰粘砂土であった。柱痕部分は柱掘形底部で若干くぼんでいた。柱掘形から須恵器が出土したが、図化できなかった。

東二坊大路東側溝 S D 24118 後世の削平のため残存状況が悪く(第26図)、南部は検出することはできなかった。検出幅は70cmで、検出面からの深さは約5cmを測る。遺物は、出土しなかったものの、検出した溝の座標値から東二坊大路東側溝と考えられる。国土座標値は、 $X = -119,532.000$ ・ $Y = -25,769.000$ である。

(中川和哉)



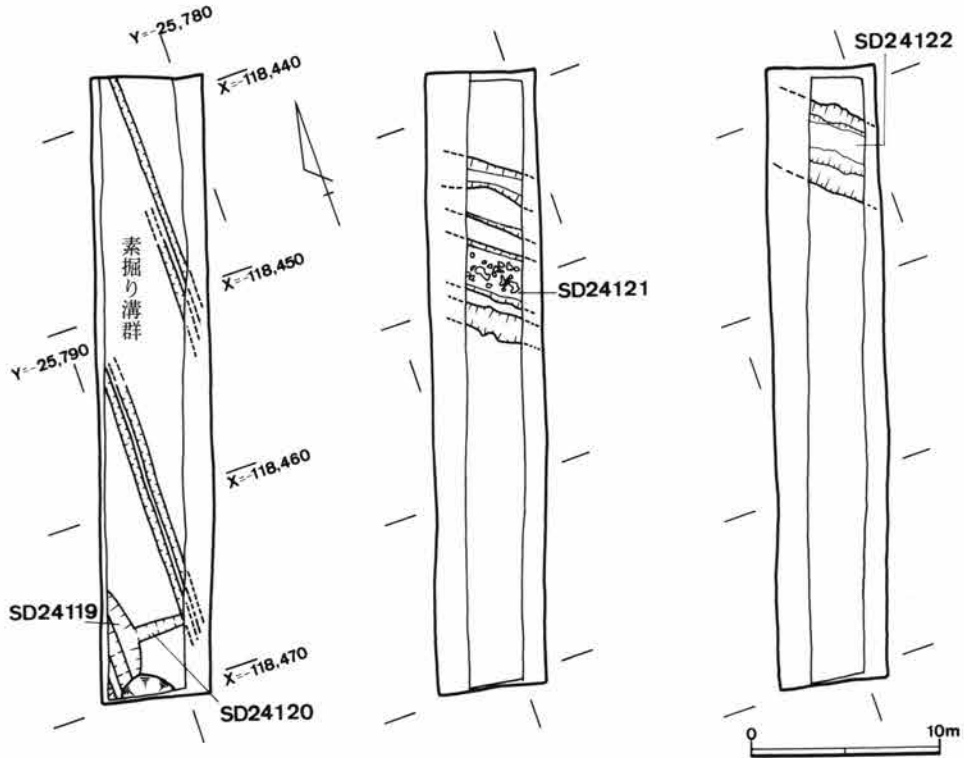
第26図 5BL、第18トレンチ
長岡京条坊遺構

⑤6ブロック(7ANXYT地区) 三条第二小路・東二坊大路、芝ヶ本遺跡の検出を目的とした調査区である。

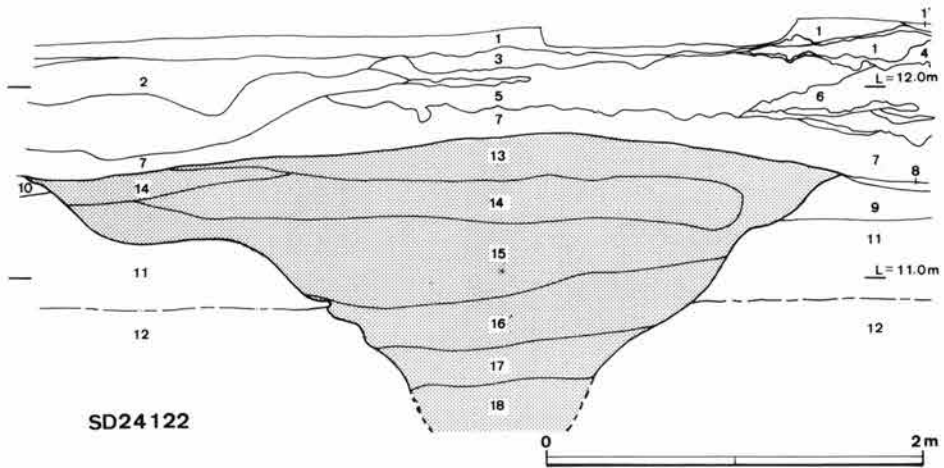
第8トレンチ(第27図・図版第10)

A. 検出遺構

上層で、中世の溝を検出し、下層で旧流路を検出した。流路内からは、古墳時代の土師器・須恵器が出土した。



第27図 6BL、第8トレンチ平面図



第28図 溝SD24122土層断面図

1. 灰色細砂(黄橙色粘質土全体に混在) 1'. 黄褐色細砂(小礫を疎らに含む) 1''. 1に類似 2. 淡青灰色砂礫(玉砂利をベースに直径3~7cmの礫が多く堆積) 3. 淡黄灰色砂礫 4. 橙褐色粘質極細砂
 5. 暗青灰色極細砂 6. 暗灰色シルト(やや赤みを帯びる) 7. 暗茶褐色 8. 濃暗茶褐色砂礫混じり粘土 9. 暗茶褐色極細砂 10. 暗青(灰)色砂粒(直径5mmの小礫を含み固く締まっている) 11. 濃茶褐色粘土 12. 灰黄(白)色粘土 13. 暗青灰色砂礫(直径1cmほどの礫多く含む) 14. 暗青灰色粗砂粒(直径5mmの小礫多く含む) 15. 暗灰色砂礫(直径0.5~1cmの小礫を多く含む) 16. 青白灰色砂礫(直径1~3cmの礫多く含む) 17. 暗青灰色粗砂粒 18. 青灰色細礫(チャート礫)

イ. 中世

素掘り溝群 瓦器椀片を中心とする遺物が出土した溝を合計7本検出した。南北方向に2本ずつで、幅約30～50cm・深さ約10cmの残存状況である。また、東西溝(S D24120)は、暗灰褐色極細砂を埋土とし、南北溝に切られている。瓦器椀片が出土しており、中世のものと考えられる。

南北溝S D24119は、溝S D24120と接続し、長岡京期の遺物が中世のものに混じって若干出土している。暗灰褐色砂礫混じり粘質土を埋土とする。残存幅約1.8m以上・深さ約10cmを測る。以上の中世遺構の検出面レベルは約12.4mを測る。

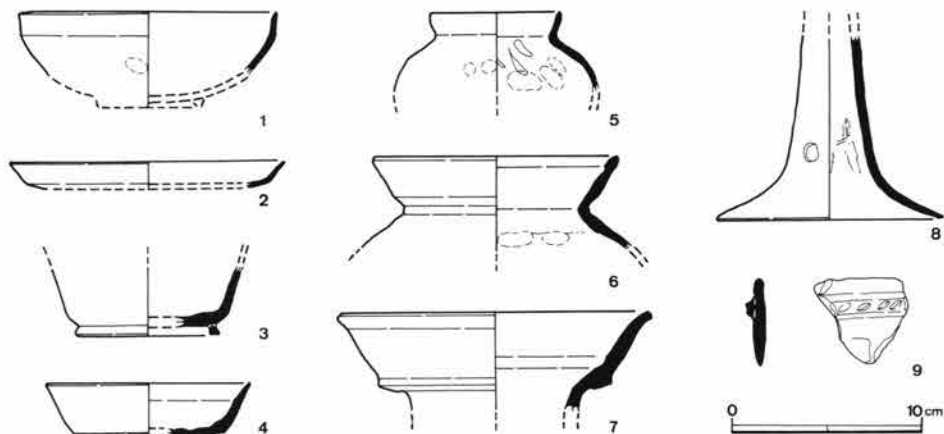
ロ. 古墳時代

中・下層遺構として、粒の粗い砂礫や細砂を縞状に堆積した自然流路を4本検出した。断面形でみて、皿状に浅くくぼむもの、ゆるやかに段をもつ逆台形に近いものがある。底面に偶蹄類の動物らしき足痕などのくぼみを多く残すものもあった。所属時期は、溝(S D24121・S D24122)から古墳時代の土師器(布留式併行期)が出土することから、当該時期を中心に機能していたと考えられる。その他の遺物としては、溝(S D24121)の最上層から奈良時代の須恵器杯の断片2点、溝(S D24122)の底近くで突帯文土器(縄文時代晩期)の断片1点がある。溝(S D24121)と溝(S D24122)の検出の標高は、前者が約12m、後者が約11.5mを測る。

B. 出土遺物(第29図)

イ. 中世

素掘り溝群から出土した瓦器椀断片がある。1は、溝(S D24102)から出土した。体部が



第29図 6BL、第8トレンチ出土遺物実測図

ら口縁に移りかわるあたりに、わずかに稜が観察される。摩滅がすすみ、内面のミガキ痕はわずかに残るのみである。

ロ. 長岡京期

中世の溝に混在していた。2は土師器皿、3は須恵器杯Bである。溝(S D24107)から出土した。

ハ. 奈良時代

自然流路(S D24121)の上層から出土した須恵器杯Aである。内外面ナデ調整で口縁部はやや外反ぎみで、端部を丸くおさめる。

ニ. 古墳時代(6~8)

この時代の土器は、自然流路(S D24121)の中から出土した布留式併行の土師器群である。6は、甕の断片である。口縁端部は、明瞭な折り返しをもつ。体部との境は、「く」の字形に屈曲する。

5は、小形の壺である。口縁部は丸みを帯びて内湾し、端部は丸くおさめられている。体部内外面には、指押さえが認められる。その他の調整は不明である。胎土・色調は、砂粒を含むやや粗い胎土で、色調は橙灰色を呈する。

7は、二段口縁の壺である。内外面ともナデ調整される。胎土はやや粗く、2mm程度の礫もわずかに入る。明るい橙灰色である。

8は、高杯脚柱部である。しほり目のあたりに円孔を1か所あける。摩滅が著しい。

ホ. 縄文時代

自然流路(S D24122)の底から出土した9は、晩期の突帯文土器(深鉢)の口縁断片である。チャート粒を含む粗い胎土で、暗灰褐色を呈する。端部付近に右上がりの刻み目を連続してつけた突帯が貼り付けられている。

(黒坪一樹)

第9 トレンチ(第30図・図版第11)

上層で、南北方向の中世溝を検出し、中層で東二坊大路の東側溝を検出した。溝内からは、土師器・須恵器片が出土した。下層で旧流路を検出した。流路内からは、古墳時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器が出土した。

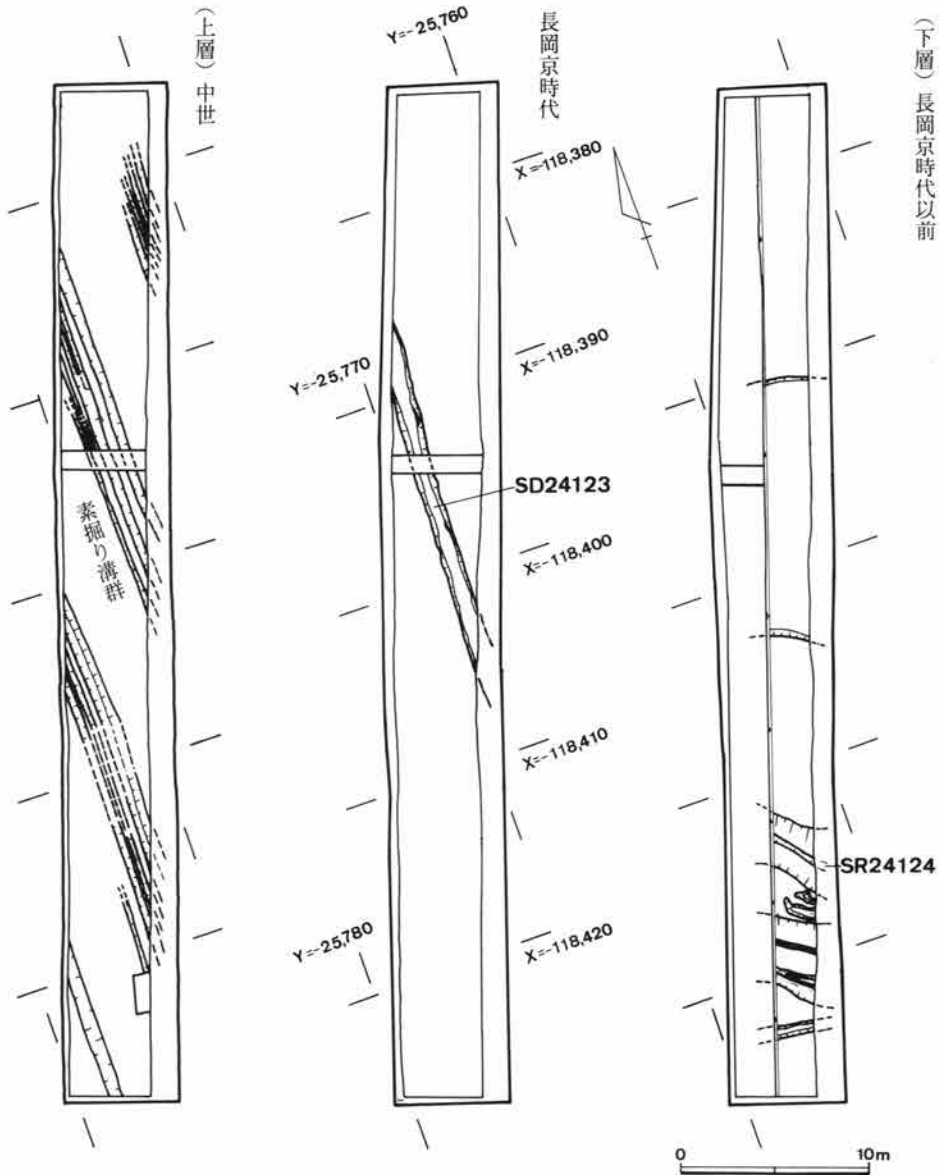
A. 検出遺構

イ. 中世

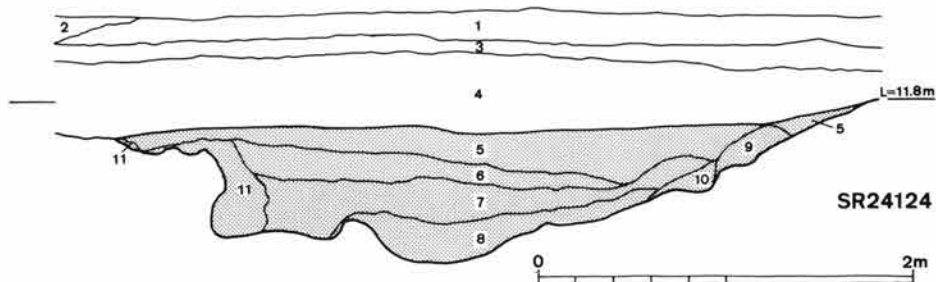
南北素掘り溝群 幅約30~50cm・深さ約5~15cmの残存状況である。およそ4mの間隔をあけ、4~5条ずつ検出された。検出の標高は、12.1mを測る。

ロ. 長岡京期

南北溝 S D24123 トレンチのほぼ中央を斜めに走る。長さ約20m分、幅約90cm・深さ約20～40cmの残存状況である。埋土は、第32図に示したように砂礫や粘質土が混在している。この溝の東側は、橙褐色粘質土が約15cmの厚さで堆積しており、整地が行われたようである。溝内及び整地層中からは、長岡京期の遺物が出土した。本溝は、東二坊大路東側溝と考えられる。検出レベルは、約12.3mを測る。国土座標値は、X=-118,395.000・



第30図 6BL、第9トレンチ平面図



第31図 溝S D24124土層断面図

- | | | | |
|------------------|-----------|------------|---------|
| 1.淡黄褐色砂礫 | 2.灰褐色極細砂 | 3.橙褐色砂礫 | 4.暗灰色砂礫 |
| 5.暗灰色砂礫(4に比べ粗粒) | 6.暗灰色粗砂 | 7.暗灰黄色細砂質土 | |
| 8.暗赤褐色礫(鉄分の沈殿顕著) | | 9.淡茶褐色極細砂 | |
| 10.赤褐色粗砂(鉄分沈殿) | 11.暗青灰色細砂 | | |

Y=-25,768.500である(第32図)。

自然流路 溝S D24123の検出面から約40cm掘り下げたところ、灰色砂礫を埋土とする自然流路を検出した。遺物はわずかながら、長岡京期の土師器甕(第33図6)と須恵器鉢(同7)の断片が1点ずつ出土している。

ハ. 古墳時代

自然流路S D24124 長岡京期の遺物が出土した自然流路からさらに20cm下位で、やはり粗砂や砂礫を縞状に堆積した状況で検出した(第31図)。中から古墳時代の須恵器杯蓋(第33図5)の断片が1点出土した。底には凹凸が認められる。

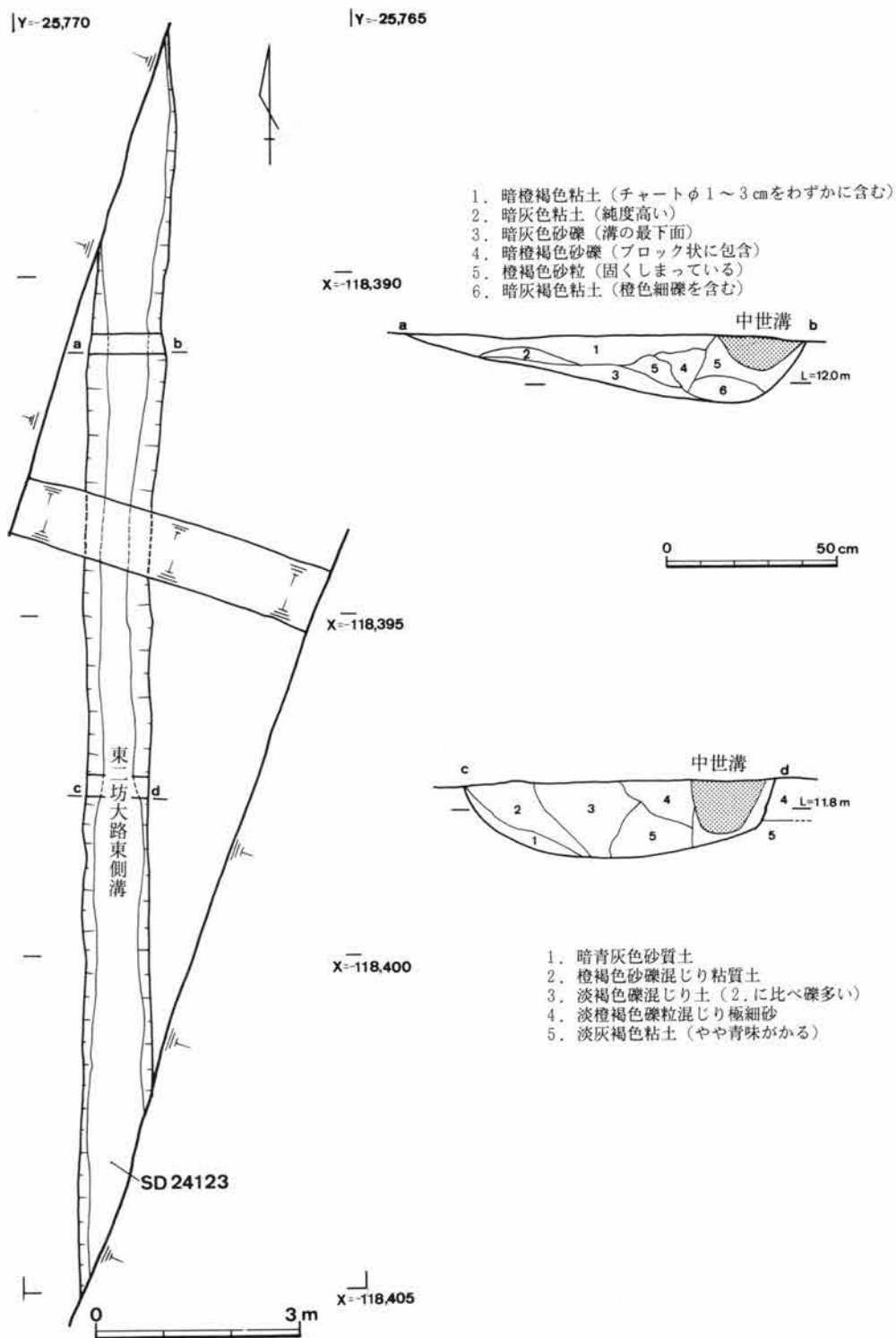
B. 出土遺物(第33図)

イ. 中世

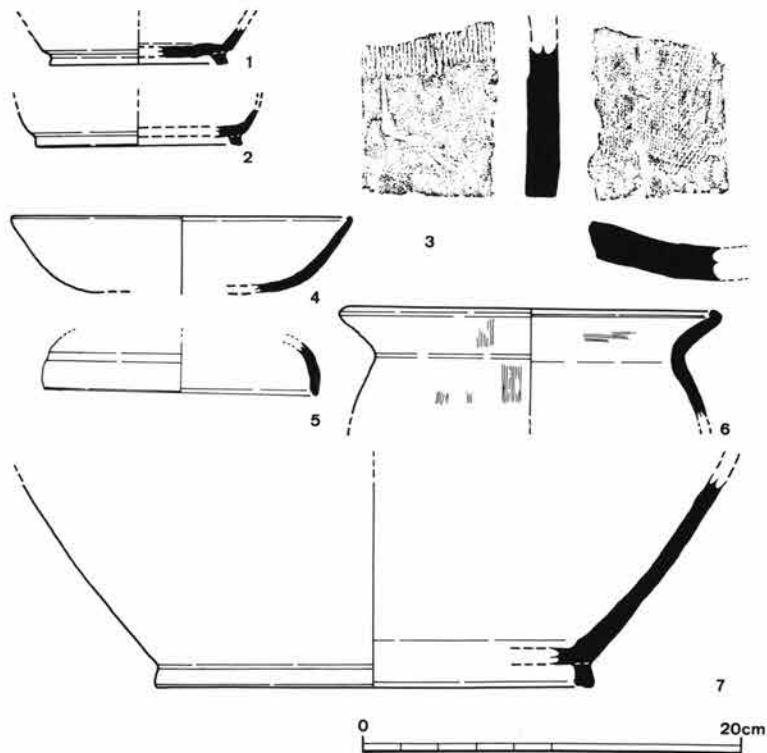
素掘り溝群から出土した瓦器碗がある。全体で15条のうち9条から出土している。いずれも細片で図化し得ない。

ロ. 長岡京期

東二坊大路東側溝(S D24123)中から出土した須恵器杯Bの断片(1・2)、同溝東側の黄褐色粘質土の整地層中から平瓦断片(3)、土師器杯断片(4)、さらに自然流路中からの土師器甕(6)と須恵器鉢(7)の断片がある。1・2とも内外面をナデで調整が施される。3は凸面側に縄目、凹面側に布目痕をもつ平瓦である。4は、ローリングが激しく調整不明であるが、外面全体をヘラケズりするc手法によるものとみられる。6は、口縁端部に折り返しをもち、口縁と体部の境はナデ整形の痕がみられる。口縁内外面及び体部外面にハケ目調整が施される。7は、鉢の断片であろう。底径の復原口径は23cmを測る、大形のものである。



第32図 6BL、第9トレンチ長岡京条坊遺構



第33図 6BL、第9トレンチ出土遺物実測図

ハ、古墳時代

5は、自然流路(S D24124)から出土した杯蓋である。古墳時代後期の所産である。

(黒坪一樹)

第19トレンチ(第34図・図版第12)

長岡京期以降の包含層は削平されており、上層で古墳時代から奈良時代にかけての旧流路を検出した。下層では、弥生時代の遺物包含層を検出した。

A. 検出遺構

このトレンチは、東西に走る用水の通水管によって南北に分断されている。重機掘削で深く下がりすぎたため、中世の素掘り溝などは検出できていない。シルト層・砂層が堆積し、その下層の粘質土層、粘土層をえぐりこんだくぼみが検出された。このうち、流路跡と判別できるもの(堆積状況・深さ)をS D24125・26・27とした。

溝S D24125 北側で検出された。幅約4m・最大深さ0.45mを測る。底面に牛の足跡状のものや轍状に並行するくぼみがみられた。古墳時代、奈良時代の遺物が少量出土した。

溝S D24126 北側で検出された。幅約3mで二段に落ち込み、深さ1.2~1.5mを測り、

西から東へ傾斜している。古墳時代の須恵器片、弥生土器片が出土した。

上記の遺構は標高11.5～11.7mで検出される。

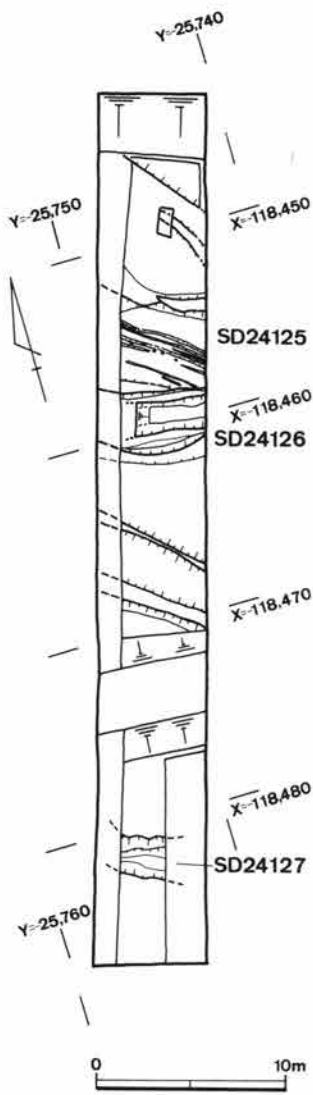
溝S D 24127 南側で検出された。幅約2.2m・深さ0.3mを測る。木片が出土しただけである。この遺構は標高11.0m前後で検出される。

これらの流路跡と第8・9トレンチの流路跡の関係は明確でない。また、北側では粘質土層の下層から溝状のくぼみを検出したが、土器類は出土しなかった。

B. 出土遺物(第35図)

トレンチ全体で少量の遺物が出土したが、図化できたのはS D 24125出土の須恵器杯A(1)、S D 24126出土の弥生土器口縁部(2)である。1は、淡灰色を呈し、復原口径13.2cm・残存高4.5cmを測る。形態の特徴から奈良時代(7世紀末)と推定される。2は、淡褐色を呈し、胎土に石英・チャート・赤褐色粒子を含み、復原口径22cm・残存高6.5cmを測る。ローリングで遺存状況が悪いものの、内外面にハケ目を施し、外面に低い凸帯を一条貼りつける。弥生時代中期のものと推測される。

(石尾政信)



第34図 6BL、第19トレンチ平面図

⑥7ブロック(7ANXYT地区) 三条条間小路(大路幅)及び、鶏冠井清水遺跡検出目的の調査区である。

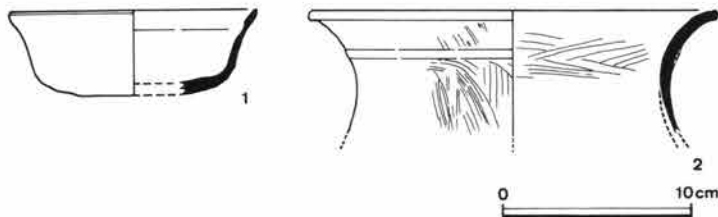
第10トレンチ(第36図)

A. 検出遺構

イ. 中世

素掘り溝 試掘

調査で確認の時点から、重機の掘削面が深くなり、中世遺構面や包含層

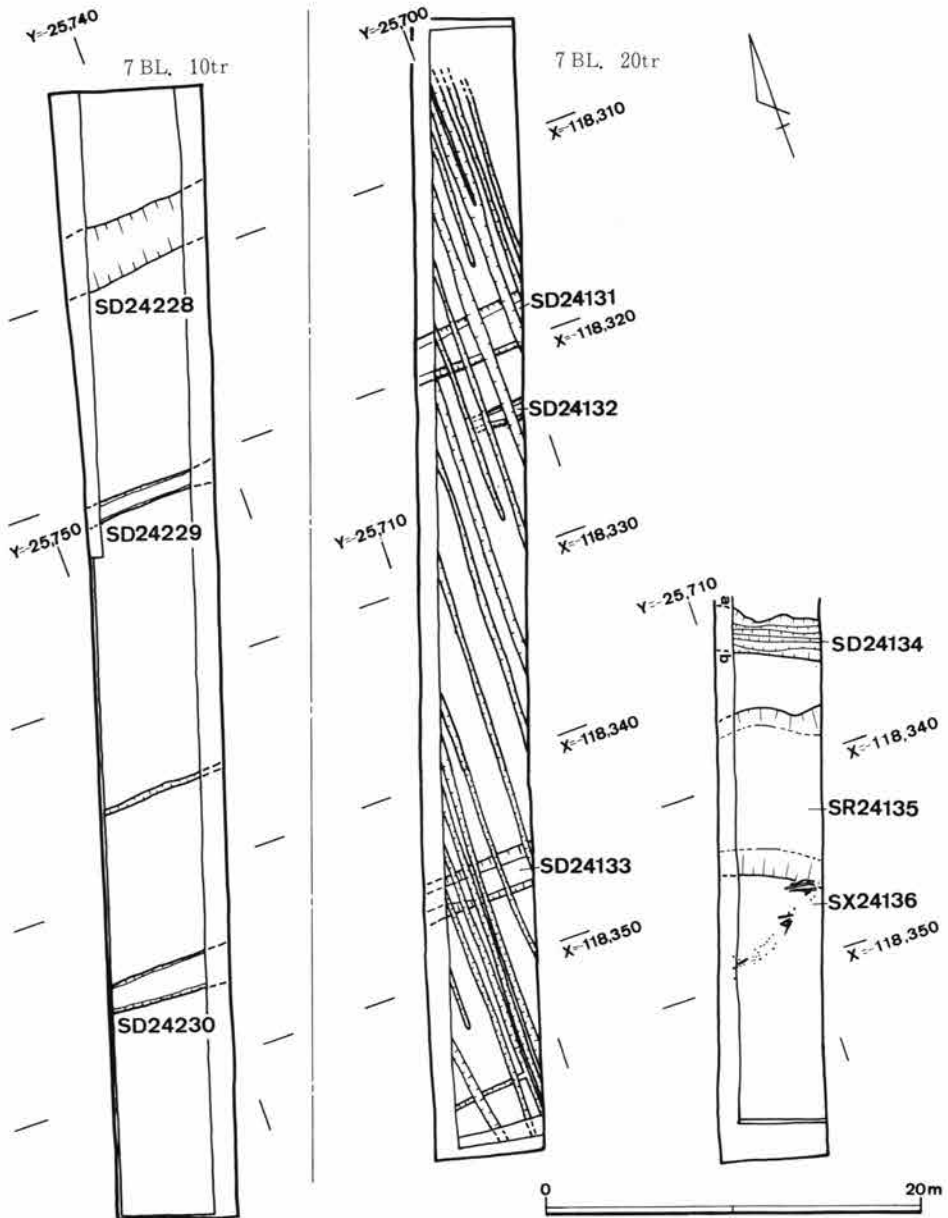


第35図 6BL、第19トレンチ出土遺物実測図

をほぼ消失させる結果になった。トレンチ北西隅で、わずかに残されたセクション断面に3～4本の素掘り溝の存在を確認した。淡灰褐色粘質土を埋土とし、幅約30～40cm・深さ約15cmを測る。

ロ. 長岡京期

トレンチのほぼ中央を東西に走る溝を2本検出した。三条条間小路の南北両側溝と考え



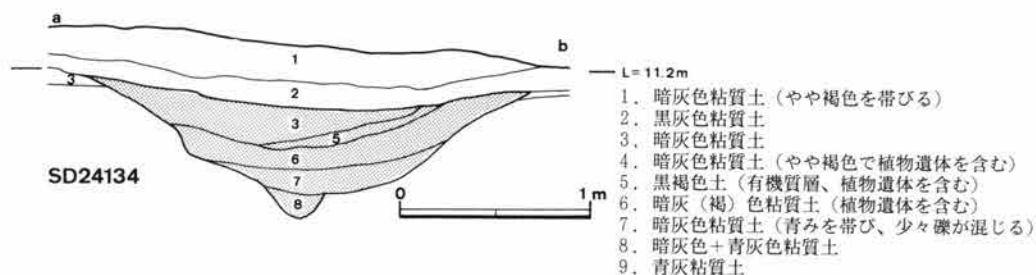
第36図 7BL、第10・20トレンチ平面図

られる(第38図)。

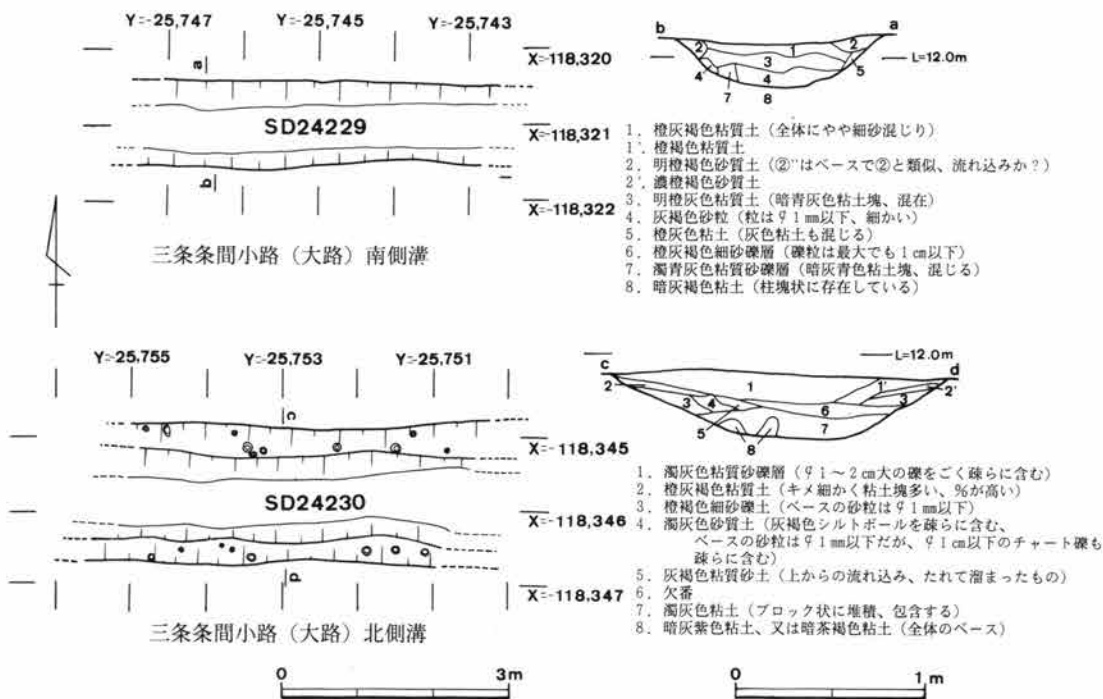
三条条間小路北側溝 S D 24229 幅約1m・深さ約10cmの残存状況で、約5mにわたって検出した。埋土は、暗茶褐色粘土をベースに掘り込まれ、埋土は灰褐色系の砂質土を主とする。出土遺物は、極めて少量である。須恵器杯の断片などが出土したが、細片のため図化しえなかった。国土座標値は、 $X=-118,320.950$ ・ $Y=-25,745.000$ である。

三条条間小路南側溝 S D 24230 幅約1.8m・深さ約30~35cmの残存値を測り、溝(S D 24229)と真東西方向に並行している。埋土は、北側溝に比べて砂質分が少なく、第1層橙灰褐色粘質土、第6層橙灰褐色細砂礫、第7層暗灰青色粘土を含む濁青灰色粘質砂礫というように、粘質土と細砂礫の互層となっている。

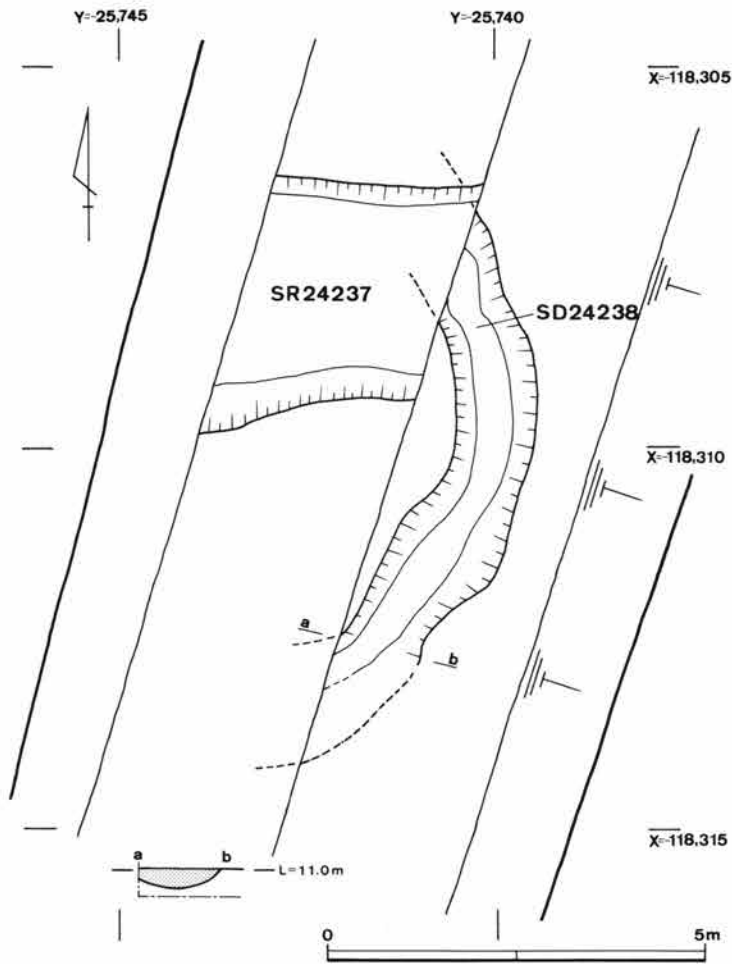
出土遺物はわずかである。須恵器杯の断片と、平瓦片などがある(第40図)。



第37図 河道S R 24134土層断面図



第38図 7BL、第10トレンチ長岡京条坊遺構



第39図 弥生中期の溝 S D 24238平・断面図

なお、溝の内側の両肩付近には、直径約5～10cmのしがらみ状の杭痕が多くみられた。国土座標値は、 $X = -118,345.900$ ・ $Y = -25,755.000$ である。

以上から、両側の溝の中間で測ると、三条条間小路の幅は、24.9mとなり、大路幅をもつ道路とわかる。

ハ. 弥生時代

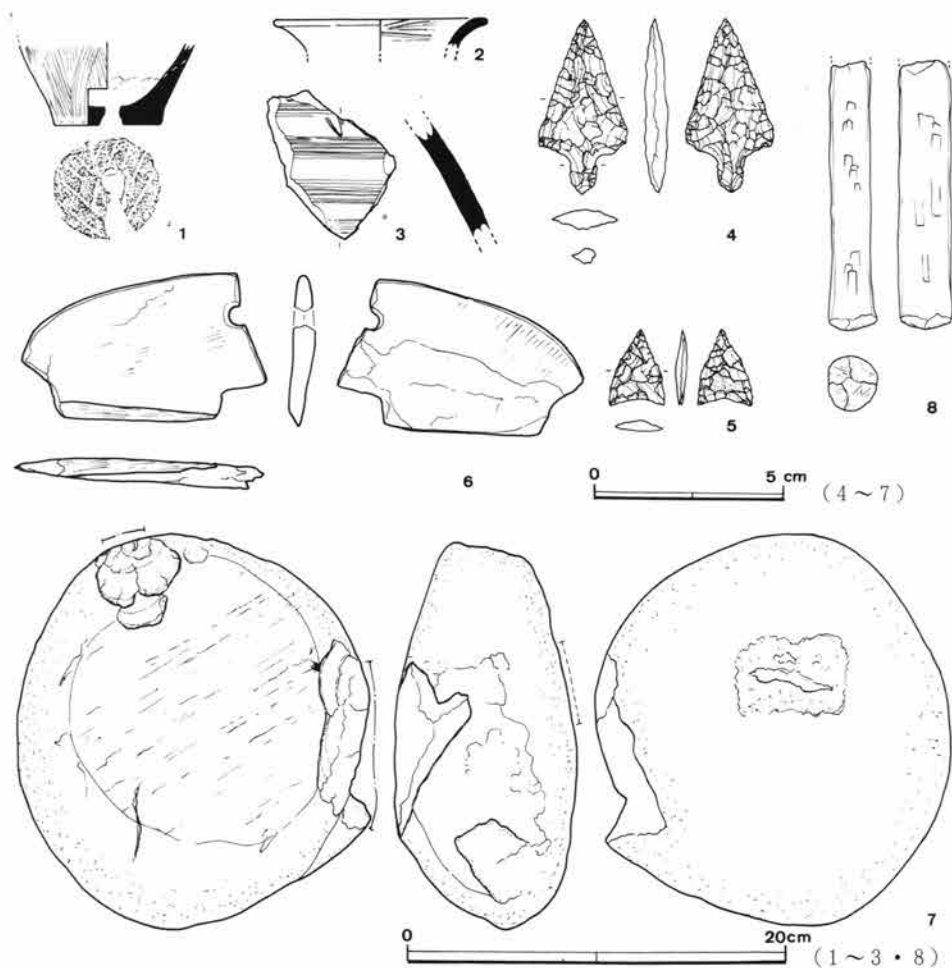
長岡京期の遺構面から約50m掘り下げると、弥生時代の包含層である黒褐色粘質土が約25cmの厚さで堆積

していた。この中からは、弥生時代の中期～後期にかけての少量の土器や石器、それに自然の流木が多量に出土した。さらに、この黒灰色粘土を除去すると、緑灰色粘質土面になり、弥生時代の溝(S D 24238)を検出した。

溝 S D 24238(第39図) 埋土は暗茶褐色粘土で、中から木製品の柄、敲石が出土した。溝の検出レベルは11mを測る。円弧を描くような溝で幅約1m・深さ約25cmの残存状況である。

二. 時期不詳

溝 S D 24228 真東西方向にほぼ沿う溝で、黄褐色砂粒混じり土を埋土としており、幅約2.5m・深さ約10cmの残存状況を呈する。須恵器の細片が若干出土するのみで、時期は不明である。検出面のレベルは、標高約12mで、中世の溝の検出レベルよりも低く、確実



第40図 7BL、第10トレンチ出土遺物実測図(上層)

1~3・8.S=1/4 4~7.S=1/2

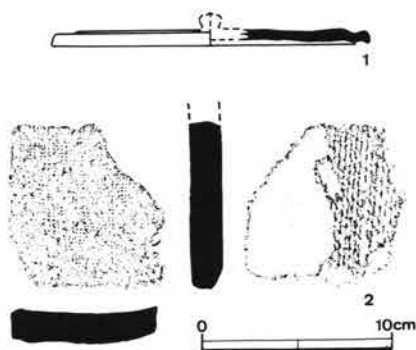
に下層から掘り込まれている。

三条条間小路南北両側溝のほぼ中間の細い素掘り溝も、出土遺物はなく時期不明である。真東西に走り、幅約20cm・深さ約3cmの残存状況である。埋土は、青灰色極細砂である。

B. 出土遺物

イ. 長岡京期(第41図)

溝 S D 24230 中からの須恵器蓋と平瓦の断片である。他は細片のため、器種も不明瞭



第41図 7BL、第10トレンチ出土遺物実測図(下層)

で図化し得なかった。

ロ. 弥生時代(第40図)

下層の黒褐色粘質土(第6層)、緑灰色粘質土(第7層)の包含層中と、第7層直上に掘り込まれた溝(S D24238)中から出土したものがある。包含層中からの甕・壺・大形石鏃・石鏃・石庖丁、溝中からの敲石・木器がある。なお、1・3・5・6は、緑灰色粘土(第7層)直上、2・4は黒灰色粘質土(第6層)中、そして7・8はS D24238中から出土した。

1は、木の葉痕を有する甕の底部断片である。外面はハケ目調整されている。なお、円孔が穿たれている。暗褐色の色調で胎土はやや粗い。2は、甕の口縁断片である。大きく外反し、端部は丸くおさめられる。内面に横方向の深いハケ目がみられる。3は、おそらく壺の体部上半の断片である。8～9条でまとまった直線櫛描き文が施されている。

4は、サヌカイトを石材とする大形の有肩石鏃である。両面加工であり、長さ4.6cm・幅2.2cm・厚さ0.6cm・重さ4.5gを測る。

5は、サヌカイト製の三角形に近い凹基式鏃で、長さ2cm・幅1.5cm・厚さ0.3cm・重さ0.7gを測る。

6は、片刃の石庖丁の断片である。暗緑灰色の頁岩ないし粘板岩を石材としている。

7は、敲石である。偏平な円磔を用い、片面の中央部と側縁の一部に敲打痕が認められる。磨痕はない。流紋岩あるいは砂岩のキメの細かい硬質の石材を用いている。重さは、475gを測る。

8は、何かの柄に使われていたような木器である。端部は4面に面とられ、柄端部は丸く、全体によく磨かれている。

第Ⅶ層の時期は、土器からみる限り、中期(畿内第Ⅱ～Ⅲ様式)に比定される。1は中期でもやや下って、畿内第Ⅳ様式になろうか。溝(S D24238)も、第7層直上の遺物から中期(畿内第Ⅱ様式)としておく。

(黒坪一樹)

第20トレンチ(第36図・図版第13・14)

A. 検出遺構

イ. 中世

素掘り溝 トレンチ全域で南北方向の素掘り溝17条と東西方向の溝2条を検出した。東西方向の溝が南北方向の溝を切る。これらの溝は、幅30cm前後・深さ20～30cmを測るものが多いが、幅60cmのものもある。素掘り溝群は、標高11.8～11.9mで検出した。素掘り溝から瓦器片、土師器片、羽釜等が出土するので、中世の耕作関係の遺構と推定できる。

ロ、長岡京期

中世遺構の検出面とはほぼ同じ高さで東西方向の溝を検出した。

溝 S D 24131 東方で北に若干振る(E 5°N)東西方向の溝で、幅2.3～2.6m・深さ15～20cmを測る。土器類は出土していない。溝の中心座標は、Y=-27,718.000・X=-118,318.800となる。

溝 S D 24132 東西方向の溝で幅90cm・最大の深さ3cmを測る。溝の中心座標は、Y=-27,718.000のとき、X=-118,323.050となる。

溝 S D 24133 東西方向の溝で幅2.0～2.2m・深さ20～25cmを測る。遺物は出土していない。溝の中心座標は、Y=-27,710.000のときX=-118,345.700となる。

上記の遺構から遺物が出土しないため、時代の判定が困難であるが、西側の10トレンチで検出した三条条間小路の南北側溝と比較すると、座標値から S D 24133が南側溝であることがわかる。溝間の距離が S D 24133から S D 24131までは26.9m、S D 24132まで23.65mとなる。このため北側溝については不明としか言えない。

ハ、古墳時代

自然流路 S R 24135 比較的浅い流路状の落ち込みである。少量の古式土師器と思われる甕の体部を検出した。

溝 S D 24134 植物遺体を多く含む溝で、タタキのある土器の底部や広口壺が出土した。これらの遺物からこの溝は弥生時代後期のものと考えられる。

ニ、時期不詳

杭列 S X 24136 縦方向に荒く割った木を二条に打ち込んだ杭列である。板を部分的に溝にあてたものもあることから、土留めまたは護岸のための施設と考えられる。時期は不明であるが、自然流路に近接することから古墳時代のものと考えておきたい。

B. 出土遺物(第42図)

中世の南北溝から羽釜(1)、包含層から須恵器の蓋(4)、杯B(5)が出土している。

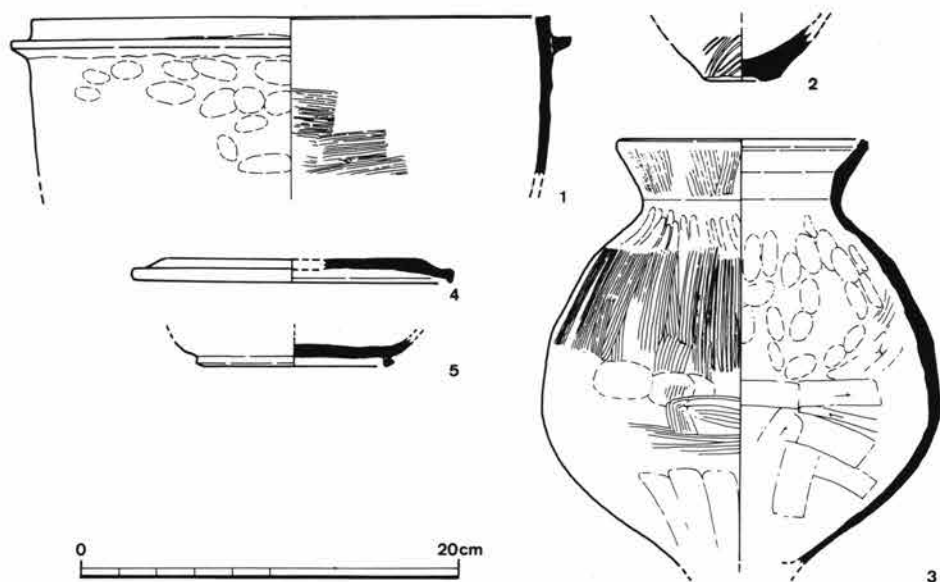
弥生時代

溝(S D 24134) 第42図のように2のタタキのある土器の底部、3の広口壺が出土している。これらの遺物からこの溝は弥生時代後期のものと考えられる。

古墳時代

自然流路(S R 24135)から少量の古式土師器と思われる甕の体部を検出したが、図化はできなかった。

(石尾政信・中川和哉)



第42図 7BL、第20トレンチ出土遺物実測図

3. まとめ

今年度の向日工区の調査で、目標とした長岡京の条坊に関する遺構のうち、第10トレンチで三条条間小路(大路幅)の南北両側溝、第18トレンチで東二坊大路東側溝を検出した。また、第18トレンチで掘立柱建物跡、第2トレンチで耕作にかかわると推定される溝群や土器溜りの長岡京期の遺構を検出した。特に、流路状堆積層に掘り込んだ第18トレンチの掘立柱建物跡のように、立地条件のよくない場所から遺構が検出できたことは注目できる。

第15・14・2・3・4トレンチでは、平安時代の旧河道(小畑川)を検出した。第8・9・19トレンチでは、奈良時代・古墳時代の流路跡や流路状堆積層を確認し、この周辺が安定しない立地であることが判明した。

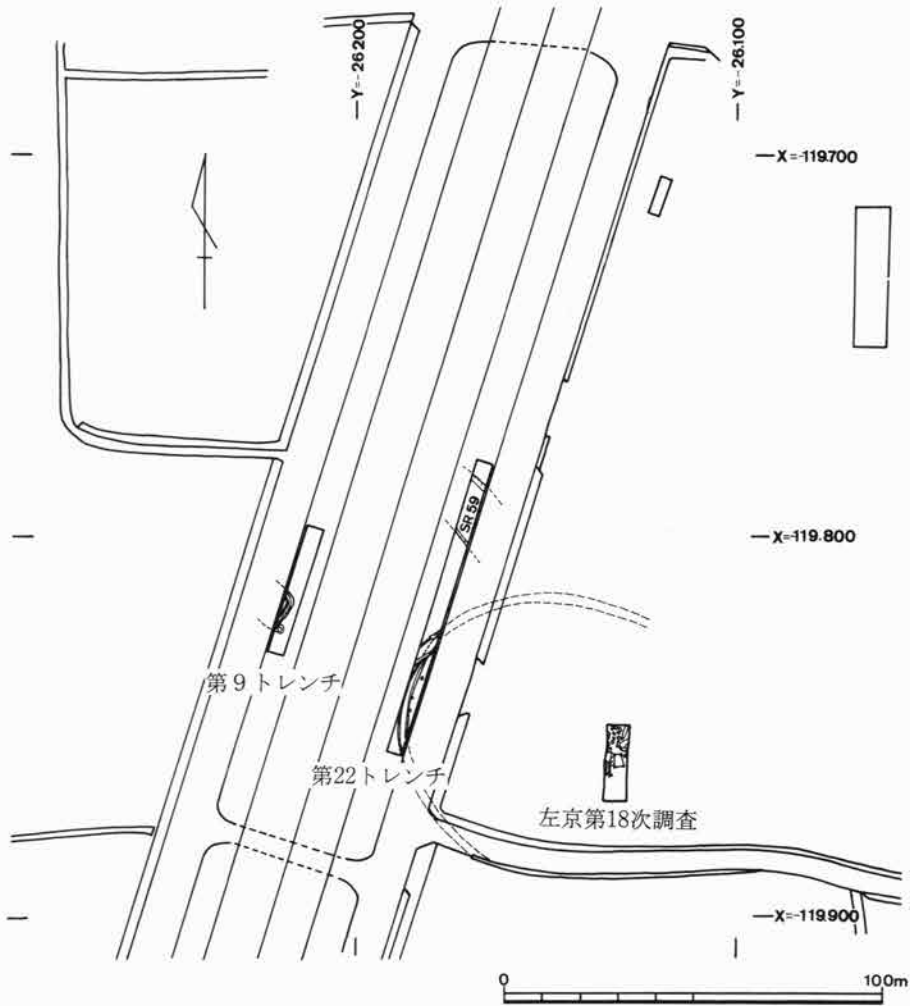
第10・20トレンチでは、弥生時代の遺物包含層・溝(流路跡)を確認した。これは、鶏冠井清水遺跡の広がりを示すものと推定できる。

(石尾政信)

(2) 長岡京跡左京第216次調査 雲宮遺跡 長岡京工区
(7ANMTD-2地区)

1. はじめに

長岡京工区の発掘調査は、本年度が最終年度にあたる。今回報告する地区は、平成元年度から調査を継続しており、同年度は長岡京期・古墳時代の遺構の検出を中心に行った。平成2年度は、下層検出遺構を、昨年度の継続調査として実施した。当該年度では、弥生時代前期の集落を囲む溝(環濠)2条と同じ時代の土坑やピットなど、関連する遺構を調査



第43図 調査地位置図

した(第43図)。発掘調査は、平成2年4月3日から開始し、平成2年6月22日までの期間を要した。

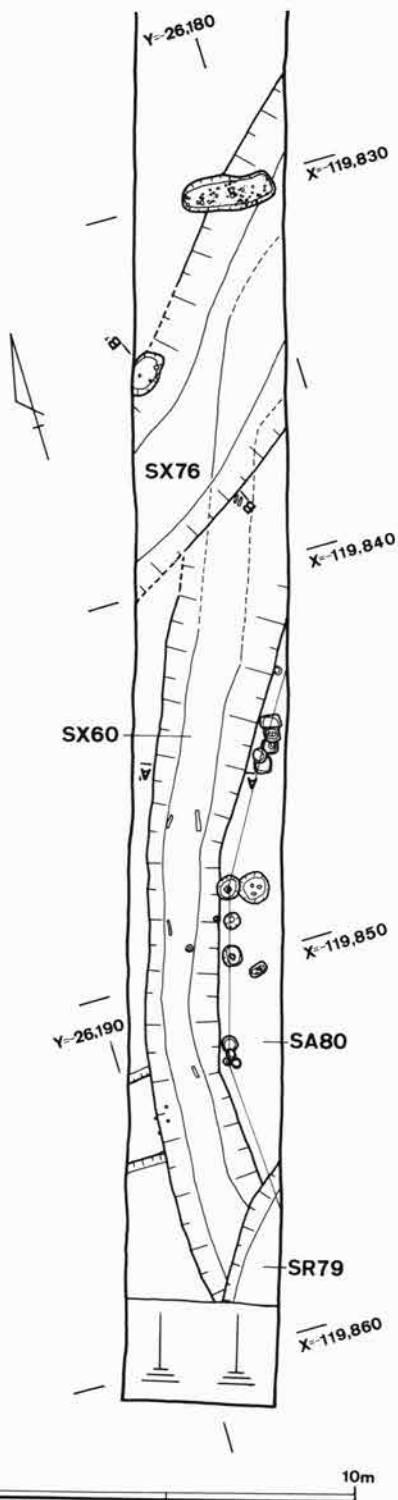
2. 調査概要

内環濠 S X 60 西側の肩が削平されていたが、復原幅約3.0m・深さ約1.0mを測り、約30mにわたって検出した(第44図)。平面の形状は、調査地内で検出した範囲内では、東に向かって弧を描くような状況を確認している。濠の堆積層は、5層に分類される。これを断面の形状で見ると、上から2層の堆積層は、下層の3層が逆台形を呈するのに対し、皿状に浅く広い形状を取っており、一度掘り直されたと考えられる(第45図)。

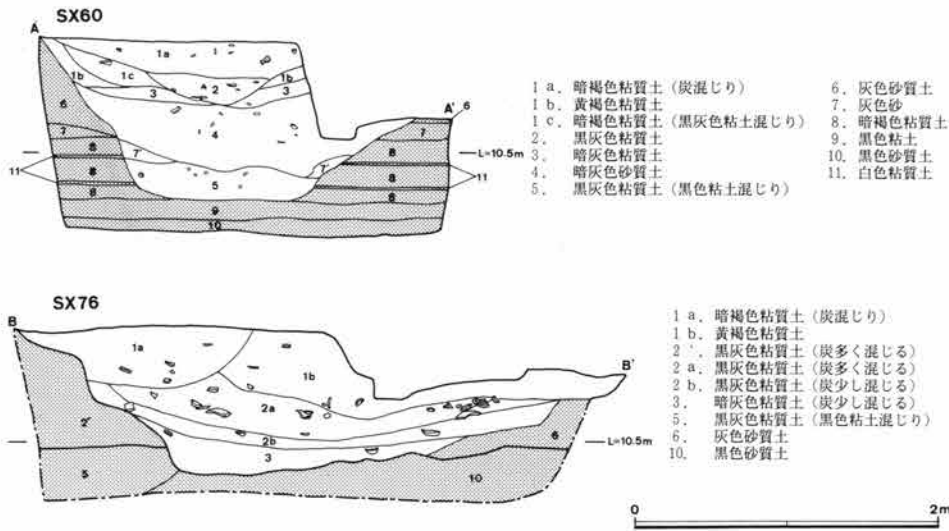
柵列 S A 80 内環濠の東肩部で検出した濠の肩部にそって、直径約30cm程度の掘形をもつ6か所のピット群である(第44図)。これらの柱穴の配列から、環濠の内側に設けられた柵列状の施設と判断した。ピットは、一定の間隔をおき複数確認しており、柱の建て替えと考えられる。

外環濠 S X 76 内環濠 S X 60との切り合い関係が認められ、また各遺構から出土する土器の様相から、S X 60が一度埋まった段階で新たに掘られた環濠と考えられる(第44図)。

今回検出した環濠の規模は、幅約5.0m・深さ約1.0mを測り、約12mを検出した。濠が埋まった最終段階の埋土(第1層)は、2回の掘りなおしをしており、幾度かにわたる溝さらえが行われたことをものがたっている(第45図)。



第44図 7BL、第22トレンチ平面図



第45図 環濠S X60・S X76土層断面図

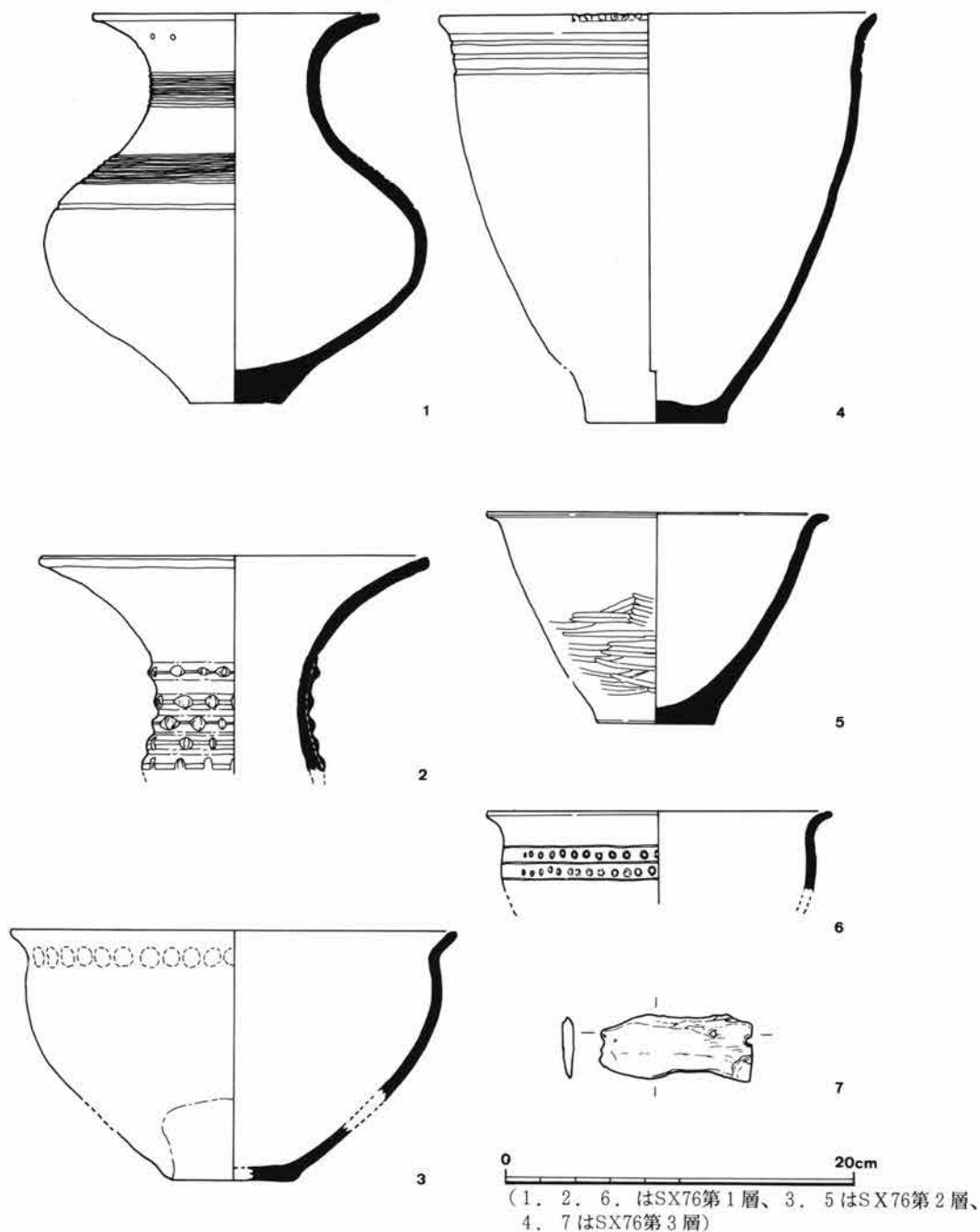
3. 出土遺物(第46・47図)

内環濠S X60から出土した遺物は、5層に分けて取り上げを行っている。いずれの遺物も弥生時代前期中葉の様相を呈しており、土器の器種としては壺・甕・鉢などによって構成される。壺の中には、ヘラ描きした木の葉文を施すものや、彩文土器がある。これらの土器のほかに、石鏃・石庖丁・土製紡錘車などの石製品があり、また、木製高杯の杯部(8)、また鍬(9)、広鍬(11)なども出土している。

外環濠S X76から出土した遺物の中には、土器では壺・甕・鉢があり、木製品では鍬の未製品、石製品では石鏃・石庖丁などがある(第46・47図)。第2・3層からは前期中葉の土器が多く出土し、第1層から、前期後葉の土器が多く出土した。器種としては壺・甕・鉢などから構成される。壺の中には、頸部にヘラ描きの沈線を7条、肩部に6条施し、胴部に1条施すもの(1)や、大きく開く口縁部を持ち、頸部に張り付け凸帯を施した後、布巻の棒状工具により刺突を施すもの(2)などがある。甕には、頸部にヘラ描きの沈線を3条施し、口縁端部に刻みを施すもの(4)が多く、鉢では、口縁部下にヘラ描きの沈線を3条施し、その間に竹管で刺突を施すもの(6)や無文のもの(3・5)などがある。このほか、濠内から粘板岩製の石庖丁(7)や、木製の鍬の未製品・獣(猪)の下顎の骨などが出土している。

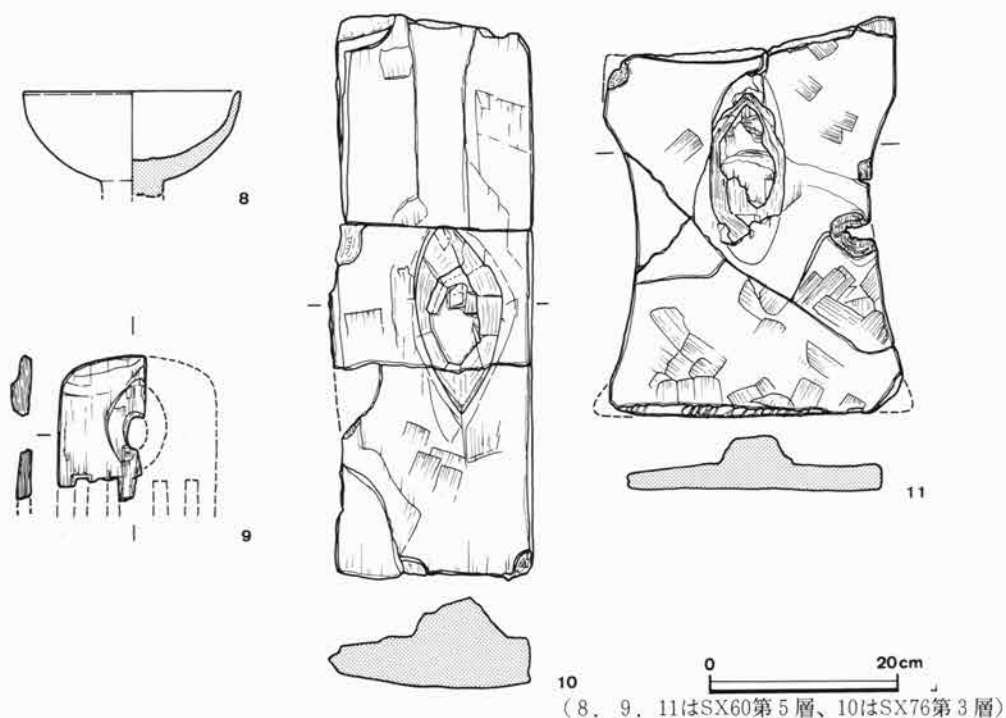
4. まとめ

今回の調査による成果としては、今まで不明であった雲宮遺跡の集落構造の一部が確認できた。この地区は、雲宮遺跡全体の整理が終了後、報告書にまとめて成果を公表する予



定である。ここでは、調査成果を簡単に列挙する。

- ①環濠は、当初、内側の環濠 S X60のみが開削されている。
- ②この環濠の内側には、柵列 S A80が設けられていたことが判明した。
- ③検出した環濠 S X60を周辺地形とともに検討すると、調査地の南側から東にのびる水



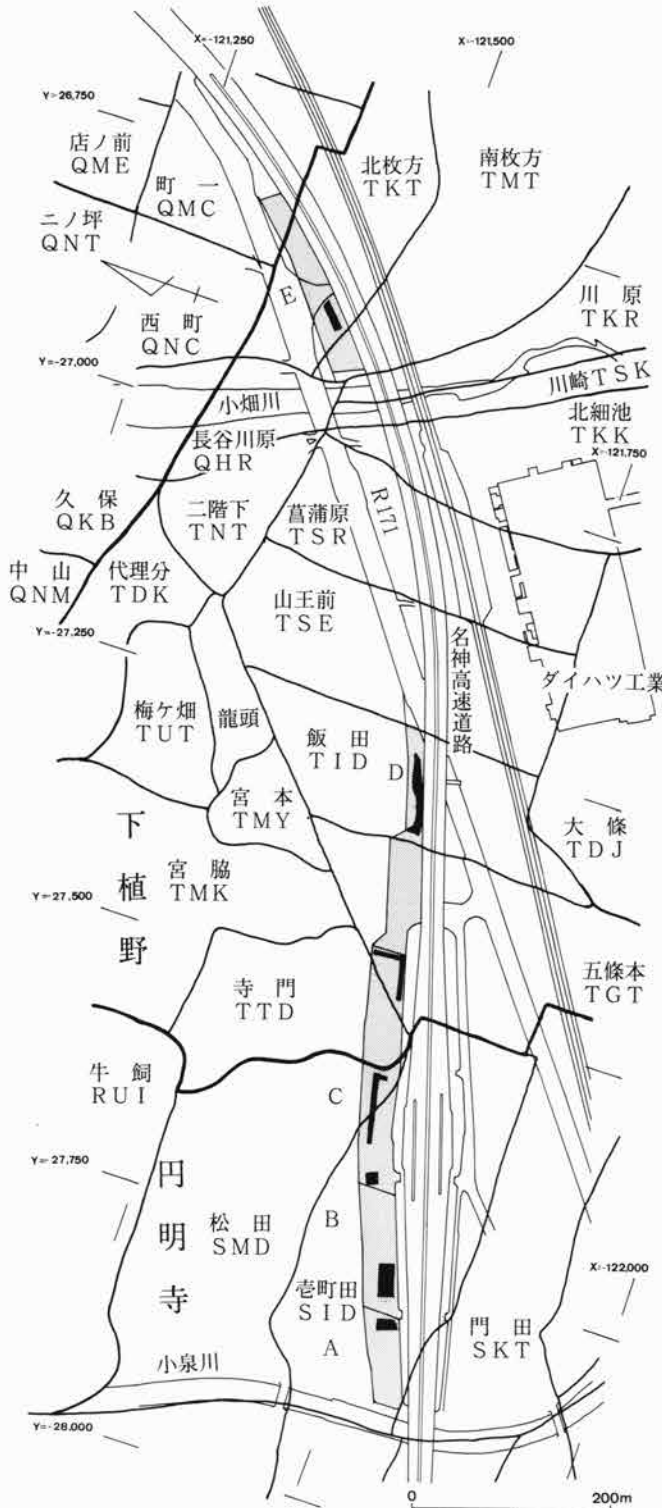
第47図 出土遺物実測図(2)

路と道路がこの環濠の延長線上でゆるやかな円弧を描き、東にのびるのがよみとれる。

- ④この環濠の円弧の北部分は周囲よりも一段高く、集落の存在が想定される。
- ⑤外環濠S X78は、内環濠S X60がいったん埋まったのち、新たに設けられていた。
- ⑥内環濠S X60と外環濠S X78は並行し、この二つが集落を囲む時期があったらしい。
- ⑦内環濠S X60が埋まった段階でも、外環濠S X78は何回か掘りなおされている。

周辺部の調査では、数百mの範囲内に前期の土器が出土する地点が何か所も確認されているが、集落の中心地を示すような資料は現在まで確認されていない。弥生時代中期段階では、この環濠で囲まれる集落は放棄されたようである。周辺では、この集落の北約100mの地点で、弥生時代中期後半の住居跡などが確認されたが、現在まで確認された雲宮遺跡に続く大きな集落遺跡としては、西約600mの台地上に展開する神足遺跡が知られている。

(戸原和人)



第48図 調査トレンチ配置図・周辺字切図

(3) 長岡京跡右京
第357次調査
下植野工区
(7ANSID・SMD・
TGT・TID-2・TKD
地区)

1. はじめに

下植野工区は、乙訓郡
大山崎町円明寺壺町田、
下植野飯田・上枚方に所
在する。

この地区での調査は、
今年度から開始した。調
査地は、長岡京復原案に
よると、右京九条一坊二
町の朱雀大路西側溝推定
地と、右京九条一坊十四
町、二坊二・四・五・十
二・十三町に復原される
地点にあたる。また、
『京都府遺跡地図』では、
縄文時代から古墳時代の
集落遺跡である松田遺
跡、及び下植野南遺跡の
範囲に入る(第48図)。

調査は当初、大山崎町
円明寺壺町田と同町下植
野飯田の2か所の試掘調
査と、下植野北枚方での
2か所の発掘調査の予定

であったが、円明寺壺町田での2か所の試掘調査を発掘調査とし、さらに円明寺五條本と同飯田で新たに2か所の試掘調査を追加した。これに伴い、下植野北枚方での2か所の発掘調査のうち、1か所については来年度送りとした。

A地区は7月11日から開始し、途中の中断期間をはさんで12月8日まで、約200㎡を発掘調査した。B地区は7月4日から開始し、途中の中断期間をはさんで平成3年2月4日まで、約520㎡を発掘調査した。C-1トレンチは7月4日から10月4日まで、C-2トレンチは11月16日に調査に着手し、平成3年2月15日まで、約310㎡を試掘調査した。C-1トレンチは7月4日から10月4日まで、C-3トレンチは11月19日に調査に着手し、平成3年2月15日まで、約330㎡を試掘調査した。D地区は9月1日から10月7日まで、約330㎡の試掘調査を行った。E-1トレンチは平成3年1月17日から2月18日まで、約200㎡の発掘調査を実施した。

2. 調査の概要

①Aトレンチ(第49・50図)

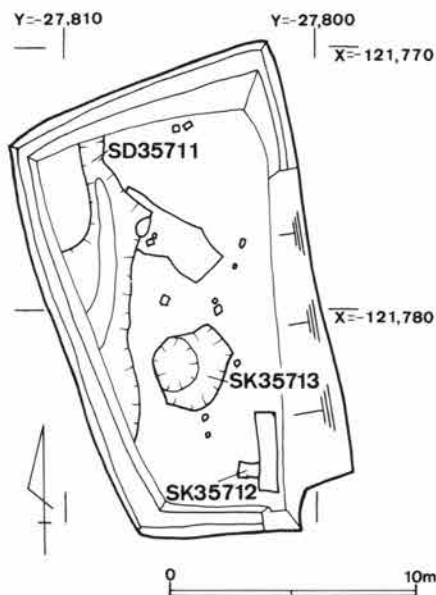
Aトレンチは、大山崎町円明寺壺町田内にあり、松田遺跡及び下植野南遺跡と長岡京右京九条二坊十三町、及び九条大路北側溝が想定される地点にあたる。調査は、名神の既設カルバートボックス(通路)増設部分について約200㎡の発掘調査を行った。

本調査地では2時期にわたる洪水堆積層を確認した。いずれの洪水堆積層の下面も水田耕作が行われていた状況を呈していたが、面としての攪乱が激しく、湧水が多いため、さらに下層への断ち割りをを行い、遺構の調査を実施した。調査の結果、現地地表下1.5mで古墳時代中期の土坑(S K 35712・13)・掘立柱の柱穴などを検出した。

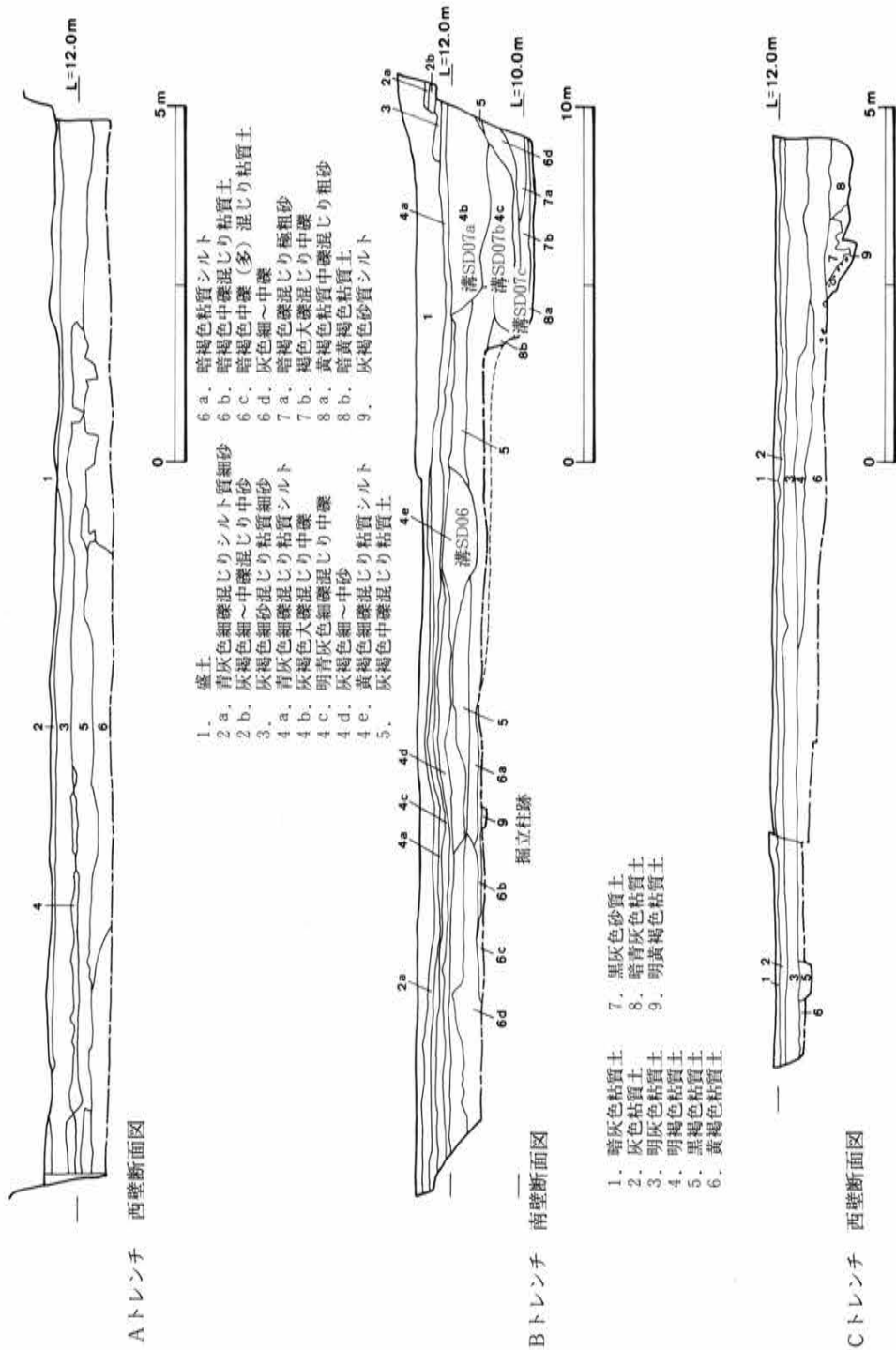
A. 検出遺構

土坑 S K 35713 調査地中ほどで検出した。平面不定形を呈した断面皿状の土坑である。南北3.2m・東西3.5m・深さ0.3mを測り、土坑内から須恵器杯身、土師器高杯・甑などが出土した。

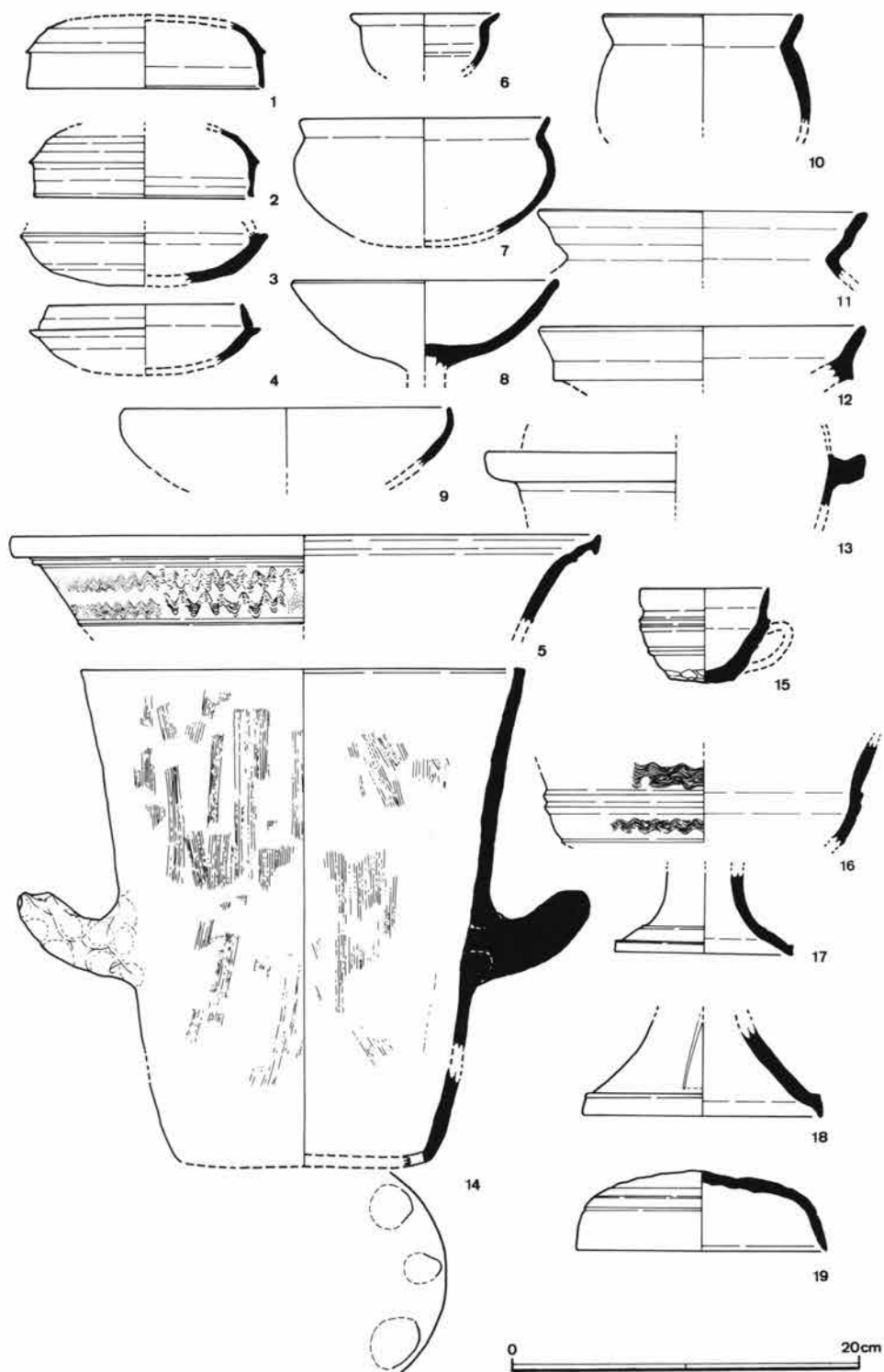
土坑 S K 35712 調査地南よりで検出した平面長方形を呈する浅い土坑である。



第49図 Aトレンチ平面図



第50図 A・B・C-Iトレンチ土層断面図



第51図 Aトレンチ出土遺物実測図

また、遺物包含層からは古墳時代中期の把手付き椀や高杯・甕など、古墳時代の須恵器の中でも比較的古いものが多く出土している(第51図)。

溝S D35711 南北方向に流れる。洪水の際にできたと考えられる溝跡である。最大幅3.5m・深さ0.5m以上を測る。

B. 出土遺物(第51図)

土坑S K35713からの一括出土遺物が最も多く、まとまりのある資料である。須恵器杯蓋(1・2)・杯身(3・4)・甕(5)・土師器鉢(6・7)・高杯(8・9)・甕(10・11)・甑(14)や、壺の口縁かと考えられるもの(12)、羽釜かと考えられるもの(13)などが存在する。包含層から出土した遺物のうち、特徴的なものに、須恵器把手付き鉢(15)や、無蓋の高杯(16)などがある。

②Bトレンチ(第50・52図)

Bトレンチは、大山崎町円明寺壺町地内にあり、同所に所在する松田遺跡及び下植野南遺跡と、長岡京の右京九条二坊十二町・西二坊第二小路が想定される地点にあたる。調査は、名神の新設カルバートボックス建設部分について約520㎡の発掘調査を行った。

A. 検出遺構

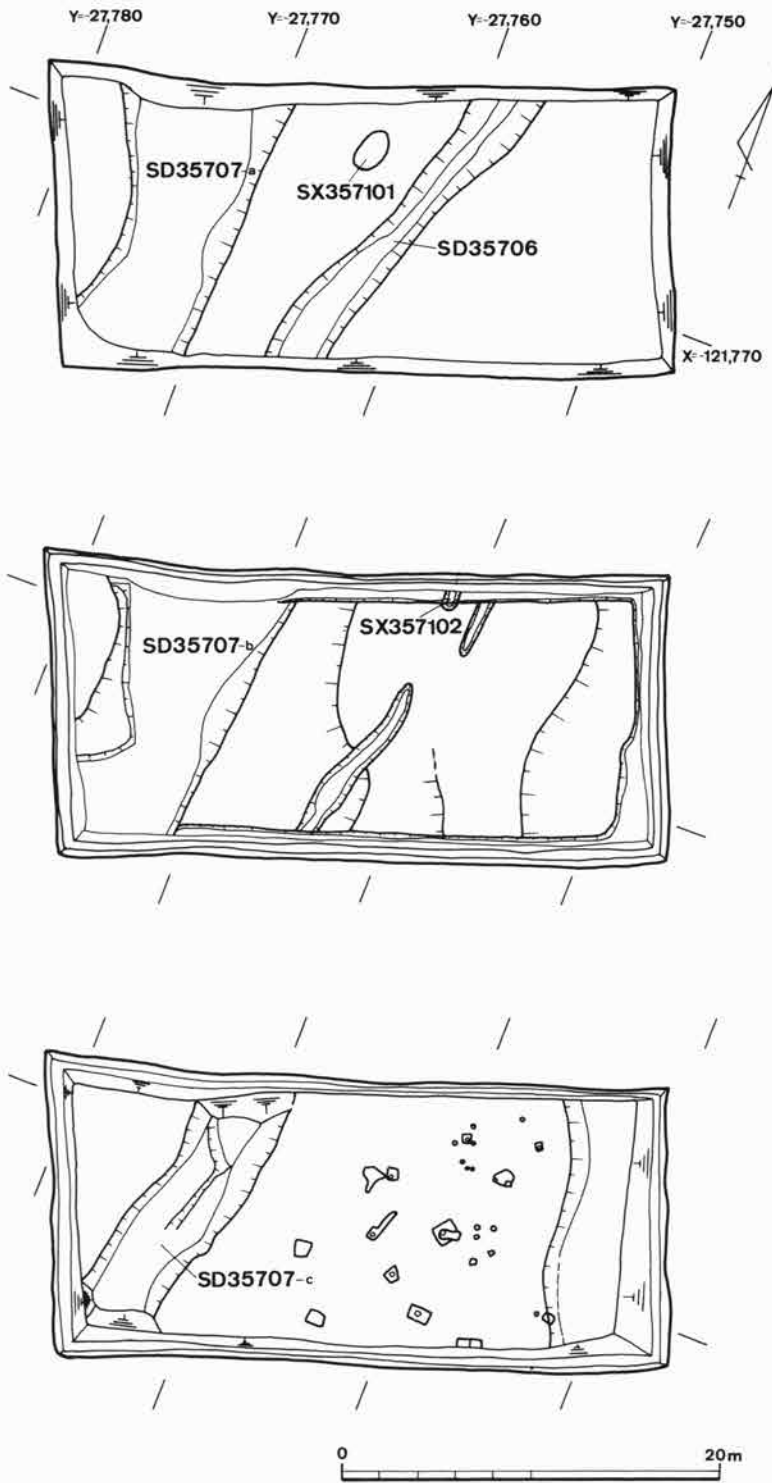
調査地は全域が洪水堆積層によって埋まっており、耕作土・床土・砂礫層を重機で除去した後精査を行った。調査によって3期の遺構面を確認した。

上層遺構 現在の水田床土直下に堆積した砂利層で、旧小泉川の流路と考えられる川跡2条(S D35706・35707-a)と、古墳時代の大甕の集積、上流から押し流されたと考えられる洪水堆積層を検出した。砂礫層の中からはおおむね6世紀後半の遺物が出土しており、上面では、9世紀から13世紀までの土器が出土している。

旧河道S D35707-a 幅6～9m・深さ1.4mを測り、約13mにわたって検出した。埋土は、拳大の礫から砂層に粘質土が混入しており、洪水堆積の様相を呈している。この堆積層は、河道の肩部から約50cm上まであり、広く全域を覆っている。

旧河道S D35706 幅2～3m・深さ0.8mを測り、約17mにわたって検出した。埋土は、径3～5cmの円礫から砂層によっており、S D35707-a同様洪水堆積の様相を呈している。川跡や遺物包含層から出土した土器には、古墳時代の土器が多く含まれており、上流に古墳時代の集落が営まれていたことが想定される。

土器集積遺構S X357101 砂礫層の中で、南北5.5m×東西1.5mの範囲に大甕が現地では割られた状況で出土した。

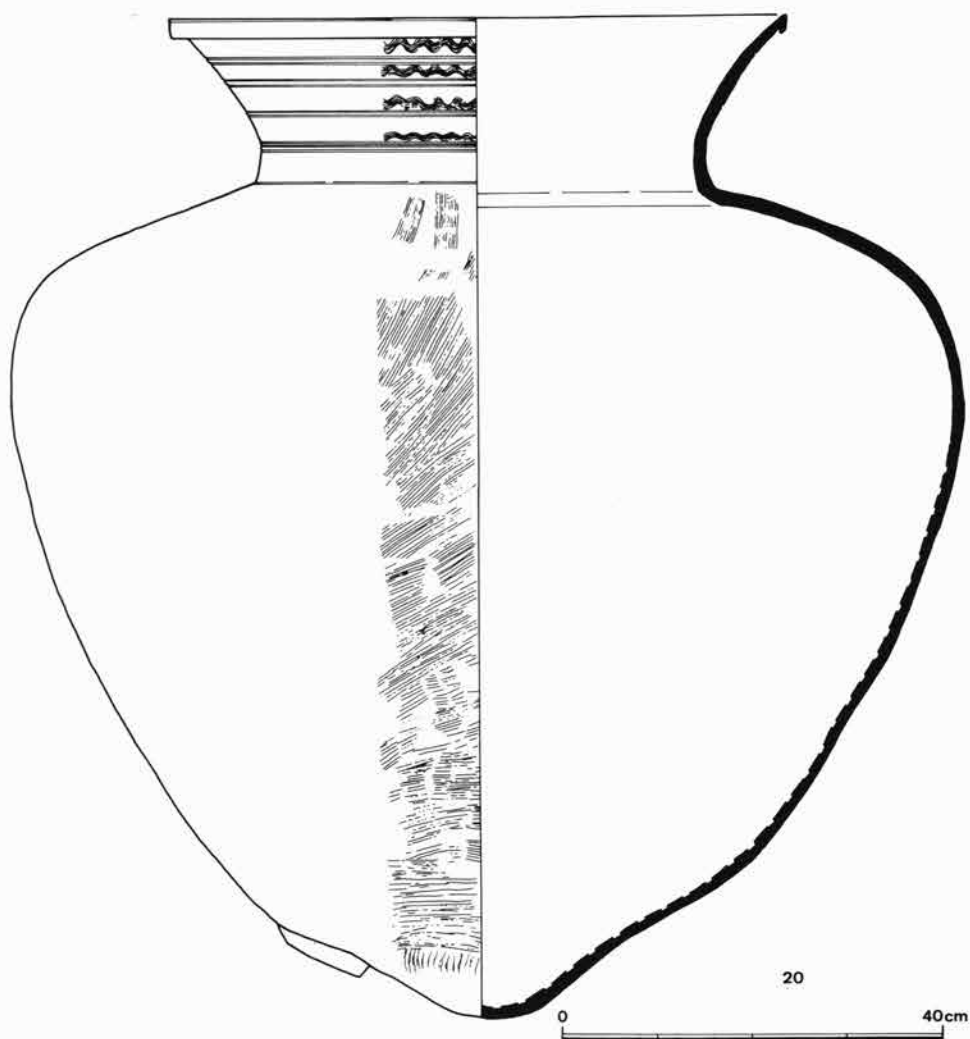


第52図 Bトレンチ平面図

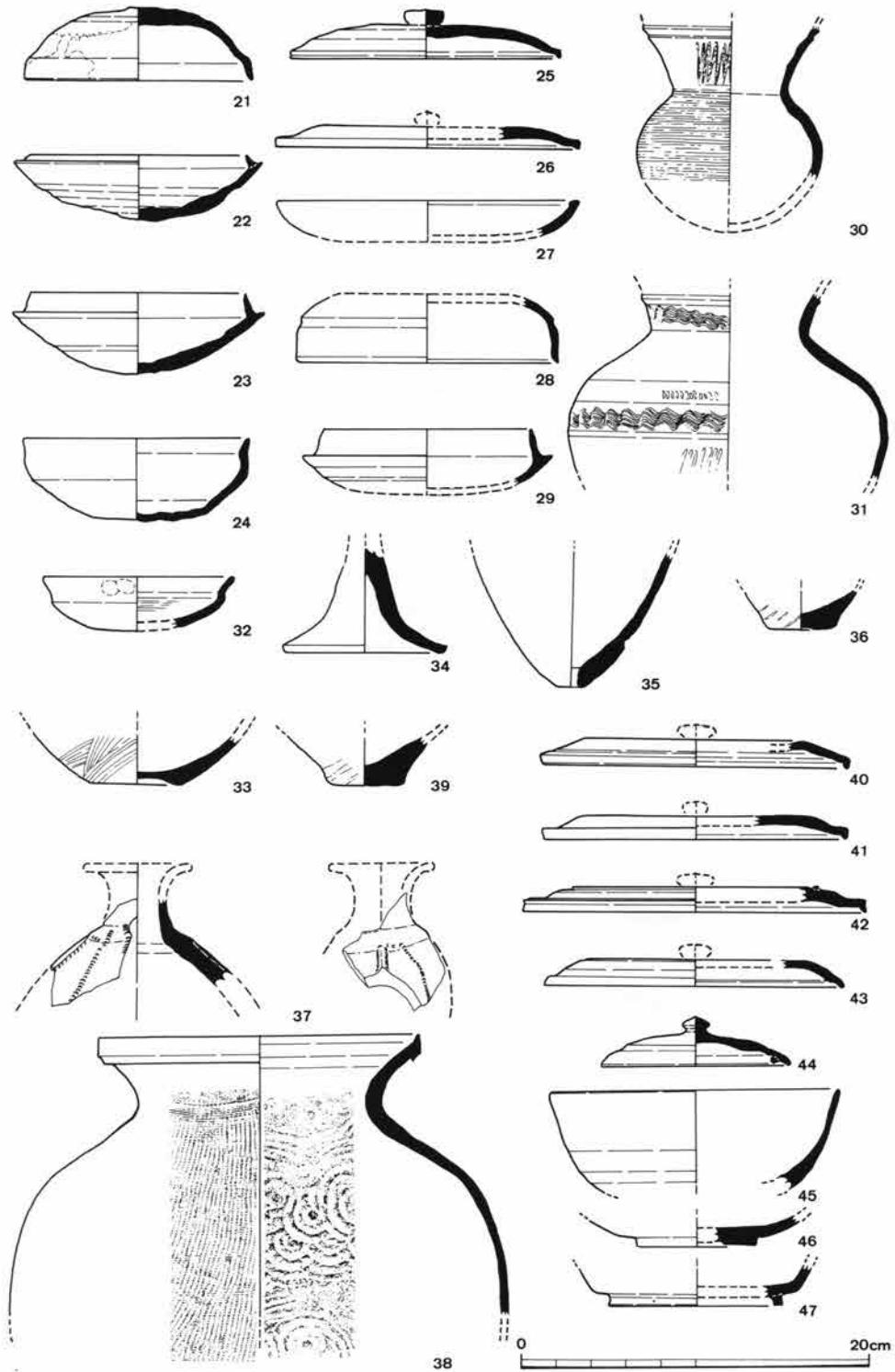
中層遺構 旧小泉川の川跡S D35707-bと、平安時代の遺物を含んだ層を確認したが、洪水堆積層によって顕著な集落跡は検出することはできなかった。下層の遺物包含層からは5世紀から7世紀の遺物が出土している。

旧河道S D35707-b 幅7～10m・深さ1.5mを測る。埋土は、径2～3cmの砂礫層によっており、洪水堆積の様相を呈している。川跡S D35707-bから出土した土器には、古墳時代の土器が多く含まれており、遺物包含層から出土した遺物には、緑釉陶器や石帯(丸靱)などの一般庶民が所有しないものが多く認められる。

土器埋納遺構S X357102 調査地中央部の北辺で検出した。南北1.2m以上×東西0.6mの土坑で、須恵器杯身・杯蓋・土師器鉢などを埋納した土坑である。



第53図 Bトレンチ出土遺物実測図(1)

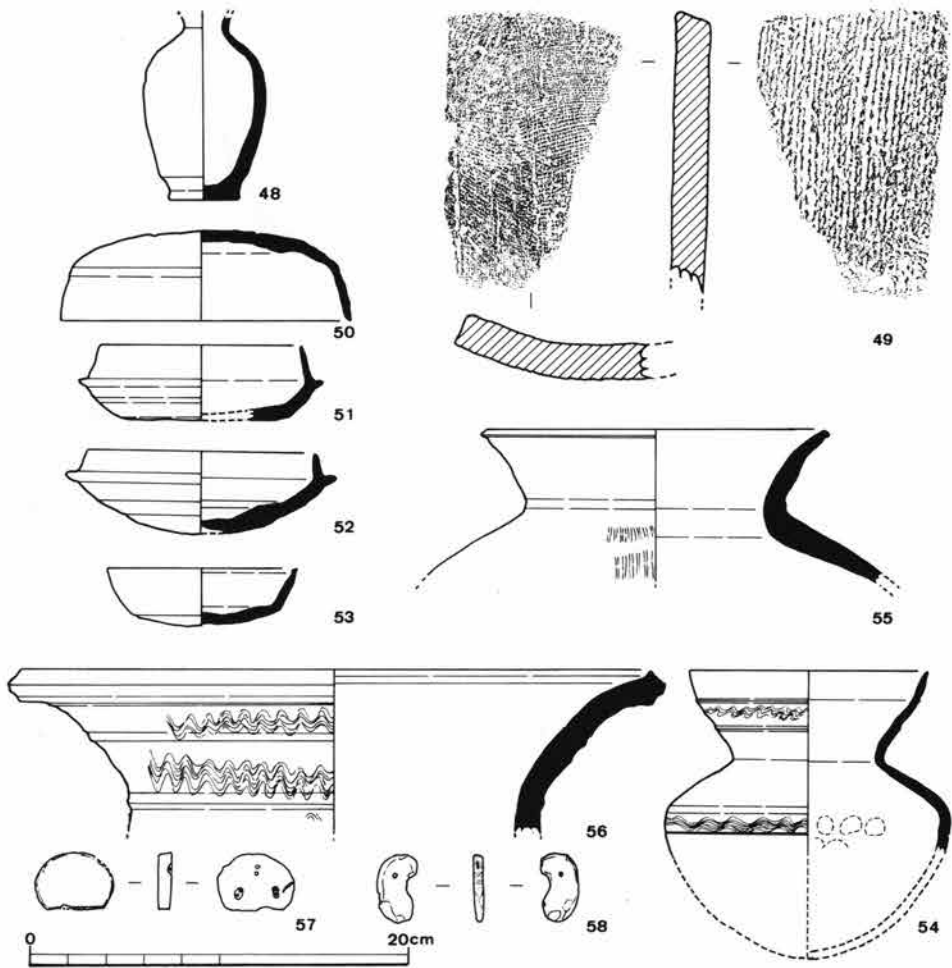


第54図 Bトレンチ出土遺物実測図(2)

下層遺構 現在の水田面から2～3m下で、旧小泉川の川跡S D35707-cと、柱跡を検出した。遺構上面では時期を確定できる遺物は出土していない。

旧河道S D35707-c 1期・2期と流れの位置を少し東に変えており、幅3.5～4.5m・深さ1.2mを測る。埋土は、拳大の礫から砂層で、急激な洪水堆積の様相を呈している。

柱跡 検出した柱跡は平面形が方形を呈するものが多く、一辺が1mほどもあるものから30cm程度のもまでまばらである。大形の柱穴は、砂質土に礫混じりの埋土により埋まっており、小形の柱穴は、暗褐色の粘質土で埋まっている。これらの柱穴群には時期差があるものと考えられるが、建物としてのまともは確認できなかった。この柱跡の時期については明らかでない。



第55図 Bトレンチ出土遺物実測図(3)

B. 出土遺物(第53～55図)

S X 357101から出土した大甕(20)は、口径66cm・器高110cmを測り最大腹径が100cmの大形品で完形に復原され、製作された技術がよく窺えるものである。この土器の特徴としては、内面の調整技法が挙げられる。成形段階で内外面にタタキ板をあてがった後、調整段階で内面のタタキ目を下から上に向かってナデ消している。

S X 357102からは、古墳時代の須恵器杯蓋(21)・杯身(22・23)や、これと近接して土師器杯(24)が出土した。

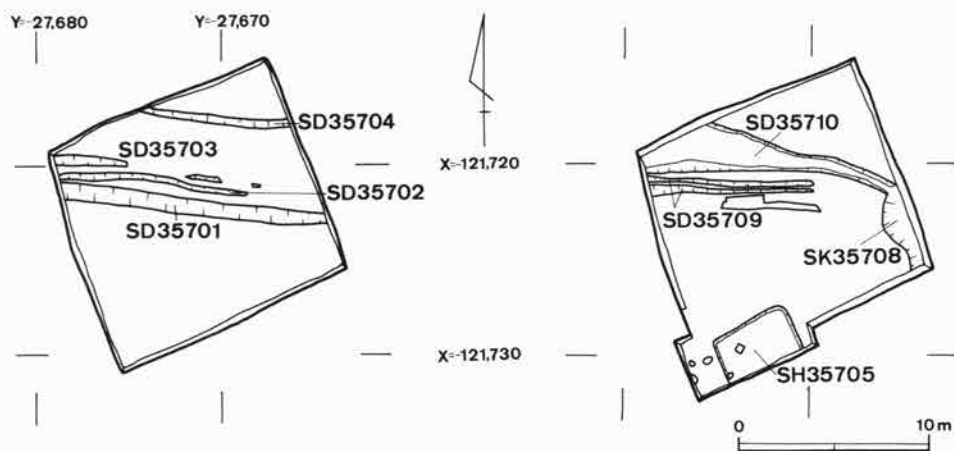
旧河道S D 35707-aの上面では、包含層遺物と同様に、7～10世紀の遺物が出土している。実測が可能なものとして須恵器杯B蓋(25・26)や土師器皿(27)などがある。

旧河道S D 35707-a～旧河道S D 35707-cから出土した土器には、古墳時代の土器が多く出土しており、須恵器杯蓋(28)・杯身(29)・壺(30・31)や、土師器杯(32)・壺底部(33)・高杯(34)・有孔鉢(35)に加えて弥生土器(36)も含まれている。

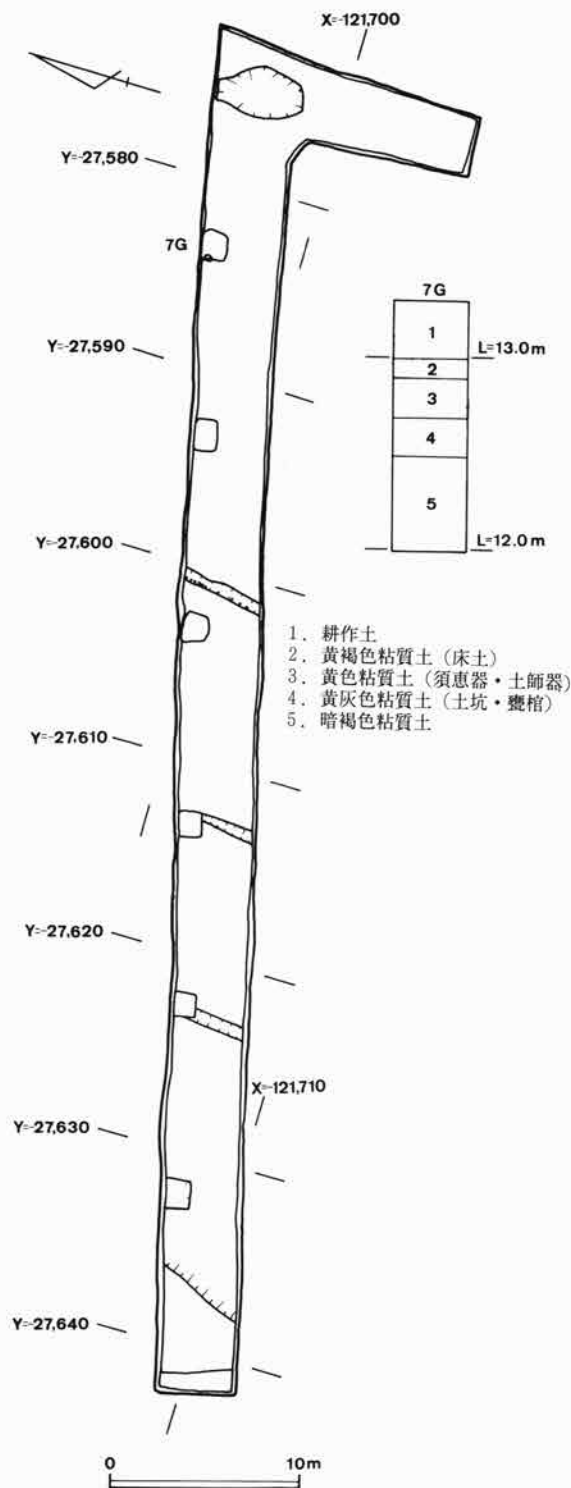
旧河道S D 35706からは、古墳時代の革袋形土器(37)・須恵器甕(38)や、弥生土器(39)も含まれている。また、遺物包含層からは、須恵器杯蓋(40～44)・杯身(45～47)・壺(48)・布目瓦(49)・碧玉製銚帯(丸軋)(57)、古墳時代の須恵器杯蓋(50)・杯身(51～53)・壺(54)・甕(55・56)や、滑石製の勾玉(58)などの特徴ある遺物も出土している。

③C-1トレンチ(第50・56図)

C-1トレンチは、大山崎町円明寺壺町田地内にあり、Bトレンチと同様の遺跡が想定される地点にあたる。調査は、名神高速道路拡幅にかかわる関西電力の鉄塔建て替えに伴い、約170㎡について発掘調査を実施した。



第56図 C-1トレンチ平面図



第57図 C-2トレンチ平面図
及び土層柱状図

A. 検出遺構

2期の遺構面を確認した。

上層遺構 中世の水田耕作にかかわる東西溝を4条検出した(S D 35701~35704)。溝内からは、瓦器碗の破片が出土している。

溝 S D 35701~35704

下層遺構 平安時代の池状の遺構(S K 35708)と、それから流れ出す溝(S D 35710)及び溝に並行する石敷きの雨落ち遺構(S D 35709)を検出した。石敷きの南では、柱跡を数基検出しており、その周辺には宅地が広がっていたと考えられる。池状の遺構内から黒色土器、溝内から緑釉の耳皿が出土した。また、トレンチの南寄りでは古墳時代後期に入ると考えられる竪穴式住居跡(S H 35705)を1棟検出した。この竪穴式住居跡は、東西が約5mを測り、西よりでは竈跡と考えられる焼土跡を検出した。住居跡内からは須恵器の杯蓋片1点出土した。このトレンチの遺構検出面は、南で浅く、現在の水田の床土直下で古墳時代の住居跡を検出した。北よりでは現在の水田の50cm下で平安時代の遺構を検出し、この下は砂利層の厚い堆積が認められた。

B. 出土遺物

池状遺構 S K 35708から黒色土器、溝 S D 35710内から緑釉の耳皿(61)が

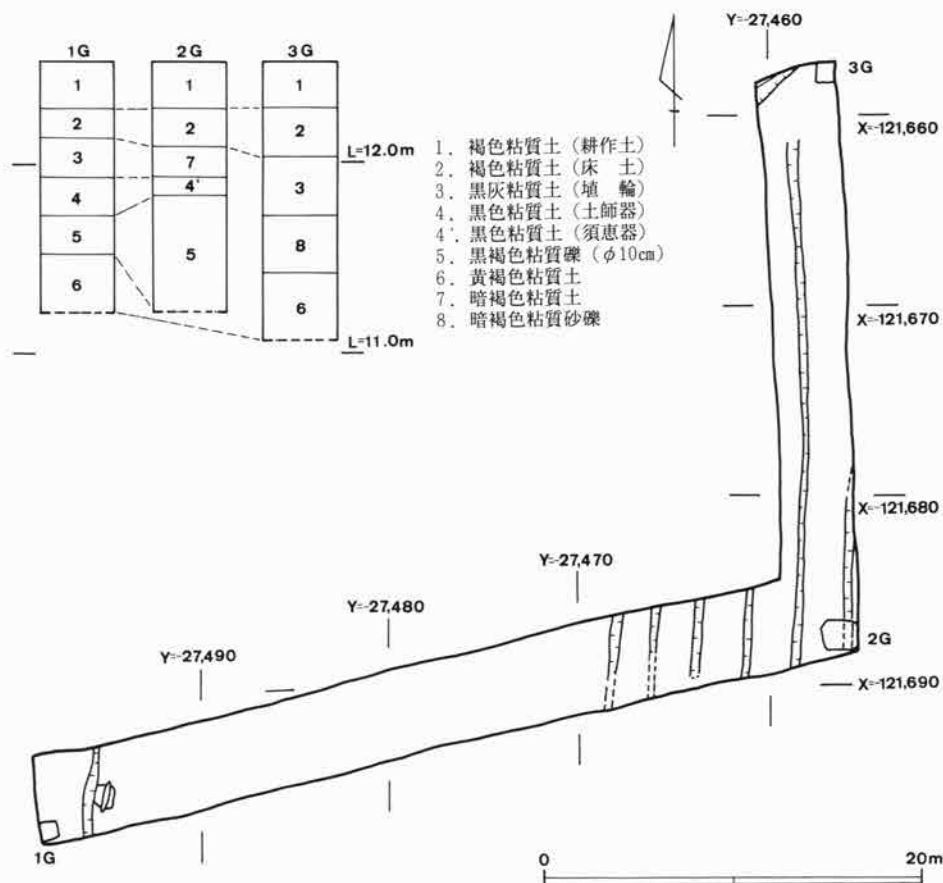
出土した。竪穴式住居跡S H35705内から、須恵器有蓋高杯蓋1点(71)が出土した。また、包含層から、須恵器椀(59・60)、緑釉陶器(62)、土師器皿(63)、平瓦(67)、須恵器杯蓋(64・65)、土師器甕(66)、土馬(68)や、古墳時代の須恵器杯身(69)、高杯の脚部(70)などが出土した。

④C-2トレンチ(第57図)

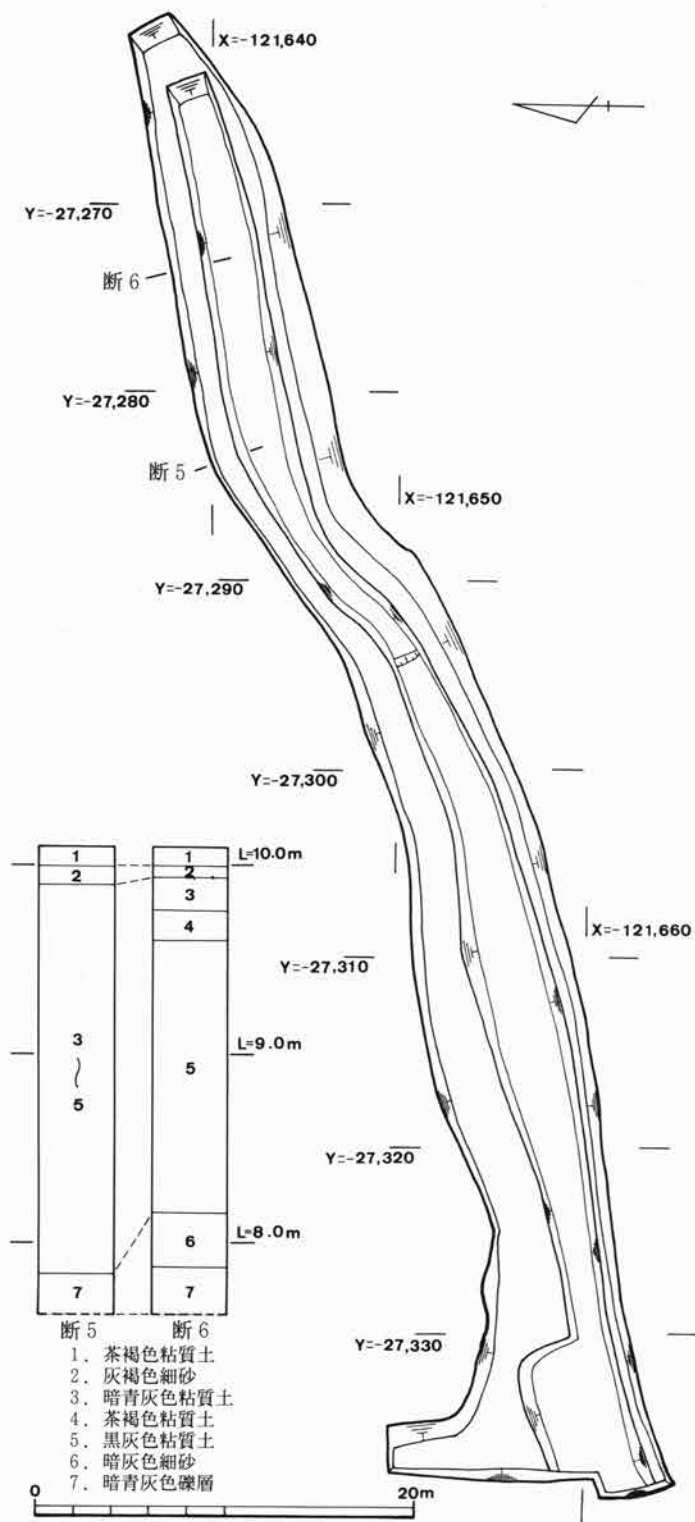
A. 検出遺構

C-2トレンチは、大山崎町円明寺松田地内にあり、同所に所在する松田遺跡及び下植野南遺跡と、長岡京の右京九条二坊五町・西二坊坊間小路が想定される地点にあたる。調査は、遺跡の広がりや重なり具合を調べるための試掘で、約310㎡について実施した。今年度の調査は、次年度以降の本調査を想定して中世の水田遺構を検出した段階で止めた。

調査の結果、トレンチの平面では中世の水田耕作に伴う溝群を検出し、水田の棚の段が



第58図 C-2トレンチ平面図及び土層柱状図



第59図 Dトレンチ平面図及び土層柱状図

大きいところで杭を打ち込んで土留め作業を行っていた。下層の地層の状況を調べるため、一定の間隔で地質調査坑を7か所設定した。地層観察の結果、西から東へと地形が下がり、西では水田の造成で遺構の削平が激しく、東寄りでは遺構の保存状態がよいことがわかった。7G(グリッド)の断ち割り断面で土師器の甕を使用した土器埋納遺構を確認した。

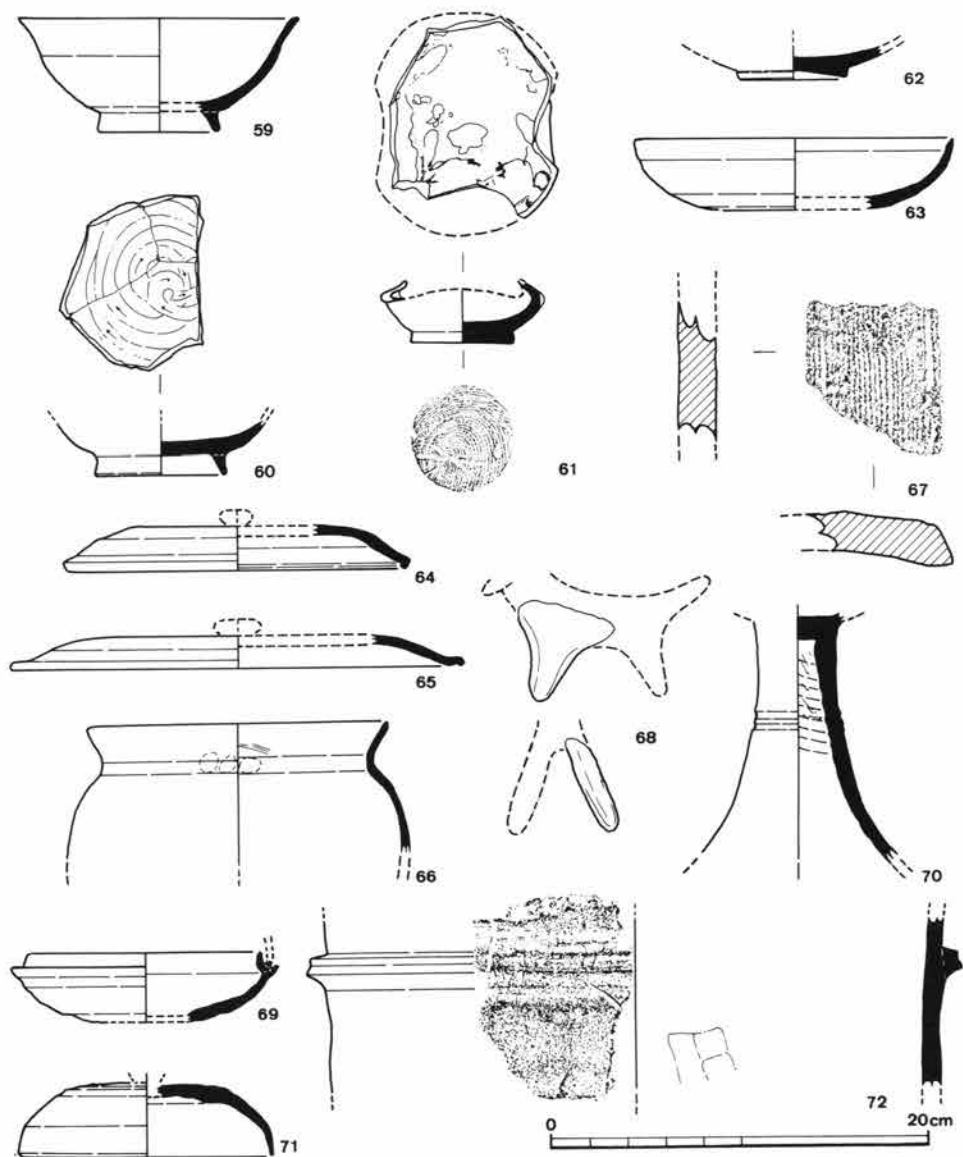
⑤C-3トレンチ(第58図)

A. 検出遺構

C-3トレンチは、大山崎町円明寺五條本地内にあたり、同所にある下植野南

遺跡と右京九条二坊四町・九条第二小路・西二坊第一小路が想定される地点にあたる。

調査は、C-2トレンチ同様、遺跡の広がりや重なり具合を調べるために設けた試掘トレンチである。約330㎡について実施した。調査は、中世の水田遺構を検出した段階で止めている。トレンチの平面では中世の水田耕作に伴う溝群と、調査地北側を走る久我畷に並行する溝の肩を検出した。中世の溝は、西で削平が激しく、東寄りで遺構の保存状態がよいことがわかった。久我畷の側溝と考えられる溝は、2層の異なった土で埋まり、上層から瓦器碗の破片が出土した。下層からは時期を決定できる遺物は出土していない。西端に



第60図 C・Dトレンチ出土遺物実測図

設けた1グリッドの第3層(現在の水田面から40cm)で円筒埴輪(71)・土師器甕・須恵器甕が出土した。

⑥Dトレンチ(第59図)

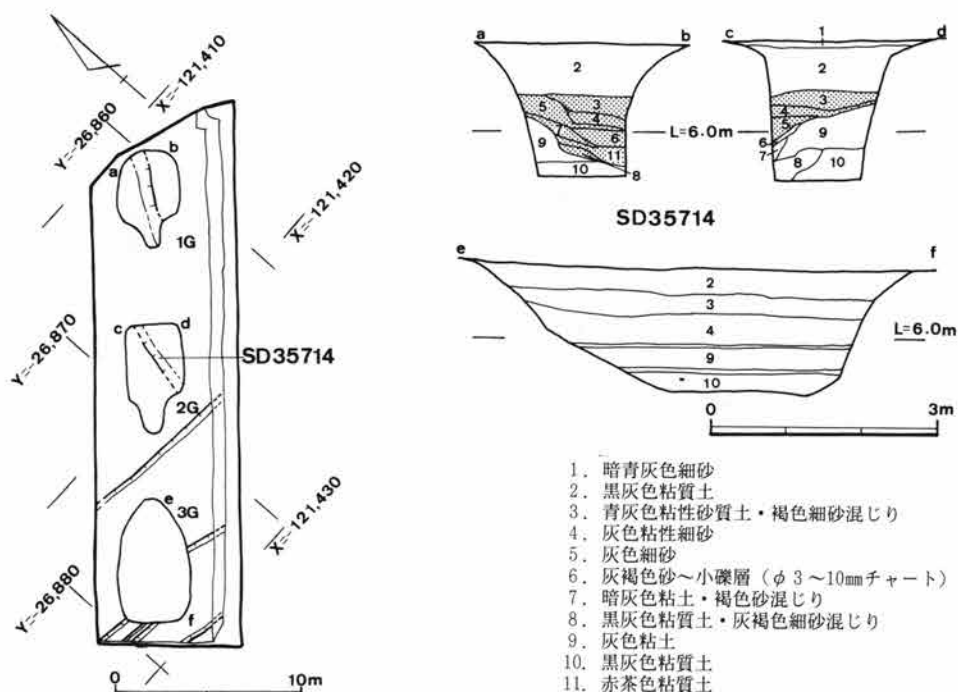
C-3トレンチは、大山崎町下植野飯田地内にあり、同所に所在する下植野南遺跡と長岡京跡右京九条一坊十四町・九条第二小路が想定される地点にあたる。

調査は、遺跡の広がりや重なり具合を調べるため、約330㎡について実施した試掘調査である。現在の水田面から約2.5mまでの地層を確認した。堆積地層は、7層からなり、最下層で中世の瓦器碗の破片が出土した。地形は、西で高く東半部は沼状になっていた。

⑦E-1トレンチ(第61図)

E-1トレンチは、大山崎町円明寺北枚方地内にあり、同所に所在する長岡京跡右京九条一坊二町の九条大路西側溝が想定される地点にあたる。

調査は、朱雀大路の西側溝が推定される地区で、約200㎡について実施した。当地の現状は、小畑川と国道171号線が合流する南で、7m以上の盛り土がある。調査は、上面の盛り土を掘り下げてシートパイルを打ち込み、安全対策を施した後開始した。調査の結果、



第61図 Eトレンチ平面図及び土層柱状図

旧水田面から約3m(海拔約7.5m)までは、小畑川の氾濫による砂礫の堆積が多く、最下層で中世の瓦器碗の破片が出土した。中央部の断ち割りの調査では、海拔約7.0mで北東から南西に向かって流れる溝SD35714を確認した。溝は砂礫とシルト質の粘土で埋まっており、溝の下層からは、板状に加工した木製品や、箸状の製品の一部が出土した。最下層(海拔約6.5m)の黒色粘土層からは土師器と思われる破片が出土した。

4. まとめ

今年度の下植野工区の調査は、4か所の発掘調査と、3か所の試掘調査を行った。

Aトレンチでは、古墳時代中期の土坑や柱穴を検出したことにより、周辺に古墳時代の遺構が広がっていると考えられるようになった。

東のBトレンチでは、遺構面が深く、古墳時代中期から平安時代までの各時期の遺物が出土したが、顕著な遺構を検出することはできなかった。しかし、出土した遺物は、各時代とも特徴あるものが多く、来年度以降の全面調査に期待が寄せられる。

C地区の調査では、検出した遺構面がBトレンチと比べ、たいへん浅いものであった。C-1トレンチでは、平安時代の宅地の存在が明らかになり、古墳時代後期の住居跡も確認された。また、C-2トレンチ・C-3トレンチとしいに地形が下がり、Dトレンチの東では、中世以前は沼状の地形であったことがわかった。

C-3トレンチで検出した久我暇の側溝は、その造営時期と規模を確認する重要な調査となる。久我暇は、平安京の朱雀大路に取り付く山陽道と考えられており、大山崎工区の調査で検出した西国街道とともに、平安時代以降の京都と西国を結ぶ主要幹線道路として調査資料の増加が待たれている。

E-1トレンチは、長岡京の復原によると右京九条一坊になり、朱雀大路西側溝の検出が期待されたが、今回の調査では、期待された遺構を検出できなかった。海拔約7.0mで検出した溝は、長岡京期の可能性もあり、来年度以降のこの面での調査に期待される。

下植野工区の調査地は、長岡京の復原条坊では、右京九条一坊・二坊にあたるが、いずれの調査地点でも長岡京に関する遺構は検出できなかった。現在までに名神高速道路拡幅工事関係の調査で確認された長岡京の遺構としては、昨年度の長岡京工区で検出した六条大路の北側溝が南限である。長岡京の京域が、どれだけ造営されていたかという問題も検討しなければならないが、あるいは長岡京の造営は九条に及んでいなかった可能性もある。

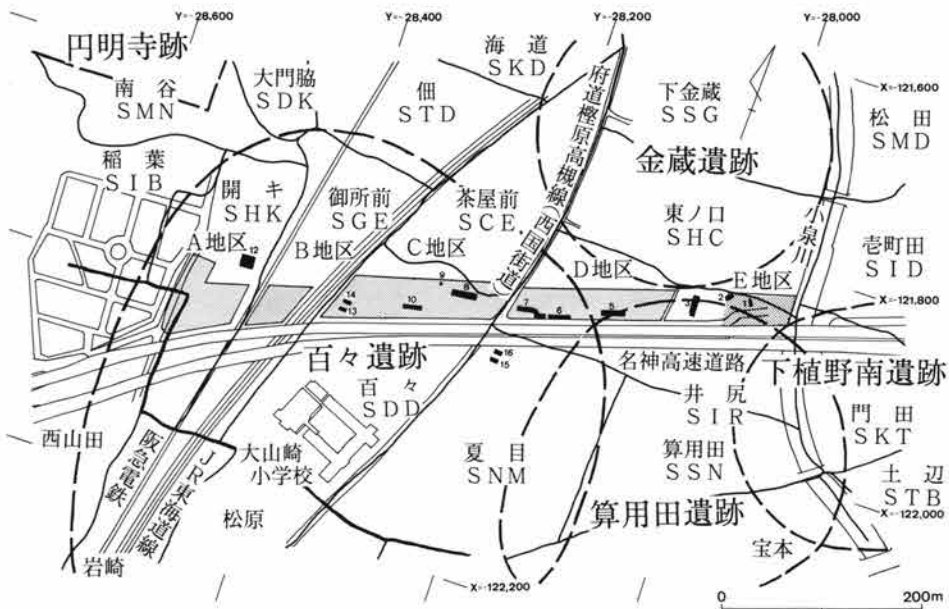
(戸原和人)

(4) 長岡京跡右京第349次調査 大山崎工区
(7ANSHK・SGE・SDD・SIR地区)

1. はじめに

平成元年度に行われた16か所の試掘調査結果を受け、2年度は4地区5トレンチの発掘調査を実施した。今年度から面的な調査を行うため、次のように地区の表示を行うこととした。大山崎工区は小泉川から天王山まで約600mの路線長があるため、A～Eの5地区に調査区を分けることとした(第62図)。西から東にA～E地区とし、A地区は天王山トンネルから阪急電鉄の間、B地区は阪急電鉄とJ R西日本鉄道の間、C地区はJ R西日本鉄道以東で府道檜原-高槻線(通称西国街道)以西、D・E地区は西国街道から小泉川の間である。試掘3トレンチでは沼状の地形となつて落ち込むことが判明しており、この西側をD地区、東側をE地区とした。基本的には地区名をトレンチ名とするが、地区内を複数トレンチに分割して調査を行う場合には、各地区に数字とアルファベットで枝番号を付してトレンチ名とした。今年度の発掘調査は、A地区1か所、B地区1か所、C地区2か所、D地区1か所である。

A～C地区は、百々遺跡と第3次山城国府推定地のひとつにあたり、A・B地区は山崎城の造られた天王山の山裾に位置する。D地区は金蔵遺跡と算用田遺跡の範囲にある。第



第62図 調査地位置図・周辺字切図

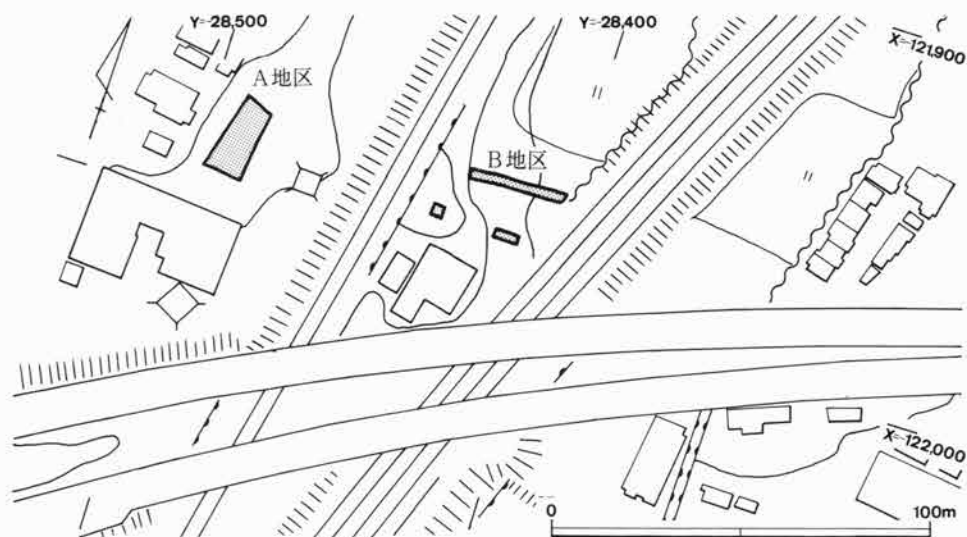
3次山城国府は797～861年までの山城国の国府で、「長岡京南」に位置したとされている。その場所は確定していないが、百々遺跡を中心とした位置に推定する考えがある。百々遺跡は数次の調査により、平安時代前期の掘立柱建物跡や溝などを確認しており、この時期を中心とする遺跡と推定される。^(注3) 算用田遺跡では、1985年の大山崎町教育委員会の発掘調査で古墳時代後期の竪穴式住居跡が確認されており、^(注4) 金蔵遺跡では1980年の調査で中世を主体とする遺構・遺物を検出しているが、^(注5) 両遺跡とも調査面積が少ないためその全貌はよくわかっていない。さらに、大山崎工区全体が長岡京の推定九条南側隣接地にあたり、長岡京に関連する遺構の検出も期待された。^(注6)

A地区は9月10日から10月12日まで、対象面積約2,500㎡中約200㎡を発掘調査した。B地区は4月9日から5月15日まで、対象面積約2,000㎡中約100㎡を発掘調査した。C-1トレンチは10月17日から3月6日まで、C-2トレンチは10月17日に調査に着手し、3年度に引き続き調査を行うものである。C地区全体では約1,100㎡の発掘調査を実施している。D地区は5月10日から3月6日まで、約2,650㎡の発掘調査を行った。

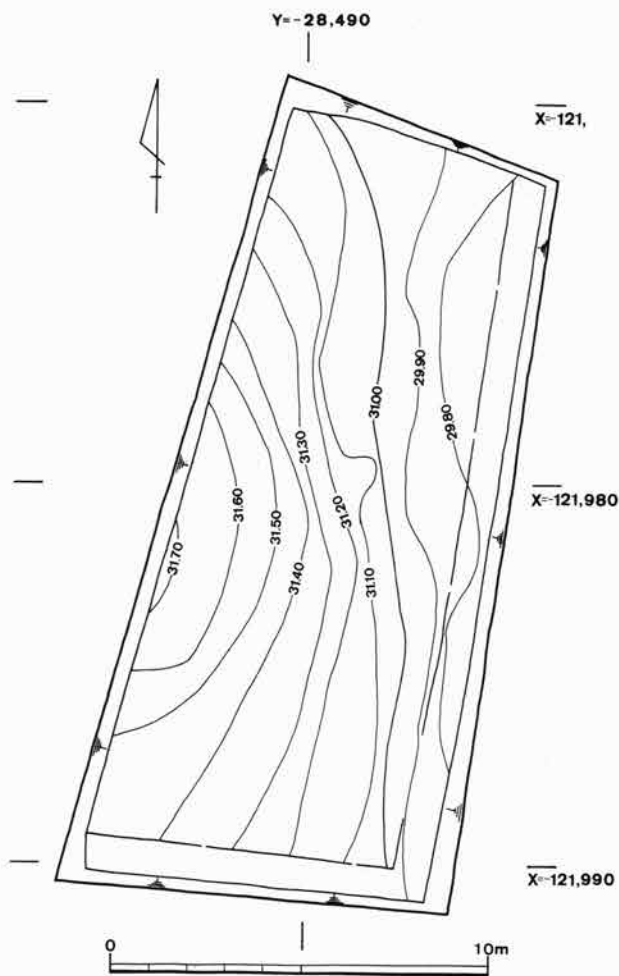
2. 調査概要

① A地区(第63～65図)

A地区は、大山崎町大字円明寺小字開キ地内にあたり、天王山の東斜面地の一角に位置する。町道より西側は天王山住宅が開発されており、遺跡が包蔵されていたとしても、すでに削平されていると判断された。そのため、町道の東側で、現状では畑地・竹林になっ



第63図 A・B地区調査地配置図



第64図 A地区トレンチ平面図

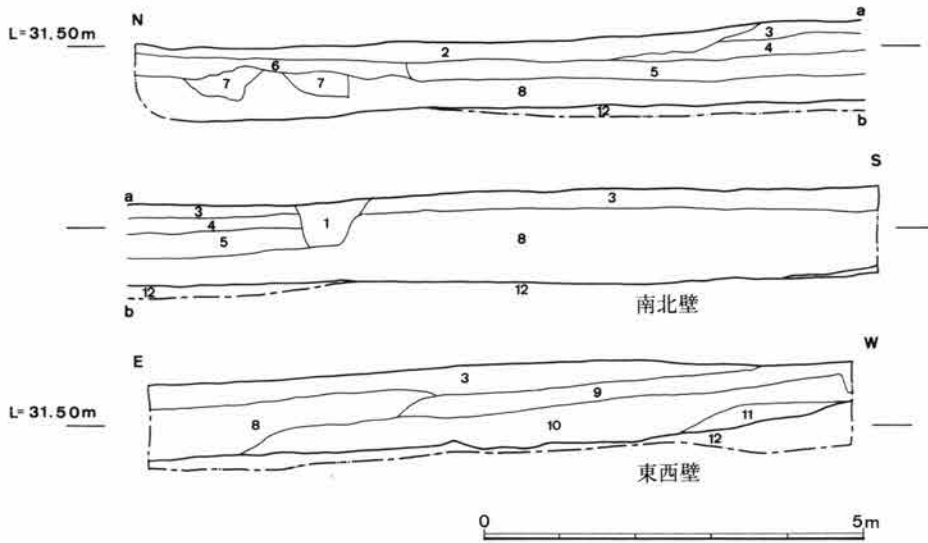
ている地区内で調査する方針を立てた。加えて、昨年度、名神の拡幅工事に伴う鉄塔移設のための調査を行った試掘12トレンチでは遺構は確認されなかったが、土師器片の出土したため、このトレンチの西南方約30mの平坦地に22m×10.5mの試掘トレンチを設定し、遺構検出に主眼をおいた。

A地区では、西から東に下る傾斜面を確認したのみで、遺構は全く検出できなかった。調査地東壁南北土層で見ると、現代の畑作耕作土下には厚く暗黄褐色土が堆積しており、数点の土器片を含んでいた。また、南壁東

西土層図の観察では、地形が高い西側から土砂が流入・堆積したことがわかり、長年月の間に土砂の流入・流出が頻繁に繰り返されたことが推測された。そのためか、土層観察でもわかるように、この調査区内では生活痕跡としての包含層はなかった。一部、地山面で石が集積していたが、地山内の石が風化して散乱したものと判断した。出土遺物には、須恵器甕片、土師器片が少量出土したのみで、図化しうるものはない。

この地区では、百々遺跡・山崎城の関連遺構が包蔵されているものと推定されたが、それと関連づけるような資料は確認できなかった。A地区全域にわたって、遺構・遺物はすでに削平されたものと推定され、今回のトレンチ調査をもってA地区全域の発掘調査は終了した。

(岩松 保)



第65図 A地区トレンチ配置図

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1.排水溝 暗茶褐色土礫混じり | 7.茶褐色土礫混じり |
| 2.盛り土 褐色土礫混じり | 8.暗茶褐色土 |
| 3.暗茶褐色土(畑の土) | 9.茶褐色礫混じり土(かたい) |
| 4.褐色土(かたい) | 10.茶褐色土(かたい) |
| 5.暗茶褐色土 | 11.茶褐色土(礫多い) |
| 6.暗茶褐色砂質土 | 12.茶褐色土(大きな礫が混じる) |

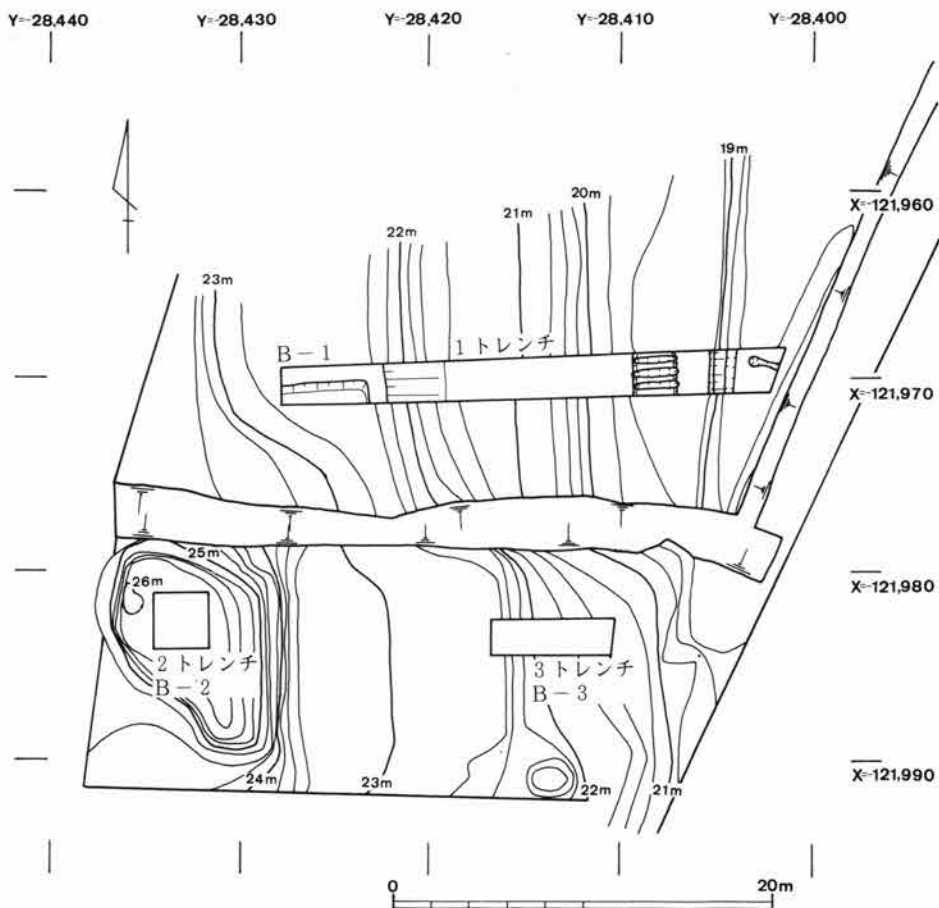
②B地区(第63・66・67図)

B地区は、大山崎町大字円明寺小字御所の前に位置する。調査前は、南北に細長い柵状の竹林があり、この地区の小字名だけでなく、調査前の地形が階段状の小区画に分かれていたため、天王山に築かれた山崎城の「出城」的な施設があった可能性が指摘できた。トレンチを地形に合わせて3か所に設け、遺構・遺物の広がりをも確認することに調査の主眼をおいた。

調査の結果、畑の耕作にかかわる数本の溝や地境溝が検出できたが、近世以前に考えられる顕著な遺構は確認できなかった。現状で認められた階段状の地形は、竹の栽培もしくはそれ以前の畑作にかかわるもので、中世の出城などの施設に関連する遺構である可能性は少ない。しかし、土器の細片は比較的多く出土した。

出土した土器には、弥生土器や須恵器、瓦器等が含まれているが、多くは細片で図化できるものはなかった。中には中国製の磁器片があり、想定された遺構は後世に削平されたとも考えられる。

(中川和哉)



第66図 B地区トレンチ配置図

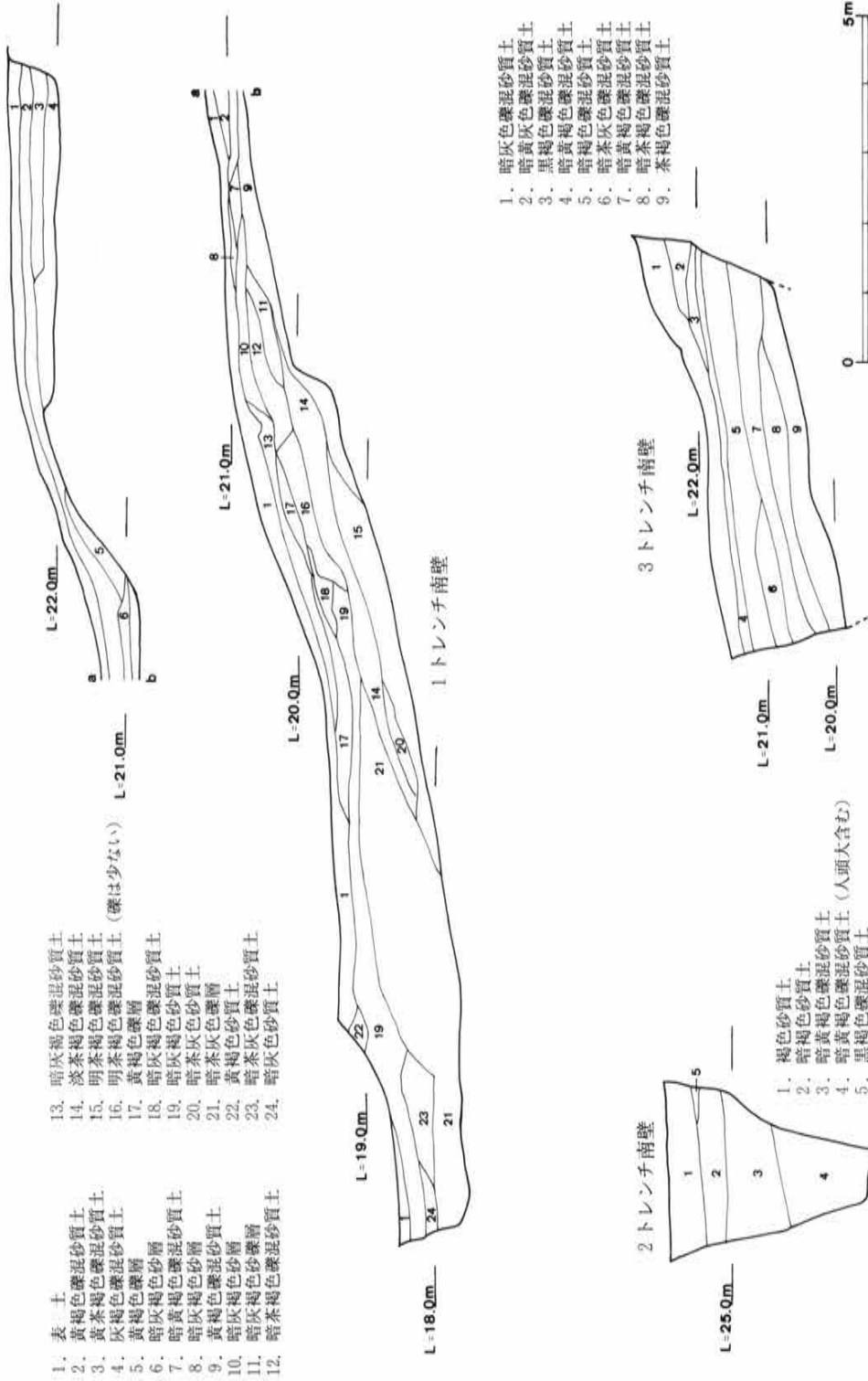
③C地区(第68～73図)

C地区は、大山崎町大字円明寺小字百々地内にあり、一部茶屋前地内を含む。C地区の西端の試掘13・14トレンチ周辺では、流路状の堆積となり遺構・遺物は検出されていない。試掘10トレンチでは柱穴などの遺構と遺物を確認したため、ほぼ、試掘10トレンチ以東を全面的に調査を行うこととした。対象面積は約3,000㎡であり、そのうち平成2年度はC-1トレンチ(約545㎡)、C-2トレンチ(約660㎡)の発掘調査を実施した。

C-1トレンチ(第69～72図)

A. 検出遺構

旧河道S R 34901 トレンチ東端で検出した自然の流路で、川底は北から南に下る。南側の東岸は東側に振れ、幅が広がる。幅4.6m・深さ約1m・検出長8mを測る。西岸は約40cmの高低差をもって、幅約85cmのテラスを有し、テラスから川底に下る傾斜変換点から斜面地に、瓦器椀や土師器皿、土師器羽釜などが一括投棄された状態で出土した。



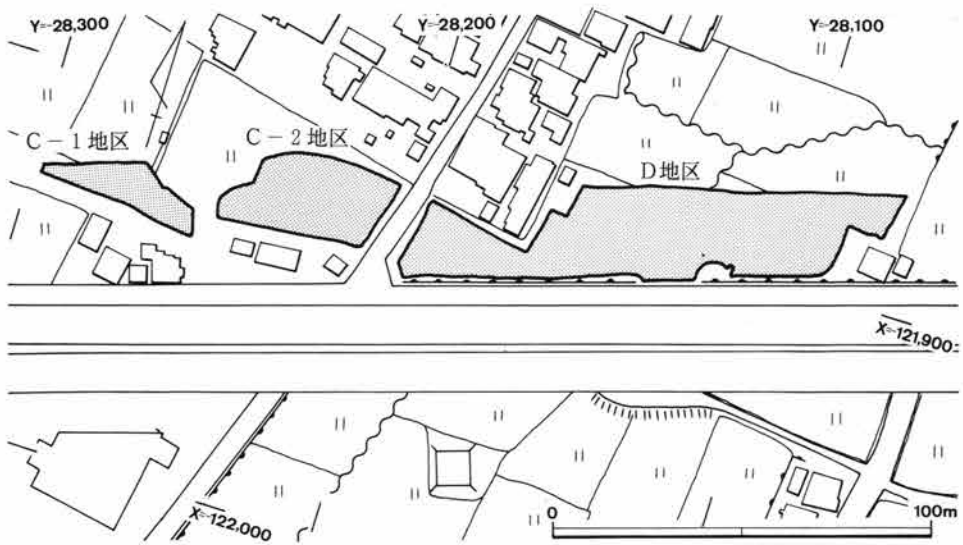
第67図 B地区トレンチ土層断面図

溝 S D34902 中央部で検出した「L」字形の溝で、約26mにわたって検出した。この南に曲がったところから、東辺に沿って杭列が並んでいた。水田区画溝と考えられる。

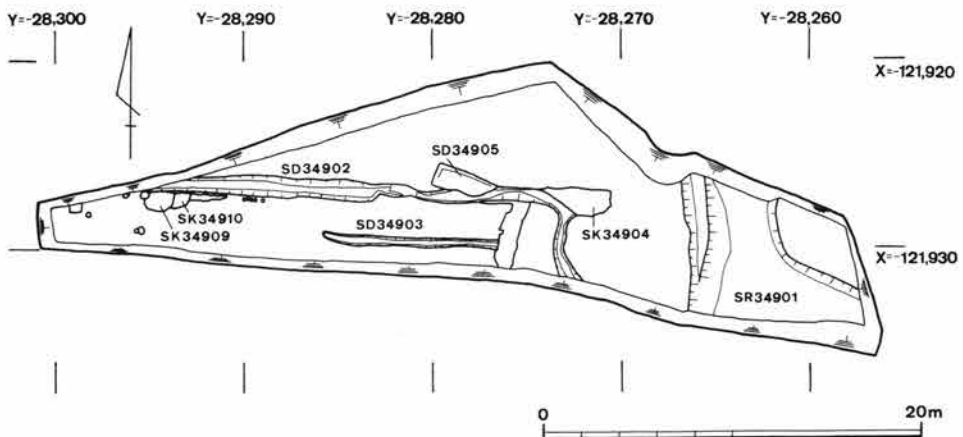
土坑 S K34904 S D34902の屈曲部で検出した大形の土坑で、埋土は淡青灰色粘土で、S D34902に切られる。底面近くで土器を検出している。

溝 S D34905 S D34902に切られた溝で、「L」字形に検出した。南に折れ曲がったところから南側では、溝内に多くの杭が打ち込まれていた。

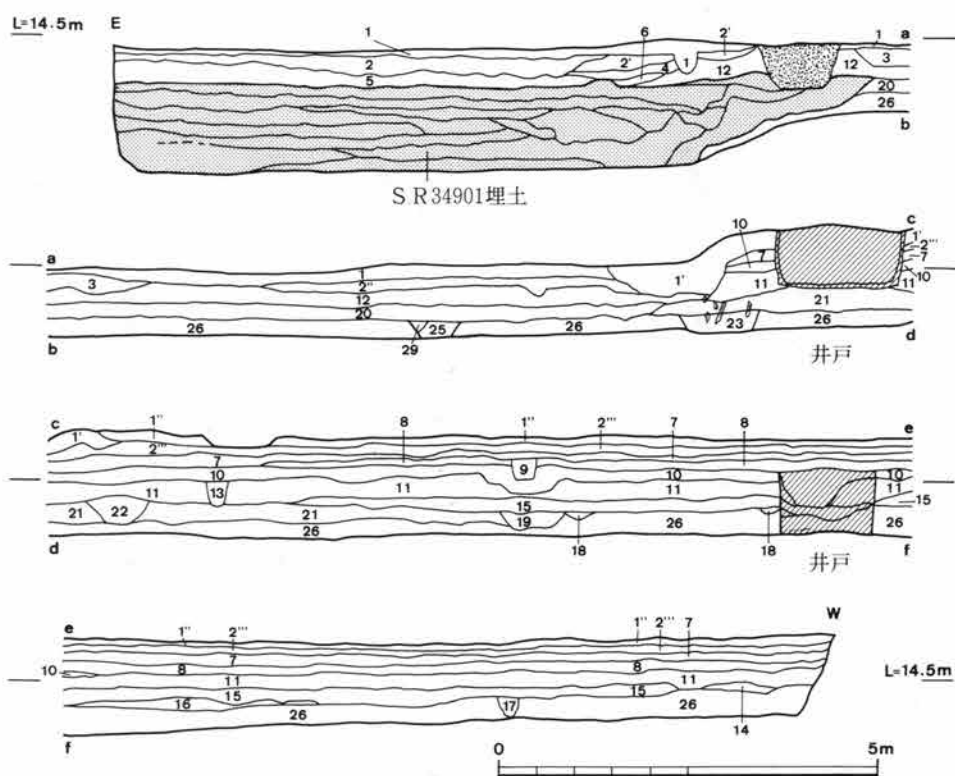
他に、調査地西端で平安時代前期の土器を含む土坑を2基(S K34909・34910)と数個の柱穴を検出した。



第68図 C・D地区調査地配置図



第69図 C-1地区平面図

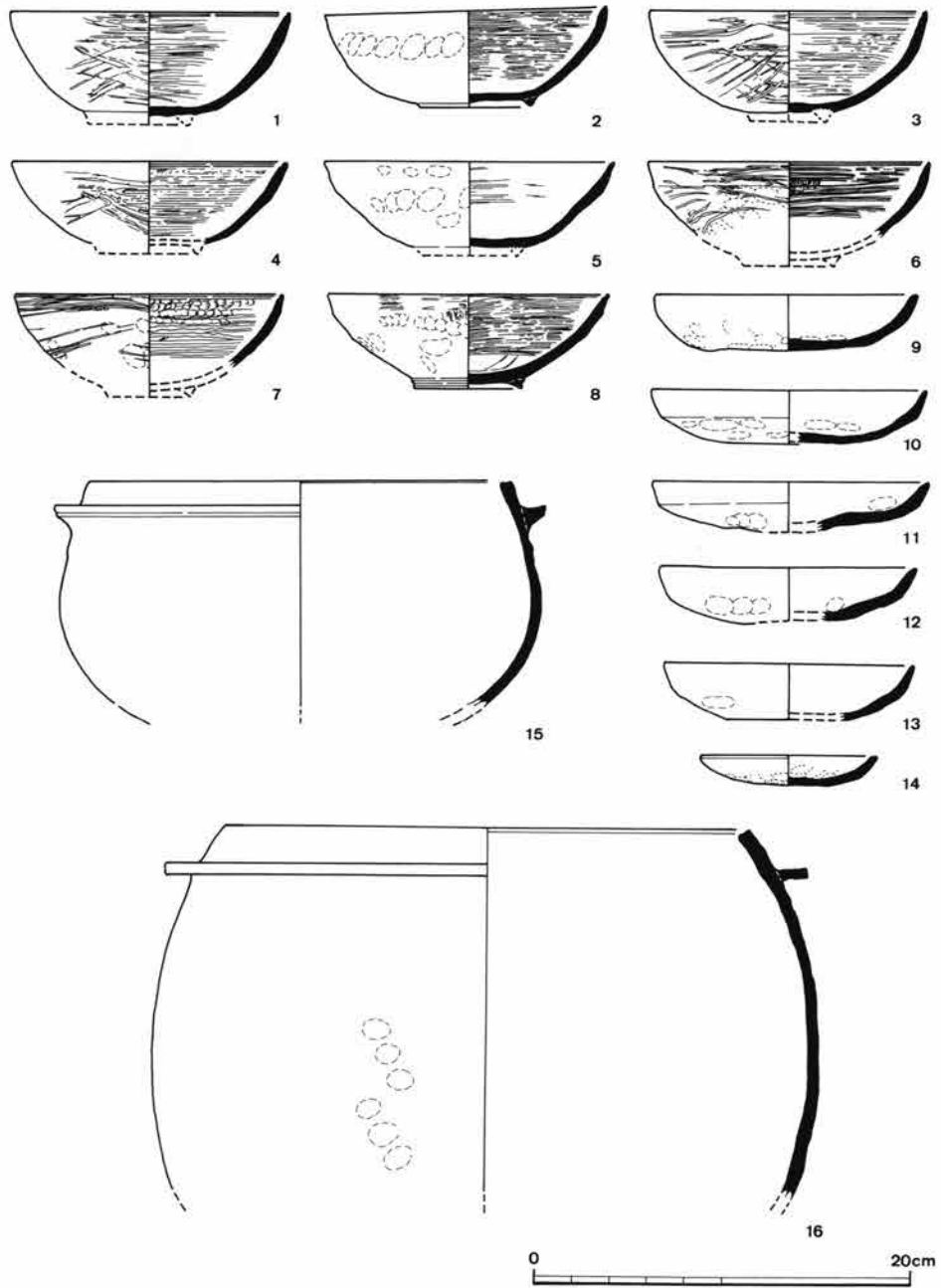


第70図 C-1地区土層断面図

- 1・1'・1''耕作土(黒灰色土～茶褐色土) 2・2'・2''・2'''床土(淡灰色土～暗褐色土)
 3.暗黄褐色土(土坑) 4.黄褐色砂質土 5.灰色混茶褐色砂土 6.淡灰色粘土 7.淡茶褐色土
 8.淡灰色砂質土 9.茶褐色混淡灰色土 10.黄茶色土 11.明茶褐色土～淡茶灰色土(漸移層)
 12.明褐色砂質土 13.淡茶灰色土(遺構) 14.明黄褐色土 15.茶褐色土(中世包含層)
 16.淡茶褐色土 17.淡褐色土 18.淡黄褐色土 19.暗茶褐色土 20.茶褐色混淡灰色粘質土
 21.明褐色混灰白色粘質土(礫混) 22.明褐色混淡灰色粘質土 23.淡緑灰色粘土(遺構――)
 24.茶褐色砂(遺構――) 25.淡灰色砂 26.黄褐色土(地山)

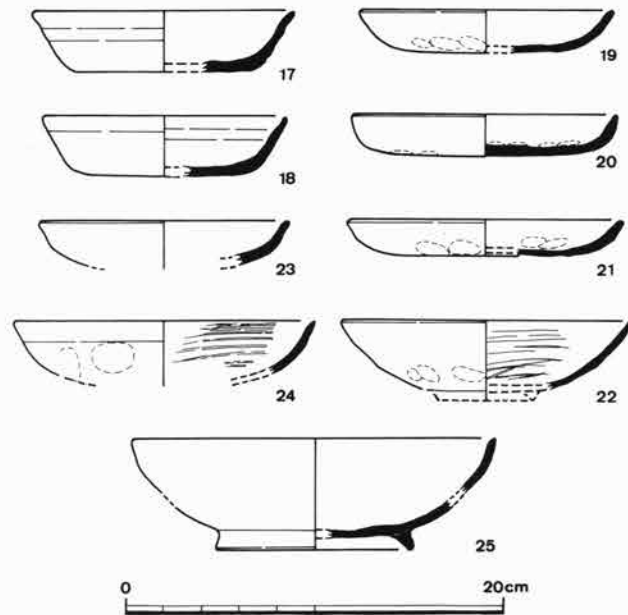
B. 出土遺物

第71・72図はC-1トレンチから出土した土器の実測図で、第71図はS R 34901、第72図はその他の遺構から出土した土器である。1～3・9～16は、S R 34901の西側テラス肩部及び斜面地に投棄された状態で出土した土器群である。1・3は、椀の高台部が意図的に打ち欠いた状態であり、11・12は底面中央に径約2cmの穿孔が焼成後になされている。4～8の瓦器椀は、投棄土器群を検出した上層及び南側付近で検出したもので、この投棄土器群と一連のものであった可能性がある。瓦器椀は、口径14.4～15.6cm・器高5.1～5.9cm(推定)である。9～13の土師器皿は、口径13.6～14.5cm・器高3cm前後の手づくねのものであるが、10～12は体部上半から口縁部にかけてヨコ方向にナデで最終調整を行っており、外



第71図 C-1地区出土遺物実測図(1)
1~16. S R 34901

面中央に稜線がみられる。
 14は、小形の土師器皿で、
 径9.6cm・器高1.7cmであ
 る。15・16は、土師器羽釜
 で、16は、色調が暗茶褐色
 で角閃石を含み、生駒西麓
 産である。第72図17・18は、
 S K 34909・34910から出土
 した須恵器杯身である。19
 ～22は、S K 34904内出土
 で、19～21は土師器で、口
 径13.4～14.7cm・器高1.9～
 2.3cmである。20は、器壁
 をヨコナデ調整で、19・21
 は、口縁部付近の体部上半
 をヨコナデ、体部下半をユ



第72図 C-1地区出土遺物実測図(2)
 17. S K 34910 18. S R 34909
 19～22. S K 34904 23～25. S K 34902

ビオサエで調整している。23～25は、S D 34902内から出土した。23は土師器皿である。
 24・25は瓦器椀で、25の体部中央は欠損しているが同一個体であり、図面上で復原している。口径16.5cmで、外面の器壁は摩耗のため不明である。

C-2トレンチ(第73図)

多数の柱穴・溝を確認している。遺構内から出土した土器は古墳時代後期から中世のものまであり、さまざまな時期の遺構が存在すると推測される。

A. 検出遺構

溝 S D 349105・106は、調査地のほぼ中央で検出した溝で、西国街道に平行している。

溝 S D 349106 幅40cm・深さ10cmで、現水田区画の下で検出した。溝の西辺に沿って杭列が穿たれている。

溝 S D 349105 幅55～80cm・深さ10～15cm(掘形は丸底)。出土遺物から中世以降の水田区画溝と考えられる。

注目される遺構としては、西国街道の路面と西側側溝がある。

西国街道路面 S F 349104 現在の西国街道に沿って、調査地の東辺約5.5mの幅で検出した。基本的には灰色砂礫混じりの青灰色粘土で整地した路面で、検出した路面上の東側

約2mは比較的多くの礫が混入していた。轍や足跡は検出できなかった。

西国街道西側溝 S D 349102・103 西国街道西側溝と推定される溝で、路面と同じく現西国街道に平行する。これらは、おおむね10世紀代と考えられる。建物に復原できるものは現在までのところ確認できていないが、一部に見られる柱跡の並びは西国街道に平行しており、道路に沿った建物配置が復原できると期待される。C-2トレンチは来年度も引き続いて調査する予定であり、詳細は平成3年度調査を終了した時点でまとめて報告する。

④D地区(第68・74～77図)

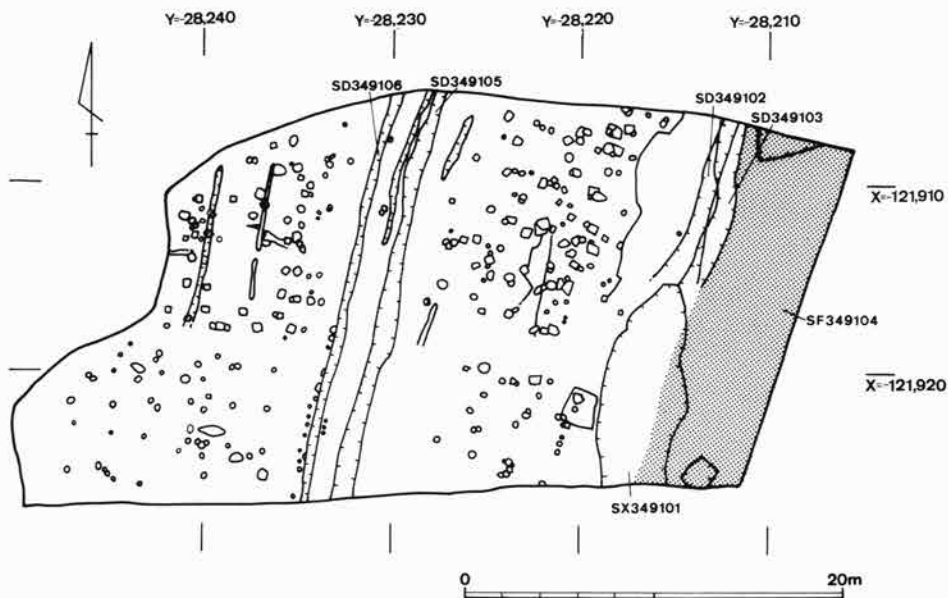
D地区は大山崎町大字円明寺小字井尻地内にあり、試掘5～7トレンチの周辺に該当する。対象面積は約3,000㎡で、今年度は約2,650㎡の調査を行った。

以下、主要な遺構について概述する。

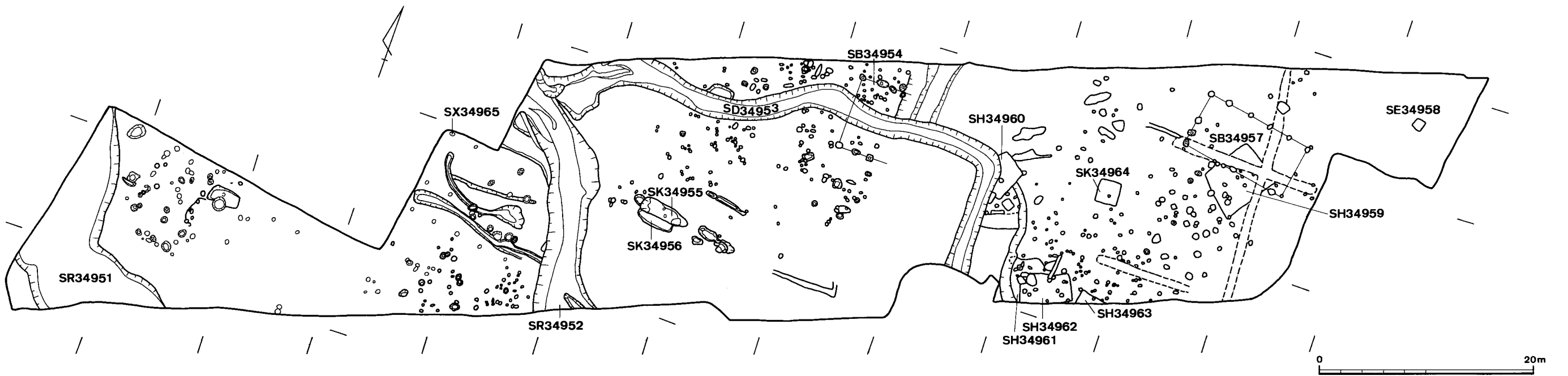
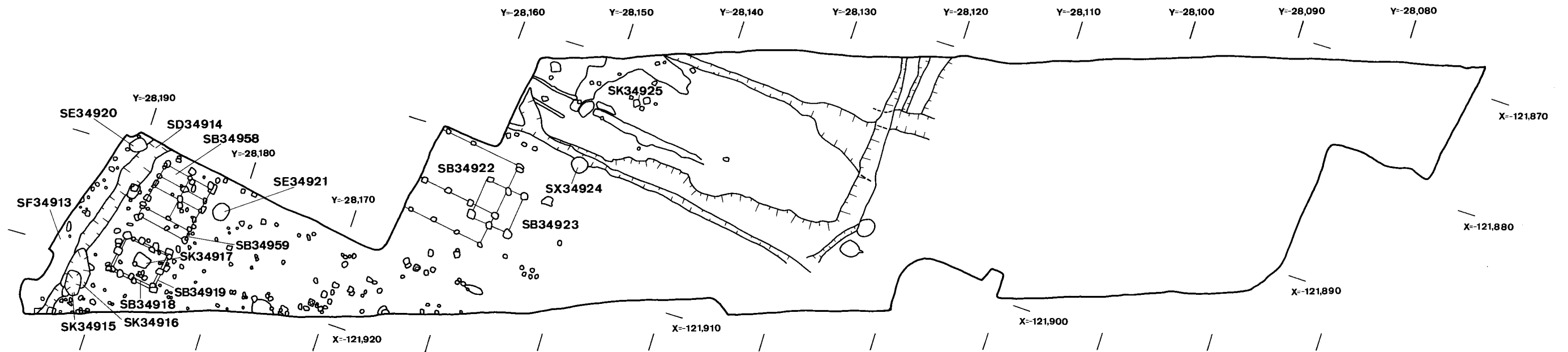
A. 検出遺構

西国街道東側溝 S D 34914 西国街道の東側溝と推定する溝で、調査地西端で検出した(第75図)。幅1.25～2.3m・深さ約15cmで、調査地の北端から南端まで約19mにわたって検出した。出土土器から9世紀中頃のものだと判断される。

西国街道路面 S F 34913 礫混じり粘土を約30cmの厚さで造成した路面で、S D 34914に対応する。幅2.8m以上を確認し、現在の西国街道下にもぐっていく。路面は「踏み固められた」ためか、固く締まっていた。轍や足跡は検出できなかった。



第73図 C-2地区平面図



第74图 D地区平面图

土坑 S K 34915・34916 S F 34913の南側ではこの溝を切って大形の土坑を検出した。埋土からは土器の破片が比較的多く出土し、廃棄土坑と判断する。

井戸 S E 34920 S D 34914及び路面(S F 34913)の北側で、これらの遺構に重複して造られた井戸で、1.15m×1.6mの長楕円形を呈し、検出高25cmである。埋土は青灰色礫混じり土で、底面近くで瓦器椀が出土した。

西国街道の東側で検出した掘立柱建物跡としては、S B 34918・19・58・59がある。

掘立柱建物跡 S B 34918・19 北側で検出した、同じ位置で建て替えられた建物跡である。前者が3間×2間、後者が1間×2間である。S B 34958は2間×2間の総柱の建物跡で、S B 34959は2間×2間の建物跡である。

調査地中央部西側でも2棟の掘立柱建物跡を検出した。

掘立柱建物跡 S B 34922 南側に廂をもち、南北2間×東西3間以上の建物跡である。

掘立柱建物跡 S B 34923 S B 34922と重複しており、1間×2間の建物跡である。

掘立柱建物跡 S B 34954 東半が削平されているが、南北2間×東西2間以上に復原できる建物跡である。

掘立柱建物跡 S B 34957 調査地の東端付近で検出した2間×5間の建物跡である。

井戸 S E 34958 調査地の東端で検出した井戸で、検出高65cmを測る。曲物積上げ井戸である。井戸上部の井桁が残存し、縦板の側板を一辺85cmの方形に組み、四隅に隅柱を設ける。井戸側は55cm×63cmで、幅約15cmの曲物を2段に組んで造られ、その一部が残存していた。西側で検出したS B 34957は、この井戸と同時期と考えてよいと判断する。

土坑 S K 34925 55cm×55cmの隅丸方形の土坑内に、土師器皿が2枚埋納されている。

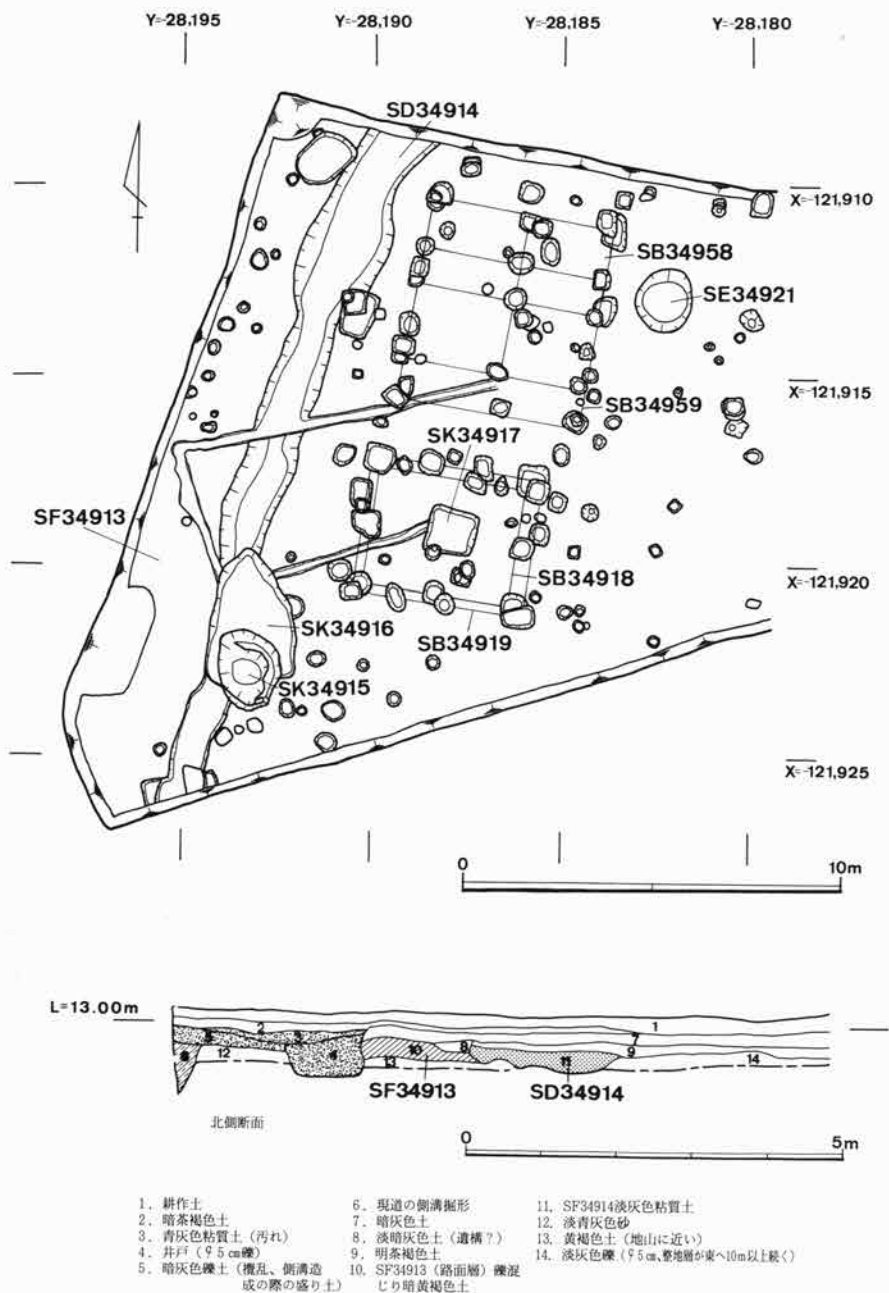
旧河道 S R 34951 西端部の下層で検出した南北の自然流路である。自然流路は西北から南東に流れ、幅9m以上・深さ約1.1mの大きな流路である。遺物の出土はほとんどなく、数点の土師器(弥生土器?)があったのみである。

旧河道 S R 34952 調査区の中央部分で検出した北西から南東に流れる流路跡で、幅約3.2~4.4m・深さ0.6mを測る。出土遺物はほとんどなかったが、第77図60の須恵器杯身が出土している。

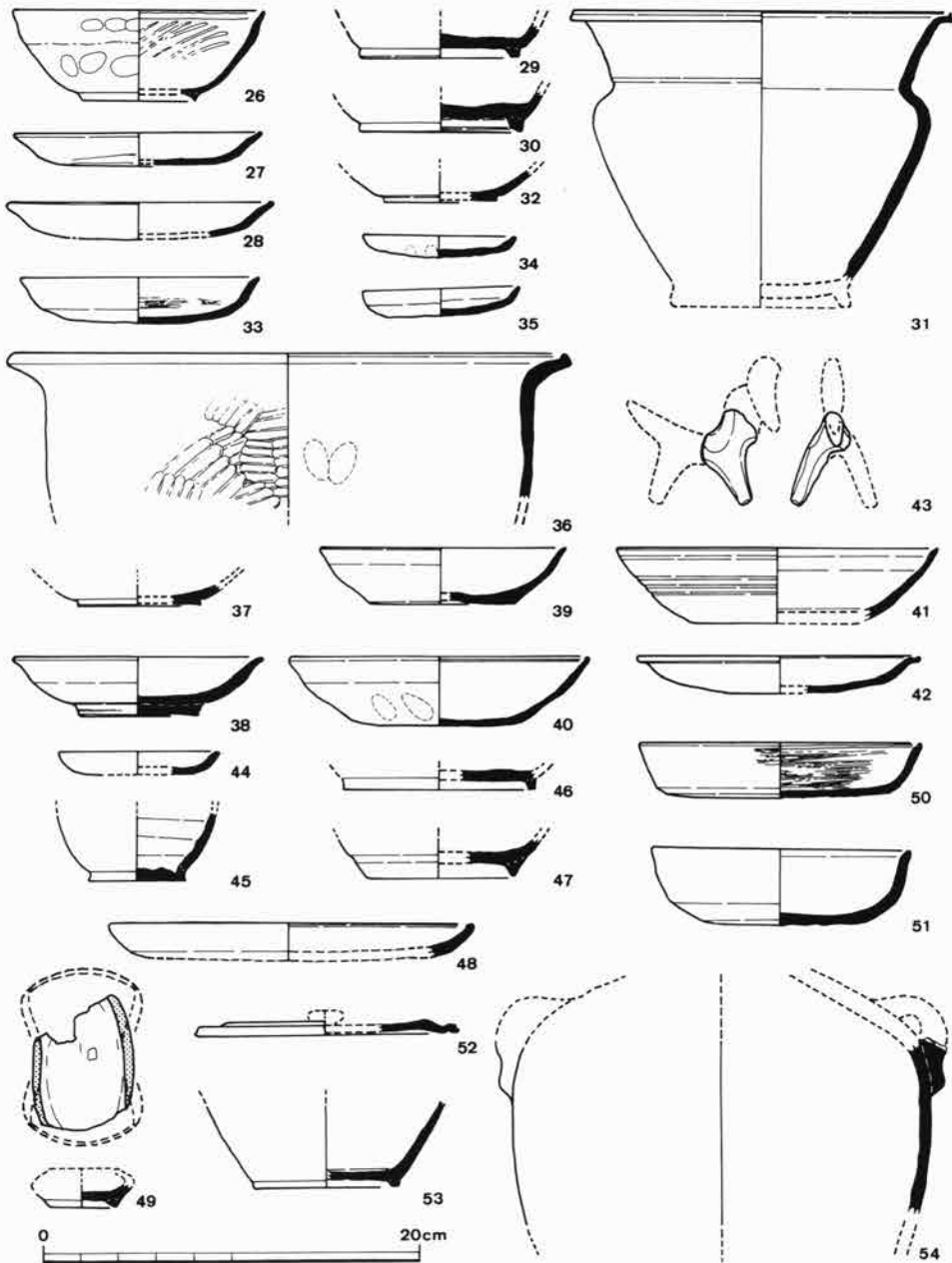
溝 S D 34953 調査区の中央部の下層で検出した溝で、東に向けてやや蛇行して掘削され、東端ではほぼ直角に南に曲がる。総延長約50mにわたって検出し、幅約2m・深さ0.6mである。このS D 34953は直角に折れ曲がることから、人工的な溝と考えられる。西端はS R 34952と同じ地点から検出しており、土層観察ではS R 34952より後出のもので、S R 34952の自然の流れを人工的に振り替えたものと考えられる。溝の埋土からの土器の出土は少なく、第77図59の須恵器杯蓋が出土しているが、真東西を意識していることや東端の

南北方向の溝がほぼ真北を向くことから、中世の時期に掘削されたものと判断される。

竪穴式住居跡 S H34959 弥生時代後期の方形竪穴式住居跡で、4.7m×5.5mのやや細長い平面形で、検出高は最も残りのよいところで20cmを測る。主柱穴は、4本(径約20cm・検出高約30cm)で、中央より南西に偏したところで炉を検出した。炉は、80cm×1.05m、



第75図 推定西国街道東側溝 S D34914 周辺実測図



第76図 D地区出土遺物実測図(1)

26～32. S D 34914

33～36. S K 34916

37～43. S K 34915

44～49. 掘立柱建物跡柱穴群

50・51. S K 39925

52～54. S E 34958

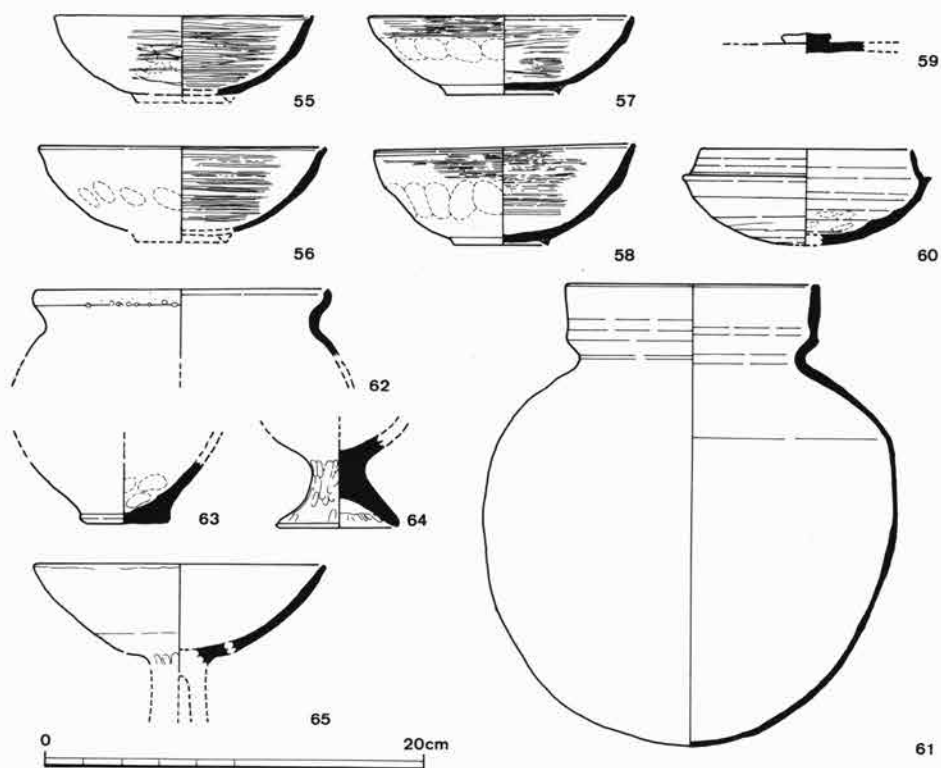
深さ約10cmの皿状の浅い掘り込み内に、炭化物が混じっていた。他に、堅穴式住居跡としてS H34960～63を検出している。

土壌S X34924 中世墓と考えられる遺構で、1.4m×1.8m、深さ40cmの楕円形の掘形内に、拳大から人頭大の石が入り込んでいた。土壌内底面付近には瓦器椀・土師器皿が埋納されていた。

土壌S X34965 S B34922の柱穴の下層で検出した甕棺と推定される遺構である。土壌の平面形は50cm×55cmの楕円形を呈し、底面は平坦である。今回の調査地内では、布留期に属する遺構はこの土壌のみで、周辺に同時期の集落が存在する可能性が指摘できる。

B. 出土遺物

第76図は平安時代前期の遺構群から出土した遺物である。26～32は、S D34914から出土した。26は黒色土器椀、27・28は土師器皿、29～31は須恵器、32は緑釉陶器である。お



第77図 D地区出土遺物実測図(2)

55・56. S E34920 57・58. S X34924 59. S D34953 60. S R34952 61. S X34965
62～64. S H34959

おもね、9世紀中頃の土器と考えられる。33～36は、S K 34916から出土した土師器である。37～43は、S K 34915から出土した。37・38は緑釉陶器、39は須恵器、40～42は土師器で、43は土製品の土馬片である。33～43は、11世紀後半頃の土器と考えられ、これらの遺構はS D 34914・S F 34913に重複しており、今回検出した西国街道の廃棄時期の下限を示す。44～49は、掘立柱建物跡の柱穴から出土している。今回は、各掘立柱建物跡の出土土器を細かく提示しないが、概して柱穴からの出土土器は少ない。44・48・49は土師器で、45～47は須恵器である。おおまかに、9世紀中頃から10世紀中頃でおさまり、S F 34913・S D 34914とはほぼ同時期の建物跡群と捉えられる。50・51は、S K 34925内に埋納された土器で、出土状況に一括性が認められる。52～54は、S E 34958から出土した。54の双耳壺は、篠窯石原畑窯のものに近似し、その編年によると9世紀後半代に位置する。第77図55・56は、S E 34920から出土している。57・58は、S X 34924から出土した瓦器椀である。59はS D 34953から、60はS R 34952から出土している。前述のように、S D 34953の時期を直接示すものではないと考える。61はS X 34965より出土した甕で、底部は丸く、内面の頸部と体部の境の屈曲部はシャープさを欠く。62～64はS H 34959内埋土から出土し、65は北壁部床面で出土した高杯片である。

3. まとめ

今回の調査では、C地区とD地区の各調査地で遺構・遺物が集中して検出され、この両地区に関しては、大山崎工区全体の調査が終了した後に、報告書にまとめて成果を公表する予定である。ここでは、C・D地区を中心にして、報告書を作成するにあたっての問題点を列挙することで、まとめに代えたい。

- ① C・D地区で西国街道の路面と側溝を検出している。今回の調査で確認した側溝は9世紀中頃から10世紀中頃のものであり、西国街道の敷設時期・歴史的な位置づけが大きな問題点として挙げられる。
- ② 今回の調査地を含めた周辺に、第3次山城国府(797～861)を想定する考えがあるが、9世紀前半代の遺構はなく、その考えを積極的に肯定する資料は得られなかった。
- ③ 長岡京期の遺構は検出されなかった。
- ④ D地区で検出した建物跡は、すべて真北より約10°東に振れている。これは、西国街道の振れとほぼ同じであり、平安前期の宅地割りと西国街道の間に関連性が認められる。真東西・真南北を意識して設定される遺構は中世以降からであり、この辺りの田畑の区画に残る「条里」は中世以前にさかのぼるものではないと推測される。
- ⑤ D地区の東端部では平安前期の井戸と掘立柱建物跡を検出しており、西国街道の東側に

かなり広範囲の居住空間であったようである。D地区の東端部は遺構が希薄で、旧小泉川の氾濫原として遺構が削平されたと考えられるが、平安前期頃の旧小泉川の流路の位置は名神下植野工区の発掘調査成果ともかかわり、興味深い。

- ⑥ C-1トレンチでは、西端部で平安時代前期と考えられる土坑(柱穴?)が検出でき、この広がりが注目される。
- ⑦ 調査地のいたるところで旧河道が検出された。旧地形の復原の一助になろう。
- ⑧ A・B地区では山崎城の関連施設が確認されるものと期待されたが、山崎城はおろか、他の時代の遺構もすでに削平されたためか、検出されなかった。
- ⑨ D地区で弥生時代後期と古墳時代前半期(布留式期)の遺構が確認でき、周辺に両時期の集落が包蔵されているものと推定される。

(岩松 保)

おわりに

今年度で名神高速道路各幅工事にかかわる調査は3年度目となる。昨年までに進められた長岡京工区・向日工区と大山崎工区での試掘に加え、下植野工区の調査も開始された。調査面積も、平成元年度の4,650㎡から9,730㎡と2倍以上になる。

今回の調査地は、向日工区では、長岡京の東西の条坊が、三条条間小路から四条第二小路、また南北の条坊では、東二坊第二小路と東二坊大路が想定され、このほかに鴨田遺跡・鶏冠井清水遺跡・芝ヶ本遺跡などの各遺跡も含まれる地区を調査した。その結果、長岡京の条坊で三条条間小路の南北両側溝と、東二坊大路東側溝を検出した。また、小畑川の旧河道の調査で、洪水堆積層が9世紀の後半から10世紀にかけての時期であることなどが明らかとなった。

長岡京工区では、昨年度の調査で確認された雲宮遺跡の環濠の調査を行った。2重の環濠及びそれに敷設された柵列などを検出した。

下植野工区では、来年度以降の準備作業として2か所の試掘と3か所の調査を行った。長岡京復原案によると、右京九条一坊二町の朱雀大路西側溝推定地と、右京九条一坊、二坊にあたり、松田遺跡と下植野南遺跡も含まれる。調査の結果、いずれの地区でも長岡京の遺構を確認することはできなかったが、平安時代の石敷き遺構や、古墳時代の旧河道・竪穴式住居跡・土坑などを検出した。

大山崎工区では、昨年度に行った試掘調査にもとづき、今年度から本調査を開始した。調査地は、百々遺跡と金蔵遺跡及び算用田遺跡の範囲にあたり、第3次山城国府推定地も含まれている。調査の結果、西国街道の路面と側溝、掘立柱建物跡や井戸などを検出した。

今回の調査で確認した側溝は、9世紀中頃から10世紀中頃のものであり、周辺で検出した建物跡はすべて西国街道に並行していた。これらの遺構により、平安時代前期の宅地割りと西国街道の敷設時期や、その構造の一端が明らかになった。第3次山城国府については、9世紀前半代の遺構が検出されておらず、関連する資料は得られなかった。また、長岡京期の遺構も検出されず、当期の周辺での土地利用については否定的な結果となっている。

下植野工区・大山崎工区の調査は、今後ますます本格的なものとなり、検出される遺構・遺物も多種多様なものになることが予想される。これらの地区では、全体的な調査の終了と整理作業の進捗をみてそれぞれをまとめていく方針である。また、雲宮遺跡の調査は、今年度で終了しており、今後全体的な整理作業を経て、報告を行う予定である。

(戸原和人)

注1 調査参加者 現地調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。

青木葉子・赤池学博・赤木 香・東 祐子・石井晶子・市川美佐・岩佐聖子・上村恵代・栄本祐子・江口正孝・江藤結城・大倉英士・太田菜諸子・小田裕子・大森智子・岡田良紀・小島孝修・加藤真弓・川崎法子・北岡里絵・久保博昭・小藤俊太郎・小牧 勲・坂本英美・坂本祐三子・澤野智佳代・渋谷庸子・清水琢哉・進木和美・首藤有里・鈴木陽一郎・高峰靖子・高尾恵子・竹内美砂・武田宏司・辻本幸子・椿井良昌・飛田浩一・中崎憲和・中西正和・成田理絵・浜中邦弘・針尾有章子・春木増美・広瀬時習・別所寛康・松本とも子・丸尾晋(故人)・溝口博士・三柳洋一・宮本純二・三次美紀・吉田絵里・若松幹郎・青山恵子・下園京美・鈴木まり子・竹内千賀子・竹谷和子・田村重野・内藤チエ・西村敏子・若林照子・吉谷美佐子

注2 戸原和人・三好博喜ほか「長岡京跡左京第216次・右京第343次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注3 林 亨「平安前期における山崎津に関する一考察」『長岡京古文化論叢』 同朋舎 1985

注4 百々遺跡では多くの調査がなされている。主なものに以下の報告がある。

林 亨・百瀬ちどり「長岡京跡右京第69次(7ANSDD地区)発掘調査概要」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第4集 大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1984

林 亨「山陽道の検出」(『大山崎町の発掘 大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第10集 大山崎町教育委員会) 1991

黒坪一樹・戸原和人ほか「百々遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第42冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注5 林 亨「算用田遺跡 右京192次 発掘調査概報」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第9集 大山崎町教育委員会) 1991

注6 林 亨「長岡京跡右京第58次(7ANSSG地区)発掘調査概要」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第1集 大山崎町教育委員会) 1980

付 載

京都盆地西縁・小畑川扇状地の微地形分析

—長岡京左京四条二坊(長岡京跡左京第242次調査地)を例に—

中 塚 良

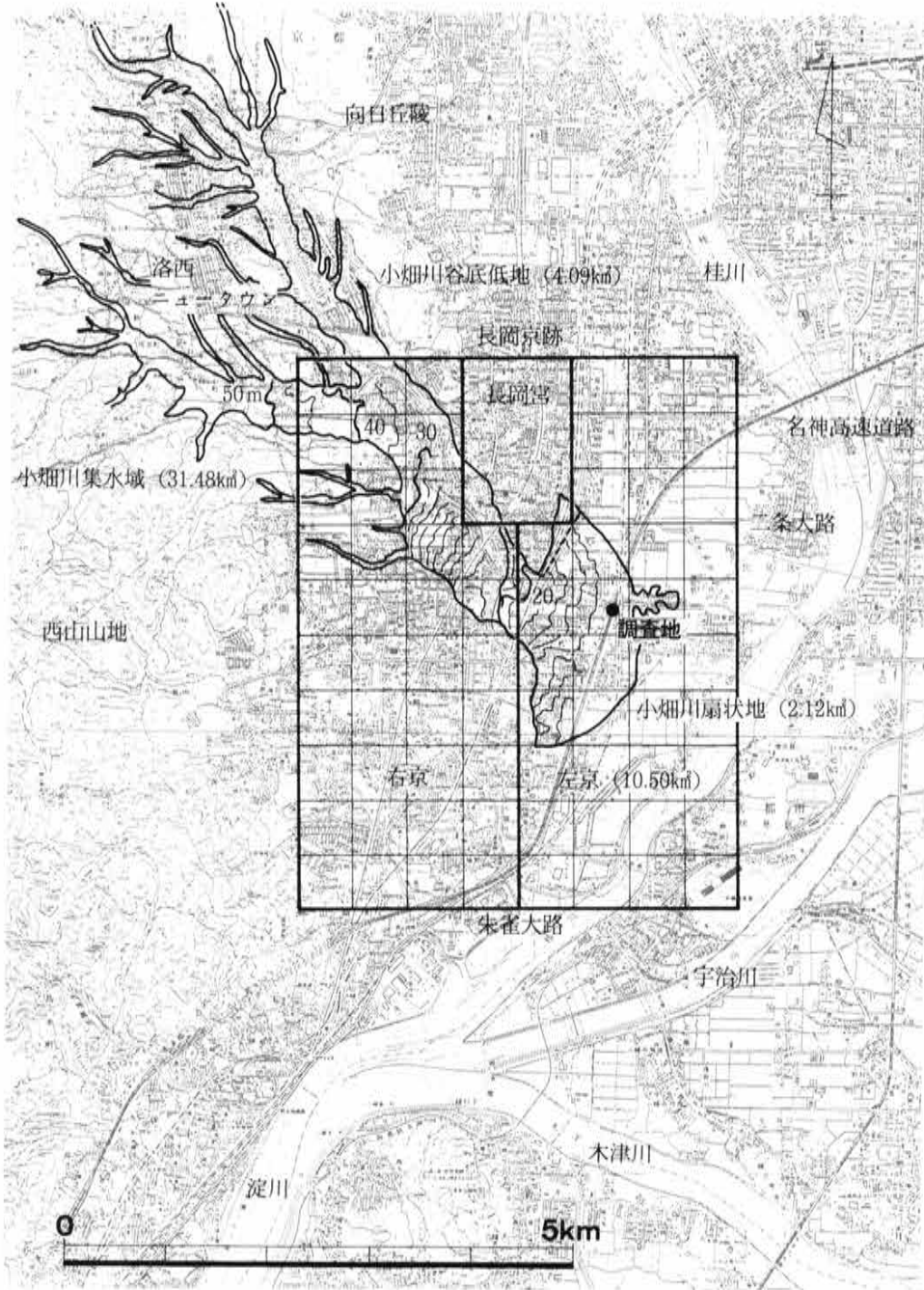
1. 緒 言

京都盆地西縁には、主に南北性の活断層が数多く分布し、山地・丘陵と低地を境としている。山地・丘陵には、小畑川や小泉川などを水系とする河谷が北西—南東方位に発達し、下流域では扇状地が形成されている。これらの中小河川は、京都盆地中央を貫流する桂川に集水される。また、河谷低地には、完新世に離水したとみられる沖積段丘(完新世段丘)が分布している。小泉川では、地形縦・横断面形に基づく地形面の連続性と遺跡立地、堆積物の分析等から、中・上流域の沖積段丘面と下流域沖積低地面下の埋没扇状地面相互の対比と地形面の編年を行った(中塚, 1991a)。小畑川扇状地は、小泉川の北方、西暦784年から794年にかけて営まれた都城、長岡京の中央部に広く発達している。名神高速道路拡幅工事に先立って実施された長岡京跡左京第242次調査地(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター実施)は、扇状地・扇端部に位置しており、調査地では延長約160mにわたって扇状地性堆積物が観察された。扇状地性堆積物の堆積時期は、土砂に含まれる遺物から、考古学年代による推定が可能であった。以下、発掘調査地における微地形分析の結果を示し、小畑川扇状地の形態的特性などについて若干の検討を加える。

2. 地形概観

第78図に小畑川谷底低地・扇状地、長岡京の条坊計画、及び今回報告の長岡京跡左京第242次調査地の位置を示す。小畑川は京都盆地西縁(桂川右岸)に分布する諸河川の中で、最も広い集水面積を有する。集水面積は31.48km²、盆地西縁に分布する河川的全集水面積(48.34km²)の約65%を占める。小畑川には、上流域において谷底から樹枝状パターンの開析谷が発達している。谷は盆地西縁の活断層を横切って、丹波帯中・古生層からなる基盤山地や、下部更新統・大阪層群で構成される丘陵を刻む。長岡京右京北西隅付近では、西方から善峰川が合流する。小畑川・善峰川合流地点から下の中流域において、河谷低地は

幅を700～900mに増す。河谷低地の勾配は、両河川合流地点付近で12%、河谷中流域においては7%程度と緩やかである。谷底低地面積は4.09km²である。谷底低地は、小畑川左岸において北西－南東方位に延びる向日丘陵の先端付近にまで連続するが、それより下流域



第78図 調査地位置図

には東方にむけて扇状地が形成されている。現在の小畑川は、扇状地先端部から扇状地の扇央部をはずれ、長岡京右京を載せる段丘(段丘下位面)^(註2)の縁を南流して桂川にそそぐ。小畑川扇状地は整った扇形で、長岡京左京域に緩やかに広がっている。扇状地の規模(計測値)は、縦長(L)：1.30～1.55km、最大幅(W)：2.40km、扇面面積(A f)：2.12km²、平均勾配(S m)：7.1%である。扇面面積・谷底低地面積比は、1：1.9、同・集水面積比は1：14.8である。また、長岡京条坊との比較では、扇面は長岡京左京条坊面積10.50km²の約20%を占めている。

3. 長岡京跡左京第242次調査地の層相と微地形

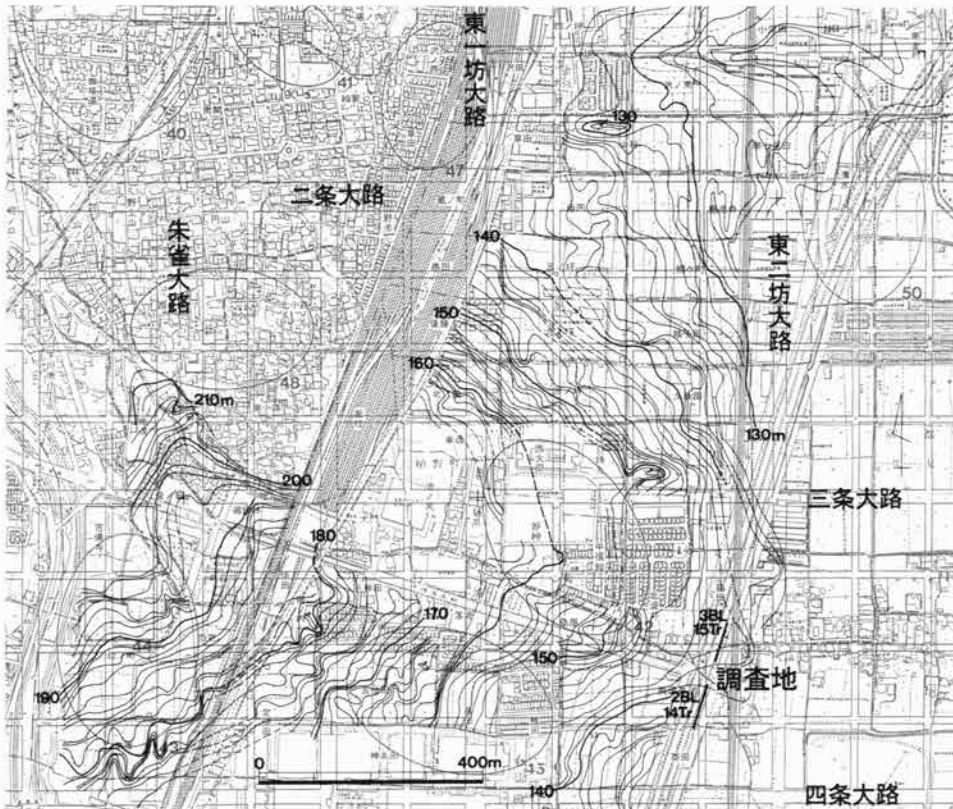
今回検討を行う長岡京跡左京第242次調査地(名神高速道路向日工区3ブロック第15トレンチ・2ブロック第14トレンチ、以下3BL15tr・2BL14trと略称)は、第78図に示したように、小畑川扇状地の扇端部付近に位置する。行政区では、向日市上植野町南淀井・脇田、京都市伏見区菱川にあたる。長岡京の条坊復原図によれば、長岡京左京四条二坊十四・十五町に相当する。現地表面高度は、標高14.0～14.2mである。両トレンチとも後述するとおり、小畑川系の扇状地性堆積物(河道堆積物)が厚く堆積し、複雑な河川の堆積相を呈している。扇状地堆積物の検出面高度は、3BL15trが標高13.8m、2BL14trが同13.9mである。両トレンチで堆積物の層相の記載を行い、同時に粗粒堆積物の基盤への掘り込み方位、葉理の発達方位、インプリケーションの発達方位などを計測して、堆積物の堆積方位(微地形の形成方位)を推定した。さらに、出土遺物をもとに、堆積物に対し考古学年代を与えた。

堆積物の計測方法

[堆積物の掘り込み方位の計測] 基盤・シルト層を刻む砂礫層の下底面(考古学調査で言う不整合面)あるいは、砂礫層中に挟まれた細粒土(レンズ)の堆積面を地層断面において削り出し、クリノメータにより計測する。走向方位が計測地点における地層の掘り込み方位である。

[葉理(ラミナ)の発達方位の計測] 地層断面において、構成粒子の粒径・組成の差、色調の濃淡などによって細かい間隔で筋～縞状の構造をなす部分が認められる。これらを一般にラミナと呼んでいる。ラミナの良く発達する部分を選んでラミナ上面を削り出し、クリノメータを用いて走向・傾斜を計測する。測定には斜葉理部分(傾斜をなす葉理面)を選ぶ。傾斜方位が計測地点における地層の運搬堆積方位と判断される。

[砂礫層中のインプリケーションの計測] 砂礫層など、粗粒物質の堆積構造を観察すると、個々の礫がその形状と関連して、一定の規則性をもって配列している場合がある。層



第79図 小畑川扇状地の微起伏・調査地位置図

理面(連続して堆積する層中において、上下に層相が変化する境界面、考古学的には遺構面として把握される)に平行する断面にあらわれ、同断面での礫のみかけの長軸の配列をオリエンテーション、層理面に直交する断面に現われ、同断面に斜交した礫の配列をインプリケーション(覆瓦構造)と呼んでいる。従って、地層断面では後者の構造が観察されることが多い。礫のインプリケーションは、主に河道堆積層中において瓦積み状に集積した状態で認められ、扁平・盤状の形態をなす礫で最も良く生成する。また、礫が運搬エネルギーを失って、ある地点に堆積する際、礫の上流側が水あるいは運搬物質(マトリクス)によって洗い流される結果、礫の上面は上流側に傾斜して配列する。従って、インプリケーションをなす礫個々の上面の走向・傾斜を測ることによって、地層の運搬堆積方位の推定が可能である。測定にあたっては、インプリケーションの良好に発達する層準を選んだ。測定方法・データ処理については、碎屑性堆積物研究会(1983)にもとづいて、筆者が長岡京跡左京第206次調査において適用した方法(中塚, 1990)に準じた。

調査地の層相と微地形

調査地の地質断面を第81図に示す。また礫のインプリケーション測定結果については第82図に示す。記載の便宜上、各トレンチ断面を17のセクション・地区(S 1～S 17区)にわけける。層相の記載とともに、堆積層中に含まれる遺物の考古学年代についてもふれる。

3BL15tr 層序は大きく3層に区分される。上部2層の扇状地性堆積物(S R 24215-1・2、層厚1.4～1.7m)が下位の基盤(細粒土、第1層：黒灰色系シルト層・層厚不明)を刻んでいる。

S R 24215-1：河道の中洲を構成する堆積物(S 4～S 7区、S R 24215-1b)の南北両側を流路堆積物(S R 24215-1a)が埋めている。中洲は黄灰褐色系の極粗砂～中礫で構成され、一部に斜交ラミナが発達する(葉理の傾斜：18° N程度)。層厚は0.55mである。北端には明瞭なインプリケーションが観察される。地点2でインプリケーションから推定される礫の堆積方位は、北東方位(N70.5° E)である。中洲を埋める流路堆積(S R 24215-1a)にも斜交葉理が発達する。中洲以北では、不明瞭ながら北方への細粒化が認められる。層中から出土した遺物の下限年代は、10世紀末である。中洲以南では、南方への細粒化が認められる。断面南端では、上面に杭列がみられる。S 7区流路北端付近が、後述する旧河道Ⅱ北端(第80図)に相当する。

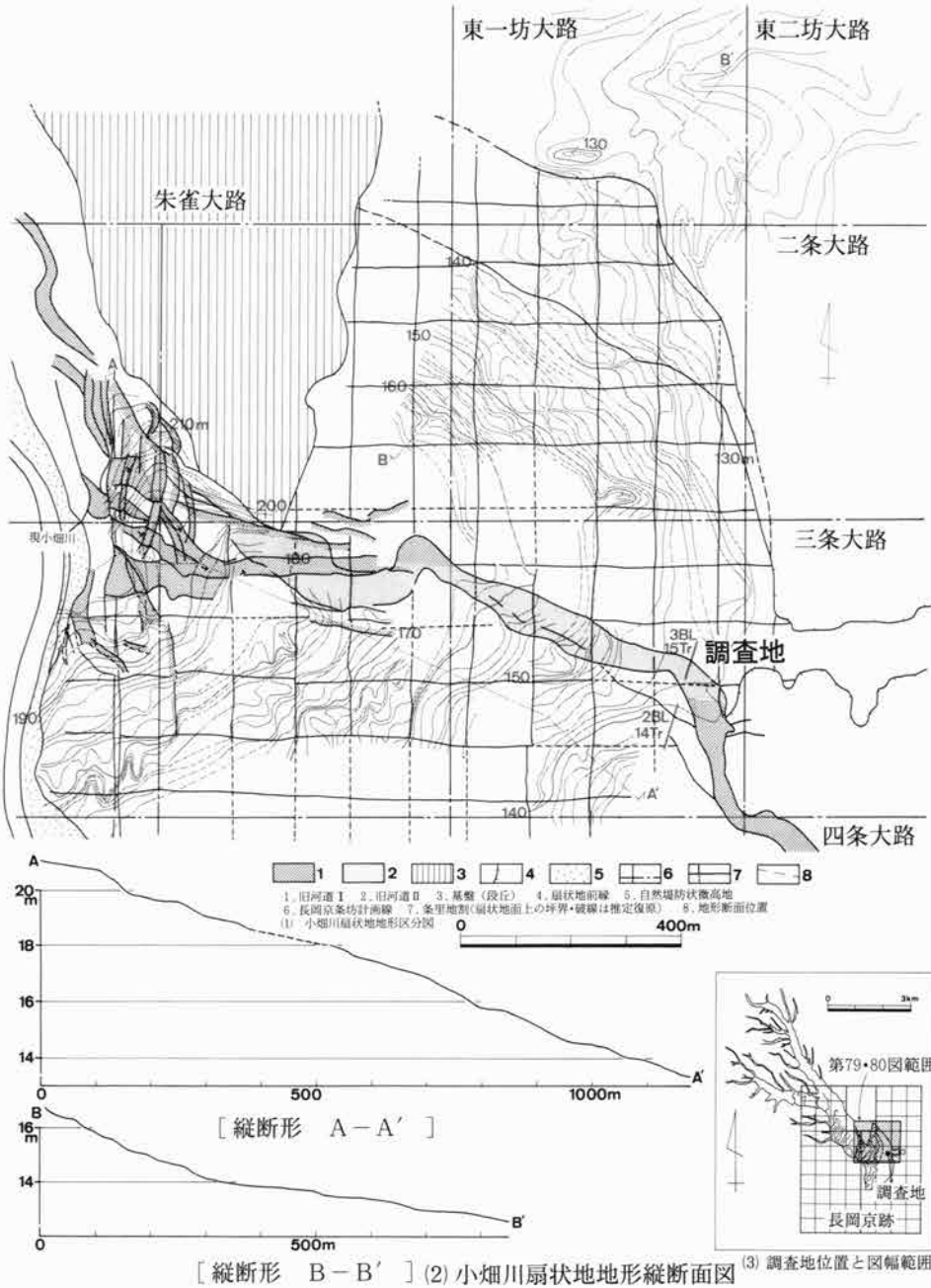
S R 24215-2：S R 24215-1と不整合の関係にある扇状地性堆積物である。トレンチ北端の堆積面において井戸、溝などの遺構群(時期不明)が構築される。層厚は1.1～1.3mである。中に層厚0.3m程度の暗灰色シルトをレンズ～指交状に挟む。砂礫は中礫主体、極粗砂を基質とする。一部で逆級化が認められる(S 3区)。砂礫層中の葉理は、主に北落ち(14° N前後、S 4区)に発達するが、S 3区には葉理の形態から判断して、中洲状の高まりがみられる。南落ちラミナの認められる地点1でのインプリケーションは、南東方位(E 60.3° S)に発達する。これを除いて、S R 24215-2の堆積方位は、地点b・d・g・hにおける葉理面の走向から、概ね北東方位と判断される。下底面は凹凸が著しく、その形状から下方への掘り込みの状況を把握し得る。掘り込みの向きは、北東方位(N 87° E、地点C)にあり、砂礫層の堆積方位とはほぼ一致している。

以上述べたように、3BL15trでは、S R 24215-1・2ともに南西から北東向きへの運搬堆積が考えられる。砂礫堆積の下限年代は10世紀末頃と推定される。

2BL14tr トレンチ中央において細粒土からなる基盤の高まりがみられるが、地層断面では、トレンチ南北において扇状地性堆積物(河道堆積物)が基盤土上に侵食・氾濫を交互に繰り返す様子が観察され、複雑な層相を呈する。

S R 24202：トレンチ北半の河道堆積物は、2層に区分し得る(S R 24202-1・2)。S R 24202-1は地層断面北端(S 9区)では、やや葉理構造をなす細～極粗砂で構成されるが、南

方に向けて細粒化し、シルト層に漸移する。S10・11区では、層厚0.25m程度の暗灰色系有機質シルト層をレンズ状に挟在する。平面的には、北西-南東に延びる黒色帯となるが、SR24202-1上面からは明瞭な掘り込みを確認し得ず、SR24202-1と堆積同時の関係にある可能性が高い。有機質シルト層中からは10世紀後半代の遺物(黒色土器・碗など)が出土



第80図 小畑川扇状地地形学図

した。S R24202-1は、S11区以南において、後述するS R24201堆積層の側方への堆積によってオーバーラップされている。S R24202-2は、トレンチ中央の基盤土を直接掘り込む河道堆積物である。S9区では細～中礫で構成され、葉理構造を発達させるが、南北にむけて細粒化し、シルト層に漸移する。土砂の運搬堆積方位は、地点7においてE36.5°Sである。また、葉理面の傾きは11°E程度である。S R24202-1同様、S13区まで分布している。S11区では基盤土を側方に削り込んでいる。侵食の向きは、E45°Sと南東方位であり、基盤土の侵食面は急角度をなす(地点i)。基盤土に被覆する部分では、下方への侵食が伴い、下底面は波状を呈する。S R24202-2からは、9世紀末頃を下限年代とする土器が出土した。

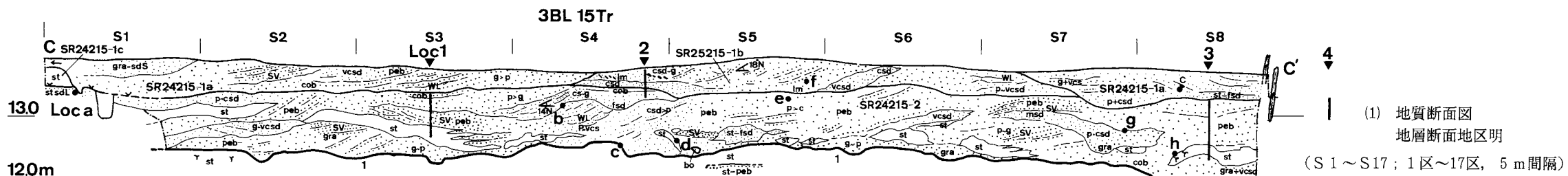
S R24201：S R24201堆積層はトレンチ南半に分布する砂礫層で、大きく上下2層に区分しえる(S R24201-1・2)。上層のS R24201-1は、細礫を主体として葉理を著しく発達させている。地層断面では北方への細粒化が認められ、S11～13区において下方侵食を伴いながら先述のS R24202-1を被覆する。葉理の傾きは、断面において15°Nである。S13区において基盤土を掘り込む肩が確認された。掘り込み方位(肩の伸び)はE3°S～E18°Sと北西～南東方位である(地点k・l)。同地点での葉理面の走向・傾斜はE13°S・21°E(地点q)を測り、掘り込み方位と有意な相関を示す。トレンチ南端・S16区では、層理面の走向は東～西方位となる(地点o・p)。S R24201-3からは、10世紀末～11世紀初頭を下限年代とする土器が出土した。S R24201-2はS R24201-1に比して全体に細粒で、シープ構造(基質の脱落構造)、インプリケーションが認められる。地点8におけるインプリケーションの測定値はE13°Sを示し、上層S R24201-1の堆積方位に整合している。

基盤(細粒土)：トレンチ中央において河道堆積物S R24202層下底面をなす基盤土は、暗灰～暗青灰色シルト～砂礫層からなる。基盤土上位は層相からみて、自然堤防を発達させるような氾濫堆積物に相当するものと判断される。下部には、北西～南東方位(地点j)に延びる砂礫堆(中洲)がみられる。シルト質砂層上面では、長岡京期頃の所産と推定される掘立柱建物遺構が確認されている。

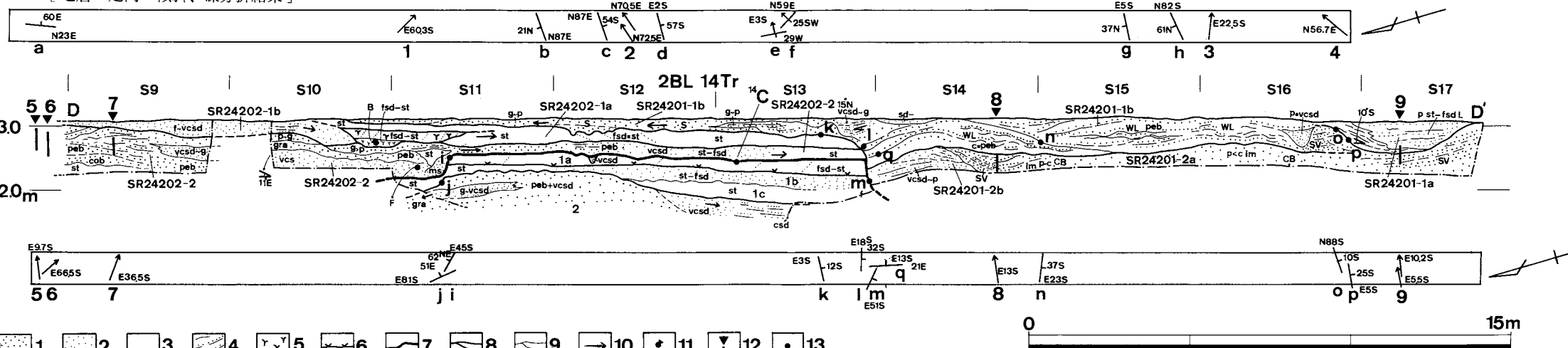
2BL14trでの層序と、堆積物の年代については、8世紀末頃まで安定した地形条件下にあった基盤土堆積面に対し、トレンチ北部には2回の扇状地性砂礫層の掘り込みと堆積(9世紀末、10世紀後半代)が存在し、トレンチ南部においては基盤土及びトレンチ北半を北方にむけて侵食・被覆する砂礫層の堆積(10世紀末～11世紀初頭)があったと推定しうる。

4. 小畑川扇状地の微地形学的特性

第79図は、小畑川扇状地の中央～北半部の微起伏(0.1m等高線)に現況地形図、長岡京条



[地層の走向・傾斜、礫分析結果]

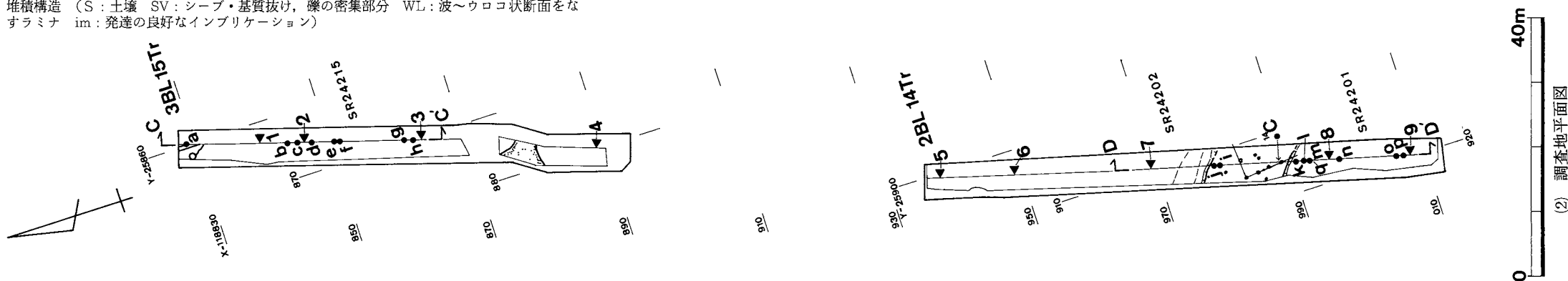


[凡例]

1. 砂礫 2. 砂 3. シルト 4. ラミナ 5. 有機質 6. 遺構検出面
7. 河道の掘り込み下底面 8. 単層(面) 9. 単層内葉理(面)
10. 単層内において再粒化するみかけの方向 11. 遺物 (C: 須恵器 B: 黒色土器)
12. 試料位置・自然遺物(走向傾斜等測定位置: Loc.a~g, F: 骨片 ¹⁴C: ¹⁴C年代測定試料)
13. 試料位置(運搬堆積方位の分析試料位置及び範囲: Loc.1~9)

[図中文字記号など]

礫 (bo: 巨礫 cob, c: 大礫 peb, p: 中礫 gra, g: 細礫)
 砂 (vcsc: 極粗砂 csd: 粗砂 msd: 中砂 fsd: 細砂 vbsd: 極細砂)
 細粒物質 (st: シルト cb: シルト・粘土塊)
 粒度組成 (□-: ~質 □.: ~混じり +□: 基質~)
 堆積構造 (S: 土壌 SV: シーブ・基質抜け、礫の密集部分 WL: 波~ウロコ状断面をなすラミナ im: 発達の良いインプリケーション)

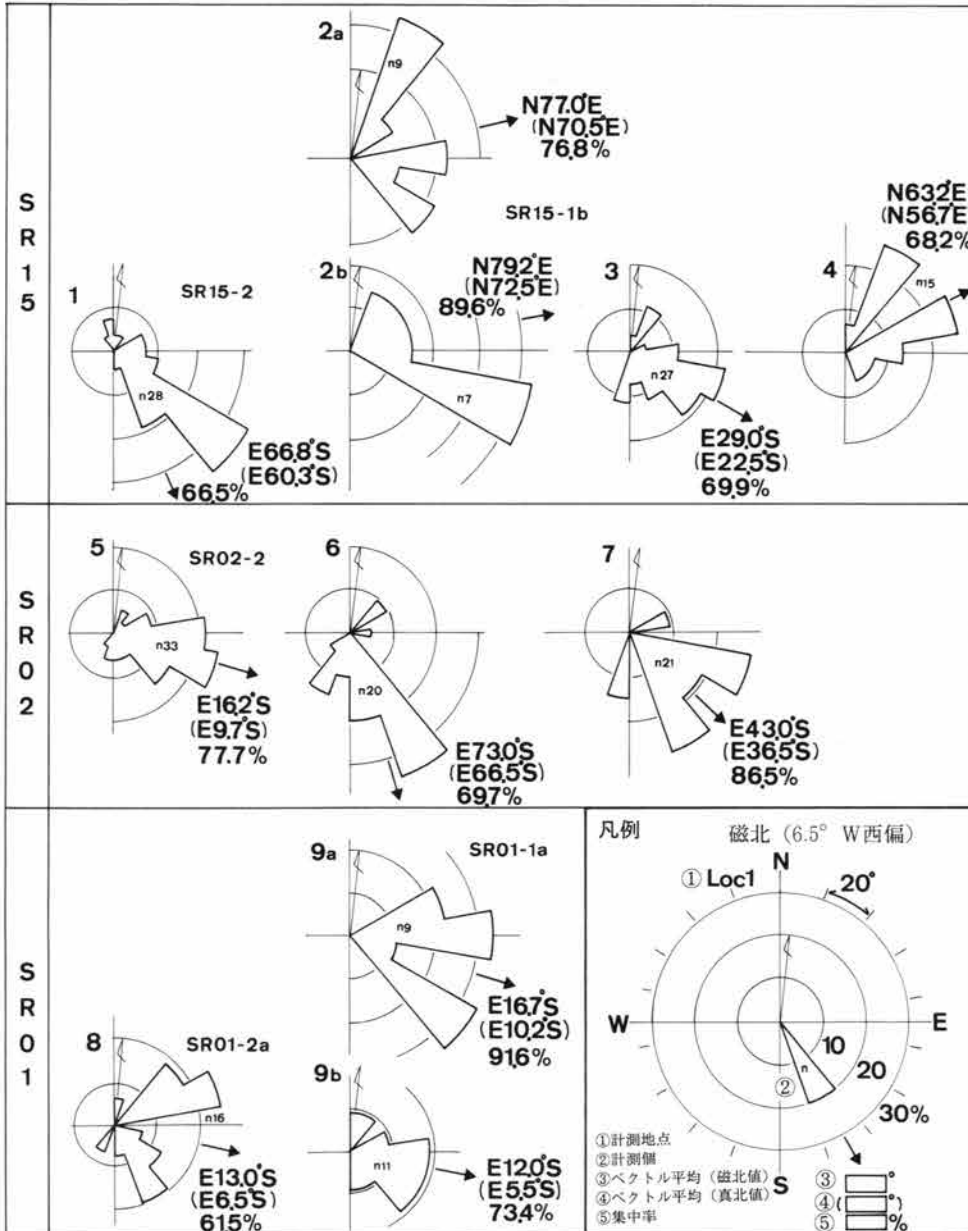


第81図 長岡京跡左京第242次3BL 第15トレンチ、2BL 第14トレンチ地質断面図

坊復原図を重ねあわせたものである。また、今回検討の対象とした調査地のトレンチ(3BL15tr、2BL14tr)の位置を示す。

第80図には、扇状地微起伏等高線図に旧河道等の微地形及び条坊計画線、条里型地割(坪界線)を重ねた。

旧河道微地形としては、旧河道 I : 条里型地割畦畔の乱れの広がりから河道と判断され



1～9 : 第81図Loc.NOに対応する

第82図 礫の運搬堆積方位ダイアグラム

るもの、及び旧河道Ⅱ：航空写真^(註5)において暗色系をなし、一部条里型地割を乱して旧河道Ⅰに連続する河道痕跡の2種を示した。

等高線の配列パターンをみると、標高20.0m付近までは凹面を呈し、谷底低地の谷口部に相当するが、以下、凸形の等高線に転ずることから、標高19.0～20.0m付近が扇状地扇頂部であることがわかる(地点E)。本地点周辺には、条里型地割が分布することなく、旧河道Ⅰが網目状のパターンで認められる。扇央(地点F)を経て、左京第242次調査地北寄り(地点G)にかけては、扇状地の起伏が沖積低地に向けて舌状～堤防状に張り出す状況がみられる。旧河道Ⅱは扇央部を東南東方位に延び、第242次調査地を横断して調査地の南東に位置する旧河道Ⅰに接続する。また、調査地の東方には、京都市伏見区・菱川集落を載せる微高地が東西に長く延びる。第80図-(2)に示す地形縦断面では、A-A'断面が、上方にやや凸な斜面、B-B'断面が凹形の斜面をなす。斜面勾配は、A-A'断面扇頂～扇央部：5.4%、同扇端部6.5%、B-B'断面扇端部：7.8%、同扇状地前縁部：2.8%である。

次に、第242次調査地で観察された層相・微地形と、小畑川扇状地に分布する微地形の対応関係を検討する。3BL15trではS R 24215-1・2の2層の扇状地性堆積物(河道堆積物)が確認され、その年代は10世紀末と推定できた。トレンチ北半部での堆積物の運搬堆積方位は、概ね南南西から東北東方位と推定された。堆積物の基盤への掘り込み方位はN87°E、観察地点中央での土砂の運搬堆積方位はN70°E程度であった。トレンチ北半における土砂の堆積方位の延長には、舌状～堤防状微高地が位置しており、微高地構成層にS R 24215を対比し得るものと考えられる。一方、2BL14trでは、トレンチ北半において、8世紀末頃(長岡京期)の遺構を載せる細粒土層(基盤・細粒土)の上面を掘り込み、さらにオーバーラップする扇状地性堆積物(S R 24202)が確認された。トレンチ南半では、基盤及びトレンチ北半砂礫層を被覆する扇状地性堆積物(S R 24201)が認められた。S R 24202・01の形成年代は、それぞれ9世紀末及び10世紀後半代、10世紀末～11世紀初頭と推定される。S R 24202の運搬堆積方位は、北西-南東方位、S R 24201が概ね西北西-東南東方位と見積られる。2BL14tr東方には、南東向きに旧河道Ⅰが位置しており、トレンチ検出の河道堆積物S R 24202・01がこれに対応するものと推定できる。

5. 小 結

今回、小畑川扇状地・扇端部における長岡京跡左京第242次調査に伴い、地層断面を延長160mにわたって観察できた。層相の記載・堆積物の定量的分析、扇状地の微地形との対比等によって以下の事柄が明らかとなった。

(1) トレンチで観察された砂礫層は層相から判断して、扇状地を構成する堆積物(河道堆

積物)と判断される。

(2) 3BL15trでは、層厚1.4～1.7mの扇状地性堆積物(S R 24215)が確認された。層相・遺構の構築状況から、堆積物は上下2層に区分された。上層S R 24215-1は本地点における河床堆積物を構成する。S R 24215は10世紀末において東北東に向けての運搬堆積が考えられ、扇端微高地(地点G・菱川集落)の形成に関わる堆積層とみられる。

(3) 2BL14trでは、8世紀末の遺構面を侵食・被覆する扇状地性堆積物(S R 24202・01)が確認された。トレンチ北半では、南東方位への扇状地の発達(S R 24202・河道堆積)を9世紀末と10世紀後半代の2時期にわたって認めた。トレンチ南半では、10世紀末～11世紀初頭における東南東方位への河道の形成(S R 24201)があった。

(4) 小畑川扇状地面の微起伏等の検討から、扇頂～扇端にかけての河道痕跡(旧河道I・II)を区分した。S R 24202・01の堆積物は、これらの河道を構成する堆積物に相当する可能性が高い。河道形成年代(扇状地の発達年代)は、今回の調査地点における考古学年代から判断して、9世紀末、10世紀後半代、10世紀末～11世紀初頭の各時期を与えることができる。そのうち、10世紀末の扇状地の発達は、より広範囲に及ぶものである。

(5) 小畑川扇状地の現在の河道は、扇状地中央部をそれ、段丘縁を南流している。今後、考古学調査の事例にもとづく扇状地の離水時期(河道の固定時期)の検討が必要である。そのためには、河道中・上流域に分布する段丘面と下流域扇状地面の対比などの地形学的検討がなされなければならない。

[謝辞] 本稿をまとめるにあたり、戸原和人・黒坪一樹・竹井治雄・中川和哉の各氏から種々の御教示を得ました。記して感謝申し上げます。

(なかつか・りょう=財団法人向日市埋蔵文化財センター調査係技師)

注1 小畑川流域に対しては、便宜上、本流に善峰川が合流する地点から上流で樹枝状に開析谷が顕著に発達する地域を上流域、合流点から下流の谷底低地の範囲を中流域、扇状地を発達させる地域を下流域という呼称を与える。また、集水面積の算出にあたっては、善峰川水系及び犬川水系を小畑川水系に含めた。

注2 国土地理院(1966・1977)の分類に従う。

注3 今回の調査地のように、狭長なトレンチ掘削において、河川堆積物下底面(侵食面)の形成方位を推定するために有効な方法と考える。

注4 微起伏等高線図作成にあたっては、500分の1現況地形図に記載された地盤高をもとに、比例配分によって描出した。

注5 米軍撮影の航空写真(約1万分の1縮尺)を用いた。

注6 現在、文献(日本紀略)の災害記録(風水害、旱ばつなど)の統計的分析から得られた地形条件の

安定性の推移と、8世紀以降の洪水堆積物の堆積年代の対比を試みている(中塚, 1991b)。
 災害記録によると、長岡京期以降11世紀前半までの期間において、地形条件の不安定化期は5
 期(770~789・860~869・890~899・940~949・980~989 A.D.)認められる。

注7 扇状地面の離水(沖積段丘)を間接的に示すものとして、扇状地面に分布する水田の畝地化が
 考えられる。小畑川扇状地では、13世紀後半~14世紀の畝地用畝溝群の検出例が増えつつある。

[文献]

国土地理院(1966): 1:25,000土地条件図, 京都南部。

国土地理院(1977): 1:25,000土地条件図, 京都。

碎屑性堆積物研究会編(1983)堆積物の研究法-礫岩・砂岩・泥岩-。地学団体研究会。

中塚 良(1990): 長岡京跡左京第206次(7ANFDE-4地区)~左京四条一坊一町~発掘調査概要。向日
 市埋蔵文化財調査報告書, 第30集。財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会。

中塚 良(1991a): 山城盆地中央部小泉川沖積低地の微地形分析-遺跡立地からみた地形形成過程
 と構造運動。東北地理, 43-1, 1-17。

中塚 良(1991b): 自然災害史料からみた8~11世紀前半の地形条件の安定性-『日本紀略』・京
 都盆地およびその周辺を例に一。日本地理学会予稿集, 39, 74~75頁, 日本地理学会。

付表2 碎屑性堆積物の粒度階区分表

碎屑性堆積物の粒度階区分(Wentworth, 1992; Pettijohn, 1975) 訳語は庄司(1971)にもとづく。
 集合物の名称は未固結堆積物と固結堆積物の両者が示されている。

大 き き	角のとれた (rounded~subangular) 岩片				角の多い岩片	
	岩 片	集 合 物		岩 片	集 合 物	
256--8 mm φ	巨 礫 bouldr	巨 礫 礫 礫 巨 礫 礫 礫 礫	boulder gravel boulder conglomerate	礫 gravel	ブロック block	栗岩 rubble
	大 礫 cobble	大 礫 礫 礫 大 礫 礫 礫 礫	cobble gravel cobble conglomerate			
64--6	中 礫 pebble	中 礫 礫 礫 中 礫 礫 礫 礫	pebble gravel pebble conglomerate	礫岩 conglom- erate		角礫岩 breccia
		細 礫 granule	細 礫 礫 礫 細 礫 礫 礫 礫			
2--1	極粗粒砂 very coarse sand	極粗粒砂 極粗粒砂岩	very coarse sand very coarse sandstone			
1--0	粗 粒 砂 coarse sand	粗 粒 砂 粗 粒 砂 岩	coarse sand coarse sandstone			
1/2--1	中 粒 砂 medium sand	中 粒 砂 中 粒 砂 岩	medium sand medium sandstone	砂 sand		グリット grit
1/4--2	細 粒 砂 fine sand	細 粒 砂 細 粒 砂 岩	fine sand fine sandstone			
1/8--3	微 粒 砂 very fine sand	微 粒 砂 微 粒 砂 岩	very fine sand very fine sandstone	砂岩 sandstone		
1/16--4	粗粒シルト coarse silt	粗粒シルト 粗粒シルト岩	coarse silt coarse siltstone			
1/32--5	中粒シルト medium silt	中粒シルト 中粒シルト岩	medium silt medium siltstone	シルト silt	泥 mud	
1/64--6	細粒シルト fine silt	細粒シルト 細粒シルト岩	fine silt very fine siltstone	シルト岩 siltstone		
1/128--7	微粒シルト very fine silt	微粒シルト 微粒シルト岩	very fine silt very fine siltstone		泥岩 mud- stone	
1/256--8	粘 土 clay	粘 土 粘 土 岩	clay claystone			

4. 堂ノ上遺跡・恭仁京推定地発掘調査概要

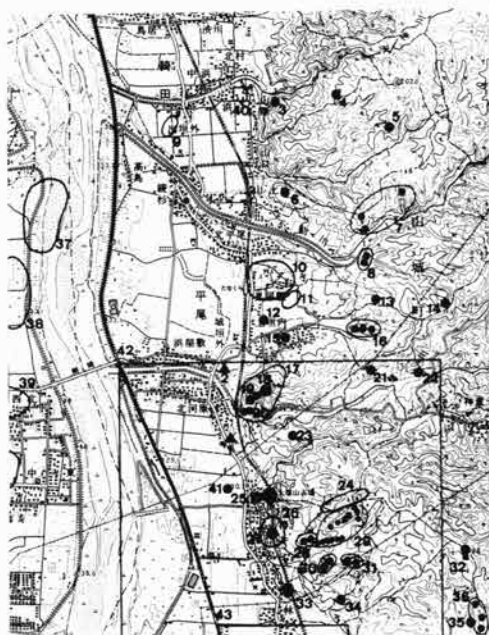
1. はじめに

この調査は、京都府が計画した一般地方道上狛・城陽線の建設に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。路線予定地内の用地買収の完了した、山城町北河原及び平尾地区における発掘調査について、京都府土木建築部木津土木事務所と京都府教育庁指導部文化財保護課、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの協議により、建設工事に先立ち、当センターが路線内に所在する堂ノ上遺跡、恭仁京推定地の発掘調査を実施した。期間は7月19日～11月26日までであり、堂ノ上遺跡は約600㎡、恭仁京跡は約170㎡の調査面積である。

なお、発掘調査及び遺物整理作業にかかる費用は、京都府が負担した。調査及び整理作業に当たり、山城町教育委員会、京都府立山城郷土資料館をはじめ、多くの方々の御協力と御助言を得た。また、学生諸氏にも協力いただいた。記して感謝したい^(注1)。

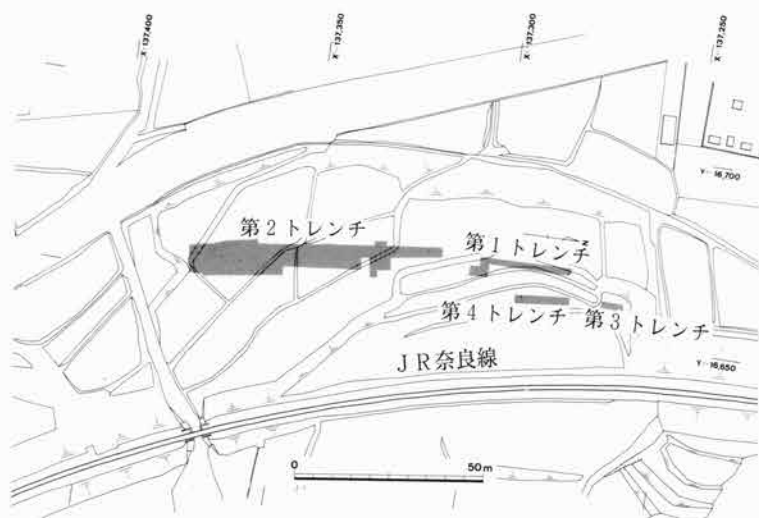
2. 位置と環境

堂ノ上遺跡は、京都府の南端の山城町にあり、地籍上は相楽郡山城町大字北河原小字堂ノ上に所在する。恭仁京推定地は、同山城町大字平尾小字東黒部に所在する(第83図)。ともに、木津川の形成した河岸段



第83図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図(1/50,000)

- | | | |
|-------------|--------------|------------|
| 1.堂ノ上遺跡 | 2.恭仁京跡推定地 | 3.山際古墳 |
| 4.車谷南古墳 | 5.淀谷古墳 | 6.山ノ上古墳 |
| 7.不動1～3号墳 | 8.笛吹1～2号墳 | 9.西ノ口遺跡 |
| 10.涌出宮遺跡 | 11.円夕遺跡 | 12.三所塚古墳 |
| 13.墓谷古墳 | 14.相応谷古墳 | 15.越中谷古墳 |
| 16.南萩谷1～2号墳 | 17.今城跡 | 18.平尾城山古墳 |
| 19.稲荷山古墳 | 20.北谷1～2号横穴 | 21.萩谷古墳 |
| 22.神童子古墳 | 23.西ヶ峰古墳 | 24.ムナガイ遺跡 |
| 25.椿井大塚山古墳 | 26.椿井城跡 | 27.天上山古墳 |
| 28.松尾1～2号墳 | 29.宮城谷1～13号墳 | |
| 30.切ヶ敷1～2号墳 | 31.高築山1～2号墳 | |
| 32.檜谷古墳 | 33.御霊山古墳 | 34.天敷堂古墳 |
| 35.蓮池古墓 | 36.蓮池1～3号墳 | 37.百久保干先遺跡 |
| 38.棕ノ木遺跡 | 39.西垣内遺跡 | 40.蟹満寺 |
| 41.阪ノ下遺跡 | 42.恭仁京右京推定地 | |
| 43.山城国府推定地 | | |



第84図 トレンチ配置図(1)

丘と山城町の東側に広がる山塊の裾部分の傾斜変換地点上に位置し、段丘下の西方には木津川が形成した氾濫原が広がる。

調査地北方には弥生時代中期の拠点集落として知られる涌出宮遺跡が指呼

の距離にあり、北白川下層Ⅱ・Ⅲ式の縄文時代前期の土器が出土している。縄文時代後期から終末にいたる遺跡は山城町内では現在検出されていないが、山城町に北接する井手町鳥休遺跡では縄文時代中期の船元式土器が採集されている。また、城陽市長池森山遺跡などでは縄文後期の住居跡などの遺構も検出されており、今後の調査によっては山城町内でも縄文時代の中・後期の遺跡が見つかる可能性は高い。

弥生時代の遺跡では先述の涌出宮遺跡があり、畿内第Ⅲ様式の土器を中心としている。弥生時代後期になると、明確な遺跡の検出例はないが、山城町の各地で後期に属する土器が確認されている。特に、調査地の堂ノ上遺跡をはさんで南北に位置する椿井大塚山古墳や、平尾城山古墳の調査に際しても、墳丘築造以前に弥生時代後期の土器片が確認されており、木津川東岸の河岸段丘面には大規模な後期の集落の存在が考えられるであろう。

古墳時代の遺跡としては、椿井大塚山古墳、平尾城山古墳、北河原稲荷山古墳など著名な前期古墳によって南山城地域の古墳時代前期の首長墓の系列を追うことができる。また、古墳時代後期には多くの群集墳が点在している。7世紀初頭には上狛の地に高麗寺が創建され、飛鳥寺創建時軒丸瓦が出土しており、平安時代まで存続した。

3. 堂ノ上遺跡調査概要

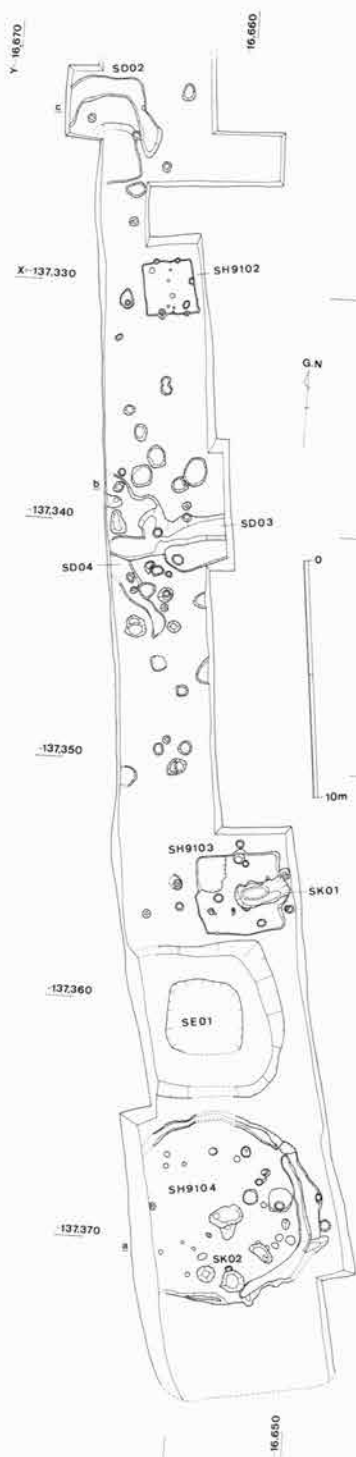
今回の調査は、京都府南部を北流する木津川東岸にあたる山城町上狛から城陽市に南北に走る府道建設に伴うものであり、『京都府遺跡地図』^(注2)には掲載されていない地点である。このため、現地調査は幅約2mの細長いトレンチを設定し、遺構の存在を確認した後に調

査区を拡張する方法をとった。もっとも北側に設定した第3・4トレンチでは遺構は存在せず、花崗岩のバイラン状の地山が表土直下で見つかり、近代に削平されている。遺物も認められなかった。第1トレンチと第2トレンチの北側でもピット等が検出されたのみであり、遺物の包含層もほとんどみられなかった。遺構がおもに遺存した地区は調査地の南側第2トレンチである(第85図)。

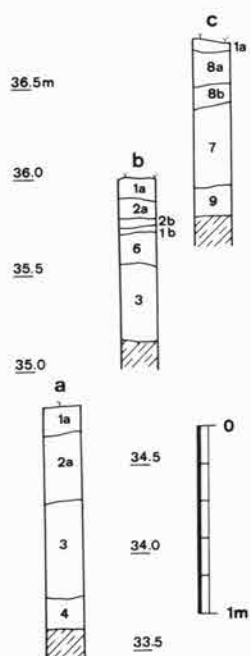
① 検出遺構

縄文時代の遺構としてSK01がある(第88図)。SH9103住居跡に重複する。不定形で2段掘りの土坑で、東西幅2.2m・南北幅約1mである。縄文時代晩期の土器が出土した(第91図)。

弥生時代の遺構として、第2トレンチ北側のSD02及びSH9104がある。SD02は「コ」字状に屈曲する方形に近い溝状遺構である。検出時の平面プランがいびつであること、想定される床面積が少ないことから削平された住居跡とは考えにくい。幅0.8~1.6mほどで、深さ約20cmを測る。弥生時代後期の土器が出土した(第92図)。SH9104は第2トレンチ南端で検出された。直径約8mの円形住居跡である。約40㎡の床面積が推定できる。東側に幅40cmほどの周溝がめぐっ

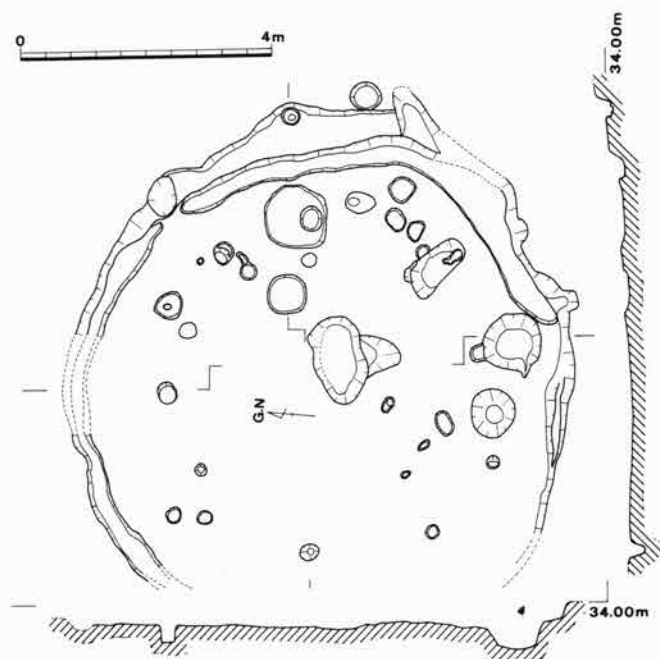


第85図 第2トレンチ遺構配置図

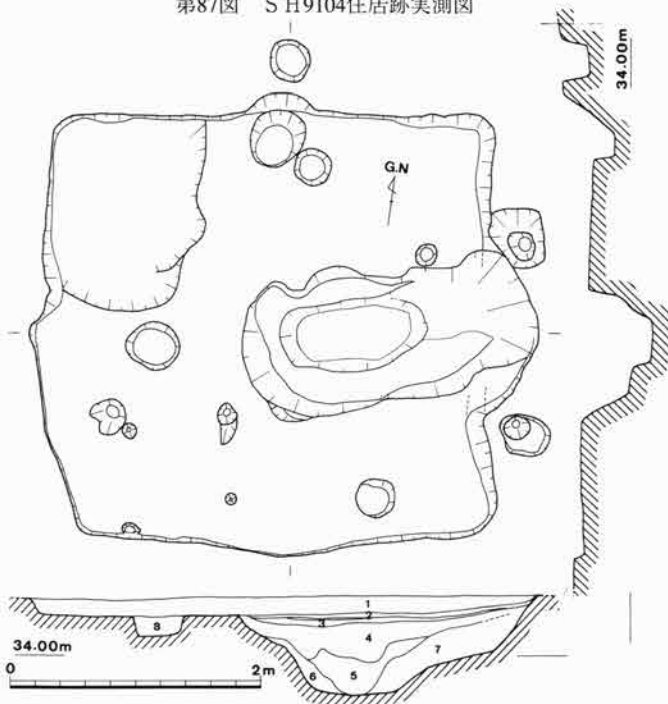


第86図 土層柱状図

- 1a.表土(灰黒色砂土)
- 1b.灰黄色砂土
- 2a.耕作土(橙褐色粘質土)
- 3.灰黒色褐砂礫土
- 4.黒褐色砂質土
(SH9104埋土)
- 6.灰黄褐色粘質土
- 7.灰褐色粘質土
- 8a.灰橙色粘質土
- 8b.灰橙褐色粘質土
- 9.青灰色粘質土
(SD02埋土)



第87図 S H9104住居跡実測図



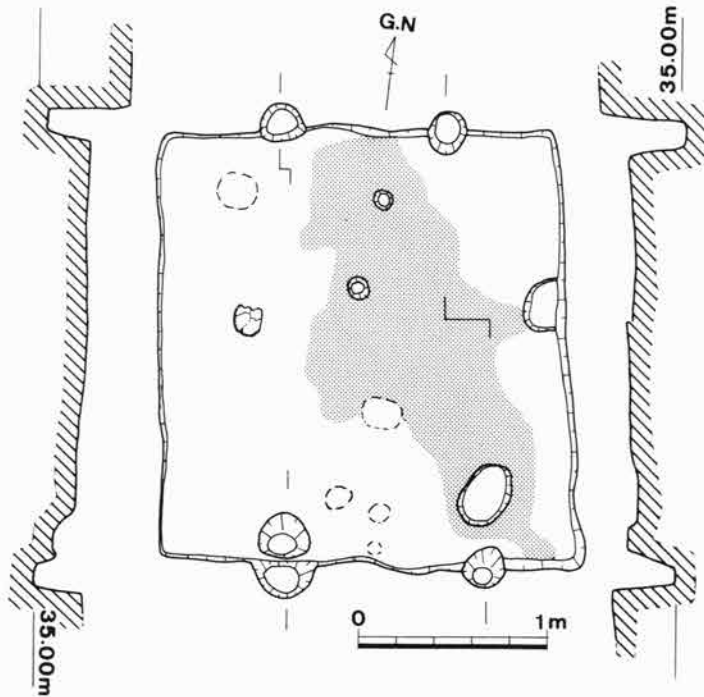
第88図 住居跡 S H9103・土坑 S K01実測図

- 1.暗褐色砂質土 2.褐色砂質土 3.橙褐色砂質土(灰色粘質土層を含む)
 4.暗褐色砂質土 5.黒褐色粘質土 6.黄褐色砂質土 7.黄褐色砂礫土
 8.黒褐色粘質土

ており、南側に行くに従って浅くなる。残存壁高は、南側で40cmになる部分がある。住居跡埋土(第86図3・4層)。弥生時代後期の土器片や石鏃等が検出された(第93図)。

古墳時代以降の遺構は、住居跡のほかに、S H9102及びS H9103がある(第87・88図)。S H9102は第2トレンチのS D02の南側で検出された。小規模な方形の掘形をもつ。南北2.3m・東西2.2mで南北両辺の掘形に4つの柱穴を穿つ特異なものである。床面には炭化木細片が堆積しており、焼失したものと思われる。S H9103は南北3.6m・東西3.4mほどの方形住居跡である。削平を受けており、検出面から床面まで10cmに満たなかった。床面からは遺物が出土せず、明確な時期は不明である。また、S H9103の南側から2段に

掘り込まれた井戸が検出された(第90図)。1段目は7m四方で、2段目は約3m四方である。井戸枠(井戸側)は地表下約3mのところから検出された。縦板をめぐらし四隅にはほぞ穴を備えた柱を立て、横棧木で保持する。井戸枠は約2.5m遺存していた。南西隅の支柱のみが相対的に20~30cmほ



第89図 S H9102住居跡実測図
(スクリーントーンは炭化木細片の遺存部分)

ど落ち込んだ形で検出され、南側は横棧木が折れて縦板組が内側に倒れかかるようにして検出された。井戸枠木材は、手斧による削痕が認められる。支柱には井戸枠棧木をはめ込むもの以外のほぞ穴があり、転用材であると思われる(第90図1・2)。平安京右京三条三坊で検出されたS E06^(注3)など同様の構造を持つもので、宇野隆夫氏によるとB IV類縦板組隅柱横棧どめ井戸とされるものである^(注4)。

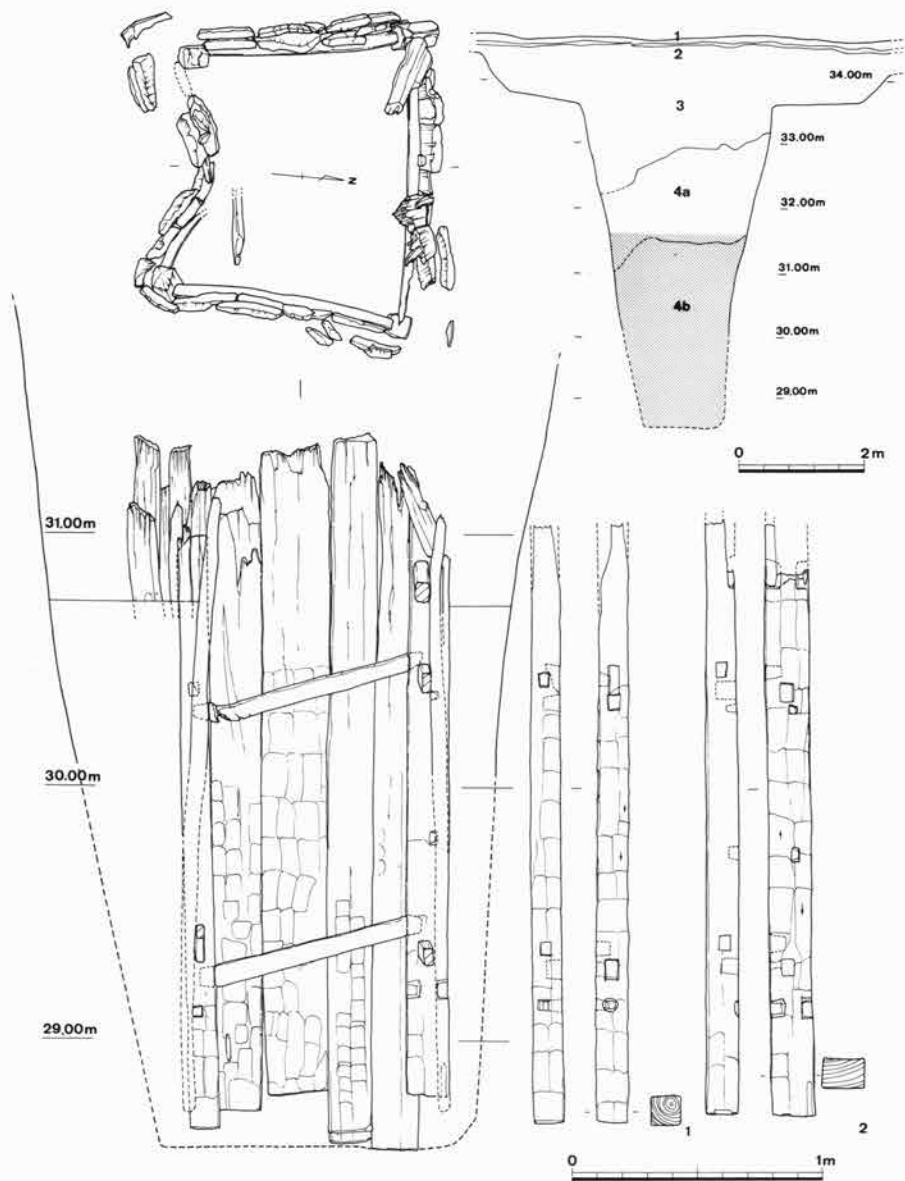
②出土遺物

堂の上遺跡発掘調査で出土した遺物は、整理箱にして約30箱ある。このうち20箱ほどが弥生時代後期の土器及び細片であり、あとは包含層から出土した奈良時代~平安時代、近世にいたる土器細片である。サヌカイトの剥片等も遺物包含層(第86図3・6・7層)から出土した。また、龍泉窯系青磁碗の破片や江戸時代後期の陶器片なども出土している。

縄文土器(第91図1~10) 縄文土器はS K01土坑から出土した(1・2・10)以外に、S H9104埋土や包含層から出土している。1は、粗製の深鉢である。口縁部径約40cm程になる。外面は横方向のヘラ削りを行う。S K01第4層下面から出土。2~8は、晩期突帯文土器の口縁部破片である。口縁端部に突帯をめぐらすものではなく、いずれもやや下ったところにあるA類である^(注5)。2・6は刻み目が「D」字、ほかは「O」字になる。また、2・3は口縁端

部に刻み目がある。7・8は刻み目がなく、7は擬口縁状に突帯が施される。9は、屈曲部にわずかな刻み目が認められる。10は、S K01の最下面から出土した浅鉢である。表裏に弧状の文様が刻まれる。

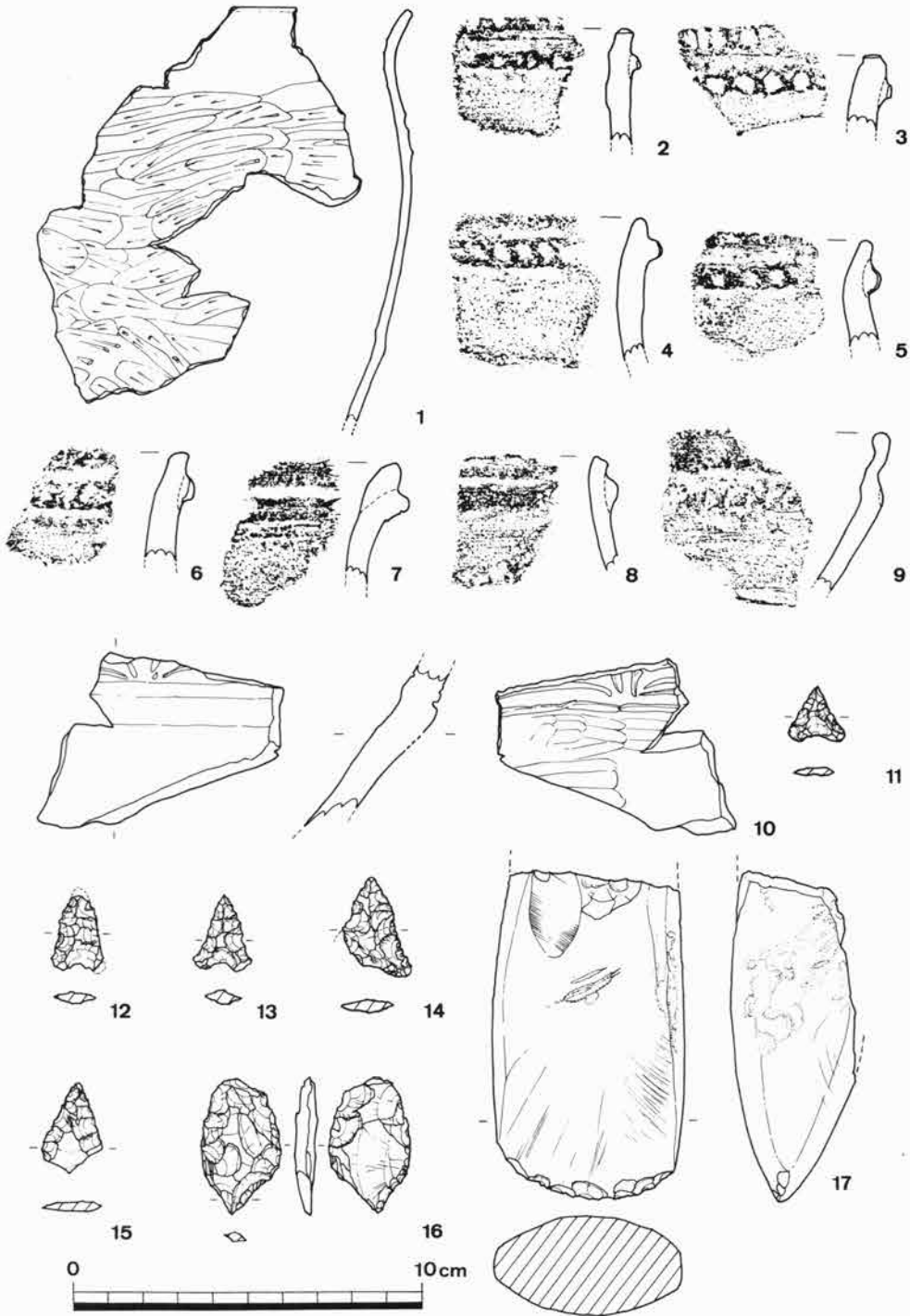
石 器(第93図11~14) 安山岩の剥片が包含層から多量に出土し、その多くは縄文時代



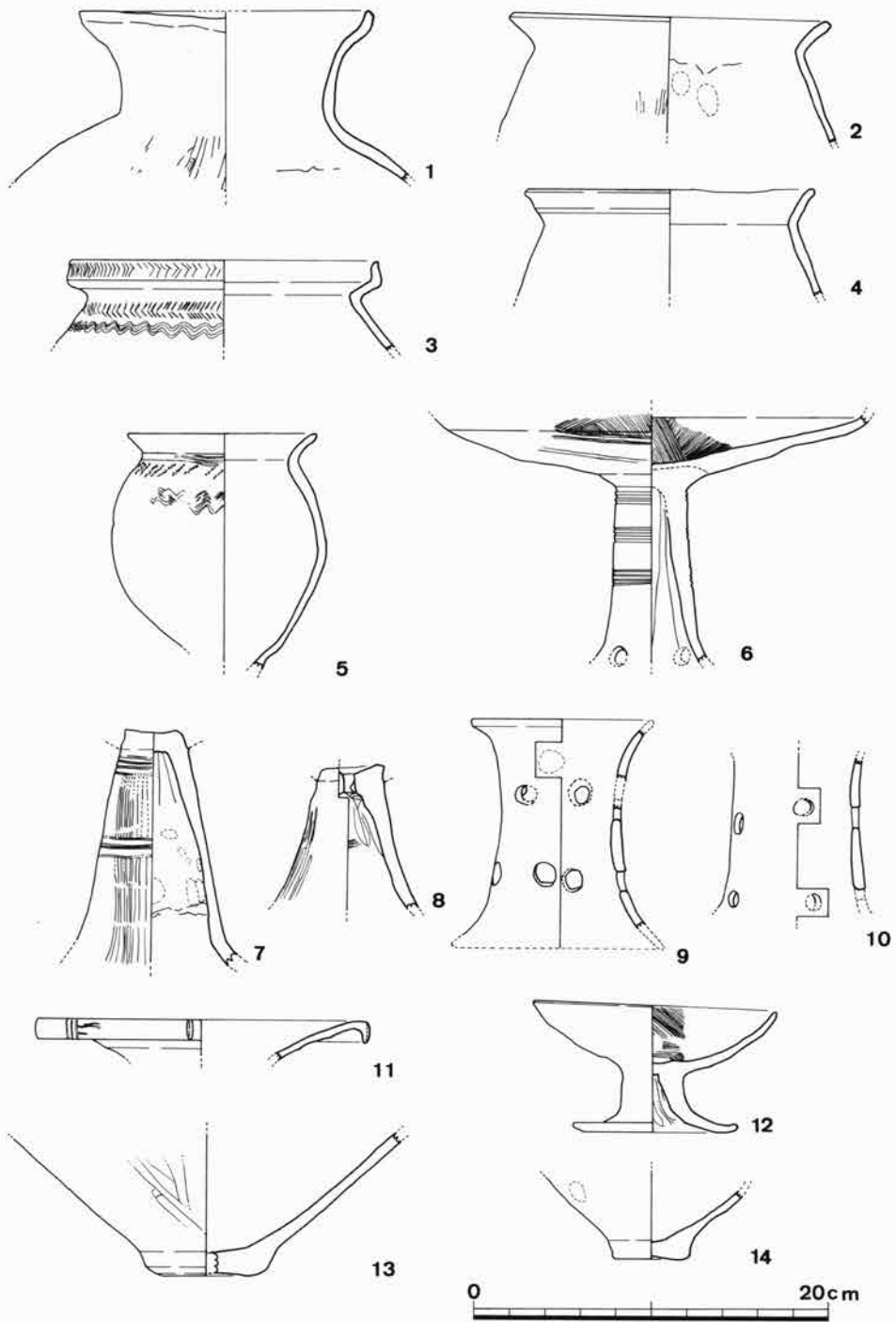
第90図 井戸及び井戸枠実測図

(スクリーントーンは左下井戸枠断面図。1は南西隅支柱、2は北西隅支柱。)

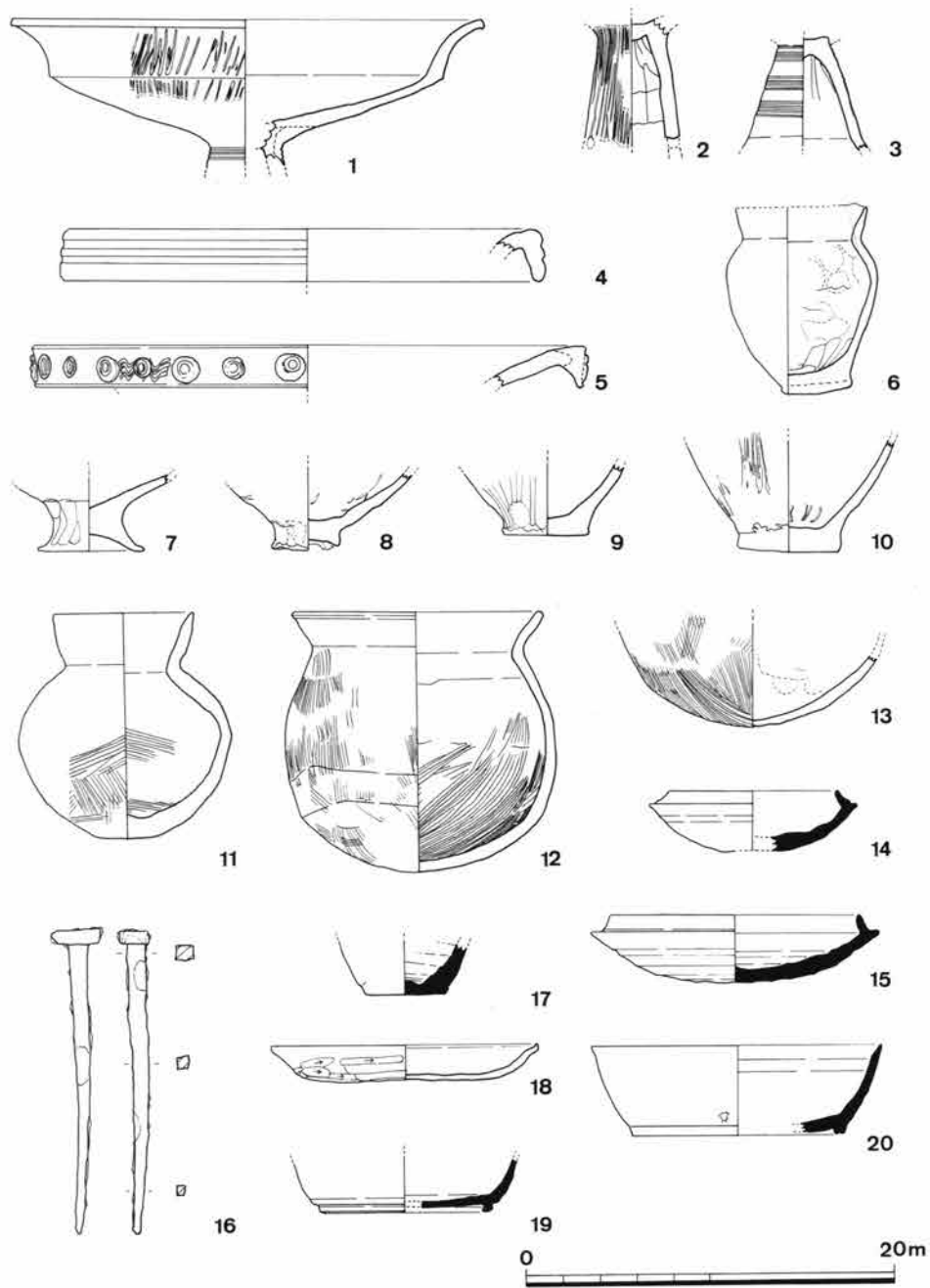
1.表土 2.耕作土 3.黒灰褐色砂礫土 4a.青灰褐色粘質土 4b.青灰色粘土



第91図 遺物実測図(1)



第92図 遺物実測図(2)



第93図 遺物実測図(3)

のものと考えられるが、一部に弥生時代の製品も含まれる。11～14は、凹基のもので主要剥離面をほとんど残さない。縄文時代のものと考えられる。S H9104第4層から出土している。15は、S H9104内S K02から出土している。有茎のものであろう。16は、包含層出土の石錐である。17も包含層出土の蛤刃石斧である。基部を折損している。

弥生土器(第92図、第93図1～10) 第92図は、S D02出土の弥生土器である。すべてまとまって検出される。1は広口の壺、2～4は甕の口縁部である。3は、近江系の甕形土器である。口縁端部拡張面と頸部には羽状文、その下には幅の均一な波状文が施される。5は、小形の甕形土器である。胴部上半には木口状の部分による列点文と波状文が施される。6～8は、高杯である。脚部に凹線を施すものがある(6・7)。9・10は、小形の器台である。9は上段6つ、下段5つの円孔を穿つものである。11は、器台の口縁部と考えられる。12は、低脚の杯である。脚部内面に絞り目が認められる。このほか低部が数点出土している。

第93図1～10は、S H9104住居跡出土の遺物である。1～3は、高杯の一部である。1・3は、S D02出土例と同様に細い凹線を施している。6は、てづくねの壺である。7は低脚のつく杯と考えられるが、8は蓋の可能性がある。9・10は底部で、10は底部面を貼りつけているようである。

古墳時代以降の土器及び鉄器(第93図10～20) 11・12はそれぞれS D03、S D04の埋土上層から出土した。11は長頸壺で内外面ともハケ目調整、12も内外面ともハケ目調整で胴部下半には粘土紐の継ぎ目による屈曲がある。13は、S H9102出土の土師器底部である。床面から出土している。12とほぼ同形態のものになると思われる。14・15は、S H9103埋土より出土した須恵器杯身である。16～20は、S E01井戸内から出土した遺物で、17・18は第3層、16・18～20は第4b層から出土した(第90図)。16は、鉄釘である。全長16.6cm、断面が方形を呈する。長押釘と考えられる。17は小形の壺底部、18は土師器皿AⅡ、Ⅱ期^(註6)古か。19・20は、杯Bである。19は、若干古い様相を示す。井戸内からは、ほかに奈良時代の平瓦破片が出土している。

③まとめ

今回の調査では各時代の遺構・遺物が検出されたが、調査地幅10mに満たないもので、面的な遺構の広がり等については不明である。また、調査地とほぼ平行して走るJ R奈良線建設などの工事によって、多くの遺物が包含層として調査地から検出されたことは、調査地東側にも遺構が存在していたものと考えられる。特に、縄文時代晩期の土器片は包含層から出土するものが多いが、山城地方でも宇治市寺界道遺跡^(註7)に先行する時期の土器片が存在しており、縄文晩期突帯文出現時の様相を示す時期が中心となる。山城町堂ノ上遺跡東側の丘陵周辺に縄文時代晩期前半の生活跡が広がるものと考えられ、晩期前半の資料の

少ない山城地方では重要な検出例と言わねばならない。

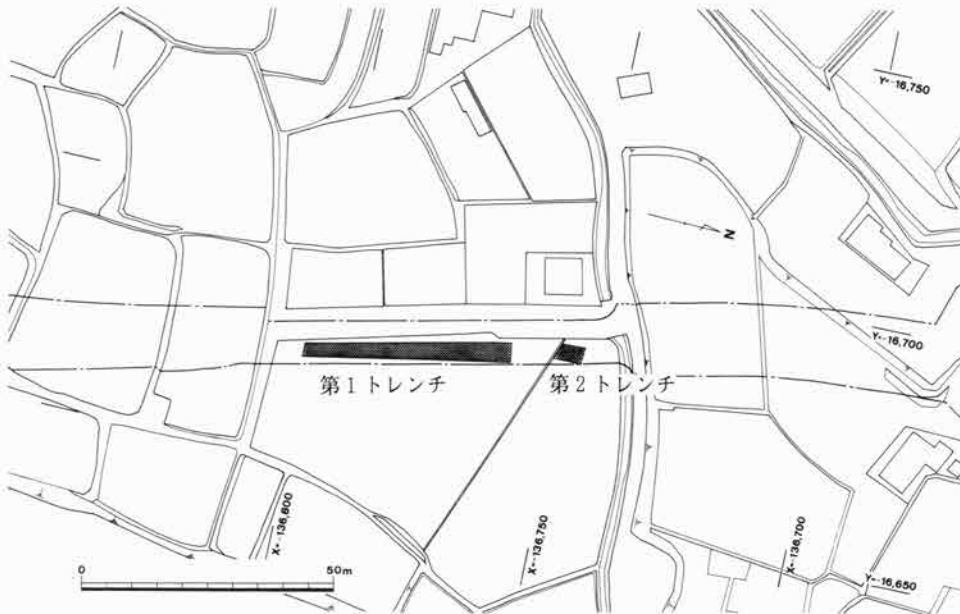
また、弥生時代後期の土器群にも前半の様相を示すS D02、S H9104埋土内の検出例があり、南山城地方には類例の少ないものである。S H9104は円形の比較的大規模なものであるが、埋土内からは後期の土器以外ほとんど認められず、住居跡も後期中葉に所属する可能性が高い。住居跡からは、有茎と考えられる石鏃や安山岩の剥片等が出土している。この地域での石鏃の製作が後期にまで下ることは興味深い^(注8)。

最後に平安時代初頭に廃棄されたと考えられる井戸は、掘形が一辺7m・深さ6m以上に及び、井戸枠には転用材と考えられる木材が使用されていた。使用時の井戸枠は復原すれば5m以上になる。出土した鉄釘が転用材に伴うとするならば、かなり大きな建物の再利用とすることができる。足利健亮氏の恭仁京復原案では、調査地は右京一条三坊にあたり、右京北西部に位置することになる^(注9)。

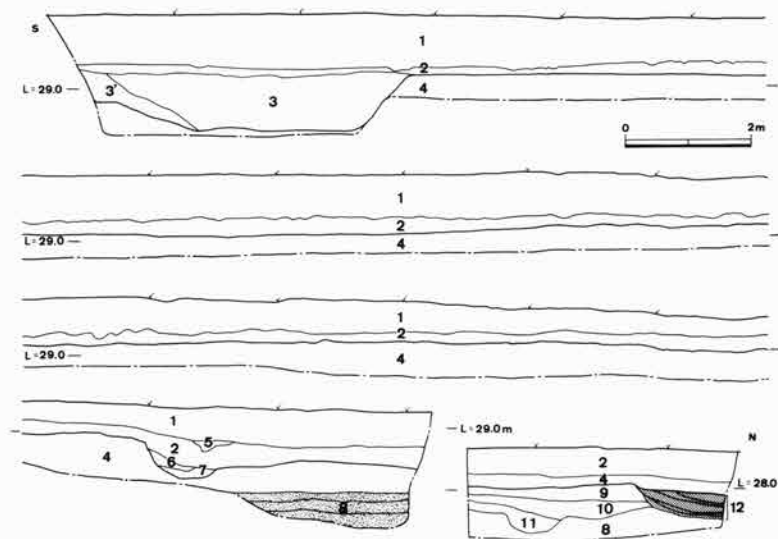
4. 恭仁京跡発掘調査概要

今回の調査地は、堂の上遺跡調査地の600m程北側であり(第83図)、山城町大字平尾小字東黒部に位置する。調査地は、足利健亮氏の恭仁京復原案の右京北極にあたり、その遺構の遺存状況等を把握するために今回の調査を行った^(注10)。

路線内調査のため、南北に約40m・幅3~4mの第1トレンチを設定し、造成土(整地層)を重機で除去したが、旧耕作土直下は淡青灰色粘砂土の地山層があり、第1トレンチ中央



第94図 トレンチ配置図(2)



第95図 トレンチ西壁セクション図

- | | | |
|--------------|----------------|----------|
| 1.濁黄褐色土(整地層) | 2.淡黒褐色土(旧耕作土) | 3.濁暗茶褐色土 |
| 3'.暗茶褐色土 | 4.淡青灰色粘砂土(地山土) | 5.暗灰色砂質土 |
| 6.灰色砂質土 | 7.青灰色粘質土 | 8.褐色礫層 |
| 10.褐色砂層 | 11.褐色砂礫層 | 12.褐色砂層 |

部では表土から4 m下まで続く。第1トレンチ北側では近世地境と考えられる落ち込みがあったが、遺物は全く検出されなかった。今回の調査地は周辺の水田と同様、旧表土の削平後、床土を入れているため、遺構・遺物は認められなかった。

(野島 永)

- 注1 兼松隆太、木坂葉香、岸本亜紀、後藤昌子、照沼修美、当麻公子、角南聡一郎、波部 健
- 注2 平良泰久編『京都府遺跡地図』第5分冊 [第2版] 1985
- 注3 平尾政幸編『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990
- 注4 宇野隆夫「井戸考」『史林』65巻5号 1982
- 注5 南 博史「大阪湾周辺地域における縄文晩期凸帯文土器の変遷」『朱雀』京都文化博物館研究紀要第2集 1989
- 注6 注3文献
- 注7 中村健二・南 博史ほか「縄文晩期の遺物」『宇治市寺界道遺跡発掘調査概報』宇治市教育委員会 1986
- 注8 若松良一「弥生時代の遺構と遺物」寺島孝一編『平安京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一』平安京跡研究調査報告第11集 (財)古代学協会 1984
- 注9 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1985
足利健亮氏の復原案の他に近年、伊野氏も恭仁京京域の復原を試みており、それでは今回の調査地は京域からはずれることになる(伊野近富「恭仁京と恭仁京の復原」『京都考古』第63号 1991)。
- 注10 注9文献

5. 興戸遺跡第11次発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、平成3年度に実施した国道307号道路新設改良事業に伴う発掘調査の概要である。

調査対象となった興戸遺跡は、京都府綴喜郡田辺町字興戸^{こうど}小字犬伏に所在する。この遺跡は、南山城屈指の広大な遺跡で、現在までに10回の調査が実施されている。この地に道路が建設されることになり、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが、京都府土木建築部の依頼を受けて発掘調査を実施した。担当は、当センターの調査第2課調査第2係長奥村清一郎と同主任調査員伊野近富である。

調査対象範囲は、約1,200㎡であったが、農道など現在使用中で調査不可能地を除く、約500㎡を掘削した。現地調査は、平成3年10月1日～11月26日までで、その後平成4年2月末日まで整理作業を実施した。

調査中は、田辺町教育委員会や京都府田辺土木事務所をはじめ、関係諸機関に大変お世話になった。また、調査補助員や整理員・作業員に多大な労苦をかけた。^(注1)記して感謝したい。なお、発掘調査にかかる費用は、全額京都府が負担した。

2. 位置と環境

南山城の中央を北流する木津川の左岸に田辺町は位置する。西部は京阪奈丘陵、東部は木津川によって形成された沖積地で構成されている。地理的には、京都と奈良の間にあり、西端は大阪と隣接しており、各地の影響を受けやすい地域といえよう。

興戸遺跡は、田辺町のほぼ中央部にあり、現在まで10回の調査が実施されている。第8次までの調査については、昨年度の概報^(注2)で触れたので、それを参照していただきたい。

ここでは、これまでの調査で判明した事実の内、主要な点について説明する。時期的変遷については、縄文時代晩期にはすでに生活を開始しているが、はっきりするのは、弥生時代中期以降である。第6次^(注3)調査では壺棺が出土した。また、第7次・第8次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての小形丸底壺や高杯を検出しており、祭祀的な意味合いの強い製品が出土した。

古墳時代後期の生活跡は、第2次調査で検出した。ここは、府道八幡木津線より西側で



第96図 調査地位位置図(1/25,000)

- | | | | | | |
|------------|----------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1.興戸遺跡 | 2.薪遺跡 | 3.西浜遺跡 | 4.伝道林遺跡 | 5.稲葉遺跡 | 6.青上遺跡 |
| 7.東神屋遺跡 | 8.棚倉遺跡 | 9.天理山古墳群 | 10.小欠古墳群 | 11.尼ヶ池遺跡 | 12.河原遺跡 |
| 13.鍵田遺跡 | 14.五反田遺跡 | 15.橋折遺跡 | 16.宮ノ後遺跡 | 17.南垣内遺跡 | 18.下ノ河原遺跡 |
| 19.竹ノ脇遺跡 | 20.田辺遺跡 | 21.田辺城跡 | 22.稲葉丹後谷遺跡 | 23.大谷古墳 | |
| 24.興戸宮ノ前窟跡 | 25.川原谷遺跡 | 26.興戸宮ノ前遺跡 | 27.興戸城跡 | | |
| 28.天神山遺跡 | 29.野神遺跡 | 30.飯岡遺跡 | 31.草路城跡 | 32.田中遺跡 | 33.七瀬川遺跡 |
| 34.散布地 | 35.都谷遺跡 | 36.新宗谷窟跡 | 37.新宗谷古墳 | 38.マムシ谷窟跡 | |
| 39.下司古墳群 | 40.散布地 | 41.館跡 | 42.散布地 | 43.新宗谷遺跡 | 44.直田遺跡 |
| 45.酒壺古墳 | 46.興戸古墳群 | 47.郡塚古墳 | 48.興戸廃寺 | 49.古屋敷遺跡 | |

高燥の地に当たっており、居住域としては、府道の東側より抜群に環境がよい。現在でも東側には水田地域が広がっている。第2次や第7次調査のように、府道の西側で実施した調査結果によれば、奈良時代の掘立柱建物跡や、溝の資料ではあるが、平安時代に属する白磁や無釉陶器、平安京の土師器皿が出土している。一般的な集落ではあまり出土しないものがあるので、この周辺に官衙(綴喜郡衙)を想定する考えもある。

ところが、第6・8次の調査によって、水田地帯と考えられていた府道東側でも、奈良時代から平安時代にかけての生活跡が確認された。そして、その建物跡群や区画の溝や柵の方向が大きく西偏していることも判明した。正確には $N33^{\circ}W$ である。さらに、奈良時代初期の1町(仮に106.59mとする)の区画があることも判明した。それによって、府道のほぼ中心も1町の区画に合うことが判明し、結局、府道から東へ3町の区域は、西偏する道に沿った地割であったことが確認された。そのため、南山城の低地が正南北に区画された条里地帯と推定されていた谷岡武雄説は変更の必要が生じてきた。現在のところ、道(足利健亮説によれば古代の山陰道・山陽道併用の道)に近接したところは西偏した区画で、低地は正南北であったと理解しているが、残念ながら、奈良時代にさかのぼる正南北の条里は検出されていない。



第97図 興戸遺跡発掘調査地点図(番号は調査次数 S=1/20,000)

さて、今回の調査地は古代の幹線道路と同位置と推定されている府道近接地であり、当時の遺構が埋没している可能性が極めて高い地点である。

3. 調査概要

発掘調査は、昨年度までの成果をもとにして、近世面まで土木機械で掘削し、その後人力による掘削に変更し、徐々に掘り下げた。

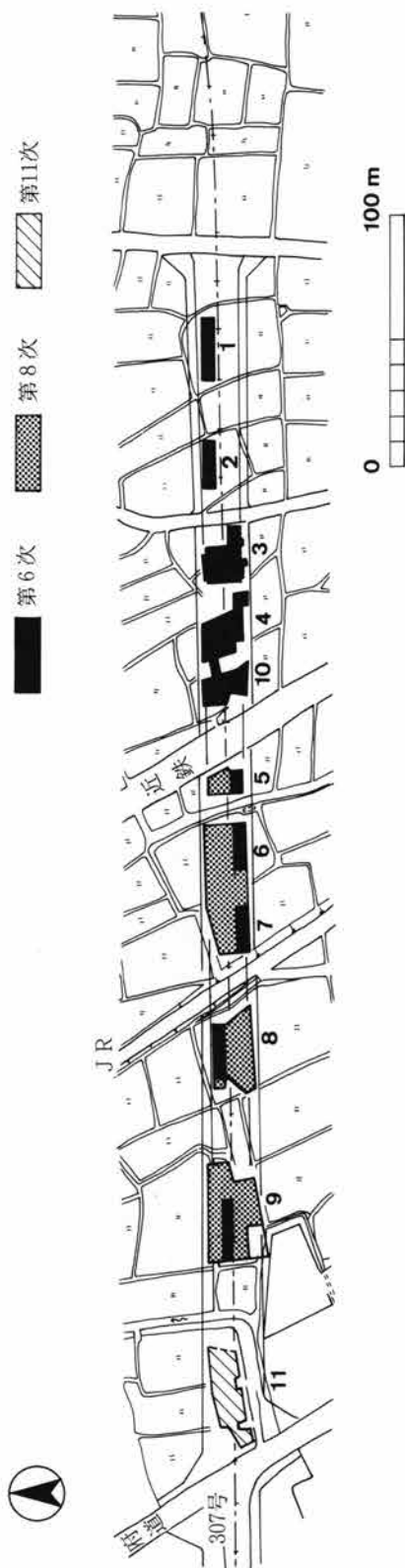
調査地は、府道沿いが駐車場として利用されており、その東は水田となっていた。2か所ではその水田のための、農作業車搬入道があったが、強固なコンクリートであるためと、遺構面より深く設置されていたので除去をあきらめた。

なお、今回も前回同様に国土座標(第Ⅳ座標系)で地点を表示した。標高は府道沿いのポイント34.278mを基準とした。

a. 検出遺構

基本的には遺構面は3面である。おおよそ、近世・中世・古代と把握した。

第99図で土層断面を示しているが、近世面は、トレンチ中央区(農作業車搬入道で3分割されており、それぞれ西区、中央区、東区と呼称)の西端で、標高約31.7mである。土層は紫暗灰色粘質土である。中世面は同地点で、標高約31.55mである。土層は灰白色シルト層である。古代面は同地点で、標

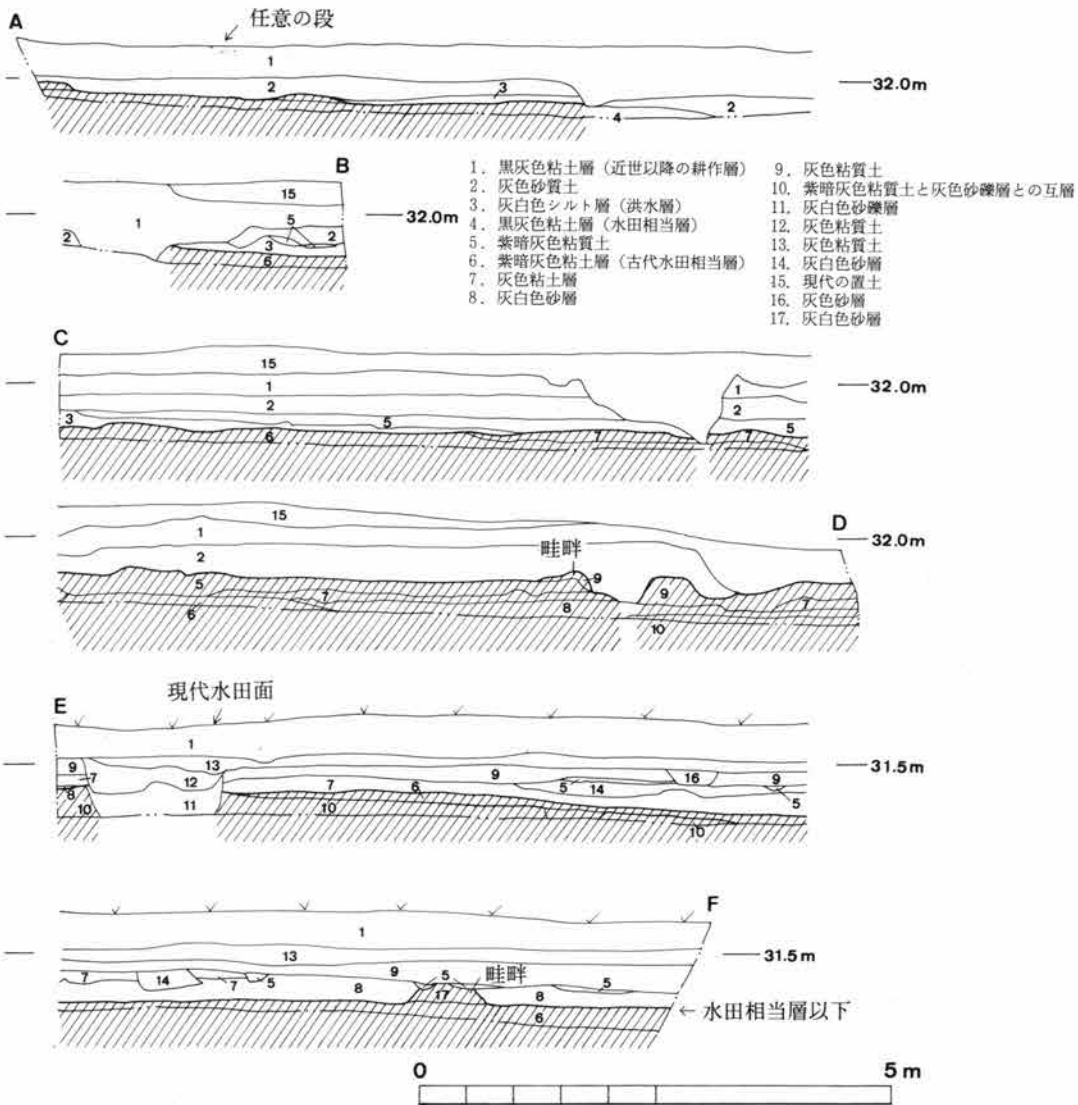


第98図 調査地周辺図(トレンチ配置図)第6・8・11次分

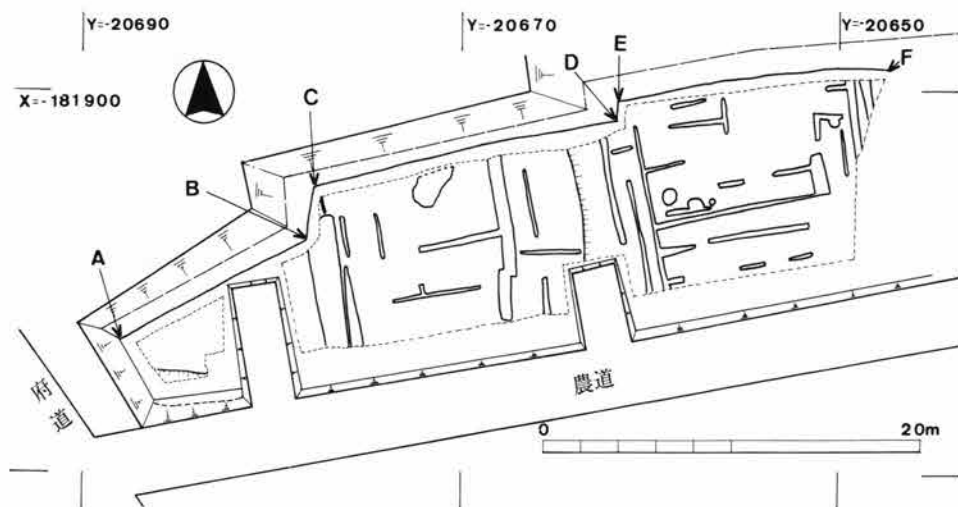
高約31.5mである。土層は紫暗灰色粘土層である。

地形は西が高く、東へいくに従って下がっている。さらに西方には谷地形があり、大局的にみれば、谷の出口、すなわち扇状地の起点部分に相当する。

では、近世面の遺構について説明したい。東西あるいは南北方向にのびる溝を検出した。方位はN 5°W程度である。溝の幅は4～6cm程度である。深さは5cm程度である。トレンチの西部では不分明だが、中央区と東区では別区画のようである。土層から耕作に伴うものと考えたい。この2つの境は10cmほど段差となっており、東が低い。

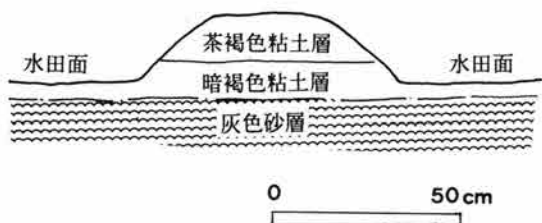


第99図 土層断面図



第100図 トレンチ平面図(中・近世)

L = 31.5 m



第101図 大畦畔の土層断面図

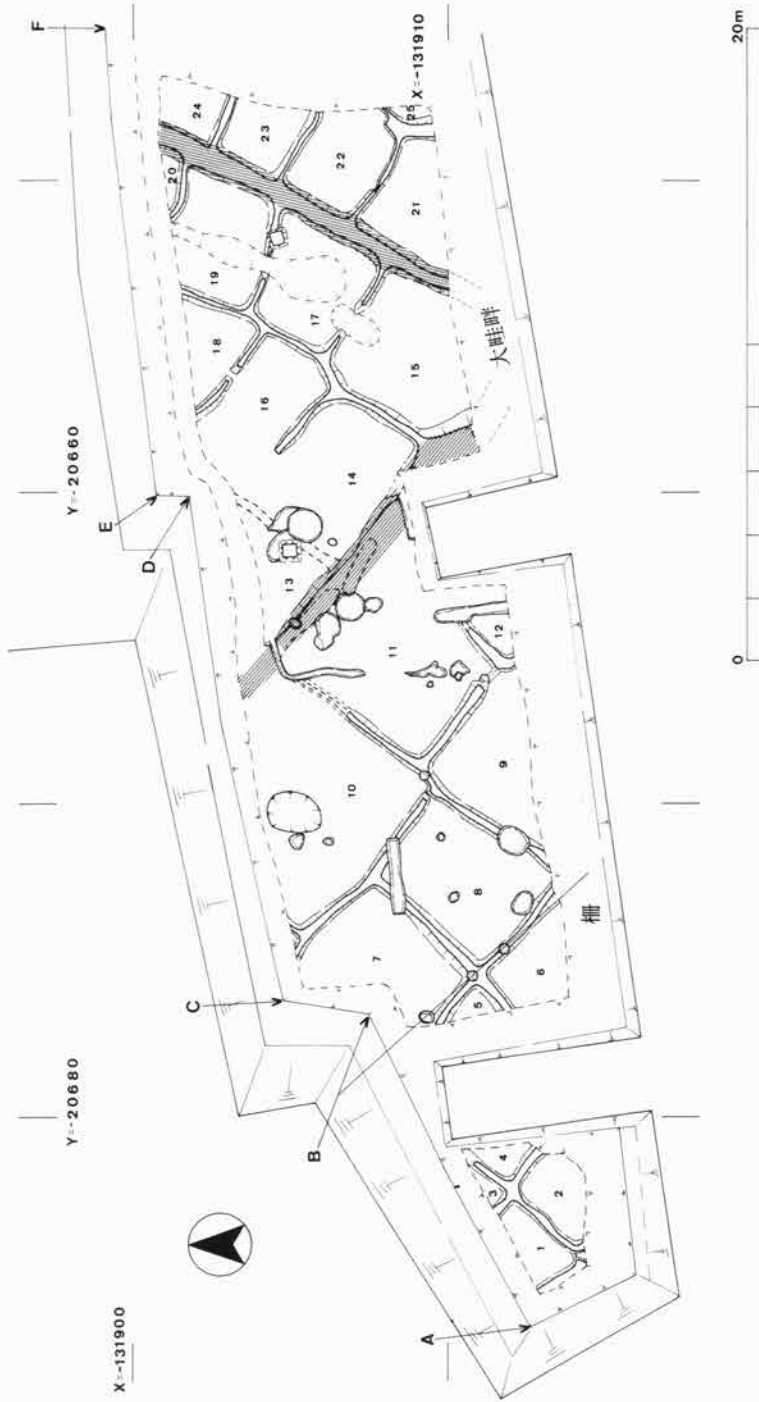
中世面ではいくつかのピットを検出したが、土層がシルトや砂層であり、しばしば洪水にみまわれたことがわかる。その中から、青磁皿や瓦器碗がごく少量検出された。

古代面では水田耕作に伴う畦畔を検出した。ベースとなる土層は、西区と中央区は紫暗灰色粘質土(厚さ

10~20cm)で、東区は灰色粘土層(厚さ5~10cm)である。この土層の上に畦畔を盛り土して形成している。やや白い粘土が混じるだけで、ベース層と同様である。この点から、畦畔は1度形成されただけで、幾度も作り直されたとは考えられない。

畦畔の規模は大小2種類ある。大は幅1m・高さ20cmで、断面はかまほこ形である。東区では南西↔北東方向の1本と、東区から中央区にかけては南東↔北西方向の1本とを検出した。ただし、中央区の北半は削平されており、地面の色の变化(やや黒変していた)によって、畦畔が北西方向にのびていたことがわかった。このふたつの大畦畔は南端及び西端で接続していたと思われるが、新しい攪乱によって確認できなかった。小は幅40cm・高さ5cmで、断面はかまほこ形である。ところどころ削平を受けているが、色調の変化によって畦畔が存在したことはほぼ確認できた。

これらの大小の畦畔によって、調査地内では24枚の水田が確認できた。そのうち、全容が判明したのは1枚で、ほぼ全体がわかるものが6枚である。1枚の平均規模は中央区で



第102図 トレンチ平面図(古代)

4.5m×3.5m、東区で3m×3.2mである。中央区と東区を走る大畦畔を境にして東側は、約60cm低い。第102図では1枚ずつの水田に番号をつけたが、その中で8と10との間に水口を確認した。さらには15と17、17と19、16と18との間でも確認できた。地形の傾斜から言えば南西から北東方向へ水が流れたものといえよう。15・17・19の中央部分はやや窪んでおり、そこで直径5cmほどの円形をした跡を検出した。そこには白色の洪水砂があり、窪んだ状況が確認できた。形状から稲株跡との可能性もあったが、断面観察の結果、0.7～1cm程度のレンズ状をした単なる窪みであることが判明した。なお、畦畔の方位はN50°Wである。

さて、これらの水田(形状からの推定)の時期は、これを埋没させた洪水砂の中から、ほとんど遺物が出土していないので確定できない。ただし、第6・8次の調査成果によれば、これと同様の砂層が奈良時代の遺構によって削平(第6—7トレンチ東端で確認)されており、少なくとも奈良時代以前の遺構である。また、5・6・7・8の間の畦畔に重複して直径約30cm・深さ6cmの円形ピットが検出された。埋土は、灰白色洪水砂(白色洪水砂より粗砂)であるので、水田埋没砂より新しい。これを柵列の一部と考えるが、その方位がN40°Wであるので、当該地周辺における奈良時代の方位にほぼ合致する。したがって、これらの点から、水田遺構は奈良時代以前であることは確実である。

b. 出土遺物

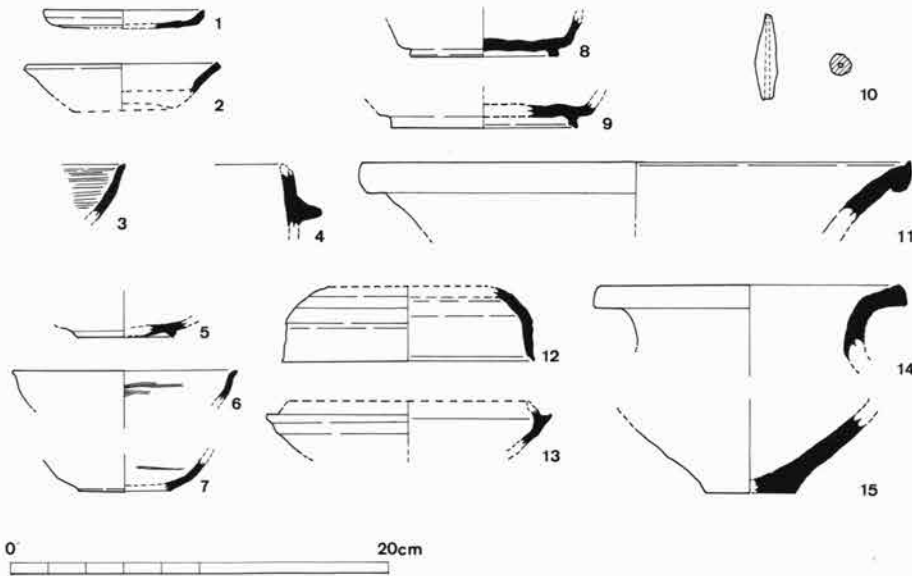
検出された遺物は整理箱で2箱分である。数量は弥生土器7点、土師器87点、須恵器71点、瓦器8点、青磁1点、土錘1点、緑釉陶器1点、瓦1点である。ほとんどは小破片で、図示できたのは第103図のとおりである。

1は、土師器皿である。色調は淡褐色系で、口縁部は二段にわたって横ナデを施している。中世溝から出土。口径8.5cm・器高1cm。2は、青磁皿である。同安窯系か。12～13世紀。3～7は、瓦器である。4は、羽釜である。内外面とも横ナデしたもので、15世紀の山城型と思われる。他は椀である。3が12世紀にさかのぼるほかは、13世紀後半のものである。大和型。5は、中近世溝から出土した。他は包含層出土である。

8・9・11～13は、須恵器である。8・9は、8世紀前半の杯身である。8は、中世溝から出土した。色調は青灰色である。11は、壺・甕の口縁部で、口径は29.2cm、色調は青灰色である。6～7世紀か。12は、杯の蓋で、天井部の3分の2ほどにヘラケズリを施している。口径は13.4cm、色調は青灰色である。6世紀前半。13は、杯身である。口縁端部が欠損しており、径は不明である。色調は青灰色で、時期は6世紀後半であろう。

10は、土錘である。長さ5.6cmで、胴の最大径は1.2cmである。色調は暗褐色である。

14・15は、弥生土器壺である。内外面とも摩滅しており、調整は不明である。色調は暗



第103図 出土遺物実測図

褐色土で、胎土に白色砂やチャート片などを含む。IV様式に属するものであろう。

この他、小片であるため図示はできなかったが、須恵質の緑釉陶器が出土した。京都産であろう。時期は9世紀後半～10世紀前半。また、奈良時代にさかのぼる瓦も1点出土したが、小片であったため図示していない。遺物のほとんどは包含層からの出土で、わずかに中世溝に伴うものがあったが、これとても前代のものが多い。また、水田面直上で出土したものはなく、その機能停止時を特定する手がかりは、遺物からは得られなかった。

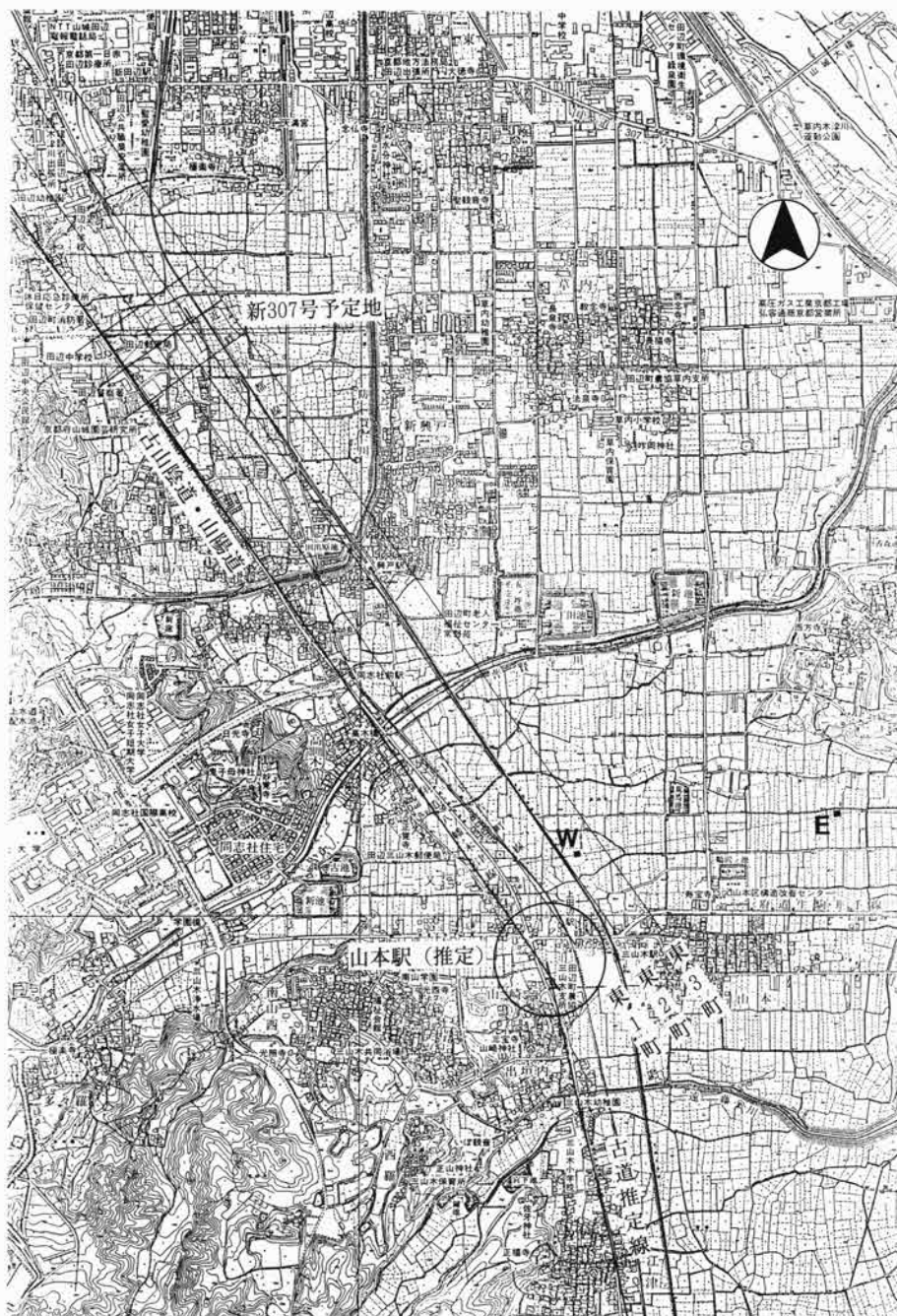
c. 小 結

以上、遺構・遺物とも水田の時期を決定する根拠に乏しいが、土層観察によれば、以下のことが言える。すなわち、水田面の下には白色砂層(無遺物層)が約10cmあり、さらに下層に黒色粘土層がある。この土層は第6次調査の第4トレンチでも確認しており、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土した。したがって、水田は古墳時代前期をさかのぼることはなく、奈良時代以降に下ることもないことから、おおよそ6～7世紀頃と推定しても大過ないだろう。

4. 条里との関係

a. 南山城の地割

今回の調査によって古墳時代に属する可能性の高い水田跡が検出された。この畦畔の方位(N50°W)は、これまでの調査では未見で、もっとも自然地形に適応したものである。



第104図 推定古山陰道・古山陽道と推定方格地割(S=1/20,000)
古屋敷遺跡(W地点・E地点)

前年度までの調査成果によれば、奈良時代には古山陰道・山陽道併用の道から東へ3町(1町=106.59mとする)までは、この道と平行あるいは直交した区画が存在したことが確認された。そして、平安時代中期に属する溝はN29°Wとなり、中世になると耕地化したことも判明した。

南山城の条里については、谷岡武雄氏の研究がある^(注6)。これによれば、綴喜郡条里は木津川から以西の山際まで施行されたことになり、また、その方位はほぼ真南北に合わせたものという。なお、氏の条里は6町方格を大区画としたもので、1町は109m方格で設定されている。発掘調査の結果、この案は少なくとも古代幹線道路の東3町までは及ばなかったと言える。

さて、別の発掘調査によって、さらに低地でも奈良時代までさかのぼり得ない条里遺構を検出した例がある。これは田辺町三山木(山本駅推定地)から木津川沿いの飯岡の丘陵付近までの2か所をトレンチ調査したもの(第104図参照)^(注7)である。ここで確認された事実は次のとおりである。すなわち、真南北に整然と区画された現条里畦畔の下層に、2層の畦畔がほぼ同位置で確認された。出土遺物からこの2層は、それぞれ16世紀と17世紀以降との説明がなされており、それ以前にはさかのぼらない。以上の事実は、現代に残る条里地割が奈良時代までさかのぼる可能性は低いことを示している。

では、通説が立脚しない以上、新たな説が必要だが、その提示は本概報では行わない。ここでは、条里制や古墳時代の土地制度といわれる代制について把握し、その後、この遺跡で検出された水田の歴史的な位置づけをしたい。

b. 条里制について

条里制についての見解は次のようになる^(注8)。

- (1) 1町方格(約109m間隔)の径溝網と、その内部の規則的な地割形態。
- (2) 六町四方の「里」の区画と一町四方の「坪」の区画を単位とする土地表示の存在。
- (3) 律令国家の基本政策であった班田収授法との密接な関係。

さて、この見解について補足すると、(1)については1町方格が106mや108mというように異説がある。(2)の条里呼称法については、金田章裕氏によって天平14(742)年～天平20(748)年の時期に開始されたことが明らかにされた^(注9)。そして、『大宝令』や『養老令』では5町四方の「里」であり、現実にある6町四方の「里」の開始時期は不明である。

したがって、条里制の開始や、具体的な内容については現在でも不明な点が多い。

c. 代制について

条里制は、その面積を表わす際に町段歩を使用しているが、それ以前は代(しろ)であった。そして、岸俊男氏によって面積500代の正方形の土地の一辺が106mと論証された^(注10)。

この代制の発掘調査例はなかったが、先日、京都市伏見区淀の長岡京跡左京六条三坊で、6世紀にさかのぼる106mの方格地割が確認された。ただし、実際の区画である大畦畔は^(注11)53m(1/2町)、35.3m(1/3町)、17.7m(1/6町)の3種類で、面積ではそれぞれ1/2町、1/3町、1/9町となり、1町の区画はない。そもそも代制は500代が1町であり、今回検出された区画は3の倍数なので、いかにも不便な割り方である。今後、論議を呼ぶ例といえよう。

d. 当該地の水田跡

小畦畔で区画された水田の面積は、9～21m²とさまざまであるが、現代に比して小規模である。これは、全国的に知られてきた古代の水田でも通有のことである。また、大畦畔の規模についても、先の淀の例と同様である。そして、出土遺物も少量ではあるが、6世紀に属するものが多いという点も見逃せない。つまり、状況証拠としては、6世紀にさかのぼる可能性を指摘できるが、断定は今後の周辺の調査に委ねたい。代制の是非も同様である。

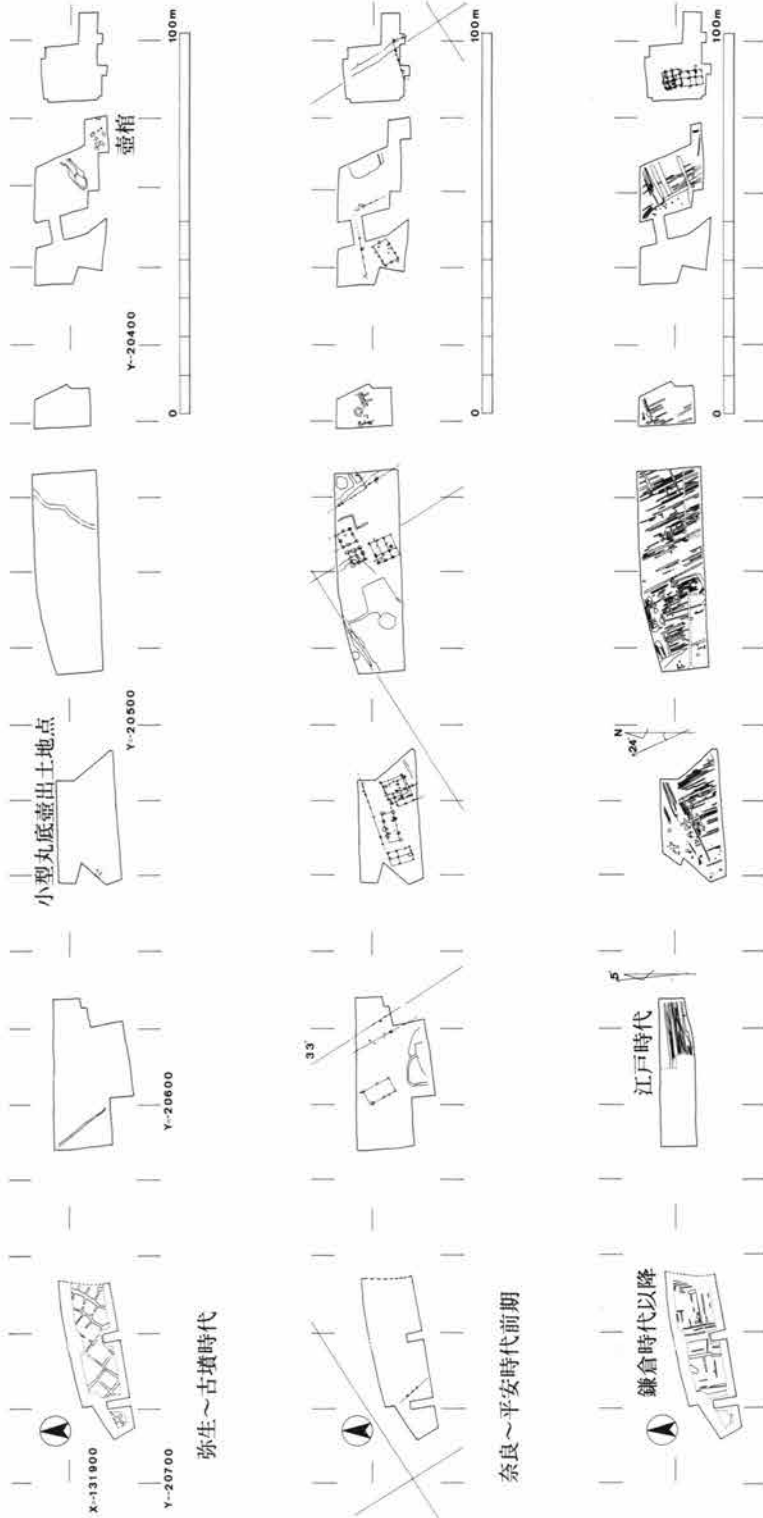
5. 興戸遺跡における時期別変遷について

3年度にわたる調査によって、おおまかな遺跡の変遷が明らかとなった。ここでは第105図のとおり、次の3時期にまとめて提示したい。

A期 縄文時代晩期から古墳時代まで。弥生時代中期の墓(第4トレンチ)と、同後期から古墳時代前期までの祭祀遺物の集中(第8トレンチ)が特徴である。田辺町教育委員会による第7次調査地(第97図参照)は、第8トレンチの北方約16mであるが、ここでも弥生時代中期の土器が確認された。^(注12)第11次調査では、古墳時代後期と思われる水田跡が検出された。自然地形に合わせたものである。方位はN50°W。

B期 奈良時代から平安時代前期までの建物跡や区画溝や柵の存在。円面硯や瓦の出土から一般的な集落ではない。第6-7トレンチの東端で検出した溝は、その後の田辺町教育委員会による第9次調査によって、全長73mにわたって延伸したことが判明した。方位はN33°W。平安時代前期の建物跡は、第10トレンチで確認し、溝は第8トレンチの東南部で確認した。この他、田辺町教育委員会による第10次調査で、10世紀頃のくり抜き井戸が検出された。^(注13)ここでは、緑釉陶器・灰釉陶器も出土し、奈良時代同様に一般的な集落ではない状況がわかる。また、足利健亮氏が推定した古山陰道・古山陽道併用の道の西方には、綴喜郡衙と目される地点(第2次調査)や、興戸廃寺があり、この時期が綴喜郡内でも最大の有力地であったことがわかる。

C期 平安時代末期以降の耕地化に伴う溝が存在する。方位はN24°W。第9トレンチの溝はほぼ東西方向(W5°S)であるが、これは近世に属する。



第105図 興戸遺跡における時期別変遷図

6. ま と め

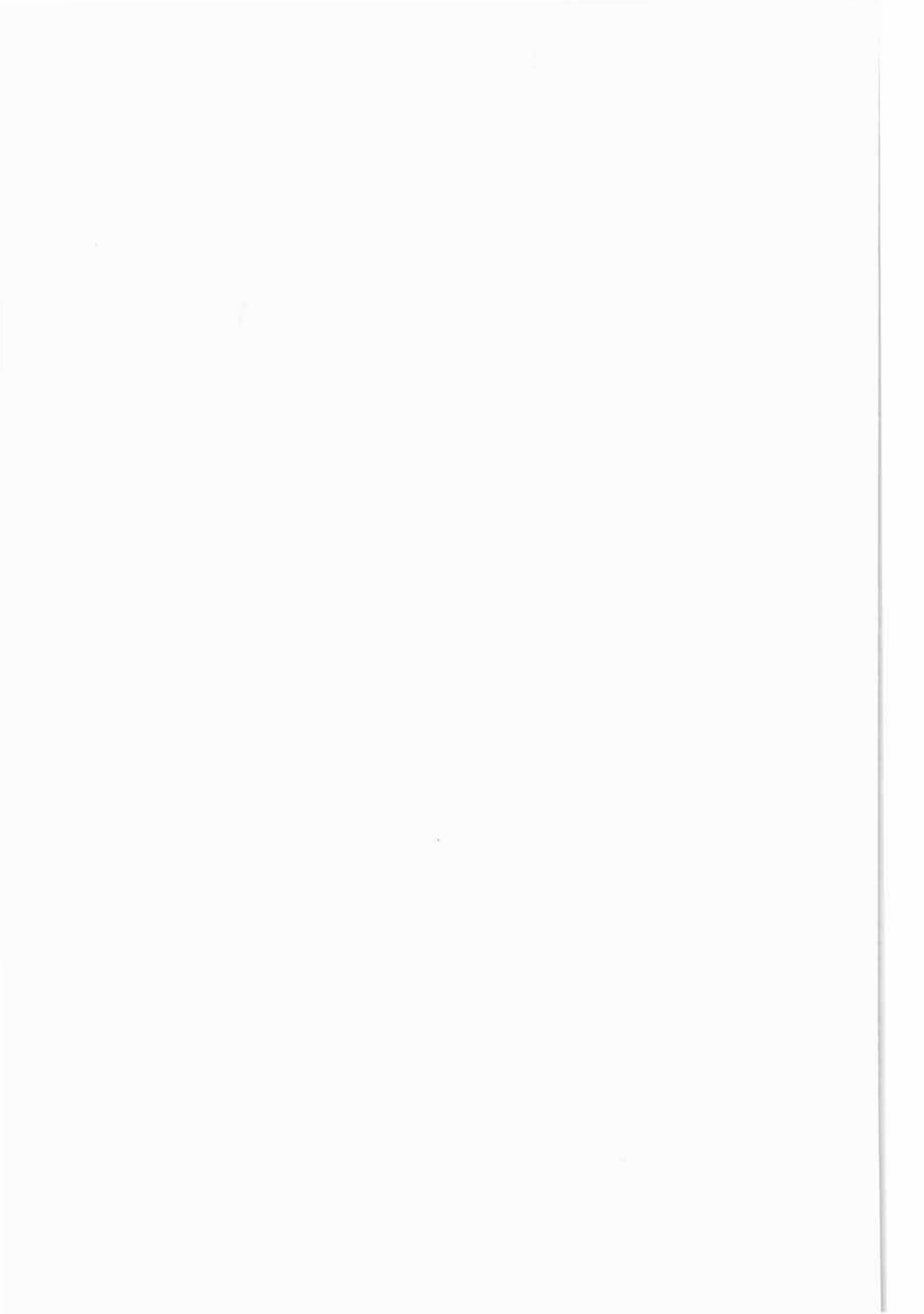
今回の調査を開始する際に想定した点は、足利健亮氏が推定した奈良時代の幹線道路沿いにあたるため、建物や井戸などのように集落を構成するようなものの存在であった。ところが、その時期に相当したのはいずれも柵(SA1)が1条のみであった。これは、調査地点が谷の出口の扇状地上にあたり、湧水が激しく生活に不便であった証しかもしれない。完全に耕地化したのは近世であり、中世ではいくつかの溝を検出したが、耕地であったかどうかは不明である。

しかし、奈良時代以前は一時期ではあるが水田であったことが判明した。これが確認できたのは洪水砂によってバックされたためであった。水田面の下も砂層であり、このような悪条件下で水田を形成したことは、何か強い意図があるに違いない。しかし、狭小な調査地ではそれを証明することはできない。今後の周辺における調査に期待したい。

(伊野近富)

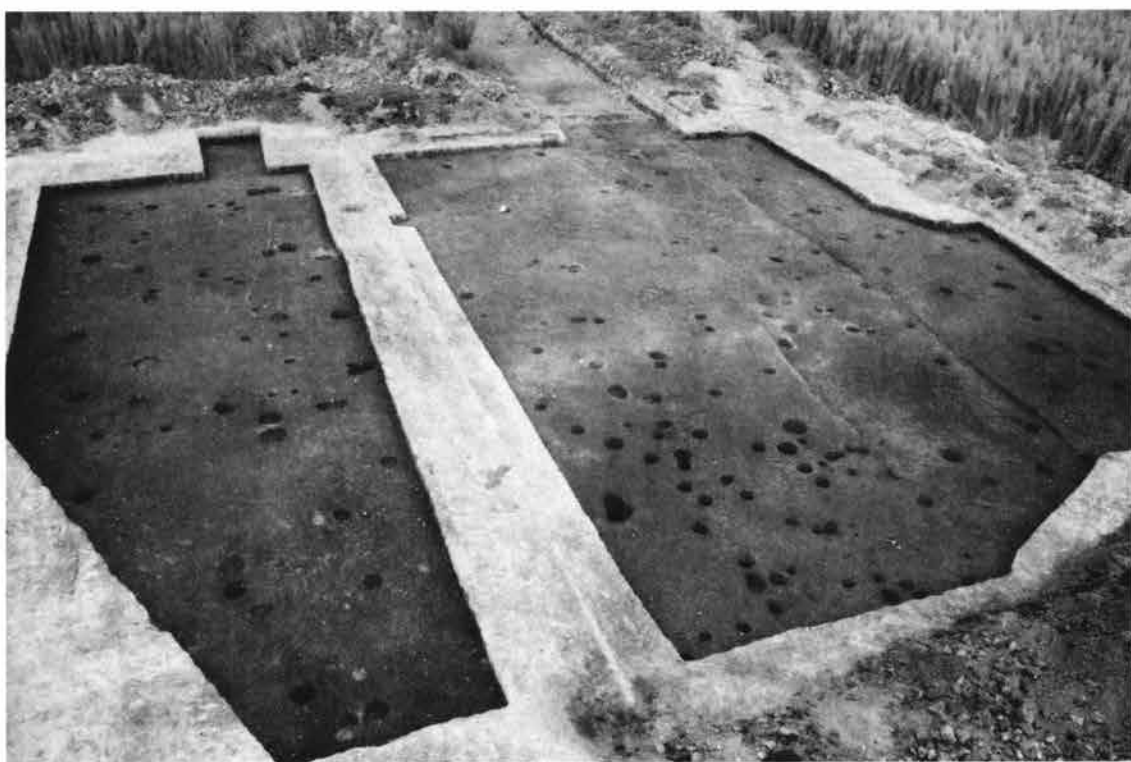
- 注1 栃木道代・村川 恵・古賀伸枝・塚本晃子・木坂葉香・内山明子・中野美佐子
 注2 伊野近富 「興戸遺跡第6・8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第42冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
 注3 注2に同じ
 注4 谷岡武雄 『平野の開発』 古今書院 1964
 注5 足利健亮 『日本古代地理研究』 大明堂 1985
 注6 注4に同じ
 注7 鈴木重治・中井 公他 「古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第1集 田辺町教育委員会) 1980
 注8 弥永貞三 「条里制の諸問題」『日本の考古学Ⅶ 歴史時代(下)』 河出書房新社 1967
 注9 金田章裕 『条里と村落の歴史地理学研究』 大明堂 1985
 注10 岸 俊男 「方格地割の展開」『日本書紀研究』第8冊 1975
 注11 現地説明会資料 『長岡京左京六条三坊跡(水垂F区)古墳時代水田跡発掘調査現地説明会資料』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991 なお、現地で木下・長宗氏らの懇切なる説明を受けた。
 注12 田辺町教育委員会、鷹野一太郎氏御教示。
 注13 注12に同じ
 注14 『興戸遺跡発掘調査概要』 田辺町教育委員会 1992.1.パンフレット

圖 版





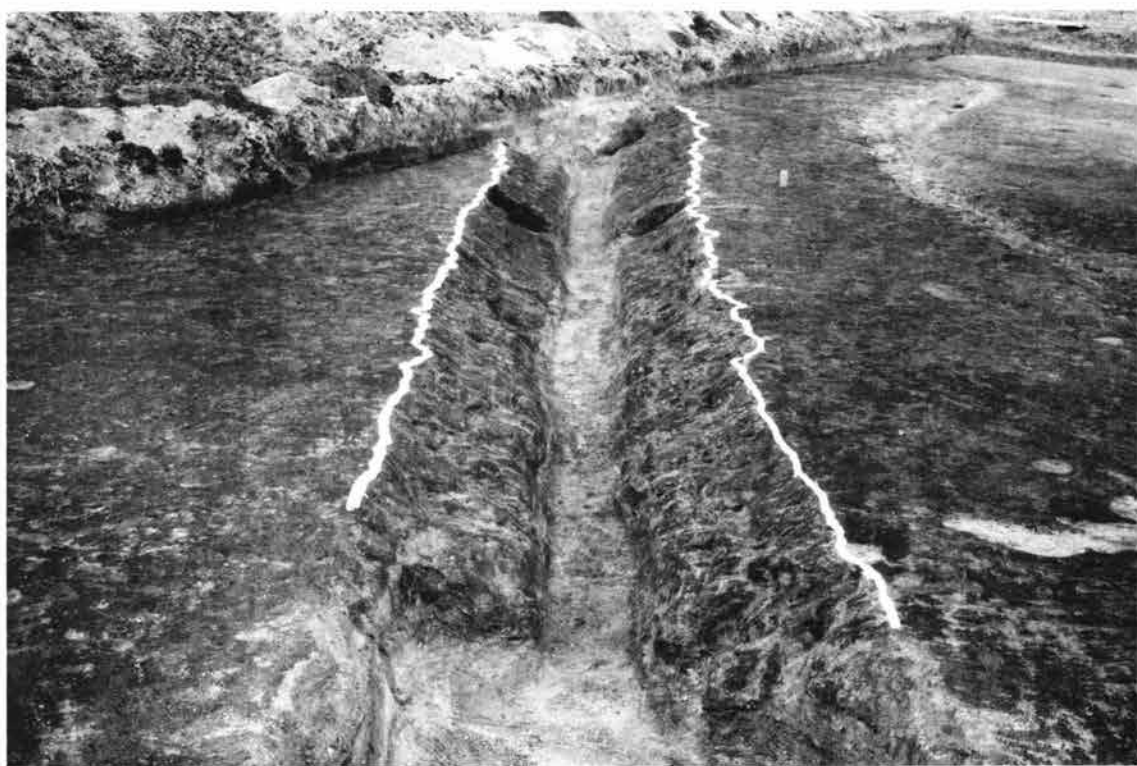
(1) 調査地風景（東から）



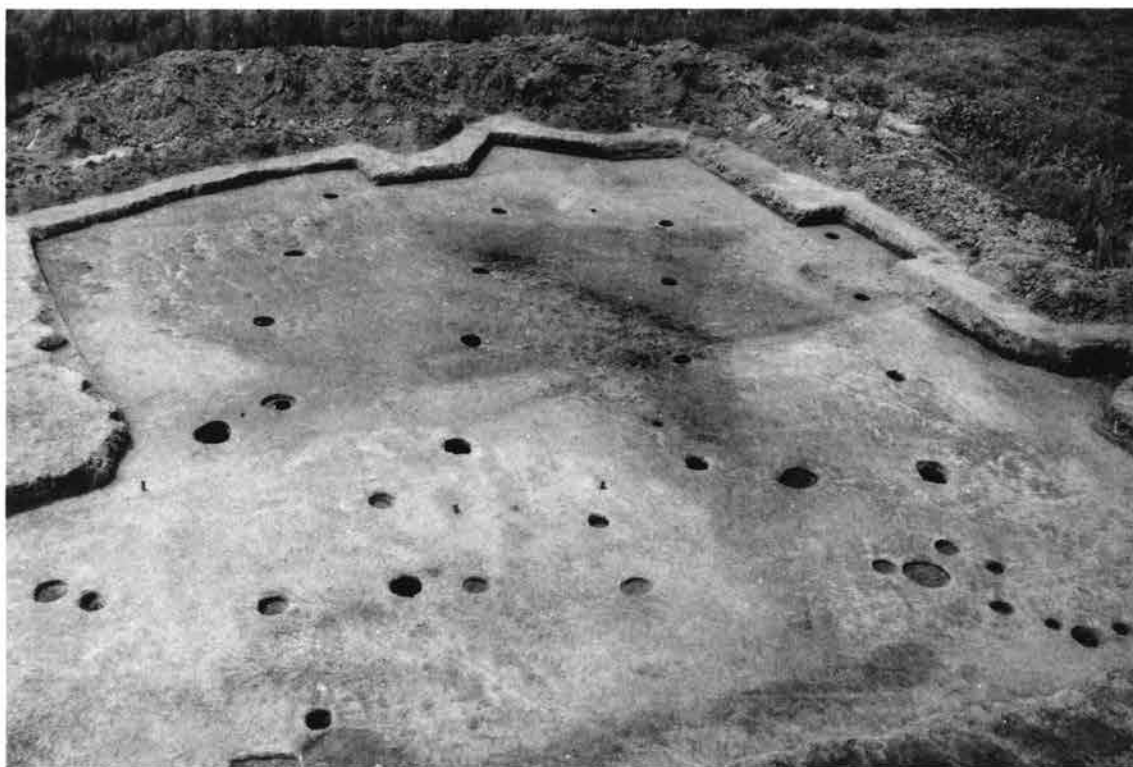
(2) Aトレンチ全景（南から）



(1) Cトレンチ全景（東から）



(2) 溝1（南から）



(1) 掘立柱建物跡2 (東から)



(2) 掘立柱建物跡2のピット6 土器出土状況



出土遺物

1・5 弥生土器 7・8 須恵器 9・14~16 土師器 10~12 黑色土器



(1) トレンチ全景 (東から)



(2) 東壁第9図A-B断面 (北から)



(1) 2 B L. 14tr 旧流路 S R 24201(北方から)



(2) 2 B L. 14tr 旧流路 S R 24201断面(西方から)



(3) 3 B L. 15tr 溝 S D 24213杭列(北方から)



(4) 3 B L. 15tr 溝 S D 24213杭列と護岸板材(東方から)



(1) 3 B L. 2 tr 中世溝群 (北方から)



(3) 3 B L. 2 tr 下層溝群 (北方から)



(2) 3 B L. 2 tr 土坑S K24207 (北東から)



(4) 3 B L. 2 tr 下層溝遺物出土状況 (南から)



(3) 4 B.L., 4 tr 遺物出土状況 (南から)



(4) 4 B.L., 4 tr 下層断ち割り (南から)



(1) 4 B.L., 4 tr 中世溝群 (南から)



(2) 4 B.L., 4 tr 中層全景 (南から)



(3) 5 B L. 18tr 掘立柱建物跡 S B 24117 (北方から)



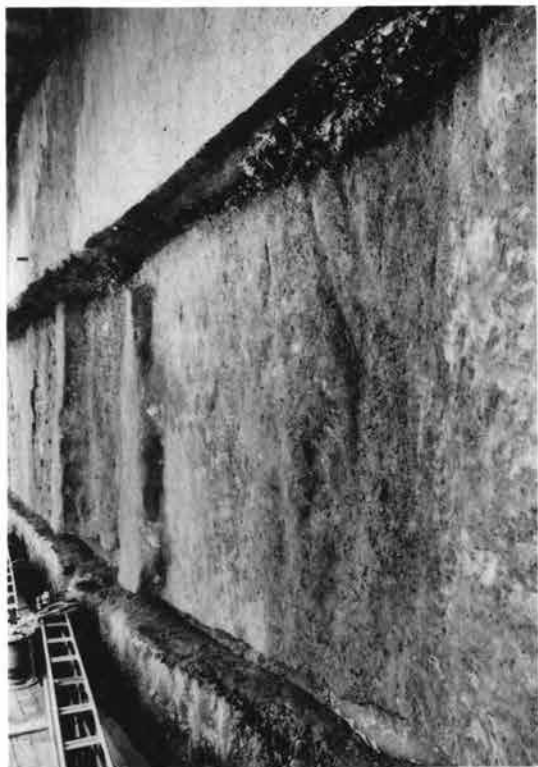
(4) 5 B L. 18tr 東二坊大路東側溝 S D 24118 (北方から)



(1) 5 B L. 18tr 南部中・近世溝群 (南方から)



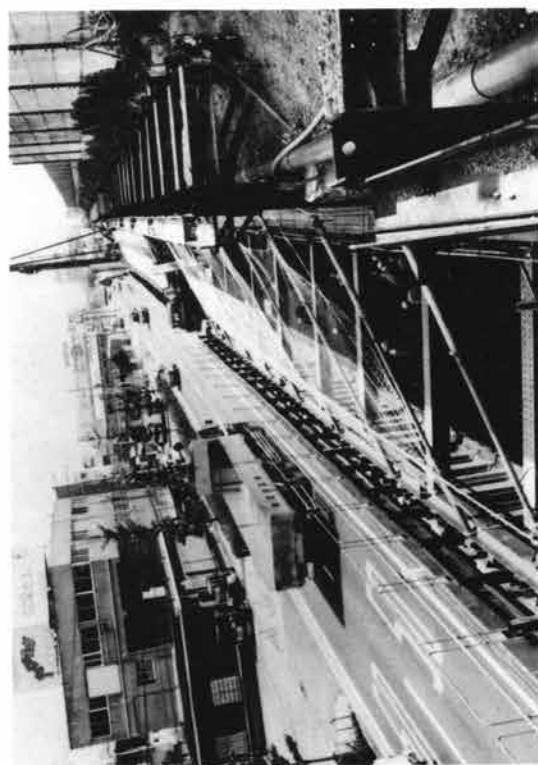
(2) 5 B L. 18tr 南部全景 (南方から)



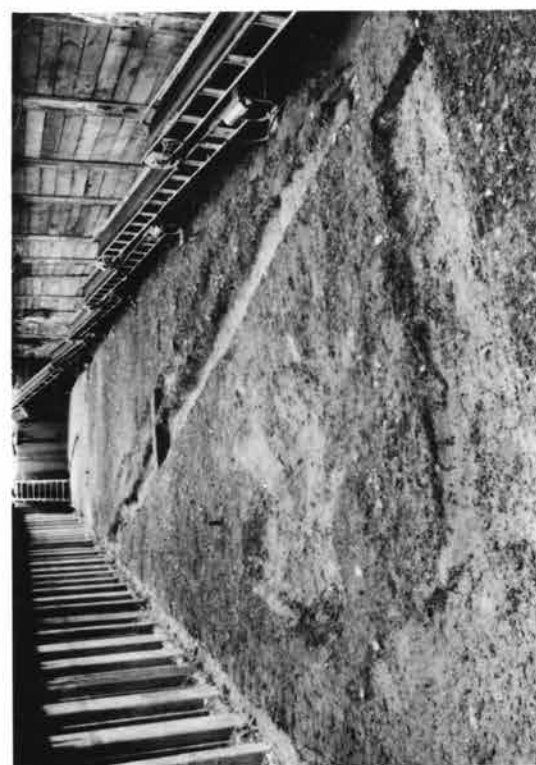
(3) 6 B L. 8 tr 溝S D24121 (北方から)



(4) 6 B L. 8 tr 溝S D24122 (東方から)



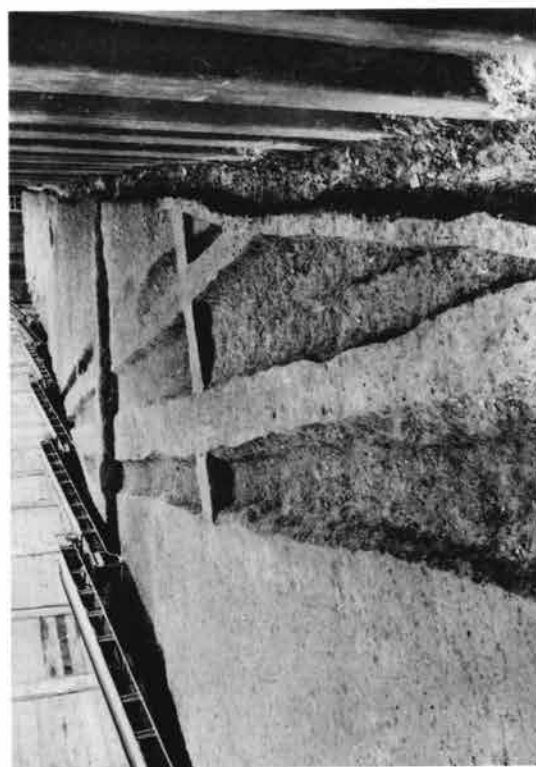
(1) 6 B L. 8・9 tr 全景 (南方から)



(2) 6 B L. 8 tr 全景・中世溝 (南方から)



(1) 6 B.L. 9 tr 全景・中世溝群 (南方から)



(2) 6 B.L. 9 tr 中世溝群 (北方から)



(3) 6 B.L. 9 tr 東二坊大路東側溝 S D24123 (北方から)



(4) 6 B.L. 9 tr 断ち割り断面



(1) 6 B L. 19tr 北部全景 (北方から)



(2) 6 B L. 19tr 北部全景・断ち割り (北方から)



(3) 6 B L. 19tr 溝 S D 24126 (西方から)



(4) 6 B L. 19tr 溝 S D 24125 (西方から)



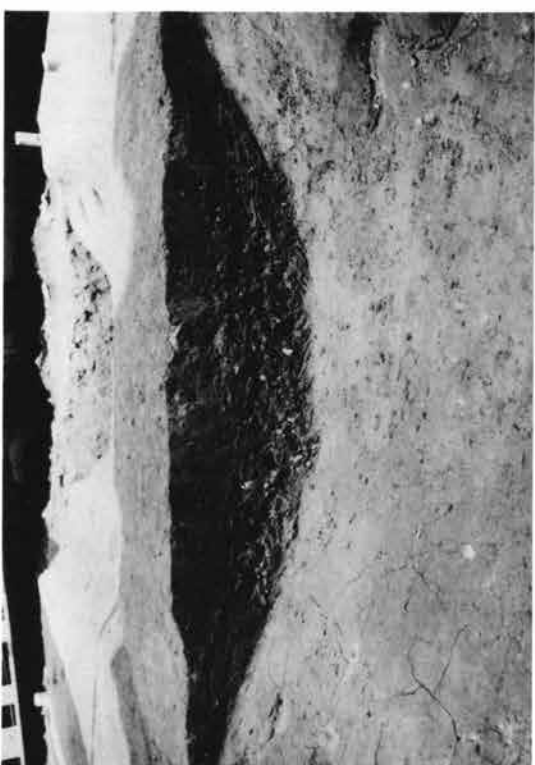
(3) 7 B L. 10tr 溝 S D 24238 (北方から)



(4) 7 B L. 10tr 溝 S D 24238断面



(1) 7 B L. 20tr 二条条間小路南側溝 S D 24230 (東方から)



(2) 7 B L. 20tr 二条条間小路南側溝 S D 24230断面



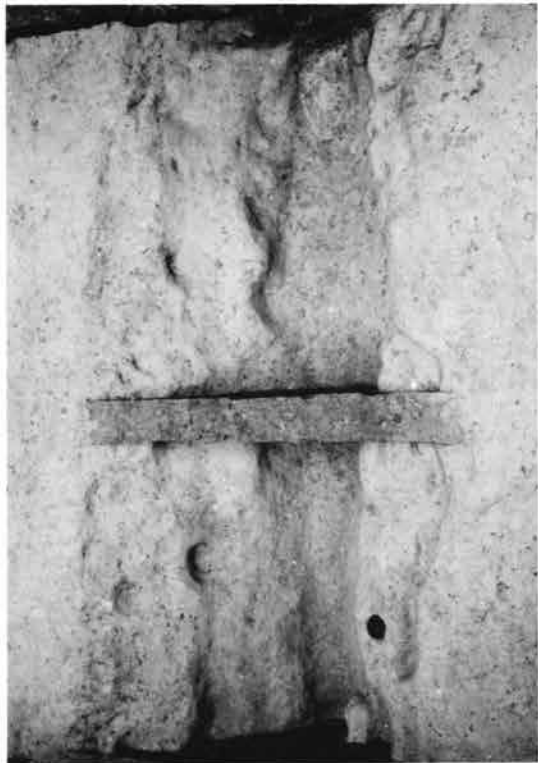
(1) 7 B L. 20tr 全景・中世溝群 (南方から)



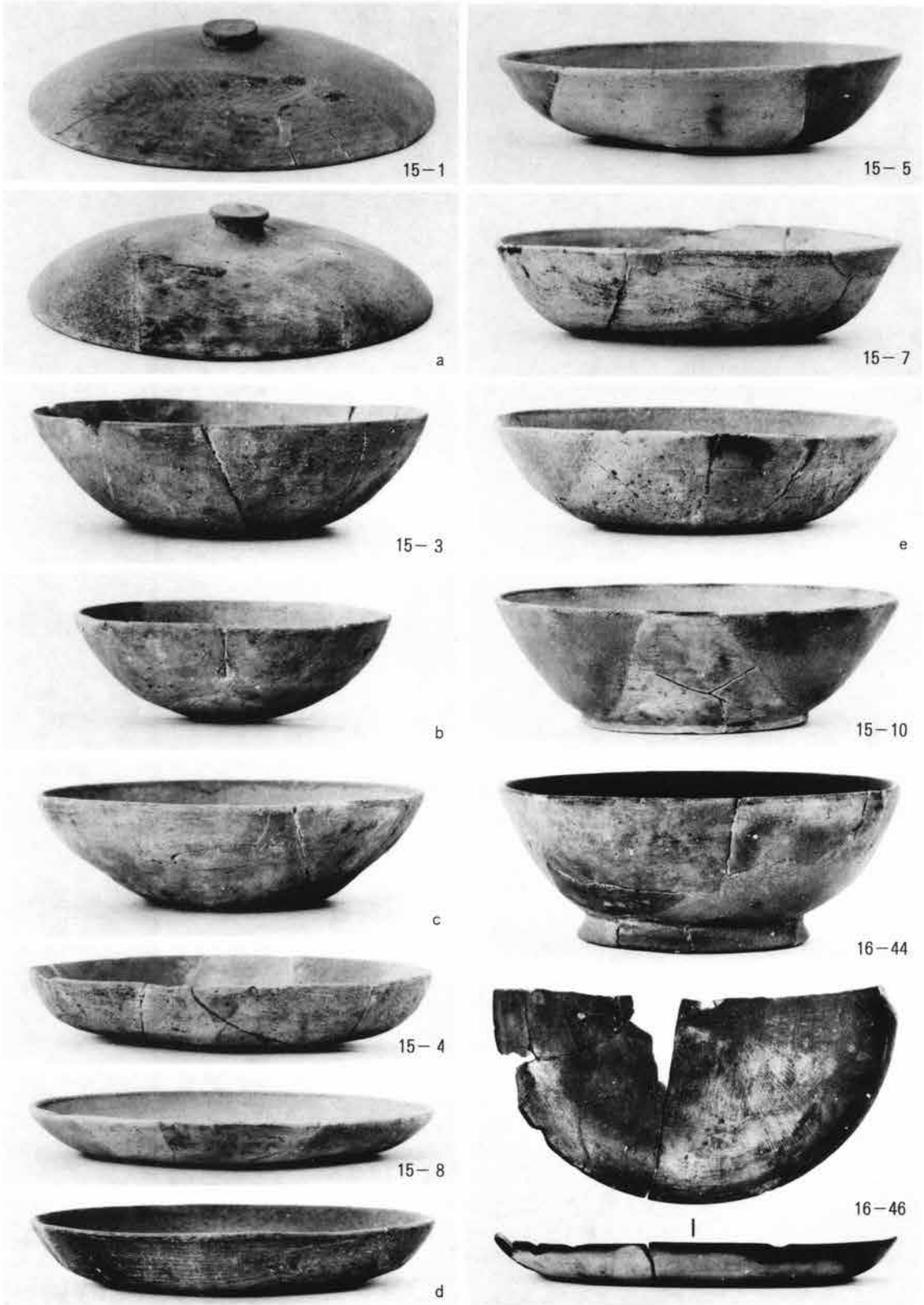
(2) 7 B L. 20tr 二条条間大路南側溝 S D24133 (北方から)



(3) 7 B L. 20tr 溝 S D24135・杭列 S A24136 (北方から)



(4) 7 B L. 20tr 溝 S D24133 (北方から)



出土遺物(1)3 B L. 2 tr

15-7・e・16-46は下層溝群出土。これ以外は土坑S X24212出土



出土遺物(2)

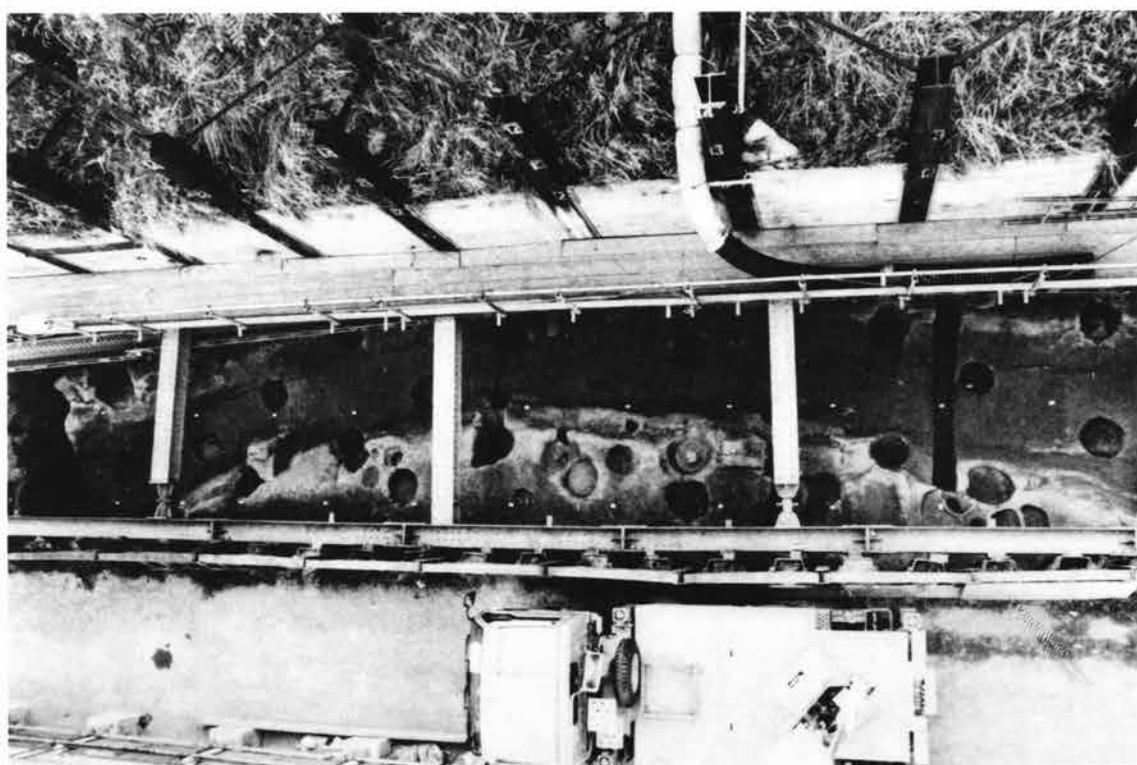
Aは3 B L. 2 tr 下層包含層出土

17-32 3 B L. 2 tr 下層溝群出土

17-35 3 B L. 2 tr 下層S B24211 柱穴出土



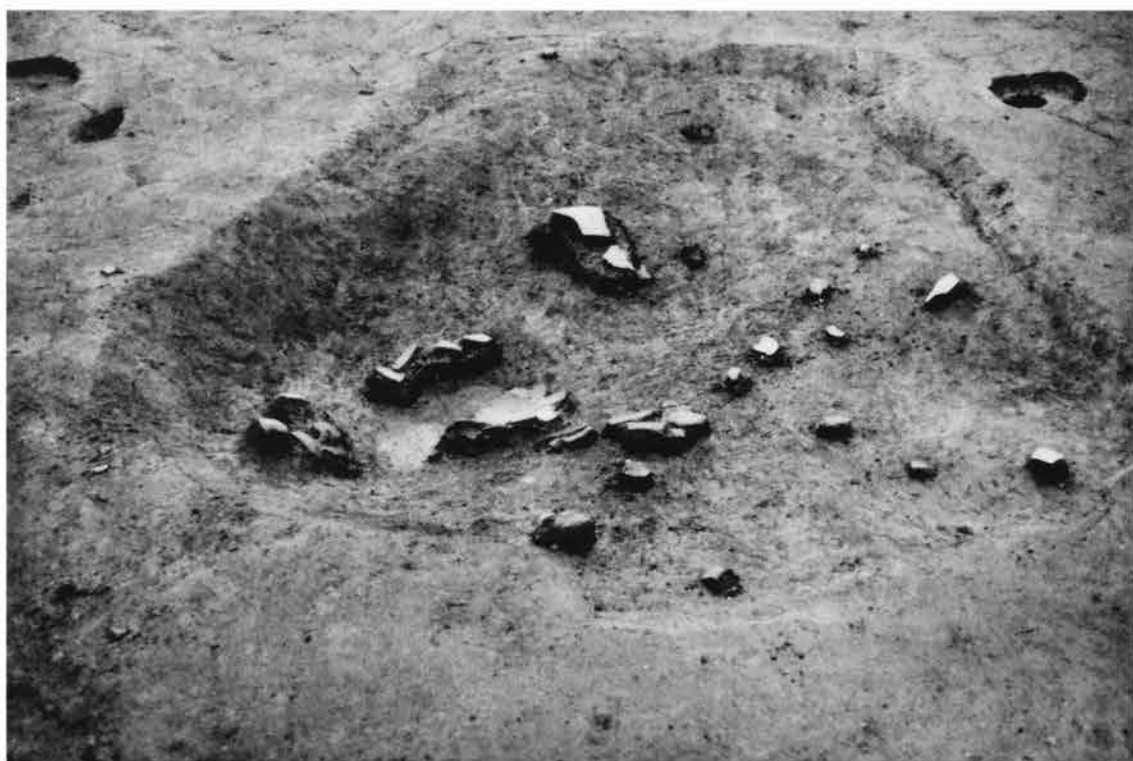
(1) 雲宮遺跡調査地遠景（南から）



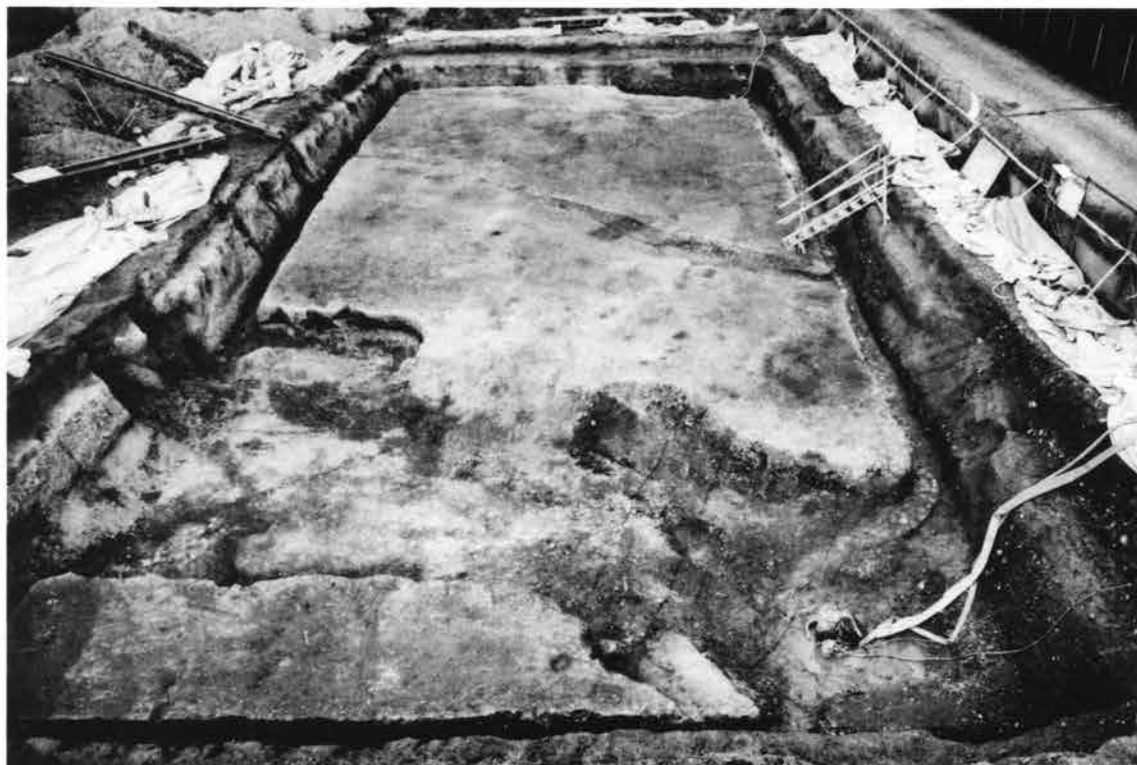
(2) 内環濠 S X60検出状況（上が西）



(1) Aトレンチ全景（北から）



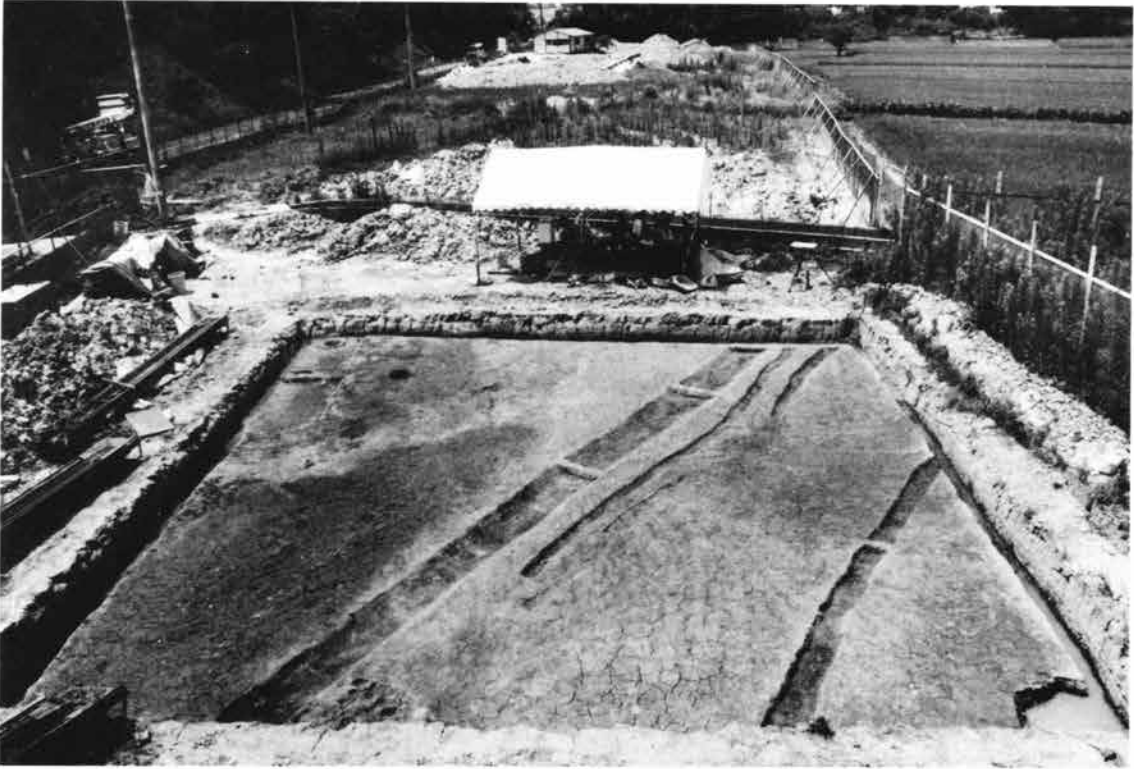
(2) Aトレンチ土坑S K35713検出状況（南から）



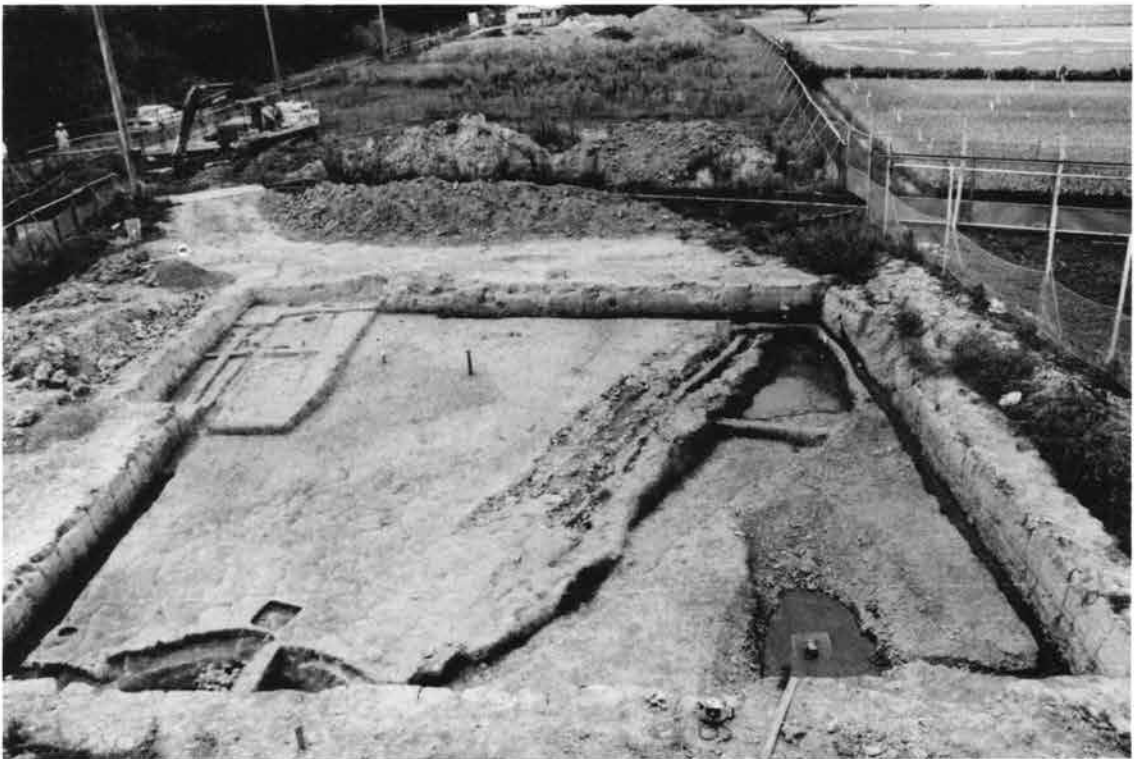
(1) Bトレンチ上・中層遺構検出状況（西から）



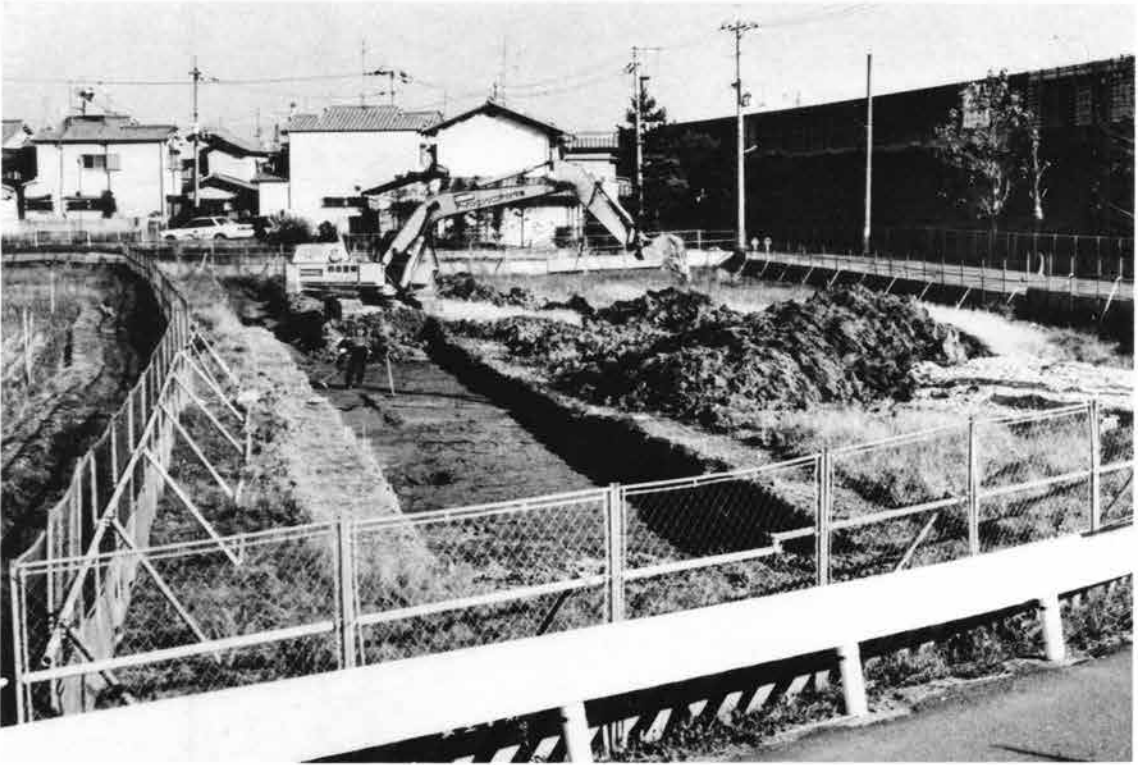
(2) Bトレンチ下層遺構検出状況（東から）



(1) C-1 トレンチ上層遺構検出状況 (西から)



(2) C-1 トレンチ下層遺構検出状況 (西から)



(1) C-2 トレンチ調査風景 (西から)



(2) E-1 トレンチ下層断ち割り状況 (西から)



15



44



19



53



21



59



23

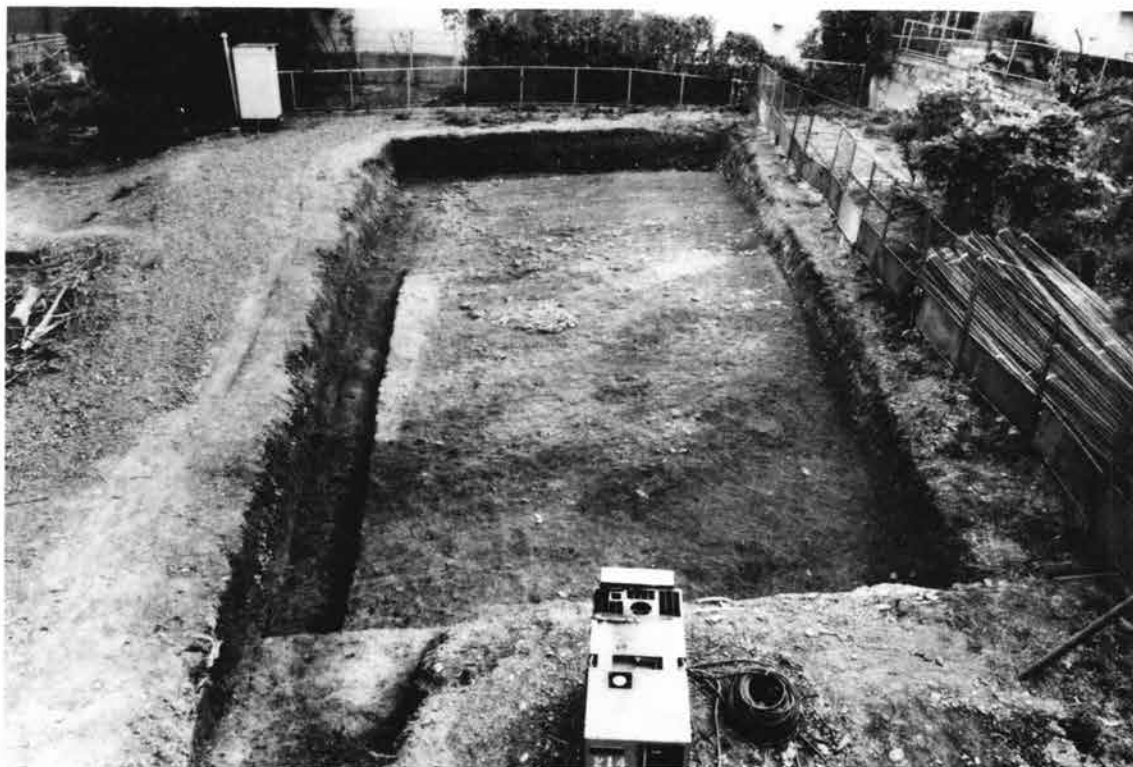


48



20

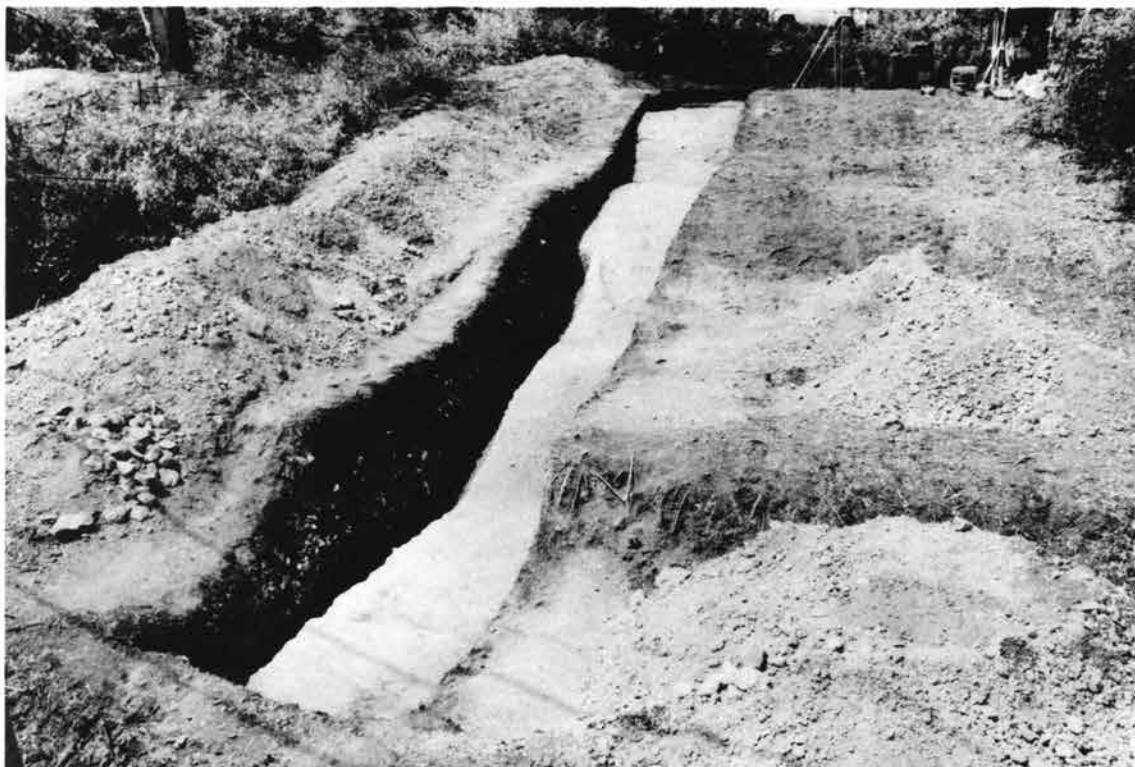
下植野工区出土遺物 15・19. Aトレンチ, 20. Bトレンチ S X357101 21・23. Bトレンチ S X357102
44. Bトレンチ 48・53・59. C-1トレンチ



(1) A地区全景（北から）



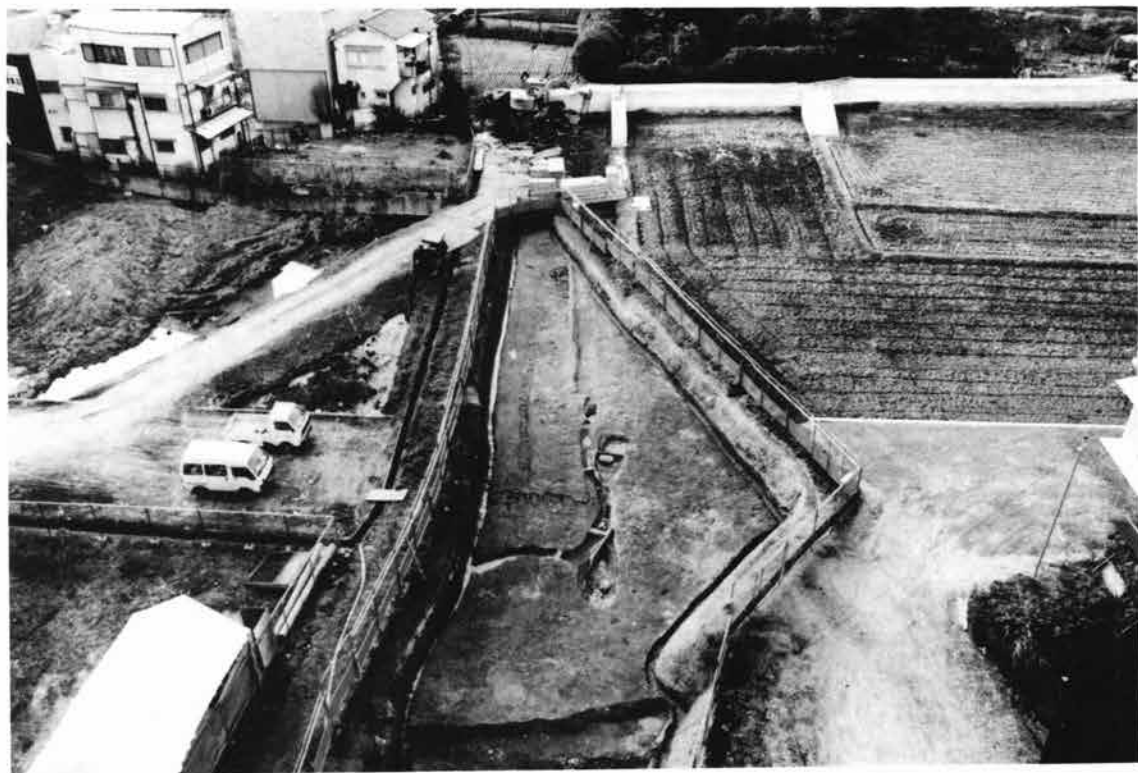
(2) A地区全景（南から）



(1) B-1 トレンチ全景 (東から)



(2) B-3 トレンチ全景 (東から)



(1) C-1 地区全景 (東から)



(2) C-1 地区SR34901内 土器検出状況 (南東から)



(1) D地区全景（東から）



(2) D地区西国街道路面・側溝及び建物跡群（南から）



(1) D地区S B34922・34923 (南から)



(2) D地区S R34951検出状況 (南東から)



(1) D地区 S R 34952全景 (南から)



(2) D地区 S D 34953検出状況 (西から)



1



a



2



b



58



3



57



17



c



38



42



d

出土遺物(1)

番号は実測図と一致 a・b・d : 土師器 c : 瓦器 a~c : SX34924

d : SK34916



e



g



f



h



50



i



51



j



61



k

出土遺物(2)

番号は実測図と一致 e~k : 須恵器 e・f : D地区柱穴群内

g~k : D地区包含層中



(3) S H9103住居跡検出状況 (西から)



(4) S K01土坑内縄文土器出土状況



(1) 堂ノ上遺跡調査地調査前全景 (南から)



(2) S H9104住居跡検出状況 (東から)



(3) S E01井戸枠遺存状況 (南から)



(4) 堂ノ上遺跡調査時全景 (南から)



(1) S H9102住居跡検出状況 (西から)



(2) S H01井戸枠検出状況 (西から)



(1) 恭仁京推定地調査前全景 (南から)



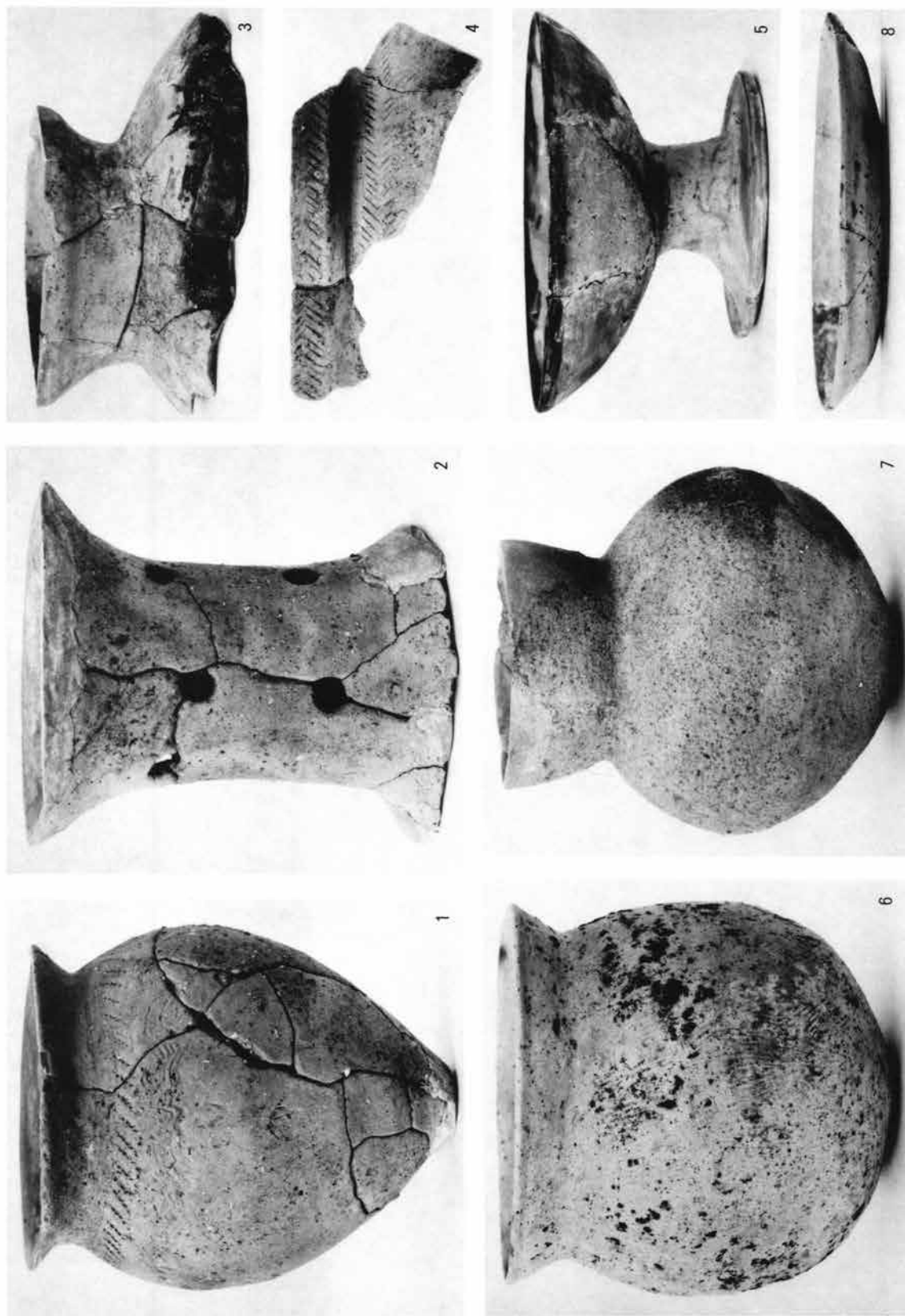
(2) 第2トレンチ西壁土層堆積状況 (東から)



(3) 第1トレンチ山断ち割り状況 (南から)

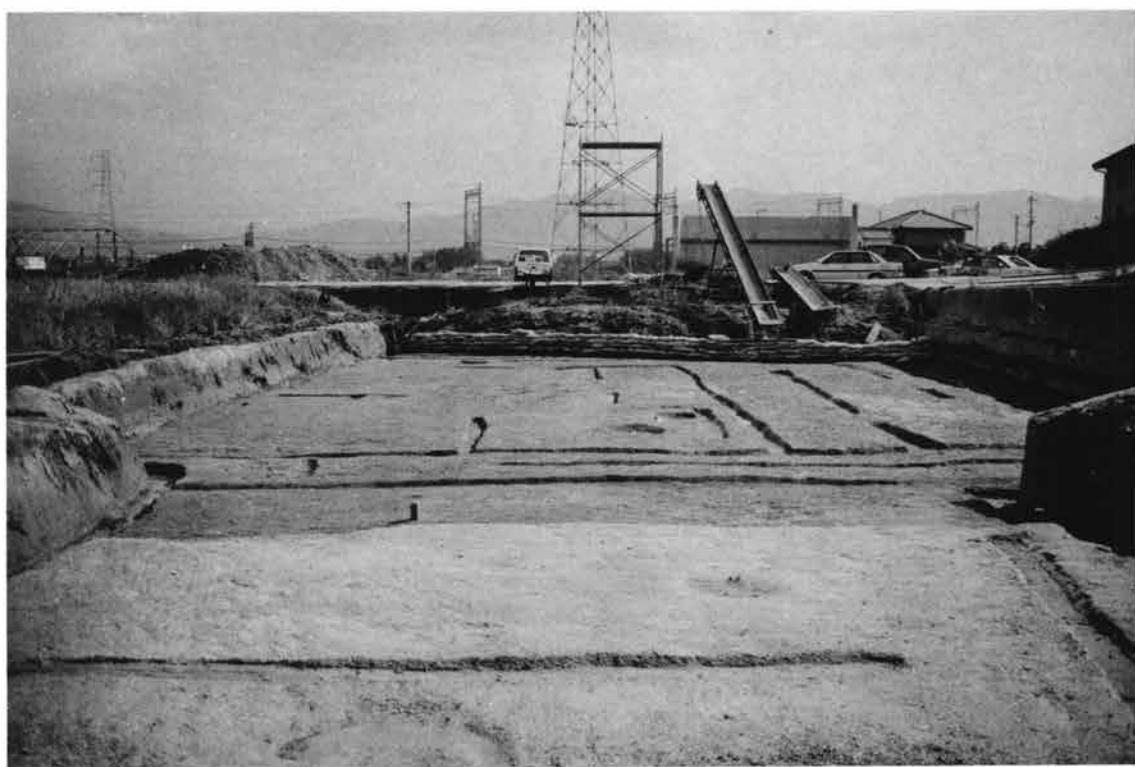


(4) 恭仁京推定地調査後全景 (南から)





(1) 調査前風景（南東から）



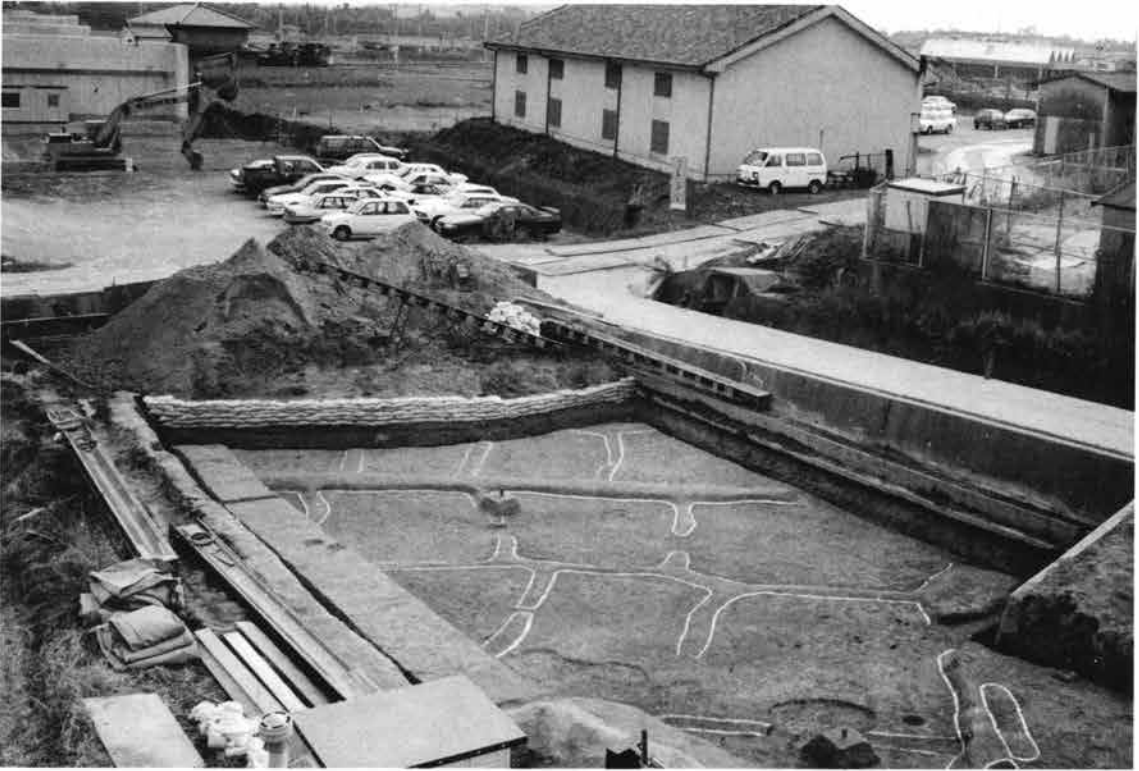
(2) 近世面（西から）



(1) 中世面（東から）



(2) 古代水田面調査風景（南から）



(1) 古代水田面東区（北西から）



(2) 古代水田面中央区（東から）



(3) 東区大畦畔断面 (南西から)



(4) 西区柵列 (南東から)



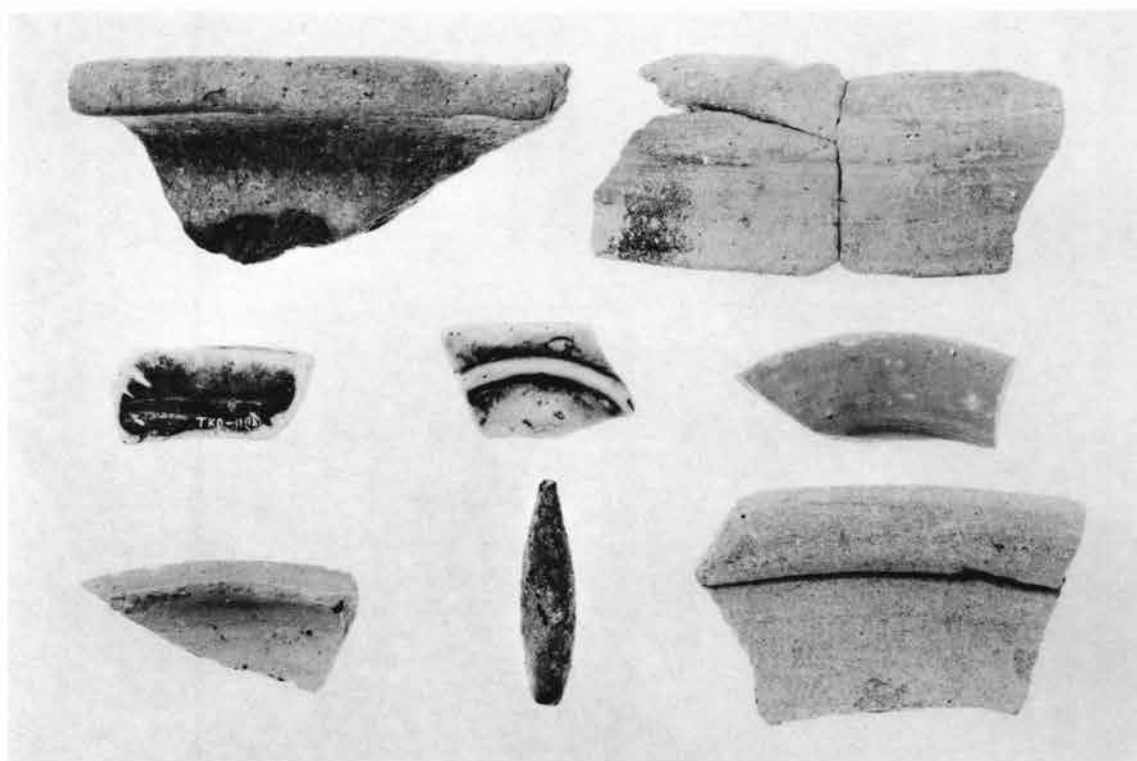
(1) 水田東区 (南西から)



(2) 水田西区 (北から)



(1) 関係者説明会風景



(2) 出土遺物

京都府遺跡調査概報 第47冊

平成4年3月13日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877(代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル
TEL (075)256-0961(代)